

死を経験した俺の生きる時間

天空を見上げる猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一度死を経験した一夏。だけど一夏は死ぬわけにはいかなかった。ある約束を守る為に。そして一夏は精神世界である男に出会い、幽霊の力を得る。一夏は大事な人と共に過ぐす為に戦う！「命：燃やすぜ！」

11／15 活動報告にアンケートを貼りました。スペクターを出さか出さないかなので多くの人の回答をまっています。

目次

番外編

番外編 覚醒の旋律 1

番外バレンタイン 13

番外ホワイトデー 26

番外ホワイトデーの続き 44

番外編 誕生日 51

番外編 結婚 79

番外編 赤ずきん 85

番外編 泊まりと兎と黒の昔話 94

番外編 泊まりと兎と蒼の昔話 115

通常編

零話 130

一話 132

二話 137

三話 143

四話 147

五話 156

六話 163

七話 168

八話 171

九話 174

十話 178

十一話 182

十二話 186

三十七話	372
三十六話	368
三十五話	363
三十四話	357
三十三話	352
三十二話	347
三十一話	338
三十話	333
二十九話	322
二十八話	317
二十七話	310
二十六話	304
二十五話	296
二十四話	289
二十三話	283
二十二話	274
二十一話	267
二十話	248
十九話	239
十八話	227
十七話	220
十六話	214
十五話	206
十四話	199
十三話	191

三十八話	——	380
三十九話	悪夢と騎士の対話	395
四十話	蒼き風嵐	401
四十一話	バイト	417
四十二話	真の最強と夏祭り	428
四十三話	兎の元に夜が訪れる	485
四十四話	堕天使再び	496
四十五話	克服の黒雷	503
四十六話	訓練を終えて	522
四十七話	悪魔の狂気	529
四十八話	家族と共に	544
四十九話	決断の時	552
五十話	動き出した運命	557
五十一話	覚悟を新たに	564
五十二話	謎のA I	571
五十三話	休息の一時	576
五十四話	夢の呪縛と約束	583
五十五話	新学期と私の覚悟	587
五十六話	覚悟を地に想いを天に	593

番外編 番外編 覚醒の旋律

ご機嫌よう。私はセシリア・オルコット、イギリスの代表候補生であり、仮面ライダースペースクターの変身者でもありますわ。今私は学園内にあるカフェでゆっくりとティータイムを楽しんで居ますわ。今日は天気も良く、何か良い事でも起きそうですわね。

「オ、オルコットさーん！」

おや？彼方から走って来られるのはクラスメイトの相川さんと鷹月さんですね。何やら慌てている様に見えますが一体何があったのでしょうか？取り敢えず事情を聞く為に落ち着いて貰いましょう。

「ご機嫌よう、相川さんと鷹月さん。何があったかは存じ上げませんが落ち着いてはどうでしょうか？」

「これが落ち着いていられる状況じゃないんだよ！ミューゼル君と鳳さんが大変なんだよ！」

「イチカさんと鈴さんがどうされたのですか？」

「ミューゼル君と鳳さんが喧嘩を始めようとしてるんだよ!!」

「成る程。イチカさんと鈴さんが喧嘩を……今何と？」

「だから！ミューゼル君と鳳さんが喧嘩を始めようとしてるんだよ！」

「理由は分からないけど既に一触即発状態でISまで使おうとして

いるんだよ！」

「なっ!?…すいませんお二人共、場所を教えて貰ってもよろしいでしょうか?直ぐに向かいますので!」

「分かった!場所は第三アリーナだよ!」

「感謝しますわ!」

イチカさん、鈴さん、一体貴殿方に何があったと言うのですか…!普段はあんなに仲が良く微笑ましく過ごしているのに…!…止めてみせますわ、絶対に!

「着きまッ!」

「…。」

セシリアが目的地に着くとアリーナの中心にイチカと鈴を発見する。しかし、セシリアはアリーナに充満する濃密な殺気に当てられ言葉を失う。正確に言えばセシリアは濃密な殺気に当てられた事である日の出来事を思い出し、心を恐怖に支配されていた。

ハア…ハア…体が動かない。此処に来てから鎖に縛られたと錯覚する程体の自由が利かない。肺を直接掴まれたと錯覚する程呼吸をするのが苦しい。見えない物体に押し潰されそうになる。それでも…。

「お二人…は…何故…喧嘩を…しよう…と…しているのですか?」

「ああ?鈴(イチカ)がタケノコ(キノコ)派だからに決まってるだろ(決まってるでしょ)!」

「タケ…ノコ？キノ…コ？」

「知らない奴は引っ込んでろ！」

「ひっ!？」

『キノコ派を潰せ!』

『タケノコ派を生かすな!』

『タケノコ（キノコ）派を殲滅してやる!』

「こ、これは…!？」

セシリアが周りを見渡すと殺気に満ちた生徒達が叫び、イチカと鈴をにらんでいる。その異様な光景にますます状況が分からなくなる。

「始めるぞ、鈴。」

「ええ、行くわよイチカ。」

「この鬨いに決着を着ける！」

「ブレイカー！アーイ！バツチリミナー！バツチリミナー！」

「…変身。」

「開眼！ナイトメア！喰らうは絶望！魔剣を抜刀！心の闇を解放！」『ナイトメアカリバー!』

「…燃やし尽くせ、紅龍。」

イチカは紫と白のローブ型のパーカーゴーストを纏いナイトメアブレイカー魂になり、ナイトメアカリバーを出現させる。鈴は焰に包まれ、そして焰を斬り払う。そこには紅龍を纏いヘルインフェルノを構える鈴の姿があった。戦闘準備が整った二人は放つ殺気を更に強くする。

「ハア…ハア…！」

セシリアが恐怖で動けなくなっているが二人は関係無いとばかりに闘いを始める。イチカは鈴の心臓を目掛けてナイトメアカリバーを突き出す。しかし、鈴は両手に持つヘルインフェルノで弾き、イチカの首を目掛けて斬り掛かる。だが、イチカは紙一重で回避し鈴に蹴りを喰らわせる。

「ガッ!? チッ! タケノコのクッキーのザクザク感にチョコがマッチして美味しいに決まってる! 何でそれが分からないのよ!」

「ガアアアアアアアアア!」

イチカは追撃しようとするが紅龍の持つ紅蓮の翼での攻撃を受ける。更にヘルインフェルノで斬られ、煉獄の焰で追い打ちを掛けられ、倒れ込む。しかし、イチカはナイトメアカリバーを杖代わりにしながら立ち上がる。

「は、ハハハハハハ! ザクザク感にチョコがマッチして美味しいに決まってる? 戯れ言もいい加減にしたらどうだ、鈴?」

「ああ?」

「あのミルクとビターの二層のチョコに本当に合うのはビスケット生地キノコに決まってるだろ。だから言ってるよキノコこそ最高だと！それにあのザクザク食感に騙されるなんて堕ちたものだな鈴！」

「…へえ。言ってくれるじゃないイチカ。あんな簡単にチョコが取れるキノコが最高？寝言は寝て言いなさいイチカ！」

「ハッ！やっぱり俺達は此処だけは合わない様だな！…本気で来いよ鈴。」

「それに関しては同感ね！…それは此方の台詞よイチカ。」

「…行くぞ白式。」

「セット！白式！」

「…殺れ、紅龍。」

「単一能力『煉獄の霸王』発動 LINK 600%OVER」

イチカは静かに白式ゴースト眼魂を取り出しナイトメアカリバーにセットする。するとナイトメアカリバーの刀身とイチカ自身に白く輝くオーラを纏う。一方、鈴は紅龍の装甲が更に紅く染まり、翼、腕、足に焰を灯す。そして二人は同時に攻撃を仕掛ける。互いに心臓部や首、鳩尾等の急所を的確に狙い殺気を込めながら斬り掛かり、撃ち込み、斬撃を放つ。

「うまい（美味しい）のはキノコ（タケノコ）に決まってるだろう（でしよう）がああああああああああ！」

「ハア…ハア…。」

怖い、怖い、怖い…！止めなければ、止めなければいけないと分かっている…！止めれるのは私しか居ないと理解している…！それなのに、それなのに…！今すぐに逃げ出したいと思う自分が居る…！…それでも。

逃げ出したいなら逃げだせば良いじゃないですか。

…声？…誰かは存じ上げませんが、それは出来ません。

何故？例え貴女が逃げ出したとしても誰も貴女を責める事は無い筈です。

誰も責めない？ご冗談を。此処でお二人を止めなければ私自身が私を責めますわ。何より…。

「こんな私を否定せず、受け入れてくれたお二人を止めなければ此処から一生後悔しますわ！」

セシリアは両手を腰にかざしてスペクタードライバーを出現させようとする。しかし

「!?何故ドライバーが出ないのですか!?!」

その様な事をしてでも無駄です。今の貴女はその力を使う事は出来ません。そして貴女は理解している筈です。もう一つの力では、あの二人を止める事はおろか、時間稼ぎにもならない事を。

「…ティアーズ！」

話を聞いていましたか？その力では時間稼ぎにもならないと！そ

れは貴女が一番理解しているの筈です！貴女はただ、この現状から手を引き、後ろに進めば良い！何故それが分からないのです!?

「黙りなさい！私の銃を！翼を！魂を侮辱するのであれば倒え誰であろうと容赦はしませんわ！行きなさい！ティアーズ！」

何故そこまでその力を使おうとするのですか!?

「私はブルーティアーズの可能性を信じていますわ！確かにスペクターと比べれば見劣りする所があるのは認めますわ。しかし！ブルーティアーズにはブルーティアーズの戦い方があり、スペクターには無い物がありますわ！」

セシリアはイチカと鈴に向かってエネルギー弾を放つ。しかし、二人は難なく回避するがエネルギー弾は分裂して二人に向かう。それでも二人は自身に向かうエネルギー弾を斬るが幾つかは命中してしまふ。

あれは…。

「…セシリアアアアアアア！何で邪魔をしたあああああああ！」

「私はイチカさんと鈴さんの友として！好敵手として！貴殿方お二人を止める義務がありますわ！」

「良いだろう（良いわ）！なら鈴（イチカ）を殺る前に邪魔をするお前を（あんたを）！葬り去る！」

「来る…！ならば、来なさい！ティアーズ！」

イチカと鈴はそれぞれナイトメアカリバーとヘルインフェルノを天に掲げ、闇と煉獄の焰を纏わせる。セシリアは最大火力で自分を攻撃する事を理解し、ブルーティアーズをスターライトmkⅢの銃口に集めエネルギーをチャージする。

「これで終わりだあああああああああ！」

「大開眼！BREAK SPELL！オメガエンド！」

「ティアーズフルブラストオオオオオオオオ！」

イチカと鈴の放つ斬撃とセシリアの放つ最大出力のレーザーが衝突する。しかし、セシリアと二人の力に差がありすぎる為に徐々に押し始め、セシリアに二人が放つ斬撃が迫る。そして

「…ハッ!?…此処は…。」

セシリアはまず、左を見るとカーテンで閉ざされた窓が目に見える。次に右を見るとぐっすりと眠っているルームメイトの姿が目に見える。そして近くにあったデジタル時計を見ると03:00と表示されていた。この事からセシリアはある結論にたどり着く。

…フウ、…先程の出来事は全部夢だったの!?えっ、ちよっ!?優雅なティertimeもイチカさんと鈴さんの喧嘩も全部夢だと言うのですか!?あんなに覚悟を決めて台詞を放ったのに!?所でイチカさんと鈴さんが言っていたタケノコとキノコとは…?…もういいですわ!明日、正確には今日イチカさんと鈴さんに聞きますわ!

セシリアは考える事を辞め、再び眠りに着く。しかしこの時セシリアは気付く事が出来なかった。待機状態のブルーティアーズが微妙に光っていた事に。

さて、イチカさんと鈴さんに聞くと決めたものの何処に居られるのでしょうか?…!彼処に楽しそうに話されているお二組は!…ああ、何故でしょうか、何時も見ている微笑ましい光景なのに自然と涙が…。あ!イチカさんと鈴さんが私に気が付いてくれましたわ!

セシリアは喜びのあまり涙を拭わず、そのまま二人の元へ向かう。セシリア自身気付かずに歩くスピードを速めて。

「イチカさん!鈴さん!何時もの光景で安心して本当に嬉しいですわ!」

「「のわああああああ!」」

セシリアは走りと同等のスピードでベンチに座っていたイチカと鈴に抱き付く。しかし、勢いが強すぎたのかイチカと鈴は後ろに倒れてしまい、セシリアは二人の上に覆い被さる様な形になってしまった。咄嗟の事にも関わらず受け身を取ったイチカと鈴は流石と言わべきだろう。

「セシリア!? 一体どうした!?!」

「と言うか何でダッシュで抱き付いて来たのよ!?!」

「私は! 貴殿方が喧嘩する所をもう見たくないんですの!」

「…はあ? 喧嘩? 一体何の話だ?」

「私達は喧嘩なんてした事無いんだけど?」

「分かっていますわ! だからこそ知りたいのですわ! タケノコとキ

ノコとは一体何なのですか!？」

「うん、取り敢えず色々説明して欲しい。」

「…分かりましたわ。」

セシリア説明中

「俺と鈴がタケノコキノコで喧嘩ってw無い無いw」

「それは同感wむしろどうなればそうなったのかその経緯を知りたいわw」

「タケノコとキノコの事もそうですが笑い事ではありませんのよ!？」

「ふー、悪い悪い。ま、多分そんな事は起きないだろうな。」

「そうね。あつたとしても直ぐに終わるでしょ。」

「だな。」

「しかし!」

「例えそんな事が起きてもセシリアなら止めれるさ。恐怖を乗り越えたセシリアならな。それに信じているんだろ?ブルーテイアーズの可能性を。」

「ええ、勿論ですわ。」

「フフ、ならこの話はこれで終わりにしましょ。」

「そうですね。」

「おう。あ、そうだセシリア。この後暇か？」

「ええ、まあ。この後は特に用事も無いですし。」

「ならラウラとかを誘って何処かに出掛けるか？」

「それ良い考えね！」

「…宜しいんですの？」

「勿論！」

「フフ、ならお供させて頂きますわ。」

「決まりだな。なら一時間後に校門前に集合で良いか？」

「大丈夫よ！」

「私も。」

やはりイチカさん達と一緒にいると楽しいですわね。願わくばこの様な時間が何時までも続きますように。その為にも宜しくお願ひしますわよ？ブルーティアーズ。

『分かりました。それが貴女の願いであるならば私は貴女に力を…可能性を託しましょう。』

「？鈴、セシリア。今なんか言ったか？」

「いや？私は何も？」

「私も鈴さんに同じく。」

「うくん？可能性を託すとか何とか聞こえた気がしたんだが…ま、良いか。気にする事でも無いしな。」

セシリア達三人は何事も無かったかの様に出掛ける準備をしに各部屋へと戻っていった。

番外バレンタイン

注意 この話は未来の話となっております。

「はー。(バレンタインのチョコどうしよう？手作りをあげたいけど作ったこと無いし…)」

鈴はイチカにあげるチョコで悩んでいた。その様子を同居人が見ていた。

「(さっきから、お菓子のレシピ本のチョコのページばかり見てる。ミューゼル君にあげるやつかな？)さっきから何で溜め息ばかりついているの？」

「ちよつとねー。」

「何見てるの？(わかってはいるけど。)」

「べつにー。」

「本当にどうしたの？」

「何でもなーい。」

「…ミューゼル君の事好き？」

「大好きだよー。」

「(あ、聞こえてはいるのね。)ミューゼル君にチョコあげるの？」

「そうだよー。…うん？ねえティナ、今とーつ前何を聞いたの？」

「何って…『ミューゼル君の事好き？』と『ミューゼル君にチョコあげるの？』って、そしたら『大好きだよー。』と『そうだよー。』って。」

「はー!?!ちよつ!?!何聞いてんのよ!?!」

「あれ？もしかして違った？」

「べ、別に違うとかじゃ無くて…答えた通りなんだけど…って何言わせるのよー。」

「勝手に答えたのは鈴でしょ？」

「うー。」

「それで？何を悩んでいるの？」

「実は…」

鈴はティナに悩んでいた事を話した。

「なるほど、ミューゼル君に手作りチョコをあげたいけど作ったことが無いからどうしようか迷ってるよ。」

「うん。」

「なら手伝おうか?」

「えっ? ティナお菓子作れるの?」

「作れるの? ってよく食べてるでしょ。」

「えっ? それって、たまにくれるお菓子のこと?」

「そうそれ。あれ全部私が作ったやつ。」

「え、えく! 何でティナが作ったって教えてくれなかったの!」

「え? だって聞かれなかつなから。」

「あ、そっか。じゃなくて! 本当にあれ全部ティナが作ったの!」

「だからそう言ってるじゃない。で? どうするの?」

「えーと、ティナ手伝ってください。」

「うん。素直でよろしい。」

その頃イチカは

「と言う訳だから。」

「わかった。ユルセンにも伝えとく。」

「お願いね。それと何人が友達を誘っても良いわよ。」

「了解。」

「(ユルセンには後で言うとして、鈴の他に誰誘おうかな?) うん?」

「む? 師匠、そこで何を悩んでいるんだ?」

「うん? ラウラか。実はな今度の日曜日、家でチョコフォンデュをやることになったんだが鈴の他に誰を誘うか迷っている所だ。」

「師匠の家と言うと姉さんも居るの!」

「あ、ああ、そりゃあクロエさんも住んでるからな。もしかして行きたいのか?」

「うん!」

「…ラウラって本当にクロエさんの事になるとキャラ変わるよな。」
「師匠それは気にしないでくれ。」

「まー良いか。それで後、誰を誘うかだな。」

「セシリアはどうだろう?」

「セシリアか…一応誘ってみるか。」

イチカとラウラはセシリアを探しに行った。

「と言う訳だがどうだ?」

「なるほど、折角誘っていただいたので参加させていただきますわ。」

「セシリアも参加と。」

「師匠、後何人くらい誘うんだ?」

「後1人くらいだな。とりあえずそれは後で探すとしてまずは鈴だな。」

その頃鈴は。

「さて、まずはどういうのを作りたいの?」

「生チョコ…かな?」

「生チョコね。なら購買に材料を買いに行くわよ。」

「わかったわ。」

♪♪♪

「イチカから? テイナちよつとごめん。」

「いいよ。」

「イチカどうしたの?」

「実は今度の日曜日に家でチョコフォンデュやることになったから鈴も来るか?」

「私もってことは他にも来るの?」

「ああ、今のところラウラとセシリアは決定、あと1人誰か誘うところだから鈴を抜けば3人だな。」

「(ラウラとセシリアなら良いわね。多分誘えって言ったのスコールさんだろうし。) なら私も参加するわ。」

「了解。」

「よし、じゃあテイナ行こうか!」

「その前にそのにやけた顔を戻そうね。」

「りよーかい。」

鈴とティナは購買に向かった。

「ところで鈴。」

「?何?」

ティナはいきなり鈴の耳に近づきある事を聞いた。

「…ミューゼル君とは何処まで行ったの?」

「にやつ!?にや、にや、にや、にやんの事!」

「(あ、猫みたいになった。) だから何処まで行ったの? A?それともB?」

「だから何でそんな事を聞くの!」

「え?だって鈴とミューゼル君って付き合ってるんじゃないの? だったら気になるじゃない。」

「何で知ってるの!」

「え?だってよく2人で食堂でアーンってしてるじゃない。それ見たかなり人が砂糖吐いてるよ。」

「マジ?」

「マジ。」

「もしかして…ティナも砂糖吐いた?」

「いや、私は吐かなかったよ。と言うより私は甘い空間ばっちこい!むしろwelcome!だから。」

「そ、そう。」

「そ、れ、よ、り、も!結局何処まで行ったの?」

「結局そこに戻るの!」

「さー、さー、白状しなさい。」

「ティ、ティナ?なんか怖いよ?」

「なら何処まで行ったか話なさい!」

「うゝ、わかったわよ!話すわよ!」

「本当に!? A?それともB?もしかして…C!」

「えーと、実は…。」

「実は!」

「キ、キスもしてない…。」

「……………はく!?何で!」

「何度かデートしてキスしようとしたんだけど…。」

「したんだけど?」

「恥ずかし過ぎて気絶しちゃって…。」

「何やってんの?」

「うゝ。」

「は、鈴。今回のバレンタインの目標、キスまで行く事!」

「ちよっ!無理よ!」

「いいね!」

「は、はい!」

鈴の目標が決まった頃イチカは。

「と言う訳なんです。」

「分かりましたけど何故私なんですか?」

「黒姫先輩にはかなりお世話になったので。」

「別に気にしなくて良いのですが…。でも折角なので参加しますよ。」

「ありがとうございます。」

「では、今度の日曜日に。」

「はい。」

そして日曜日。

「そう言えばどうやって師匠の家に行くんだ?」

「もうすぐで来るはずなんだが…。」

「ねえイチカあれじゃない?」

「うん?ああ、あれだな。」

イチカ達の前に1台の車が止まり中から1人の女性が出てきた。

「お待たせ。早速だけど乗ってちょうだい。」

「いや、義母さんこれ4人乗りだよな。義母さんを含めれば3人しか乗れないからな。」

「ええ、知ってるわよ。だからイチカのバイクに1人乗せれば良いじゃない。」

「(なるほどそう言う事か。)あー、そう言う事だから鈴、乗るか?」

「うん。／＼／＼」

「ふむ、師匠と鈴はラブラブだな。」ニヤニヤ

「本当に熱いですわね。」ニヤニヤ

「珍しいですね、この様なミューゼル君は。」ニヤニヤ

「(中々良いものが撮れたわ。)時間も圧してるし急いで乗って。」ニヤニヤ

「ニヤニヤするなー!」

そしてイチカ達はミューゼル家に到着した。

「さ、着いたわよ。」

「すまない。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

「とりあえず寒いから入ろうぜ。」

「そうね。ただいま。」

「ただいま。」

「「「お帰りー。」「」」

「邪魔する。」

「お邪魔しますわ。」

「お邪魔します。」

「お邪魔します。」

「「「いらっしやーい。」「」」

「こつちよ。入って入って。」

「イツ君イツ君どんな子誘ったの? ってあれ? そこに居る黒髪の少女はもしかして…。」

「初めまして黒姫刹那です。以後お見知り置きを。」

「は、は、は、初めまして! 篠ノ之束と言います! 貴女のお姉さんにはお世話になった者です! こちらこそよろしくお願いします!」

「ええ、姉からよく話を聞いております。そんなに堅くならなくても大丈夫ですよ。」

「永久ちゃんと全く違う!」

「はは、よく言われますね。」

一方ラウラは。

「姉さん！久しぶり！」

「久しぶりですね。ラウラ、元気になっていましたか？」

「うん！私は毎日元気でした！」

「それなら良かった。」

「姉さんは怪我とか無かったですか？」

「私も大丈夫ですよ。」

「なら良かったです！」

「ふふ。」

その様子をスコールはバツチり撮っていた。そしてセシリアは。

「セシリアじゃねーか！」

「会長!?!もしかして会長もここに住んでいるのですか!?!」

「ああ、にしてもセシリアがイチカの知り合いとわな。」

「私もですわ。まさか会長がイチカさんの知り合いとわ。」

「?セシリアと秋姐は知り合いなのか？」

「ええ、私とオータムさんはとあるクラブの会長と副会長ですわ。」

「セシリアとオータムさんの事だからもしかして可愛いもの大好き

クラブとか？」

「いや、流石に違うだろ。」

「そうよね。」

「…。」

「え?。」

「…。」

「秋姐…。」

「セシリア…。」

「…。」

「あー、そろそろ始めるか。」

「そうね。」

開始前に色々あったがなんとかチョコフォンデュパーティーが始まった。

「それにしても何でいきなりチョコフォンデュパーティーなんだ？」

「なんか東の嬢ちゃんがテレビ見てたと言って言ったらしいぞ。」

「なるほど。それよりもユルセン、姿消さなくて良いのか？」

「消しても意味無いからなく。」

「何で？」

「黒姫の嬢ちゃんも幽霊とかが見えるんだと。」

「えっ？黒姫先輩、ユルセンが見えるんですか？」

「ええ、幼い頃から幽霊等が見えていましたよ。なので初めて会った時から居ることは知っていました。」

「なるほど。」

「兄さん！バナナと苺が切れました！」

「ちよっ！マドカ！あの量全部食べたの!？」

「フルーツは私の好物です！なのでいくらでも食べれます！」

「それでも限度があるわよ！」

「ちよっと待て、バナナと苺は2皿ずつ用意していたはずだ！まさかマドカ、チョコ付けずに食ったな！」

「残念ですが兄さん、ちゃんとチョコを付けて食べました。」

「なら食べるスピードを落とせ！落とさなければバナナと苺を持ってこないぞ！」

「くっ！分かりました！食べるスピードを落とすのでバナナと苺を下さい！」

「約束だからな！」

セシリア達は。

「で？セシリア、ユルセンを見た時どう思った？」

「そうですね…まず注目すべきはあの可愛らしいシルエツト、そして可愛さを引き立たせるあの生意気な態度、他とは全く違う可愛さを持っていると思いましたわ。」

「ふっ、やっぱりセシリアを副会長に選んで正解だったな。」

「可愛さを愛する心なら会長に劣りますわ。」

「そんなセシリアにこれをやるよ。」

「こ、これは！ユルセンの等身大のぬいぐるみ！」

「俺が作った物だ。つまり非売品だ。」

「なんと!?!つまり持っているのは会長と私のみ!?!」

「そう言う事だ。」

「あ、ありがとうございます!?!」

「セシリア、これからも可愛い物を愛して行こう!」

「はい!」

そしてラウラ達は。

「姉さんアーン。」

「アーン。」

「いやー、クーちゃんとラウちゃんは仲が良いねー。」

「そう言えば貴女の事は何と呼べば?」

「うん? そうだねー? あ、ねえねえラウちゃんママって呼んでみて。」

「? わかった。ママ。」

「はうっ!」

「? どうかしたのかママ。」

「ヤバイよクーちゃん! すっごい幸せだよ!」

「東様だけずるいです! ラウラ! 私もお姉ちゃんと呼んでください!」

「? お姉ちゃん。これで良い?」

「はうっ! ラウラお願いします! これからずっとお姉ちゃんと読んでください!」

「わかった! お姉ちゃんが喜ぶならずっとお姉ちゃんって呼ぶね!」

「ラウちゃんこれからよろしくね!」

「こちらこそ宜しく頼む。ママ。」

「(ああ、今日は天国ね、こんなにも良い物が沢山撮れるなんて。あ、そうだ。) ねえねえ鈴ちゃんちよつと良いかしら?」

「? 良いですけど。」

「ちよつと付いてきて来てくれない?」

「はー。」

「ねえ鈴ちゃんこれ付けてくれない?」

「これって：猫耳と尻尾ですか？」

「そうよ。これを付けた鈴ちゃんを見たくなくてね。」

「別に良いですけど。」

鈴装着中

「似合ってますか？／＼／＼」

「やっぱり私が見込んだ通り凄く似合ってるわ！」

「あ、ありがとうございます。／＼／＼」

「多分その姿をイチカに見せたら喜ぶわよ。」

「(本当かな…。とりあえず寮で見せてみようかな？) スクールさん
この2つ貰っても良いですか？」

「良いわよ。」

「ありがとうございます！」

そして時間が過ぎ帰る時間となった。

「さて、IS学園に行きましようか。」

「ああ。宜しく頼む。」

「宜しく願いますわ。」

「宜しく願います。」

「イチカ宜しく。」

「おう、任せとけ。」

「そう言えばイチカ、私達からのバレンタインどうだった？」

「中々楽しかったよ。」

「そう、なら良かった。そろそろ出発しましょう。」

イチカ達はIS学園に向い到着した。

「今日1日世話になった。」

「ありがとうございます。」

「また、機会があれば呼んでください。」

「ありがとうございます！」

「じゃあ、イチカこれからも頑張ってね。」

「ああ、今日1日ありがとう。」

「ふふ、じゃあね。」

そう言うスコールは帰っていった。

「さて、師匠これは私からだ。」

「これは？」

「友チヨコならぬ師弟チヨコだ。こちらからも宜しく頼むぞ、師匠。」
「はは、ラウラらしいな。こちらこそ頼まれた。」

「…鈴、お前は師匠と2人きりの時に渡せ。受け取れ、友チヨコだ。…頑張れよ。」

「…余計なお世話よ。はい、友チヨコ。」

「すまないな。」

「では、私からも友チヨコならぬライバルチョコですわ。これから
も良きライバルでいてくださいませ。」

「了解だ。こちらこそ宜しく頼む。」

「…鈴さん、頑張って下さい。私からも友チヨコですわ。」

「…あんたも？はい、友チヨコ。」

「ありがとうございます。」

「どうぞ、ミューゼル君、普通のチョコです。」

「ありがとうございます。」

「…鈴さん焦らず、慎重にですよ。どうぞ鈴さんも。」

「…先輩もですか？どうぞ私からも。」

「ありがとうございます。では、私達はお先に失礼します。」

「分かりました。」

そう言うところ人は帰っていった。

「ねえイチカ、私はイチカの部屋で渡したいんだけど良いかな？」

「ああ、良いけど。」

そしてイチカと鈴はイチカの部屋に向かった。

「はい。」

「ありがとな。早速食べて良いか？」

「うん、良いよ。」

「へえー、生チョコか。もしかして手作りか？」

「うん。テイナに作り方を教えて貰ったんだ。それでどう？」

「今までに食べたチョコの中で一番うまいよ。」

「本当に？」

「嘘はついていない。」

「良かった！」

「ところで何で俺の部屋なんだ？」

「ちよつとイチカに見せたい物があつたからね。」

「俺に見せたい物？」

「うん。だから私が良いって言うまで目を閉じてて。」

「?わかった。」

イチカが目を閉じて鈴は準備し始めた。

「イチカ、開けていいよ。／＼／＼」

「ああ。(緊張しているのかな?)」

イチカが目を開けるとそこには猫耳と尻尾を付けた鈴がいた。

「イ、イチカどう?似合ってる?／＼／＼」

「凰鈴音さん今すぐ俺と結婚してください。(似合いすぎて涙が出そうだ。)」

「ふえっ!?け、結婚!?う、嬉しいけど、そ、その、私は法律で結婚できるけどイチカはまだ18じゃ無いから法律的に考えてまだ早いかな?それと本音と建前が逆になってるよね?」

「すまない。あまりの可愛さについて本音が。」

「…ありがとう。／＼／＼」

「なあ、鈴。」

「何?」

「…今俺は鈴に言いたい事があるんだ。聞いてくれるか?」

「?うん。」

「スー、ハー、凰鈴音さん今から俺と結婚を前提に付き合ってください。」

「!はい!(そう言えばティナに「鈴。今回のバレンタインの目標、キスマで行く事!」って言われてた…。チャンスは今しか無い!)…あのさいチカ。」

「?どうした?」

「け、結婚はまだ早いけど、そ、その…。」

「言いたい事があれば言ってくれ。」

「え〜と、い、今その〜。キ、キスして欲しい…。」

「鈴は大丈夫なのか？」

「た、多分今なら大丈夫だと思う…。」

「…分かった。なら目を閉じてくれ。」

「…うん。」

イチカと鈴は目を閉じると互いの顔が近づきやがてその距離が零になった。唇が触れ合ったのは数秒だが2人にはその数秒がとても長く感じた。そして互いに離れた。

「ね？大丈夫だったでしょ？」

「そうだな。」

「さて、そろそろ部屋に戻らないとテイナが心配するから帰るね。」

「ああ。…今度また、2人で何処か出掛けような。」

「うん。」

そう言うと鈴は部屋を出ていった。2人の想いは変わらない。ただ1歩前に進んだだけ。

番外ホワイトデー

イチカは現在、バレンタインのお返し用のクッキーを作っていた。シンプルな形や動物などを型どった物や白や緑、黒など様々なクッキーの生地があつた。

「よし、後はこれを焼くだけだな。」

「イチカく、何やってんだく？」

「バレンタインのお返しを作っている所だ。」

「…多くないか？」

「そりゃあ、渡す人が多いからな。」

「何人くらいいるんだく？」

「何人って、鈴、義母さん、マドカ、秋姐、東さん、クロエさん、黒姫先輩、簪、セシリア、ラウラ、シャルロット、のほほんさん、楯無先輩、虚先輩の十四人だな。」

「Master 私達も何か欲しいです！」

「そうだよ！食べ物じゃなくても良いから何か欲しいよ！」

「勿論、白騎士と白式にも準備してあるぞ。何時も世話になっていくからな。」

「イチカく、俺はく？」

「ユルセンにはクッキーをやるよ。」

「よっしや〜！」

イチカは会話をしながらクッキーの生地をオーブンに入れて一息着いていた。しかし、この時イチカ達は気が付いていなかった。魔の手が迫っていることに…。

一方その頃、魔の手の元凶は。

「やった！遂に、遂に完成した！これで…を…する事が出来る！楽しみだなく、…がどういう反応をするか！そうだ！これを応用して…じゃなくて…なるようにしよう！それで？…の準備は出来てるの？」

「フツ、私が…の準備を怠るとでも？」

「いや、一応確認しただけだよ。」

「そう。それにしても楽しみね。」

「そうだねー。」

そしてイチカは。

♪♪♪♪「はい、ミューゼルです。はい。わかりました。では、今からそちらに向かいます。はい、ありがとうございます。では。」

「誰からだ〜？」

「ちよつとな。さて、出掛けるか。」

イチカは出掛ける準備をしバイクに乗ってとある場所に向かった。

(ところで何処に向かつてるんだ?)

(着けばわかるさ。)

(Master 先程の電話と今向かっている場所と関係あるのですか?)

(ある。と言うか電話の内容がその場所に来てくれだからな。)

(マスター、本当に何処に行くの?)

(それは着いてからのお楽しみ。)

十数分後イチカは目的の場所に着き、中に入っていった。中にはキーホルダーやストラップなどがあり、多くの人で賑わっていた。

(此所は...。)

(見ての通りアクセサリーショップだ。)

(ですが何故此方に?)

(マスターってアクセサリーとかあんまりしないよね?)

(俺がするわけじゃないからな。)

「いらっしやいませ。何かお探しでしょうか?」

イチカ達が話していると紺色のエプロンをした一人の女性が話しかけてきた。どうやらこの店の店員のようだ。

「連絡を頂いた者です。」

「失礼ですが名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「イチカ・ミューゼルです。」

「少々お待ちください。」

そう言うとき女性はポケットからメモ帳を取り出しあるページを開きイチカ・ミューゼルと呟きながら何かを探し始めた。そして十数秒後。

「お待たせいたしました。では、此方にどうぞ。」

「わかりました。」

イチカは女性に案内されると女性は長方形の箱を持ってきて机の上に置いた。

「ご確認ください。」

イチカが箱を開けると中には白い羽根と青い羽根が付いている剣を型どったペンダントとブローチがあった。

「凄いな…。」

「何か不満な点はございますか？」

「いえ、特に無いです。」

「では、お受け取りください。」

「ありがとうございます。」

「またのご利用を。」

イチカはペンダントとブローチが入った箱を受け取ると店を出て家に向かった。

(Master先程のペンダントとブローチは何方に?)

(うん?ペンダントは白騎士、ブローチは白式にだけど?)

(え?)

(言っただろ?準備してるって。)

(Masterありがとうございます!) (ありがとう!マスター!)

(ところでイチカ、さっきの代金は?)

(注文しに行った時に前払い。)

イチカは家に帰るとすぐに手を洗いオーブンからクッキーを取り出し袋詰めをし始めた。

(∴明らかにオータムの嬢ちゃんとセシリアの嬢ちゃんの奴って解る二つがあるなく。)

(ええ、明らかにオータム様とセシリア様用の物と解りますね。)

(それにしてもそっくりだね。)

ユルセン、白騎士、白式はイチカに聞こえないようにクッキーが入った二つの袋について話していた。二つの袋にはユルセンの形をしたクッキーが一つ入っていた。

(それにしても…。)

(うん…。)

(クオリティーが高い！)

「よし！袋詰めも終わってラッピングも出来たし届けにいくか。」

イチカは三袋をオータム、マドカ、クロエに渡すために三人を探した。

「いたいた。秋姐。」

「うん？どうしたイチカ？」

「はい、これ。バレンタインのお返し。」

「おっ、サンキュー…って！ユルセンのクッキーがあるじゃねえか！？」

「作ってみたけどどう？」

「good！これはもう可愛い物大好きクラブの象徴にして祀るしかねえ！いや！むしろするべきだ！」

「いや、食ってくれよ。クッキーだし。」

「何してるんですか？（兄さん何しているんだ？）」

「あ、マドカにクロエさん。これバレンタインのお返しです。」

「ありがとう、兄さん。」

「ありがとうございます。ところでオータムさんは何をやってるんですか？」

「…気にしないでください。」

「？わかりました。」

イチカは三人に渡し終わるとFRCとIS学園に向かう準備をしていた。すると白騎士と白式が話しかけてきた。

「Master似合っていますか？」

「マスター似合ってる？」

「ああ、二人とも似合ってるぞ。」

「ありがとうございます。ですがよくこの形を見付けましたね。」

「別に見付けた訳じゃないぞ。」

「え？でもあのお店で予約したんじゃないの？」

「予約じゃなくて注文だから。デザインを描いたものを作ってもらっただけだ。」

「デザイン？誰が描いたの？」

「俺。」

「[え?」

「俺がデザインを描いて店で作ってもらったんだ。」

「と言うことはMasterのオーダーメイドですか？」

「そうなるな。気に入ってくれたか？」

「はい！」 「うん！」

「それなら良かった。ところでユルセン、何時まで食べてるんだ？」

「さあなく。」

「…とりあえず、IS学園に着いてから食べ。クッキーが宙に浮いてたらややこしい事になる。」

「りよ〜からい。」

イチカ達は出発し、FRCに向かった。だがイチカは思いもしなかった。この後、自分が大変な事になるとは…。

♪♪♪♪♪ 「どうしたの？イチカ？」

「仕事中にごめん。ところで義母さん、今何処に居るんだ？それと東さんの場所も知っていたら教えてくれ。」

「私は束と一緒に開発室に居るわ。」

「じゃあ今からそっちに向かうから。」

「わかったわ。」

イチカ達は開発室に着き、中に入った。

「ヤッホ〜♪急にどうしたのイツ君?」

「バレンタインのお返しを持ってきたんですよ。はい、束さん、義母さん。」

「フフ、ありがと。」

「サンキュー、イツ君。あ、そうそう、はいこれ!」

「?何ですかこれ?」

「私のお気に入りのお菓子だよ。イツ君にも分けてあげる!」

「ありがとうございます。」

「家に帰ってから食べるんだよ。」

「いや、今からIS学園に戻りますよ。」

「「え?」」

「お返しを早めに渡したいので外出許可だけ取って来たので。（それに明日は大事な用があるしな。）」

「イチカちよつとタイム！」

「あ、ああ。」

スコールと束はイチカに聞こえないように緊急会議を開いた。

（スーちゃんどうするの!? 計画が全部おじやんだよ!?）

（お、落ち着きなさい!? こんな時こそヒツヒツフーよ!）

（スーちゃんそれは出産するときの奴だよ!? やるなら3秒吸って7秒間吐くんだよ!）

（それはロングブレスよ! そうだ! 超小型のカメラ飛ばすのはどうかしら!?!）

（いや、それじゃあ白騎士と白式に見つかっちゃうよ!）

（逆に考えるの、白騎士と白式を味方に付ければ成功する確率は大幅に上がる、と。）

（なるほど! その手があったね!）「イツ君、ちよつと白騎士と白式を借りていい?」

「? いいですけど。」

そう言うイチカは束に白式眼魂を渡した。

(どうしたのですか母様?)

(どうしたのお母さん?)

(二人ともさ…イツ君の…の姿見たくない?)

(!?)

(白騎士は見た事あるよね。)

(はい、過去に何度か。ですが可能なんですか?)

(可能よ。もう準備は終わってるから。それで見てみたい?)

(はい!) (うん!)

(決まりだね♪)

「お待たせイチカ。」

「何の話をしていたんだ?」

「ガールズトークを無闇に聞いたら駄目よ♪」

「…ガールズって言う歳じゃないけどな。」

ヒュンツ!ザクツ!ユルセンが言い終わると風を切る音が聞こえ、更に何か刺さったような音が聞こえた。イチカとユルセンがゆっくりと後ろを振り返ると壁に一本のナイフが深く刺さっていた。

「ユルセン？何か言ったかしら？」

「イイエ、ナニモイツテイマセン。」

「そう、なら良いわ♪」

((((怖っ！)))

イチカ達はFRCを出てIS学園に向かった。だがユルセンはIS学園に着くまでずっと「ナニモイツテイマセン。ナニモイツテイマセン。」と呟いていた。

イチカはIS学園に着くとお返しをする人達を探し始めた。

セシリアの場合

「ほい、セシリア。バレンタインのお返し。」

「ありがとうございます。こ、これはまさか!?ユルセン型のクッキーですか!?!」

「ああ、作ってみたけどどうだ？」

「goodですわ！これはもう可愛い物大好きクラブの象徴にして祀らなければーいやーむしろするべきですわ！」

「いや、食ってくれよ。クッキーだし。」

(うわゝ、デジャブ)。 (デジャブだね)。 (デジャブですわね)。

ラウラの場合

「師匠、そんなところで何をしているんだ？」

「ラウラか、丁度良かった。ほい、バレンタインのお返し。」

「すまない。後でゆっくりと味わって頂く。それより師匠。」

「うん? どうした?」

「お姉ちゃんとママは元気だった!?!」

「ああ、二人とも元気だったぞ。」

「そっか、それなら良かった!」

シャルロットの場合

「いたいた、おーい、シャルロットー。」

「どうしたの? イチカ?」

「ほい、バレンタインのお返し。」

「ありがとう。イチカの作るお菓子って美味しいんだよねー。そう言えばイチカの作ったお菓子を食べた他の子がイチカの事何て言ってると思う?」

「さあ?」

「プライド殺しとか、女子力マンって言われてるよ。」

(アーハハハツツ! うける〜!)

(プ、プライド殺し (笑))

(女子力マン…。フフツ。)

(…泣いてもいいか?)

本音、虚先輩の場合

(虚さんが凄く嬉しそうだな。)

(あの嬢ちゃんからキラキラしたオーラが見えるな。)

(ですが本音様が疲れているように見えますね。)

(気のせいかな? 本音ちゃんの目のハイライトが消えてる気がするんだけど。)

「あ、イッチーどうしたの?」

「(!?!何時ものように話していない!?)のほほんさんこそどうしたんだ?」

「あー、お姉ちゃんがだんだんと明日デートに行く話を何回も聞いたんだ。多分イッチーが話しかけたら同じ事になるよ。」

「なるほどな。あ、そうそうほい、バレンタインのお返し。虚先輩の分も渡しとく。」

「ありがとうイッチー。」

簪の場合

(うわー、簪もキラキラしたオーラを出してるー。(棒))

(絶対良い事あったな。(棒))

(絶対愚痴る人がいますねー。(棒))

(誰だろー。水色の髪で紅い目の生徒会長じゃないと良いなー。
(棒))

「簪。」

「あ、イチカ。」

「ほい、バレンタインのお返し。」

「ありがとう。」

「…簪スゲーニヤニヤしてるぞ。」

「あ、ごめん。」

黒姫先輩の場合

「あれ？永久さん？」

「…久し振りだなイチカ君。」

「お久し振りです。」

「ミュージーゼル君？どうしたのですか？」

「バレンタインのお返しを持ってきました。どうぞ。」

「ありがとうございます。それにしてもミュージーゼル君が姉と知り合
いとは驚きましたね。」

「…イチカ君は時々私と試合をしに来ている。…イチカ君の戦い方は中々面白い物だ。…これからどう成長するか楽しみだ。」

「姉さんがそこまで言うのは久し振りですね。」

楯無先輩の場合

(黒い…ですね。)

(生徒会実から黒いオーラ見えるよ…。)

(入って大丈夫なのか…?)

(入りたくねえ…。♪♪♪♪「メール?誰か…」

『入りなさい。』「…マジか。」

(白騎士、白式、イチカにけくれ。)

(Masterの事は一生忘れません!)

(短かったけどマスターと過ごした時間は楽しかったよ!)

(待てい!何で俺が死ぬ前提になっているんだ!?)

この後俺は一時間ほど楯無先輩の愚痴を聞きました…。

鈴の場合

「…。(落ち着け、落ち着け俺。ただノックをして、鈴がいるか確認してお礼を言っただけだ。)」

「あれ?イチカ?」

「!?なんだ、鈴か。」

「どうしたの？」

「これを渡しに来たんだ。」

「これってバレンタインのお返し？」

「ああ。」

「ありがとう♪それにしても明日、楽しみだね。」

「そうだな。じゃあお休み。」

「うん。お休み。」

イチカは部屋に戻り明日の準備をし、束から貰ったお菓子を食べて眠りについた。次の日イチカはユルセンの笑い声と白騎士と白式の歓喜の声で目を覚ました。

「一体何なんだ？」

（イチカく鏡を見てみなく（笑）。）

「笑いながら渡すな。」

イチカはユルセンから鏡を受け取り自分の顔を見てみると幼い自分の顔が写っていた。

「…は？」

イチカは急いでベッドから出ると明らかに視点が低くなっており、何故か服のサイズまであっていた。

「なんでさ?」

三月十四日、この日イチカは、子供の姿になっていた。次回に続く。

番外ホワイトデーの続き

前回のあらすじ。イチカが子供の姿になりイチカくんになりました。

「何でそうなったんだ〜? (笑)」

「何でって…心当たりが。(うん?)」

イチカは昨日あった事を思い出していると、ある場面を思い出した。その場面はイチカが束にお菓子を分けてもらった所だった。

「…心当たりしかない。ところで何で白騎士と白式はそんなに騒いでいるんだ?この部屋が完全防音だから良かったものの。」

「何故ってMasterの子供の姿ですよ!?小さくて可愛いMasterの姿を久し振りに見れたんですよ!?しかも今のMasterは幼い時に身長の高さに悩んでいた時期の姿ですよ!?そして母様に小さいっ君と呼ばれていた時の姿ですよ!?!」

「待て白騎士!?小さい言い過ぎだ!あの時マジで悩んだからな!?しかも小さいっ君って何その不名誉なあだ名!?!」

「それにしても小さいね。今のマスター、ラウラちゃんより三十七センチくらい低いね。」

「言っってほしくない事を言われた!?!」

「と、とりあえず鈴音の嬢ちゃんに連絡したらどうだ〜? (笑) 今日、デートだろ〜? (笑)」

「…駄目だろ。」

「既に鈴様にプライベートチャンネルで連絡しています!」

「は?」

コンコン「イチカく、いる?」

「ほいほい、今開けるぜ。」

「おい!」

ユルセンは鈴が来るとすぐにドアを開け鈴を部屋の中に入れた。

「お邪魔しまー…。」

「…よう。」

「ハウツ!」

「鈴?どうし…うおっ!」

イチカが鈴に尋ねようとすると、いきなり抱き付かれてしまい、頭を撫でられている。

「イチカどうしたの!?!凄く可愛いんだけど!」

「ちよっ!?!鈴!身長差を考えろ!」

「あゝ、本当に可愛い。」

「ですよ！鈴様は本当にわかっていますね！」

「白騎士！何でこうなったの!？」

「実はカクカクシカジカ」

「四角いムーヴと言う事ね。」

「白騎士!?!何でボケた!?!そして鈴!?!何で乗った!?!それよりも頼む！マジで身長差を考えくれー!！」

「アーハハハハハハハ！(笑)腹痛てゝ！(笑)」

ユルセンは床を叩きながら爆笑していた。いつもならここでイチカが止めるのだがイチカは今鈴に抱き付かれていて既にそれどころでなくなっている。

「…カオスだね。」

そう言いつつも止めようとしないう白式である。

「それでイチカ、今日どうするの?！」

「確か今日は水族館に行くんだったよな?なら、今から行こうぜ。」

「でも服とかどうするの?！」

「あつ。」

「心配いりません。私達が作れますから。」

「だからちよつと待ってて！」

「ありがとう。白騎士、白式。」

「ねえイチカ。」

「うん？どうした？」

「今日さ…鈴お姉ちゃんって呼んでくれない？」

「(ヤバイ！ヤバイ！ヤバイ!?その可愛いさは反則だぞ!?絶対に断れない…)わ、わかった。り、鈴お姉ちゃん。／／／」

「ツ〜！／／／(自分で言つといて凄く恥ずかしい!でも可愛いイチカの姿を見れて良かった♪)」

そして数分後、鈴は部屋を出てイチカは白騎士と白式が作った服を着て幽霊化し鈴の元に向かった。

「お、お待たせ、鈴お姉ちゃん。／／／」

「じ、じゃあ、行こっか。／／／」

「うん。／／／」

二人は共にバスに乗り込み水族館に向かった。だが、鈴がイチカを膝の上に座らせ鈴は満面の笑顔になっているがイチカは恥ずかしさで顔が真っ赤になっていて、他の乗客の人達は二人を見て微笑んでいた。

「や、やっと着いた…。」

「大丈夫？イチカ？」

「ああ、大丈夫だ、り、鈴お姉ちゃん。／＼／＼」

「そ、それじゃあ、早速入ろうか。／＼／＼」

「あ、ああ。／＼／＼…えーと、その手…繋ぐか？／＼／＼」

「う、うん。／＼／＼」

イチカと鈴は手を繋ぎ水族館を見て回った。イルカやペンギン等の可愛らしいものから鯨やマンボウ等の迫力満点のもの等、様々な種類がいた。二人が普通に水槽の中にいる生き物達を見ている中、他の人達は手を繋いでいるイチカと鈴を微笑ましく見ていた。

「ねえ、イチカ？ペンギンと鯨どっちが良い？」

「…ストラップなら解るけどそれ何なんだ？」

「着ぐるみ。」

「誰の？」

「私の。」

「何で？」

「い、良いから！イ、イチカはどっちに着て欲しい？／＼／＼」

「ちよつと考えさせてくれ。」

「わ、わかったわ。(い、勢いで何て事聞ってるの!?!ただ、これを着てイチカに見せてペンギンなら警戒心が無いことをアピール、鮫なら襲う気をアピールって何で私はこんな事考えてるの!?)」

(まず、ペンギンから。)

イ、イチカ、ペンギンって警戒心がほとんど無いんだって。／／／わ、私の言いたい事、解る?／／／

(違う!違う!違う!?!鈴はこんな事は言う筈が無い!次だ!次!)

イ、イチカ、今から襲っても良い?／／／そ、それともイチカから襲う?／／／

(待て!待て!?!何でそっちの方向に行く!?!)

「イ、イチカ?」

「ど、どつちとも見てみたいけど、り、鈴お姉ちゃんは着なくてもか、可愛い…。／／／」

「あ、ありがとう。／／／」

結局二人はイルカのストラップを色ちがいのお揃いを購入し水族館を出て別の場所に移動した。

「来て良かったね。」

「そうだな。り、鈴お姉ちゃんは何が一番良かった?／／／」

「わ、私はペンギンが良かったな。／／／そう言うイチカは?」

「俺はイルカのショーが凄く良かったな。な、なあ何でまた俺は、り、鈴お姉ちゃんの膝の上に乗ってるんだ?／／／」

「ダメ？」

「ダ、ダメじゃない…。／＼／＼（というか何で他の人達は俺達を見て微笑ましく見てるんだ!?!）」

「なら良かった♪」

二人はこの後、ショッピングセンター等に行き、この日のデートは無事に終了した。しかし、この日のネットで会おうと幸せになれる姉弟が居ると騒がれていた。

番外編 誕生日

どうしてこうなった？俺の選択は間違っていない筈だ。それなのに何故、鈴の服が少しはだけながら俺の服を離さずに寝ていて、身内＋同居人の大人組から罵倒されているんだ？あ、別に罵倒と言っても昔みたいな酷い奴じゃない。ただ心にグサグサと来るだけだ。

と言うより、こんな事になった原因の彼奴をこれ以上鈴に近付けるものか。彼奴のせいで鈴が変わってしまった。まあ、例え鈴がどんな風に変わろうが俺は鈴を嫌いになる筈は無いがな。とにかく彼奴を鈴に近付けてなるものか。絶対に。

取り合えず、鈴の目が覚めるまで何が起こったのかを説明させてくれ。そう、あれは一昨日の事だ。

イチカは何時もの様に部屋でゆっくりしていると、イチカのスマホに一通のメッセージが届いた。差出人はスクールで、内容は『イチカへ、明後日に大事な用があるから、17時まで家に帰って来なさい。追記・泊まりの用意もしておく事。スクールより。』だった。

「(大事な用？まあ、明後日は特に大した用事も無いし大丈夫か。しかし、えらく簡潔な文章だな？何時もなら絵文字とか普通に使うてるの筈なのに?)」メアは何でだと思おう?」

「知るか。てめえの疑問なんぞ俺には関係の無い話だ。てめえ自身で考えろ。と言うか動くな、シロ。三つ編みがしにくいだろうが。」

「す、すみません…。少々くすぐったいもので…、つい…／＼／」

「…別にお前が謝る事じゃない。」

「メア…／＼／」

メアと白騎士は、軽めの甘い空間を創り出している。

しかし、この部屋の主は宝具『無限の砂糖精製』アンリメデットシユガーワークス』を持つイチカである。正直、この程度なら日常茶飯事で無意識に創り出しているためにあまり意味はない。だが、この部屋に居るのはイチカ、メア、白騎士の三人だけではない。

「おっと、此処でメアさんがそっぽを向いて、お姉ちゃんが赤面しています！解説のユルセンさん、この状況をどう思いになりますか？」

「これはあれだなく。メアは俗に言うツンデレだと俺は思うなく。ただなく、メアはもうちよいデレた方が良い思うぞく。てか、男のツンデレとか正直誰得だよ。そんで白騎士はあれだなく。くすぐったいんじゃないで、ただ恥ずかしいだけだと思うなく。」

「成る程。メアさんは、好きな女の前ではデレたいけど分からない為にあんな風になるんですね。そして、お姉ちゃんが幸せそうでなによりです。」

「白式にユルセン、あんまりメアと白騎士をいじるなよ？その内、酷い目に合わされるぞ？」

「大丈夫だ、問題無い。」

「そうかそうか。大丈夫で問題無いんだな？なら、今からOHANA ASIするか。ゆるキャラ？」

「白式、少し私とOHANA ASIしませんか？」

メアと白騎士はユルセンと白式がフラグを立てて直ぐに、それぞれの背後を取っていた。イチカはこれ以上どうにもならないと分かつ

ているので、ユルセンと白式に静かに黙禱を捧げた。

「さあ、眼魂の中に逝くか。（眼魂の中に逝きましようか。）」

「待って!?!それ絶対に字が違う!?!」

ユルセンと白式は抵抗するも、難なくメアと白騎士に眼魂世界に連れて逝かれた。

「…外泊許可を取りに行くか。」

イチカは重い足取りで職員室に向かった。しかし、この時イチカは思いもしない事が起こるとはまだ知らない。

「…。」

「…おい、てめえ。この短時間で一体何があった?と言うか、心の闇がかなり増えてるぞ。」

「Master、大丈夫ですか?」

メア達が眼魂世界から帰って来ると、ベッドの上でうつ伏せで落ち込んでいるイチカの姿があった。イチカの落ち込みは周りが暗く見える程落ち込んでいた。

「…ボソ。」

「ロリっ子、何て?」

「何か鈴ちゃんの対応が少し冷たかったんだって。半年以上前から行動を思い返しても何の心当たりが無いって。」

「半年前から思い返せるって凄くなく。」

「…ボソ。」

「バカにするな、鈴との思い出は出会った時からずっと覚えてるって。マスター、本当に大丈夫？」

「(理由を知ってるとは言え、此処まで落ち込むか？普通？)こいつマジで面倒だな。…取り合えずこいつの意識刈るか。よっと。」

メアはイチカの中の入り込むと、強制的にイチカの意識を心の奥に押し込めて直ぐに自身との繋がりを遮断した。この時のイチカの見えた目は、右目が紫になっており、髪は白くなっていた。

「さて、こいつに気付かれない様にどう計画を進める？正直、俺は面倒臭いからネタバレに一票。」

「このまま黙ってた方が面白そうだからネタバレ無しに一票。そんで、誰かメンタルケアに付けた方が良いと思うぞ。」

「そうだね。このまま行くと最悪マスターは自殺する事になるよね。だから私もメンタルケアを付けて、ネタバレは無しに一票。」

「私もネタバレ無しに一票で。明後日になれば、Masterも絶対に元気になると思うので。」

全員の意見が出終わると、ユルセン、白式、白騎士はメアの方に向き、静かに見つめ始めた。勿論、メアは自身に向けられている視線を無視していたが、視線(特に白騎士の視線)に耐える事が出来ず、ついに口を開いた。

「…ハア、バラさなきや良いんだろ。で？仮にメンタルケアを付けるとして、誰を付けるんだ？言つとくが俺はメンタルケアなんぞ柄じゃないからな。」

「消去法で楽しんでいるユルセンも外されますね。となると残るのは必然的に私と白式になりますね。」

「だったら私がマスターのメンタルケアをやるよ。大丈夫！私に任せよ！」

白式は、胸を張ってイチカのメンタルケアをする事を宣言した。ユルセンと白騎士も、白式なら大丈夫だろうと考えていた。しかし。

「…無い胸張って言われてもなあ。」

「それ関係無いよね!?!今、関係無いよね!?!それに何で今いじつたの!?!」

「ああ？そんなの自分の胸に手を置い…すまねえなw置ける程の胸は無かったなw」

「うがああああああ!?!人が気にしてる事を平然と言ったな!?!このツンデレ悪夢！」

「ハッ！「ひ、貧乳はス、ステータスだ！き、希少価値だ！」って誰が言ったんだっけなああ？なあ？ぺったん娘さん？」

「じ、事実だもん！今となっては胸が慎ましい方がすくないもん！」

「フツ、所詮負け惜しみだな。」

「だな。しかし、白式はメア達に着いていなくて良かったのか？」

「気にしない、気にしない。それに私は、こう言う風にマスターと話すだけで楽しいからね！」

「なら良いんだが…。」

イチカは、白式が嘘を吐いていない事は理解していると同時に、自分に何かを隠している事に気付いていた。しかし、白式からは悪意などは感じられない事から、あまり気にしない様にした。

「ほら、マスター！早く行こうよ！」

「そうだな。」

イチカはバイクに乗り、IS学園を出発した。道中では白式と話しながら家に向かっており、白式は鈴の話題が出ない様に気を付けながら話していた。そして、時間はあっという間に過ぎ、家に到着した。

「到着つと。」

「お疲れ、マスター！あれ？ねえ、マスター？何か、扉…開いてない？」

「ホントだ。全く、無用心だな。」

イチカは白式の台詞を聞き、扉の方を見ると少しばかり開いており、住人の誰かが閉め忘れたと考えていた。しかし。

パンツ！パンツ！パンツ！

「!？」

「マスター!?今のって!？」

「分からない!でも急ぐぞ！」

「うん！」

突如、家の中から何かが破裂する音が三回程聞こえてきた。その音を聞いたイチカと白式の二人は、急いでスコール達が居るであろうリビングに向かい、リビングのドアを開けた。

「義母さん、秋姐、マドカ、東さん、クロエさん!大丈夫か!？」

『誕生日、おめでとう!』

パンッ!パンッ!パ、パン!

「…は？」

イチカがリビングに入るとスコール、オータム、マドカ、東、クロエ、ユルセン、白騎士、そして、居る筈の無い鈴がクラツカーを鳴らして、イチカの誕生日を祝っていた。(メアは後ろの方で腕を組み、笑みを浮かべていた。)イチカは突然の事に驚いていると、白式が話し掛けて来た。

「マスター!どう?驚い…マスター!?何で泣いてるの!？」

「い、いや、嬉しさと色んな事に対する安心感が同時に来たから自然と涙がな。皆、こんな俺の為にありがとう！」

「フフ、さて主役も登場した事だし、イチカの誕生パーティーを始めましょうか！…皆席についたみたいね。それでは！イチカの十七の誕生日を祝して、乾杯！」

『かんぱーい！』

スリーブの掛け声により、イチカの誕生パーティーが始まった。テーブルには多くの料理やお菓子、飲み物等があり、周りを見れば様々な飾りが付けられている。

イチカ達はそれぞれ好きな席に座り、グラスに好きな飲み物を注ぎ、全員でグラスを当て合う。

因みに席順はこうなっています。

スコール・マドカ・東・クロエ・白騎士・メア

イチカ・鈴・オータム・ユルセン・白式

「イチカ、誕生日おめでとう！はい、私からの誕生日プレゼント！」

「ありがとう、鈴！なあ、今開けても良いか？」

「勿論！」

イチカが受け取った物は、白と紫のラッピングが施された長方形の形をした物だった。ラッピングを丁寧にほどくと、中には箱の様な物が包んであった。箱を開けると黒いフレームの眼鏡が入っていた。

「眼鏡？」

「うん。最近、パソコンで作業した後とか、よく目頭を押さえてたでしよ？だからブルーライトとかを軽減してくれるやつを贈ろうかなって思ったんだ。」

「鈴…、ありがとう。」

「どういたしまして♪じゃあ、早速着けてみて？」

「ああ。」

イチカは箱から眼鏡を取り出して、自身に掛けて顔を上げる。すると、スコール、マドカ、鈴の三人はそれぞれスマホを取り出して、眼鏡を掛けたイチカを連写し始めた。スコールに関しては右手に愛用カメラ、左手にスマホと言う荒業まで見せている。やがて、三人による連写が終わると、良い笑顔でイチカにサムズアップをしていた。

「「good！」」

「似合ってるよ！マスター！」

「ウンウン、バッチグーだよ！イツ君！」

「東に同意だな。スゲー似合ってるぞ！」

「眼鏡一つでこんなに変わるもんだなく。」

「そうですね。眼鏡を掛けているのと掛けていないとはかなり雰囲気違いますね。…ほら、メアも何か一言言ってください。」

「…ま、悪くはないな。」

「何か…照れくさいな。」

イチカが鈴からのプレゼントを受け取り、それぞれ感想を言い合う。そして、ゆっくりと時間が過ぎる。すると突然、スコールが何か

思い出したかの様にイチカと鈴に真剣な表情で呼び掛ける。

「処でイチカ、鈴ちゃん。貴方達二人に聞きたい事があるの。」

「聞きたい事?」

「孫の顔は何時になったら見れるの?と言うか何時、子供を作るの?」

「ツ!?ゲホッ!ゲホッ?!いきなり何言ってるんだ!」

「ま、孫!?こ、子供!?あ、あの、え、えっと、はう／＼／ゴグゴク、ふう、そうですよ!?!い、いきなり何て事言うんですか!?!」

スコールの質問にイチカは顔を紅くして、気管に飲み物が入ったのかむせており、鈴も同じ様に顔を紅くし、グラスに入っていた飲み物を一気に飲み干す。他の面子は声を殺して笑っていた。

「ごめんなさい、言い方が悪かったわね。何時になったら「ピー」するの?」

「ちよつと待て!?!何で悪い方で言った!」

「だってね、再開してから結構経つのに「ピー」もしないなんて心配するに決まってるじゃない。それに早く孫の顔が見たいんだもん!」

「::その歳で、だもん!とか言われても無理して言ってる感じがしてるから何かなあ?」ヒュッ!ザクッ!

ユルセンとメアがスコールに向かって歳の話をしたとたん何か

二人の横を通り過ぎ、後ろの壁に何か刺さる音がした。二人はゆつくりと後ろを振り返るとそこにはフォークが二本が壁に半分以上突き刺さっていた。

「何か言ったかしら？ユルセンにメア？」

「ナ、ナンデモナイデス！」

「自業自得だな。…ってありや？いつの間にか俺の酒が無くなって？イチカ、俺の酒知らないか？」

「いや、知らないけど…、自分で飲んだんじゃないのか？」

「うーん、そんな筈ねえんだけどな？」

「鈴は何か知らないか？」

「…。」

「…鈴？一体どうs…ムグツ!？」

イチカは鈴の事を心配していると、いきなり頭を捕まれて鈴の顔に引き寄せられた。そして、二人の唇が触れ合い、イチカの口の中に何が侵入する。

「！ああああ、まあまあ。」

「へえ、鈴もやるじゃねえか。」

「兄さん達はお熱いね。」

「深い接吻だね！分かるとも！ねっ！クーちゃん！」

「はい、東様！ディープなキッスですね！分かりますとも！」

「ビュービュー！情熱的だね、お二人さん！」

「Masterに鈴様、おめでとうございます！」

（後でいじる為に写メ撮っておくか。）

（だなく。）

周りから様々な言葉を掛けられるが、イチカの脳内はそれ所では無い。何せ、いきなり頭を捕まれてディープキスまでされているのだから、他の事を考える事すら出来ない。

「…プハ。…イチカの味。…フフ♪おいしい♪」

「（あれ？何か、頭がふわふわする？俺、鈴に何をされたんだっけ？…ああ、そうだ、キスされたんだった。しかも初めてするディープキスを。しかし、何て言えば良いんだろか？中で残る感触と例え様の無い甘さ。そして、口一杯に拡がる強いアルコールの香り。………アルコールの香り!?）鈴!?まさか酔ってるのか!?」

「…ん、イチカに酔ってる♪」

「可愛いから許す！（何時もの鈴と違う!?）」

「…フフ、本音と建前が逆だよ♪…でも、ありがとう♪…それじゃあ、早速。」

「え？」

鈴はいきなり、イチカを強く押した。気を抜いていたイチカは簡単に後ろに倒れてしまい、鈴がイチカの両腕を押さえる様に座ってしまった。簡単に言えば、鈴がイチカを押し倒して馬乗り状態になっていた。

「…ねえ、イチカ？子作り…しよ？」

「!?ちよつと待て鈴!?いきなり何言ってるんだ!？」

「…?…子作り?」

イチカは焦りながら鈴を止めようしているが、鈴は首を傾けながら質問に答えていた。

(そう言う事じゃなくて!合ってるけど、合ってるけど!そう言事じゃなくて!?兎に角、俺が何を言いたいかと言うと!何時もと違う鈴も可愛い!じゃなくて!?!いや、可愛いのは事実だけ!取り敢えず!義母さん達に助k…)

「…ねえ、今は私だけ見て、私の事だけ考えて?」

(マジで可愛いすぎる!と言うか、理性とか色々とヤバイ!)

「なあなあ、スコール。この後、どうなると思う?」

「そうねえ、まずイチカの理性がダイカイガン!するでしょ。」

「!？」

「そしたら、イチカがビーストになって鈴ちゃんに向かってオメガドライブ！状態になって、鈴ちゃんのヴァージンをオメガブレイク！するでしょうね。」

「ちよつ！まつ…ムグツ!？」

「…。」

スコールに何か言おうとすると、鈴がイチカの唇を自身の唇で塞ぐ。そして、先程の様に自身の舌をイチカの口の中に侵入させる。

「違うよ。貫いて出すんだからオメガストライク！してからオメガショット！するんだよ。」

「「それだ!」」

「プハ！それだ！じゃねえよ!?(兎に角、これ以上は色々と不味い!どうにかしな…!?!ちよつと待て!?!鈴の力が予想以上に強くて腕が動かせない!?!)」

「…イチカは私とするの…嫌?。」

「そんな訳無いだろ?俺は鈴以外とする気なんて無い。」

「…イチカ。」

「鈴…。」

イチカと鈴は互い名前を呼び合いながらに見つめ合う。二人は周りにから見て、とても良い雰囲気になっていた。

「よし、皆！別の所に移動しましょう！」

『はい！（おう！）（うん！）』

スコール達は料理や飲み物等を持ち、別室に移動し始めた。するとスコール、東、マドカ、メアがいきなり足を止め、イチカは何故足を止めたのか分からなかった。

「ねえ、イチカ。孫は三人欲しいわ。」

「何でだよ!？」

「東さんは子供が二人欲しいな！」

「それは蒼夜さんに言ってください！」

「兄さん、私は姪と甥が二人ずつ欲しいです。」

「何でマドカが一番多いんだよ!？」

「おい、ツインテ猫。」

「…?？」

「これを使いな。」

「?…:ありがとう。」

メアは鈴に向かって長方形の紙を一枚投げつけ、空中でその紙を手取る。鈴は手に取った物を対して首を傾げるが、それが何なのか理解するとメアに感謝の言葉を伝える。

「おい、メア!? 一体鈴に何を渡した!?!」

「何って、決まってるんだろ。お前用のお札だ。」

「なっ!?!お前何してるんだよ!?!ちよ、鈴さん!?!流石にそれは洒落にならないんですが!?!」

「…でも、使わないと勿体無いよ?…だから。」

鈴はメアから受け取ったお札を迷う事無く、イチカに張り付けた。イチカは腕や脚に力を入れようとすが入らず、体を動かす事が出来なくなってしまった。

「フツ、無様だな、てめえw動けない状況でされるとか、まさに愉悦だなw」

「覚えてろよ!?!メア!」

「ああ、勿論覚えておいてやるよ。その無様なてめえの姿をな!」

「メエエエエエアアアアアア!」

「…むう。」

「ちよつと待て、鈴!?!何で服を脱ごうとしているんだ!?!」

「…今から始めるから?」

「お、落ち着け、鈴?ま、まだ俺の心の準備が出来ていないし、そ、それに義母さん達が居るしや?」

「…？…皆なら、もう居ないよ？…それにイチカはリラックスして
るだけで良いから。…だから、しよ？」

「鈴…。(彼女にここまで言わせるなんて、彼氏失格だな。鈴が酒の
影響だとはいえ、覚悟を決めたんだ。俺も鈴の覚悟に応える為に覚悟
を決めるしか無いな。) 待たせて御免な、鈴。」

「…うんうん、大丈夫。…イチカなら何時までも待てるから、でも今
は、私達だけの時間を楽しみたい。」

「ああ、俺もだ。…ん。」

イチカが覚悟を決め、鈴の言葉に応える。その言葉を聞いた鈴は、
無表情から少しだけ微笑むとゆっくり自身の唇をイチカの唇に近づ
け、やがて唇同士が触れ合う。今度のキスは鈴の一方的な物ではな
く、お互いがお互いを求め合うキス。

イチカと鈴は、キスで互いを求め合い、お互いの愛を確かめ合う。
二人だけの時間で、二人だけの世界で。イチカは、何時もとは違う鈴
と周りの雰囲気には最初は戸惑っていたが、次第に鈴を強く求め始め
る。しかし、それ以上に鈴はイチカを求める。

「…イチカ、いい？」

「ああ。(まさか、十七の誕生会でこんな事になるなんて…：…十七
？いや、確かに高二だから十七で間違いn…十七!?不味い!卒業まで
に後一年半もある!?)」

イチカは、何かに気付いてしまったが既に鈴は服を脱ごうとしてい
る為に手遅れである。

「(マズイ!? マズイ!? マズイ!? このままだと色々マズイ!? 待ってくれ!? 待ってくれ!? マジで待ってくれ!?) 鈴!」

「…?」

「俺は鈴が好きだ! 鈴の可愛い所が好きだ! 鈴の可憐な姿が好きだ! 鈴の明るい所が好きだ! 鈴の活発な所が好きだ! 鈴の優しい所が好きだ! 鈴の眩しい位の笑顔が好きだ! 鈴の真っ直ぐな眼が好きだ! 鈴が慌てると猫みたいになるのが好きだ! 鈴の人懐っこい所が好きだ! 鈴のたまに見せる格好いい所が好きだ! 鈴の勇敢な姿が好きだ! 鈴の諦めない所が好きだ! 鈴の熱い所が好きだ! 鈴の誰かの為に怒る所が好きだ! 鈴の誰かの為に泣く所が好きだ! 鈴と一緒に過ごす時間が好きだ! 鈴の全てが好きだ! だからこそ言わせて貰う! 俺は! 鳳鈴音を、すう…誰よりも愛している!!」

「…きゆう。」

イチカの告白を聞き終わった鈴はイチカに覆い被さる様に倒れてしまった。

「…勢いに任せ過ぎた。今考えるとかなり恥ずかしい…。と言うかこのままだと鈴が風邪引くな。鈴を起こさない様に俺の部屋にはk…お札のせいで動けない…。ハア、仕方が無い。♪♪♪」

「キィー!」

「っー。」

「キィ。」「コクコク」

イチカが口笛を吹くとコルーが何処からともなく現れ、元気よく鳴

き声を上げた。しかし、鈴が起きない様にイチカはコルーに静かにするに伝える。コルーにそれが伝わり、小さな声で鳴きながら頷いた。

「コルー、俺の部屋から毛布取ってきて、鈴に掛けてくれないか？このままだと鈴が風邪引くかもしれないから。」

「キイー。」

「いや、俺より鈴だろ。」

「キキイー？」

「動かないんじゃないんで、動けないんだ。だから頼む。」

「キイー。」

「ありがとな。」

コルーは急いで毛布を取りに行くと、直ぐに赤い毛布を持ってイチカの元に戻る。そして、イチカと鈴に掛かる様に毛布を広げてゆつくりと二人に掛ける。そして、仕事を終えたコルーは満足したかの様に自身の寢床に戻って行った。

「ふう、取り敢えずはこれで安心だな。義母さん達が来るまで俺も少し眠るか…。」

イチカは目を閉じて意識を落とし、夢の中に旅立とうとしているが、そう簡単には行かなかった。

「スウ…スウ。」

「…。(寝れるか！耳元で好きな人の寝息が聴こえてたら寝れるか！しかも、鈴の柔らかい感触がほぼダイレクトで感じてるから余計に寝れるか！もう一度言ってやる！寝れるか！…クソツ！今、無性に鈴を抱き締めたい！優しくギュツとして、そのまま寝てしまいたい！と言うか鈴そのものを感じていたい！…フウ、一旦落ち着こう。これじゃまるで俺が変態みたいじゃないか。確かに耳元で聴こえる鈴の寝息と鈴の柔らかさと鈴の香りにドキドキしているが断じて俺は変態ではない！」

無言で様々な事を考えながら、理性と本能が闘っているイチカ。しかし、自身は変態ではないと思っっているが最後の考えで全て台無しである。だが、このまま行けばイチカは理性崩壊と闘いながら、この一夜を過ごす事になる。…まあ、だからと言って此処で終わる程世界は優しくはない。

「…ハミュ。」

「くッ!? (何だ!?何だ!?一体何だ!?いきなり耳から電流が走ったと思ったら全身がゾワゾワってしたぞ!?一体何が起きた!?てか、現在進行形で耳が暖かくて全身がゾワゾワする!?)」

「…ハムハム。」

「くッ!!? (によおおおおおおわあああああああああ!?!サモサモキヤットベルンベルンDDB!?!ボチヤミサンタイダムド!?!ボチテンシヨンタイクリスティア!?!アイスグラススノウクリアクリスタル!?!ハッ！一体俺は何を!?)」

「…スウスウ。」

「くッ!?!?!?! (耳元は辞めてええええええええええ!?これ以上されたら!?!?!?!)」

色々可笑しくなつて理性が完全に崩壊する!?これも全部マーリンつて奴のせいなんだ!マーリン死すべし慈悲はn「:スウスウ。」によおおおおおおわあああああああ!?)」

耳を甘噛みされたり、吐息を掛けられたりしたイチカの鋼(笑)の理性は崩壊寸前である。因みに今の二人の顔は、イチカが焦りに焦りまくって顔も真っ赤にしながら涙目になっており、鈴はかなり幸せそうに笑っていた。因みに、数時間程この状況が続いた。

「おはようございまゝす。今、私達はイチカと鈴ちゃんが寝ているリビングの前に来ていまゝす。さて、二人は夜戦後なのでぐっすり寝ている筈でしょう。なのでこのまま突撃したいと思ひます。二人とも準備は良い?」

「おう!」

「バッチグーだよ!」

「なら…:スウ、総員!突撃!乗り込め!」

「ウエエエエエエ!」

リビングの前ではマイクと『ドッキリ大成功!』と書かれている看板を持つスコールと、テレビ撮影等で使う様なカメラを持ったオータムと束が待機していた。そして、スコールの掛け声と共にリビングに勢い良く侵入する大人組。因みに、この三人はかなり酔っている状態である。

「グッドモーニング!イチカ!夜戦は何回した!?子作りは!?夜のプロレスは!?ええ〜い!ピーは何回やった!」

「よっ！イチカ！今、何食べたい？赤飯か！赤飯か！それとも赤飯かあああああああ！？なら俺が祝福ついでに作ってやるよ！」

「ハロー！イツ君！これで君も大人の仲間入りだね！正直、先に子作りされたのは悔しいけどイツ君達なら許せるよ！何せイツ君達だからね！」

「…うるせえよ、頼むから静かにしてくれ。此方は寝てないんだから騒ぐなよ…、現在進行形で色々とヤバいから。」

「「ア、ハイ。」」

イチカは自身の周りで騒いでいる三人の方を睨みながら消えそうではあるがドスの利いた声で訴え掛けていた。眼もかなり鋭くなっているために、スコール達は少し声を抑えて返事をした。

騒ぐのを辞めてもイチカは三人を睨むのを辞めないまま口を開く。

「勘違いしている様だけど、俺と鈴はしてないから。取り敢えず、今は胃に優しいお粥が食べたい。出来れば薄味で。」

「「へ…。」」

「へ？」

「「へタレエエエエエ！」」

「ええ…。」

「何してんのよイチカ！普通あの状況になったら、ヤルのがお約束でしょ！？それをやってない！？本当に何してんのよ！？このへタレ！」

「抱けよ!?男なら抱けよ!?好きな奴くらい抱けよ!?良い雰囲気になつてたろ!?だったら抱けよ!?迷わず抱けよ!?何で抱かないんだよ!?このチキン野郎!てか、作つてやるよ!胃に優しいだけじゃなくて栄養のあるお粥位作つてやるよ!」

「折角二人の為に皆で歌つた『想い〇がい〇ぱい』を流そうと思つたのに!イツ君のせいで台無しだよ!こんな時こそ、覚悟を決めるぜ!だよ!?この意気地無し!」

…とまあ、こんな感じで今に至るわけだが、確実に三人とも酔つてるよな?てか、結論を言わせて貰おう、アルコールお前だけは許さなからな?絶対に仕返ししてやる。具体的には料理で重労働させてやる。さてと。

「…高校生活、後一年半あるんだけど?」

「「?」」

「……………鈴は既に国家代表になつて次のモンド・グロッソ出場が決まつてるんだけど?」

「「「??」」」

「…ハア、もし俺と鈴がしてて、もし妊娠して鈴が酒を飲んだ事がバレたらどうなる?」

「「ハッ!」」

「やっと分かつてくれたか…。」

「「オオメダマ!」」

「……………酒類全部(料理で)処分しても文句ないよな?と言うか絶対に(料理で)処分する。」

「「待つて!?それだけは勘弁を!」」

「酔ってるよな?」

「「ごめんなさい!だからお酒だけは!お酒だけはあああああああ
あ!」」

酒類の為にプライドを捨てて土下座をする三人。この光景にイチカは逆に感心していた。すると。

「…ふうあゝ、…。」

「おはよう、鈴。随分と幸せそうにして寝たけど何か良い夢でも見てたのか?」

「んゝ、おはよく。うん。何だか凄く面白くて楽しい夢だったわ。」

「へえゝ、どんな?」

「私が赤ずきん、お母さんが刹那先輩、狼がイチカ、ハンターがセシリア、お婆ちゃんが永久さんで、私がお使い途中でイチカに出会ってセシリアとイチカが戦った後にイチカとデートしてる夢。」

「え?何それ。めっちゃ気になる。」

「ところでイチカ?」

「どうした?」

「重くない? 退けようか?」

「全然、俺は別にこのままでも構わない。それよりもお札を外して欲しい。」

「良いわよ。ほいっと。そう言えばイチカに聞きたい事があるんだけど。」

「ありがとう。聞きたい事?」

「うん。イチカって…耳弱い?」

「……………さあ? あんまり気にしな「隙有り!」ヒヤツ!?!…………。」

「「…にやあ。」」

「いゝチカ♪お願いがあるんだけど♪」

「お願いか、何だか嫌な予感がするが言ってみてくれ。内容次第では叶えるやるからさ。」

耳を摘ままれたイチカは高めの声で声を上げ、それを見ていたスコール達はやついでおり、鈴は甘える様にイチカにお願いする。イチカも良い笑顔で鈴に返答する。

「耳…もつといじらせて♪」

「ハハ、今?」

「うん♪」

「仕方ないな。と、その前に…ああ!? あんな所に天照さんから頂いた神界の名酒、天空の夜桜が！」

「何!? 何処だ!?!」

「鈴! 捕まれ! そして舌噛むなよ!」

「え? きやつ!? (こ、これって…お、お姫様抱っこ!? …久し振りにされたけど、やっぱり落ち着くな。)」

イチカは、スコール達がある筈の無い酒を探している内に鈴をお姫様抱っこでリビングから離脱し、イチカ自身の部屋に避難した。

「よつと、いきなりごめんな? 驚いただろ?」

「大丈夫よ。それに、別に嫌じゃなかったから。」

「そっか、それならよかった。ふああ…。」

「眠いの?」

「ちよつと…な。」

「ねえ、イチカ?」

「…ん?」

「(い)(こ)…使う?」

そう言ううと鈴は優しい笑みを浮かべながら自身の膝をぽんぽんと軽く叩き、イチカを誘う。そしてイチカは、無言で眼鏡を渡しながら鈴の膝に自身の頭を乗せた。

「昼…くらい…に…起こして…く…。」

「寝ちやった。それにしても、かなり疲れてたみたいね。…えい。」

「…。」ピク

「…！」ムニムニ

「…。」ピクピク

「…♪」ムニー！

「…。」ビクーン！

「…。」ムニツ

「…。」ビクツ！

「…ちよつと癖になりそう。でも此方の方がもつと癖になりそうね。」

「…ん。」

鈴はイチカの頭部を優しく撫でる。頭部を撫でられたイチカは気持ち良さそうにしていた。そして、この状況が、鈴がイチカを起こすまで続いた。

番外編 結婚

あの日、私は彼のある言葉を聞いて泣いてしまった。別に悲しくて泣いた訳じゃない。ただ単純に嬉しくて、幸せで、何より彼からの言葉だから泣いているんだ。

本当は何て言われたか言いたいけど、彼から言葉は他の誰の物でも無い。私だけの物。だから何て言われたかはご想像に任せるよ。まあ、結婚の申し込みだった事は教えて上げるよ♪

うん？何でこんな話をするのかって？そりゃあ、私と彼が今日、結婚式を挙げるからさ。え？全然嬉しそうじゃない？嬉しいに決まっているじゃないか！それこそ、こんな風にクールにしていないと、嬉しさで死んじゃう位に嬉しいよ!?だって彼と結婚だよ!?憧れの結婚式だよ!?嬉しくない訳がないよ!?

コンコン。今日の主役が若干ポンコツになりかけていると、ドアがノックされ、スーツに身を包んだスコールが部屋に入って来た。

「何してるの?…束?」

「うひゃああああああ!?何でスーちゃんが此処に居るの!?!と
言うかノックは!?!」

「ちゃんとしたわよ。それにしても似合ってるじゃない、その花嫁衣装。」

「ありがとう。それにしてもこの花嫁衣装、凄く私好みだよね?何処で見付けたの?」

「フフ、実はその花嫁衣装ね、マドカがデザインした物よ。」

「だからこんなに私好みなんだね。」

束は手を胸に置き、微笑みながら自分自身の喜びを噛み締めていた。

「…ねえ、スーちゃん。私って本当に結婚するんだよね？」

「いきなりどうしたのよ？あんなに嬉しそうにしてたのに。もしかしてマリッジブルー？」

「そうじゃないよ。ただね、今この時間が夢なんじゃないかって、今でも怖くなるんだ。目が覚めたら蒼夜君と赤の他人になっちゃうんじゃないかって…。」

「束、こつち向きなさい。」

「え？なn「バシンツ！」ぬおおおおおおお!?おでこが!?おでこがああああああ!?」

「はい、痛いなら夢じゃない。お分かり？」

「もっと別の方法があったと思うのは私だけかな!?例えば右の頬をつねるとか!?左の頬をつねるとか!?両方つねるとか!？」

スコールは暗くなりかけていた束のおでこに、本気のでこぴんをお見舞いした。束は涙をこらえておでこを抑えながらスコールに訴えていた。

「夢じゃないから良かったじゃない。」

「なんか納得出来ないんだけど!?!…でもありがとね、スーちゃん。」

「フフ、どういたしまして。さ、そろそろ時間よ。参りましょうか、花嫁さん？」

「うん。よろしくね、スーちゃん。」

東はスコールに連れられて、控え室から会場へと向かった。そして、東は閉ざされた扉の前で深呼吸をしてスコールに何も言わずに頷いた。それを確認したスコールは何処かに連絡をすると、閉ざされていた扉が静かに開き、東はスコールに連れられてゆつくりとヴァージンロードを歩む。

「お待たせ、蒼夜君。何時も格好いいけど、今日は一段と格好いいね。」

「ありがとう、でもそれ以上に東も綺麗だよ。それこそ女神と見間違う程にね。」

東と蒼夜は、互いに言葉を掛け合う。そして、誓いの言葉が始まる。

「汝、如月蒼夜は、この女、篠ノ之東を妻とし、健やかなる時も、病める時も、富める時も、貧しい時も、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くす事を誓いますか？」

「誓います。」

蒼夜は真剣な表情で、神父服に身を包んだオータムに誓いの返答をする。それを聞いたオータムは微笑み、今度は東に誓いの言葉を問う。

「汝、篠ノ之東は、この男、如月蒼夜を夫とし、健やかなる時も、病

める時も、富める時も、貧しい時も、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くす事を誓いますか？」

「誓います。」

「それでは指輪の交換をしてください。」

蒼夜と束は、互いの事を思い、心が高鳴りながら指輪をはめ合う。

「では、ベールを上げてください。神の下で誓いのキスを。」

二人の顔は、互いに赤らめながら少しずつ近付いて行き、やがて二人の唇が触れ合う。そして、スコールが我が子の様に涙を流しながら、静かに手を叩いていた。

「ねえ、蒼夜君。私と出会って付き合った事、後悔してる？」

「してな…いや、一つだけ後悔した事があったよ。」

「ッ！…それって？」

「もっと早く束に会いたかったな。ってね♪」

「えっ!? あ、うん／＼わ、私も、も、もっと早くあ、会いたかったな／＼」

蒼夜の台詞に、束は顔を真っ赤にしながらモジモジしていた。それを見ていた蒼夜は、悪戯が成功した子供の様な表情をしていた。そして、スコールは号泣寸前であった。

誓いのキスも終わり、暫くして会場の外でイチカと鈴は二人で話し

ていた。

「東さん、綺麗だったね。それに物凄く嬉しそうだったし、見てるこっちまでドキドキしちゃった。」

「そうだな。東さんと蒼夜さんの二人なら幸せになれるだろうな。」

（あ！もうすぐブーケトスが始まるみたいですよ！早く行きましよう！ほら、メアも一緒に！）

（シロ!? 待て!? 俺はブーケトスなんかに興味は無い！ 離せ！ おい、ロリっ子！ シロを何とかしやがれ！）

（マスター達は行かなくても良いの?）

「鈴はどうする?」

「私は良いかな。」

「なら俺も。」

（無視してんじゃねええええええええええええええええええ！）

色々ありながらも、東によるブーケトスが始まる。

（うん? 今一瞬、東さんと目があつた様な…。）

「どうしたの、イチカ?」

「いや、何でも無い。」

束は後ろを向き、手に持つブーケを思いっきり放り投げた。会場の入り口前に居る人達は一生懸命手を伸ばしブーケをキャッチしようとしているが手が届かず、ゆっくりと頭上を越えていく。そして、最終的にブーケを手にしたのは…。

「…え？」

「…は？」

…鈴だった。と言うより、鈴の目の前に束が投げたブーケが落ちて来たのだ。

イチカが束の方を見ると、見事なドヤ顔を決めている束の姿があった。その顔を見たイチカは、束が何をしたのかを理解し、更に口パクで何かを伝えている事に気が付いた。

（『つ・ぎ・は・ふ・た・り・の・ば・ん・だ・よ。』…束さんらしいな。）

束は伝えたい事をイチカに伝え終わると、物凄く良い笑顔でウィンクをしており、蒼夜は苦笑いをしていた。その光景を見たイチカと鈴は、心の中である事を願った。

『あの二人が何時までも幸せに過ごせます様に。』と

番外編 赤ずきん

ある家に赤ずきんというニックネームの少女が住んでいました。名の通り何時も赤い頭巾を被っており、その頭巾から何故かツインテールにした髪が出ています。しかし、誰も不思議に思いません。そしてかなり有名人です。少女の名はリン。今回の主人公です。

「リンきーん。少しよろしいでしょうかー?」

「はい。お母さん?どうしたの?」

「実は母にこれを届けて欲しいのです。」

「わかったわ。」

この人は私のお母さんです。名前はセツナ、特徴は誰に対しても敬語で、高めの身長に黒い髪。そして何時もキモノと呼ばれる服装をしていて何がとは言わないが大きい…。何れくらいだろう?…小さめのメロン位?ま、それは置いておいて届ける物は何だろう?

・小太刀×5本

・砥石

・羊羹と呼ばれるお菓子×3本

・アルコール度数90を越える神殺しという名前のお酒

…何これ?全体的に可笑しい気がする。本当にお婆ちゃんって何者?

「…:これを届ければ良いの?」

「お願い出来ますか?私は用事があつて行けませんので…:。」

「わかったわ、じゃあ今から行ってきます。」

「行つてらしゃい。あ、それとどうぞ。後、ハンターさんに出会つたら急いで逃げてくださいね。」

お母さんは私が行く時にお小遣いを少しくれて注意をしてくれた。それにしてもハンター？狼じゃなくて？ ま、良いか。

この時のリンはまだ知らない。ハンターの本当の恐ろしさを。そしてこの後起こる運命の出会いを。

確かお婆ちゃんの家って森を抜けた先の家に住んでるんだよね？ うーん、良いお婆ちゃんなんだけど何だか苦手なのよね…。何と云うかあの独特の雰囲気と言うかオーラと言うか…

「キャッー！」

考え事をしている内に何かに当たって尻餅を着いたらしい、何に当たったんだろう？

「大丈夫か？」

「あ、はい。大丈夫で…」

声が聞こえたから返事をしながら顔を上げるとそこには見た事のない形の剣を持った人が居た。だけど私は目の前に居るのは人じゃないことに気が付いた。何故なら真っ直ぐ立っている耳に大きな尻尾、口からは鋭そうな牙が見えていた。そして私はこの人？の優しそうな目に見惚れていた。あ、一応聞いてみよう。

「貴方はもしかして…狼？」

「一応そうだけど…言いたい事があれば言つて良いぞ？別に怒りは

しないから。」

「じゃあ、一つだけ。尻尾触って良い？」

「尻尾？この事か？それなら別に触るのは構わないけど…。」

「ありがとう♪」

「ツ!?／＼／ほ、ほら、は、早くしろ!／＼／(この子に警戒心と言う物は無いのか!?)」

「?」

いきなり狼が顔を真っ赤にしたけど何でだろう？それよりも尻尾♪尻尾♪あ、凄い！尻尾の毛はサラサラなのにふわふわしてて気持ちいい♪それに撫でる度に狼の耳がピコピコ動いてる！何この可愛い生き物!?!…あ、狼か。じゃなくて！耳も触りたい！聞いてみようかな？そう言えば。

「ねえ？」

「な、何だ!？」

「貴方に名前はあるの？」

「名前？イチカだけど…。」

「イチカ、耳も触って良い？」

「…君は俺が怖くないのか？」

「全然怖くないよ。だって貴方は優しい目をしてるから貴方自身が優しいって解るよ。」

「(優しい…か。久し振りに言われたな。)話が脱線したな耳も好きに触って良いよ。」

「あ、ありがとう。／／／」

あれ？可笑しいな？顔が物凄く熱い気がする。何でだろう？取り合えずイチカの許可も貰ったし早速触らせて貰おう。

「ヒヤッ!?!」

「!?!」

何?!?!この可愛らしい声は!?!何処から聞こえてきたの!?!

「ヒヤッ!?!」

また聞こえた!?!一体何処から!?!…あ、居た。目の前に顔が林檎以上に真っ赤になってるイチカが居た。よし！確認の為に今度は摘まんでみよう！

「ヒヤンツ!?!」

♪ うん♪ やっぱりイチカだ♪ どうしよう？楽しくなって来ちゃった♪
♪ 取り合えず。

「イチカって耳が弱いんだ〜♪」

「や、辞めっヒヤッ!?!」

「フフ、そんな反応されたら辞めれなくなっちゃうよ♪」

「ちよつと待て!? 同時攻めはヒヤン!? これ以上されたら可笑しくヒヤツ!?!」

「本当に可愛い反応だね♪でも私が満足するまで辞めないよ♪」

誤解が無いように言っておこう。リンはただイチカの尻尾と耳を触っているだけである。如何わしい事は何もしていない。如何わしい事は何もしていない。大事な事なので二回言わせて貰いました。

「君は何処かに用事があるんじゃないのか!?!」

「あ!」

「はあ、場所は何処だ?」

「え?」

「そこまで俺が連れッ! 危ない!」

「キヤツ!?!」

私は何が起きたのか分からなかった。ただ金属同士が当たった音が聞こえて気が付けば私はイチカに抱き寄せられていた。この時、私の心臓の鼓動が速くなっていた。

「ご機嫌麗しゅう、イチカさん。」

「セシリア!」

リンは声が聞こえた方を向くとそこには右手に銃を持ち、綺麗な金髪を後ろで束ねて漆黒のスーツに身を包み同じく漆黒のサンングラスを装着したハンターが居た。

ええええええええええええ!?ハンターってそつち!?てかあれ…逃○中じゃない!?と言うか女の子!?…はあ、神様は不公平だ。

「イチカさんの可愛らしい声が聞こえて来てみれ可愛らしさで有名な赤ずきんさんではありませんか。今日の私はラッキーですわね。」

「いい加減しつこい。その内男に嫌われるぞ。」

「それで結構ですわ!私は可愛い物があれば十分ですわ!」

…綺麗なのに何だか残念な子だな。って発泡してきた!?それをイチカは普通に斬った!?

「イチカさん、そろそろ諦めてもらえませんか?」

「それは此方の台詞なんだが!」

二人の喧嘩は激しさをますます思ったその時、森の奥から誰かが歩いてきた。

「…帰りが遅いと思って来てみれば、これはどんな状況なんだ?イチカ君?」

「「師匠!?(お婆ちゃん!?)えっ!?!」」

森の奥から歩いてきたのはイチカの師匠であり、リンの祖母であつ

た。名をトワ、年齢と容姿が合っておらず鋭い剣の様な雰囲気のある女性である。歳は90を越えているが20代にしか見えず、子供が三人居る不思議な女性である。

「…ふむ、イチカ君。今日の特訓は何時もの倍だ。」

トワは指を三本立ててイチカに話している。

「待ってください!?あの特訓を三倍って何ですか!?!」

「…孫に手を出したからに決まっているだろう?…それに三倍では無い、三十倍だ。」

「／(ゝoゝ)／オワタ」

「…取り合えず。」

いきなりセシリアと呼ばれた少女は倒れてしまった。

「!?!」

「…心配するなただ気絶させただけだ。」

いや、どうやって!?!お婆ちゃんやんはセシリアって子に触ってもいないよね!?!

「二発ですか?」

「…正解だ。最近目は追い付く様になってきたな。…どうだ?久し振りに模擬戦をやるか?…勿論、特訓の後だがな。」

「冗談ですよね!？」

「…冗談では無いが?…処で何時までリン君を抱いているつもりだ?」

「え?あ!?!ご、ごめん!／／／」

「あ、うん。／／／別に嫌じゃなかったから…／／／あ、お婆ちゃん、はい。」

「…すまないな。…それとイチカ君、受けとれ。」

「パーカーと何ですかこれ?」

イチカが受け取ったのは白いパーカーと何かが入った小包であった。

「…今日の特訓は無しだ。…それを使ってリン君と遊んでこい。…そして三十倍は見逃そう。」

「えっ!?!どう言う事ですか!?!」

「そうだよ!?!いきなりそんな!?!」

「…ならば簡潔に言おう。今日は二人でデートしてこい。以上。」

「えっ!?!ちよっ!師匠!?!」

「行っちゃった…。どうする?私はイチカが良ければ一緒にデートに行きたいけど。／／／」

「な、なら、い、行くか？／＼／＼」

「う、うん。／＼／」

二人は手を繋ぎ、顔を赤くしながらデートを始めた。さて、このお話は此処でおしまい。この後二人がどうなったかは皆さんのご想像にお任せします。

この二人に祝福あれ。

番外編 泊まりと兎と黒の昔話

とある日の放課後。授業を終えたイチカは何時も通り寮の部屋に帰る準備をしていた。本来なら鈴達と訓練をする筈であるが、全アリーナのメンテナンスの為に一週間程使用できない状態になっている為である。

「さて、アリーナは使えないからどうするかな…。鈴達を誘ってトランプとか普通に談笑とかでもするか。」

「師匠！ちよつと良いか!？」

「ラウラ？どうしたんだ？と言うか少し落ち着け？」

「うむ、すまない。スウ…今度姉さんの家に泊まりに行きたいぞ！」

「家にか？」

「うむ！」

（うわあ…。スツゲー目がキラキラしてんなあ…。）

（可愛いですね。）

（だね！）

（ラウラの嬢ちゃんらしいと言えらしいけどなく。）

「（だな。）ちよつと待ってる。」

イチカはラウラに期待の眼差しを向けられながらスマホを取り出し、スクールに電話を掛ける。数コールで電話が掛かり用件を伝え

る。

「…もしもし義母さん？ちよつと聞きたい事…と言うより頼みたい事があるんだけど。」

『珍しいわねイチカが頼み事なんて？内容次第だけど大体の事なら大丈夫よ。』

「いやまあ、大した事じゃないんだけど…。今度の休みに家に泊まりたいって子が居るんだけど…。」

『今度の休み？うーん、その日はオータムと出張なのよ…。一応、束とクロエちゃんとマドカは居るんだけど…。…そう言えば誰が泊まりたいって言ってるの？』

「ラ「ガタツ！」ウラ。…何か凄い音が聞こえたけど？」

『き、気にしないで！ちよつ！土下座しないで！此処食堂だからね！？あ、ち、違うの！無理な仕事を押し付けてるとかそう言うのじゃないからね！？待って！？その台詞は更に誤解されるから！？イチカ！？ラウラちゃんのお泊まりはオツケー！って伝えて！今すぐ！速く！そして伝えたらラウラちゃんに急いで変わって！』

「お、おう。ラウラ、泊まりのOKがでたぞ。」

「本当か！よしっ！」

ラウラはイチカの家泊まれると聞くと先程よりも目をキラキラさせて嬉しそうにガッツポーズをする。

「あ、それと電話を変わって欲しいそうだ。」

「?私にか?」

「ああ。(もしかして義母さんに土下座とかしてるのって…。)」

「御電話変わりました、ラウラです。」

『ラウラ!』

(やっぱりクロエさんか!)

「姉さん! 丁度良かった♪今度の休みに姉さんの家に泊まりに行くからね! ああ! 今から考えただけでも凄く楽しみだよ! そうだ! 寝る前にいろんな事を沢山話そうね!」

『!?!』

『はい! 私も楽しみにしてますね! あ、では私は仕事に戻りますね。』

「うん! お仕事頑張ってね! ふう、と言う訳で宜しく頼むぞ師匠!」

「おう、任せろ。」

そう言うラウラはスキップをしながら教室を出て行き、何処かへと行ってしまった。するとラウラが教室を出るのを確認したクラスメイトの一人が戸惑いながらイチカの元へとやって来る。

「えっと…ミューゼル君? さっきのは…ボーデヴィツヒ…さん…で…良いん…だよな?」

「ああ、間違い無くラウラだ。ただ、お姉さんと話す時とかはああなるらしい。」

「そうなんだ…。何かボーデヴィツヒさんの珍しい一面が見れてイメージががらりと変わったよ。お菓子が好きなクールな女の子からお姉さんとお菓子が好きな可愛らしい女の子のイメージになったよ。」

「そっか。」「♪♪」…鈴から？」

イチカ！私もイチカの家泊まりに行っても良い!?ラウラが嬉しそうにスキップしてたから「何か良いことでもあったの?」って聞いたら「姉さんの家に泊まる事になったんだ!…そうだ!鈴も一緒に泊まらないか!?!きっと楽しいぞ!」って言われたから泊まりたくなっちゃった♪ダメ?」

「…頼んでみるっと。」

「ミューゼル君、何か良い事あったんだね。」

「分かるのか?」

「うん。凄く良い笑顔。」

「…マジで?」

「うん。」

イチカはクラスメイトと話した後、スコールに鈴の事で連絡すると、とても悔しそうな声を出しながら許可を出しており、ラウラと鈴が楽しんでいる写真を撮る様をお願いされた。

そして土曜日になり、ラウラと鈴はテンションが上がっていて周りに迷惑が掛からない程度に声を押さえて談笑を楽しんでいる。すると三人の前に黒い車が止まり、中から黒服に身を包みサングラスを掛けた男女が現れる。

「イチカ・ミューゼル、鳳鈴音、ラウラ・ボーデヴィツヒだな？大人しく我々に着いて来て貰おうか。」

「…何だ貴様らは？いきなり現れて着いて来いだと？」

「…私達が黙って従うと思う？」

「…。」

「君達の意見を聞いている訳ではない。」

「無駄な抵抗はしない方が良いわよ。ま、此処に居る人達がどうなっても良いなら話は別だけど？」

「ツー！」

「…はあ、乗るぞ二人とも。」

「なっ!? 師匠!？」

「何考えてるの!? イチカ!？」

「…兎に角、今はこの人達に黙って着いて行く。ただそれだけだ。別に心配しなくても良い、この人達は敵じゃないから。」

「でも…：はあ、分かったわよ。てな訳で乗るわよラウラ。…ラウ

ラ？」

「師匠！鈴！このぬいぐるみ凄くモコモコして気持ちいいぞ！あ！
そうだ！二人とも触ってみてくれ！本当に気持ちいいぞ！」

（…ヤバイ、何かラウラの事が心配になってきた…。何とかしないと…。）

イチカと鈴はラウラの声が聞こえた方を見ると満面の笑みを浮かべながら少し大きめの白い兎のぬいぐるみを抱えているラウラの姿があつた。その姿を見たイチカと鈴は何とも言えない表情になり、何とかしようと決意したのだった。

「…ねえ、イチカ？」

「…どうした？」

「…この車の座席、凄くフカフカで気持ち良くて気が付いたら寝そうなんだけど。」

「確かに気付いたら寝てそうだな。」

「…。」モグモグ

「…しかも何か冷蔵庫があつて中に私達の好きな飲み物とかお菓子とかが沢山入ってるんだけど。」

「期間限定の奴とかもあるな。」

「…。」ゴクゴク

「…ねえ、もしかしてこの人達ってイチカの子会社の人達？」

「正解。此方の人達はP R Cの広告宣伝担当の日野さんと月谷さん。普段はさつきみたいなの口調じゃないから安心していいぞ。」

「初めまして、イチカ君の紹介通りP R Cの広告宣伝の担当をしている日野明です。以後お見知り置きを。そして鳳さん、ボーデヴィツヒさん、先程は大変失礼いたしました。お詫び…と言っては何ですが車内にあるお菓子や飲み物はお好きなだけどうぞ。」

「同じくP R Cの広告宣伝を担当している月谷紫苑です。今回はクロエちゃんと社長の希望でこの様な形でおもてなしする事になりました。…おもてなしと言って良いのか疑問ではありますが。」

「…サプライズが義母さん、お菓子とかがクロエさんですね。すまん二人共、クロエさんは兎も角義母さんが勘違いさせたな。」

「まあ、驚いたけどこの人達が良い人だって分かったから私は気にしてないわ。「鈴！これも美味しいぞ！食べてみてくれ！」あむ…あ、美味しい。てか、苺味あったんだこれ。ラウラこれも食べる？」

「頂くぞ！」

「なら、はいあーん。」

「はむっ…うむ！此方も美味しいぞ！」

「…ハア。」

席に座っている三人のやり取りを見ていた月谷はいきなり右手を頬に添えながら溜め息を吐いていた。三人には聞こえていない様だ

が運転席の日野はしっかりと聞こえていた。

「…？月谷さん？溜め息なんか吐いてどうかしたんですか？何か問題でもありましたか？」

「違うのよ…日野君…後ろにツインテール活発美少女と銀髪キュート美少女が居るでしょ？その二人が仲良くお菓子を食べさせ合ってるでしょ？後は…分かるわよね？」

「分かりません。」

「…え？日野君…貴方本気で言ってる？直ぐ後ろに世界の神秘があるのよ？」

「神秘。」

「そう…美少女と美少女が近い距離でキャツキャツウフフ…これこそ世界の神秘であり、世界の真理でもあるの。」

「真理。」

「女の子同士の過ごす時間…これこそがGL…世界で最も尊くエモい物なのよ。」

「すいません、僕はNL派なので否定はしませんが同意出来ません。男女の甘い恋、これこそ至高です。」

「何…ですって…!?!じゃ、じゃあ！そこまで言うなら日野君の今のトレンド言ってみなさい！因みに私の今のトレンドはお嬢様×メイドよ！」

「男の娘×姐御系女子。」

「…クツ！あり…！」

「ねえ、イチカ？この人達って何時もこうなの？」

「この人達はって言うか会社の人達はってのが正しいかな？大体休憩時間とかに仲良くお互いの好きな事を話してるからなあ…。サブカルチャーとかアウトドアとかミリタリーとか色々。」

「成る程ね。でもそう言う風に好きな物を話し合えるくらい仲が良いのね。それにしても…初めてじゃない？イチカの家に泊まるの。」

「確かにそうだな。まあ、昔は俺自身の環境に問題があってそれどころじゃなかったからなあ…。それを考えると今日はラウラに感謝しないとな。」

「そうね、私も誘ってくれてありがとね。」

「！（しまった…お菓子在夢中で話を聞いていなかった…取り敢えず鈴が頭を撫でているから笑っておこう。）ニツ！」

前の席で二人がGLとNLの事で言い合っている間もイチカと鈴は少し前の事を思い出しながら楽しそうに話して泊まりの切っ掛けを作ったラウラに感謝していた。話を聞いていなかったラウラは笑って誤魔化していた。そして車で移動する事約1時間、目的地であるミューゼル宅に到着し日野と月谷の二人と別れた。

「おお！此処が姉さんと師匠達の家か！」

「やっぱ広いわねえ、初めて来た時もラウラくらい驚いてたわね。」

「鈴は来た事があったのか?…あ、そう言う事か。」

「?そう言う事って?」

「挨拶に来たんだろ?結婚の?」

「んなっ!?!」

「ゲホツゲホツ!?!何でそうなる!?!普通に鈴は遊びに来ただけだぞ!?!後、年齢的に早いわ!」

「そうなのか?てつきりシャルロットの言う通り二人の結婚の挨拶をしに来たとばかり思ったんだが…。勘違いしてすまなかつたな。」

(やっぱりシャルあロットか!?!)()

「?どうしたんだ?二人共?」

「あ、いや、何でもない…。『♪』ちよつと待つてろ。(メッセージ?あ…。)()」

『イチカさん!?!外で何をしていますか!?!私は月谷さんから連絡を頂いてからずっと玄関でスタンバイしてたんですよ!?!なのに何時までも入ってこられないし、ラウラの楽しそうな声が聞こえて!私は何時まで待てば良いんですか!?!私は久し振りにラウラに会うんですよ!?!沢山話したい事もありますし、何よりラウラを甘やかしたいんですよ!?!』

「(オウ:速めに入るしかないな…。)ま、まあ、立ち話もこれくらいにして中でゆつくりしようぜ。」

ラウラの勘違いを解きクロエからのメッセージを確認すると急いで家の中に入る事を提案する。鈴とラウラも断る理由も無いのでイチカに続く。

「ただいまー…うおっ!？」

「キャツ!？」

「ムグツ!？」

「お帰りなさい、イチカさん。鈴さんもいらっしやいませ。そして…待ってましたよラウラ! 元気にしてましたか? 怪我とかはしてませんか? きちんとバランスの良い食事を取っていますか? 友達は沢山出来ましたか? あ、今着ている服はとても似合っていて可愛いですよ♪」

「久し振り姉さん! そうでしょ! この服は鈴達が私の為に選んでくれたんだよ! それに私は何時も元気で怪我もしてないよ! 今日は沢山色んな事を話そうね!」

「はうっ!?! 私の妹が可愛い過ぎる…そうは思いませんか!?! イチカさん! 鈴さん!」

「玄関でスタンバイしていたとは知っていましたが、まさかクラウドチングでスタンバイしていたなんて普通予想出来ませんよ…」

「お邪魔します。と言うよりラウラに抱き付きながら迎えられるなんて思ってもいなかったわよ…」

イチカが扉を開けて家に入ると同時にクロエが此方に飛び付いて

きている光景が目の前にあり、咄嗟に鈴を抱き寄せて回避してクロエはそのままラウラに抱き付くと同時に頭を撫で始め、イチカと鈴に挨拶をしていた。これがイチカが扉を開けて数秒の出来事であった。

「兄さんお帰…何か凄い事になってるね。それとお久し振りです鈴さん。今日はゆつくりしていつてください。」カシヤツ

「ただいま、マドカ。と言うか何で普通に流れる様に撮影した?」

「久し振りね、マドカ。一日だけど世話になるわね。確かに、ラウラとクロエさんを撮影したなら分かるけど明らかにスマホは私達に向いてるわよね?」

「え?いやー、こんな状況でも仲が良いなあって思ったから。つい撮っちゃった。」

「仲が良い?」

「あ、無自覚なんですネ。何時までも抱き合ってるから微笑ましなあって。」

「ツ!」

「えく、気付いて無かったのかよ?」

「まあ、マスター達に関しては何時もの事だからね。」

「仲が良いのは良い事です!ね?メア?」

「…ノーコメントだ。」

「ユルセン達もお帰りなさい。兄さん、鈴さん、ラウラさん、クロエさん、此処玄関ですし中でゆつくりしましょう。東さんも中で暇にするでしょうし。」

マドカの言葉にイチカと鈴は急いで離れ、ラウラはクロエに抱き抱えられながら東の待つリビングへと向かう。イチカ達がリビングに入るとそこには軽快な音楽とシャンシャンと言う音が流れており、東がタブレットを何度もタッチしていた。

「フンフン♪…あ、イツ君お帰り♪鈴とラウちゃんもいらっしや〜い♪」

「お邪魔します。」

「何やってるんですか東さん？」

「あ、これ？かんちゃんに教えて貰ったリズムゲームだよ。かんちゃんに時間を潰すのに丁度良いゲームを聞いたらオススメされたんだけど見事にはまってね〜。よし！フルコンボ！」

「成る程。」

「あ、これお土産なんですけど良かったら皆さんで食べてください。」

「鈴ちゃんありがとう！これは…クッキーだね。折角持って来てくれたから食後に出して良いかもね。」

「そう言えば東さん。夕食って何にするか決まってるんですか？メニュー次第では今から準備しようと思いますので。」

「晩御飯のメニューは皆でワイワイ出来ながら作れる…たこ焼きだよ

！」

「たこ焼き!?!作れるのか!?!」

「オウ、ラウちゃんが凄く食い付いてきた。フッフッフ、勿論!この…たこ焼き機を使えば誰だつて作れるよ!」

「こ、これで、たこ焼きが作れるのか!?!」

「因みにたこ焼きで使うタコは、私がラウラの為に朝一で一番良い物を買つてきたんですよ!」

「本当!?!ありがとうございます!」

東は何処からかたこ焼き機を取り出しラウラに見せて説明しラウラは眼を輝かせながら見つめており、クロエは買ってきたタコについて語っていた。そしてイチカはクロエの言葉にある疑問を覚えた。

「…朝一で買ってきた?」

「兄さん、鈴さん、ラウラさん、お茶です。それと兄さんにはこれを。」

「あ、うん、もう理解した。」

「クーラーボックス?マドカ、これ開けて良い?」

「どうぞ。」

「…タコ…ね。しかもかなり立派な真ダコね。しかも二匹居るわね。」

「だな。因みに…生きてますけど東さんとクロエさんはタコの下処理

出来るんですか？」

「…。」「スッ

イチカの質問に束とクロエは無言で顔を反らし、わざとらしく口笛を吹くふりをしていた。イチカは束達の反応が予想通りだった為に特に驚きもせずマドカの方を向く。

「…マドカは？」

「生きてるタコを触るのは抵抗があります。この大きいサイズは特に。」

「だろうな。取り敢えず俺が下処理するから束さん達はラウラ達とゆっくりしてください。」

「イチカ、私も下処理手伝うわよ。二人でやれば早く終わるしね。」

「いや、悪いから。鈴は客人なんだからゆっくり好きな事をして待ってくれ。」

「良いから良いから、さつきも言ったけど二人でやった方が速いから、ね？それに二人でキッチンに並んで作業するって何か良くない？」

「そうだな。なら、頼めるか？」

「勿論！」

イチカと鈴はクーラーボックスを持ってキッチンに移動してタコの下処理を始める。その光景を見ていた束とクロエとマドカはまるで仲の良い夫婦に見え、スマホのカメラを起動して二人を撮影し、ラ

ウラを含めた四人でトランプで遊び始めた。

「ふう…こんなもんか。鈴、そっちは？」

「此方も終わったわよ。ところでイチカ？これ全部たこ焼きで使うの？」

「流石に全部はなあ…クロエさん、タコつて全部たこ焼きにせずに幾つか別料理にしても良いですか？唐揚げとかマリネとかに。」

「お願いします！」

「分かりました。鈴、マリネの方を頼む。体と足四本位で味付けは任せる。あ、調味料とかは一通り揃ってるから好きに使って良いぞ。」

「了解。たこ焼きに入れるタコは一口サイズで良い？」

「おう。」

イチカと鈴は手際良くタコを調理し、同時進行でたこ焼きの生地を作ろうとすると先程までラウラ達とトランプをしていたマドカがキッチンに入ってきて来てポウルやキャベツを準備していた。

「兄さん、鈴さん、ユルセン達がトランプに交ざるそうなので手伝います。話しを聞いた感じ兄さんは唐揚げを作るみたいなので生地は私が作りますよ。」

「マジか、それは助かる。なら、生地は五袋全部使ってくれ。それで足りると思う。」

「そうね、五袋あれば足りるでしょ。」

「五袋で足りる…？え…？…もしかしてラウラさんって私達の中で一番食べます？」

「ああ、てか俺達のメンバーで一番食うぞ。」

「そうなんですか。何か…意外ですね。」

「そうね。私達も普通に驚いたからね。」

マドカが加わったキッチン組の三人は他愛の無い話で盛り上がりながらそれぞれの担当した物をこなしていく。リビングではトランプで盛り上がっている声が、キッチンではタコが揚がる音や野菜を切る音や泡立て機がボウルに当たる音等が響いていた。

「よし、完成つと。二人は？」

「此方も完成したわよ。」

「で、出来ました…！」

「うん、マドカに関してはマジでありがとうな。さて、束さん、クロエさん、ラウラ、ユルセン、準備出来たからトランプ片付けてください。」

イチカの声聞いた束達はすぐにトランプを片付け始めて夕食もといったこ焼きパーティーの準備に取り掛かる。タコの下処理が出来ずトランプを楽しんでいた束とクロエも流石にたこ焼きは焼ける様で二人がメインで焼いている。

「四人共！私とクーちゃんですらでどんどん焼くからじゃんじゃん食べて！」

「そうですね。下処理や準備出来なかった分、焼くのは任せてください。私達は作りながら食べれますしね。」

「ありがとうございます。」

「まあ、作りなら食べるのはたこ焼きパーティーの醍醐味でもありませんからね。」

「ですね。」

「し、師匠、鈴？わ、私は下処理も準備もやっていないのに、ただ食べるだけで良いのか？」

「気にするな。元々ラウラが泊まりたいって俺に言ってくれたから泊まりに来たわけだから、ゆっくりしても何も問題無いぞ。」

「そうそう。それにラウラのお陰で私も泊まれたんだからね？後、ラウラは東さん達の為に私と一緒に土産を選んでるでしょ？それだけでも無いもしていない訳じゃ無いからね？」

「そ、そうなのか？」

「そうよ。…あ、そう言えば東さん。一つ聞きたい事があるんですけど。」

「ん？何かな鈴ちゃん？」

「蒼夜さんとはどうやって出会ったんですか？」

「あ、気になっちゃう？」

「ああ、確かに気になりますね。あ、でも俺は永久さんとの出会いも気になりますね。何て言うか、束さんは永久さんに絶対的な信頼を置いてますよね。俺に永久さんを紹介したのも束さんですし。」

「そうだね。なら、まず永久ちゃんとの出会いから話し始めようか。」

私が永久ちゃんと出会ったのは中学一年の夏の事だよ。まあ、最初はテストの順位で私と同率一位ってだけで特に興味無かった：と言うより、その頃は彼奴以外の人達を認識してなくて、その辺の小石同然に思ってたんだよねえ：そうそう、イツ君が知ってる最初らへんの私だね。本当に今考えるとクソガキだったなあ：あの頃は：おっと話が逸れたね。ある日、彼奴は永久ちゃんに剣道で本気の勝負を仕掛けたんだよね。確か理由が手加減していることに気付いたからかな？勿論、私はその時彼奴が勝つと確信していたし、疑わなかった。でも結果は一瞬だった。試合開始の合図に繰り出された面が彼奴に何かする暇も与えずに決まったんだよ。その瞬間、私の中で色んな事がぐちゃぐちゃになって、気付いたら私も永久ちゃんに本気の試合を申し込んだ。で、一瞬だけ見えちゃったんだよねえ、永久ちゃんの興味無さげの目付きが獣みたいな目付きに変わって私に向かって何て言ったと思う？「：良いだろう、私も一度篠ノ之と本気で手合わせをしたいと思っていた。」って言ったんだよ。

「アムツハフツ：まあ、その時私は例え本気を出した所で勝てる訳がないって内心は嘲笑いながら思ってたんだよね。彼奴に勝ったのも偶然だとか調子が悪かったとか考えてたし。」

「そう言えば永久さんも言っていましたね。最初束さんは他人を見下す事しか出来ないつまらない奴だったって。」

「あはは…ひどい言われ様…まあ、事実だけど。」

話を戻すけど試合開始の合図で最初に動いたのは私なんだよね。けど呆気なく対処されて反撃されるし、速いし一撃一撃は重いは、時々見える目付きは鋭くて怖いし、「…どうした？…そんな物か？」つてめっちゃ低い声で聞いてくるしで、かなりイライラしてたんだよねえ、それでも何度も攻撃するけど当たらないから私の本気を全力で出して一撃、一本取れた訳じゃないけど、たった一撃を当てる事が出来た。それだけで本当に嬉しくて勝利を確信して一瞬だけど気を抜いちちゃったんだよね。そしたら目の前にとつもない速度で迫る竹刀と面越しに血に餓えた獣の様な目付きの笑顔の永久ちゃんが見えたんだよね。そして頭に強い衝撃を受けた瞬間に意識が無くなって、気付いたら保健室のベッドで寝てたんだよね。そして私が目を覚ましたのを確認した永久ちゃんがいきなり「…すまなかった。」だよ？本当にその時は意味が分からなかったよ。なんでこいつは謝っているのか。

普通なら私は興味を示さないんだけど、気になったんだよね。こいつの…永久ちゃんの強さとか何で謝ってるのかとか色々。だから私は永久ちゃんに聞いたんだよ、「何で謝るの？私が本気で戦えって言ったんだから。」つて、そしたら永久ちゃんは何したと思う？私の着けてた面を取り出したんだよ。真っ二つになった状態で。真っ二つだよ真っ二つ！面が綺麗に真ん中から二つに割れてたんだよ!?!それたら「…私は初めて本気の試合で竹刀を当てられた。…その瞬間、今まで感じた事の無いくらい気分が高揚していた。…その結果がこれだ。…本当にすまなかった。…弁償もするし可能なら償いもしたい。」もうその謝る姿を見たら笑うしか無くて大爆笑！だから私は永久ちゃんに「弁償も要らないし償いとかじゃなくて、私と友達になつてよ！私は君の事が凄く気に入ったから！」そこからだね私と永久ちゃんが友達になって、信頼し合える親友になったのは。

東は自身の過去を振り返りながら本当に楽しそうに永久との思い

出を語っていきおり、イチカ達も束の話を興味津々に聞いていた。

番外編 泊まりと兎と蒼の昔話

「…とまあ、中学で永久ちゃんと出会って、私は良い方向に変わる切っ掛けを掴んだんだよ。…本当に永久ちゃんには感謝しか無いよ。多分、永久ちゃんと知り合って親友になって無かつたらずっと自己中なクソガキのまま世界すら敵に回してやりたい放題だっただろうし、何より蒼夜君とも恋人になってなくて、こうしてイツ君や鈴ちゃん、ラウちゃん達とたこ焼きパーティーもしてなかっただろうね。さて、たこ焼きも食べ終わったし鈴ちゃんとラウちゃんは先にお風呂「私も入ります！」うん、まあ、此処のお風呂広いからクーちゃんも入っておいで。その間私達で片付けとくから。」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます。ほら、ラウラ準備しましよ。せつかく朝から選んで買ったんだから。」

「うむ！姉さん！楽しみにしててね！」

「？ええ、楽しみにしてますね♪」

「行ってらっしゃい。」

鈴とラウラはクロエと共に入浴する為に荷物を持って連れられてリビングを出る。そして残ったイチカ、束、マドカは片付け始める。

「そう言えば嬢ちゃん達は随分と楽しそうにしていたが何を選んだんだ？」

「さあ？鈴とラウラが朝からクッキーと一緒に何か買ったのは分かるけど内容までは分からないな。」

「まあ、話からしてクーちゃんが喜ぶ事なのは間違いないね。と言うかラウちゃんって本当に食べる事とクーちゃんの事になったら変わるよねえ。」

「そうですね。まあ、それもラウラの魅力ではあるんですけどね。さて、片付けも終わったし、束さん達は何か飲みますか?」

「そうだね、食後だから緑茶で良いんじゃないかな? マーちゃんとユルセンもそれで良いよね?」

「私は大丈夫ですよ。」

「俺も構わないぜ。」

「おい、天災兎、ゆるキャラ、さっきの続きをやるぞ。今度は俺が勝つ。」

「良いねえ、やろうやろう。今度はイツ君も入って五人でやろうよ。」

「良いですよ。三人が上がってくるまで時間もありませんしね。それとお茶です。」

「ありがとうね。それじゃ最初は無難にババ抜きにしようか。マーちゃんもそれで良い?」

「大丈夫ですよ。あ、兄さんありがとうございます。」

「白式達は好きな所で見ててくれ。」

「うん!」

「はい！」

片付けも終わりイチカ達はお茶を飲みながら鈴達に戻ってくるまでトランプで遊び始める。イチカ達はそれぞれ勝ったり負けたりしており、遊び方を変えながら楽しんで時間を潰していた。

「お待ちせしました。」

「ただいま戻ったぞ！」

「お帰りくって何かラウちゃんが凄い事になってる。と言うか：何でクーちゃんはラウちゃんを抱っこしてるの？」

「ラウラが可愛いので！」

「成る程。それにしても凄いな：ラウラが黒猫になってるな。：そう言えば鈴は？：姿が見えないけど？」

入浴から戻ってきたラウラとクロエ、何故かラウラは猫耳の付いたフードのある黒猫の全身パジャマを着ており、頬を赤く染めたクロエに抱き抱えられていた。

「鈴なら後ろの扉に隠れてるぞ。鈴、隠れてないで出てきたらどうだ？：師匠に見せたいと言っていたら？」

「そうですよ、凄く素敵で可愛いんですから皆さんや、特にイチカさんに見せてあげましょうよ。」

「その：ラウラとクロエさんが言ってる事は分かるんですけど：きゅ、急にこの姿をイチカに見せる事が恥ずかしくって：ちよつと勇

「気がいると言うか…何と言うか…うん…スウ…よし、ばっち来い！」

「…。」

リビングの扉が開かれる。そこにはラウラと同じ様な三毛猫の全身パジャマをフードを被らずに着ており、ルーズサイドテールと呼ばれる髪型にして、少し恥ずかしそうにしている鈴の姿があった。

「…何か言つてよ。」

「ツ！す、すまん！その…似合ってるし、凄く可愛いぞ。それに…その…」

「それに？」

「何て言うか…三毛猫の可愛らしい全身パジャマにルーズサイドテール…だっけ？その髪型のお陰で大人っぽい雰囲気なのにアンバランスなだけど妙にマッチしてて…正直、今まで以上に見惚れてた…スウ、ヤバ…恥ずい…」

「その…ありがと…」

イチカは鈴に対する感想で、鈴は自身の格好の感想でお互いに顔を赤くして恥ずかしそうにしていた。その光景を同じ場所にいる殆どは微笑ましそうに眺めていた。メアを除いては。

「クツソ甘え…。おい…てめえ…どうせこの後は天災鬼の甘ったるい話だろ、俺はこれ以上の胸焼けは勘弁だから眼魂の中に戻るぞ。」

「あ！メアさん！まったく…此処からが楽しくなるのに。」

「まあ、メアさんは私達と違って恋話とか苦手だからねえ。無理強いはい出来ないよね。」

「だなく。」

「ラウラ！鈴さん！二人共横に並んでください！せっかくだから写真を撮りましょう！」

「うむ！」

「そうですね。せっかくラウラとお揃いで着てますし、記念にもなりますしね。」

「なら、猫繋がりでユルセンも入ったらどうだ？確かユルセンって猫の付喪神だろ？」

「お！ナイスアイデア〜！なら早速〜！ポンポンッと！」

イチカの提案にユルセンは手を二回叩くと光に包まれ、光が収まるとユルセンに猫耳と猫の尻尾が生え、鈴とラウラの前に移動する。そして鈴とラウラはお互いに猫の様なポーズを取り、それをクロエと何故かマドカがスマホを取り出し撮影する。

（今の内に鈴達のお茶を淹れておくか。）

「あ、イツ君、お茶を淹れるなら私の分もお願い！後、ラウちゃんから貰ったクツキーと冷蔵庫にチーズが入ってるからそれも出してくれる？」

「分かりました。（冷蔵庫の中のチーズ：ああ、あの兎のシールが貼ってた奴か。）」
「♪♪」セシリア？何でこんな時間に？もしもs『イチ

カさん!?今すぐどう言う状況なのか説明を願います!』…鈴とラウラが俺の家にお泊まり、風呂上がりにお揃いの全身猫パジャマで猫の付喪神のユルセンと写真撮影。」

『尊い…。おっと失礼、あまりの可愛らしさに鼻血が…IS学園に帰られたら詳しいお話を伺いますからね!?それではご機嫌様!』

「ええ…。」

イチカは突然のセシリアからの嵐の様な連絡に困惑しつつお茶の準備を進める。ただイチカ自身もIS学園に帰ってから今日の事をセシリアに話すのを少なからず楽しみにしていた。

「さて、皆に飲み物とかも回ったみたいだし、私の昔話の続きと行こうか。特に鈴ちゃん達女の子が楽しみにしてる私と蒼夜君の恋話をね。」

私が蒼夜君と出会い…と言うより、初めて話したのが高校一年の秋の事なんだよね。新学期が始まって最初の席替えで私の右隣に来たのが蒼夜君だったんだよね。最初は特に気にしてなくて、眼鏡を掛けた地味な奴…ってのが第一印象で特に話す事も無くねえ。うん? ああ、まだこの時は他人を認識しては居ただけ、基本的に彼奴と永久ちゃん以外と関わる気は無かったからね。だから最初に話し掛けて来たのは蒼夜君の方からで「教科書を忘れたから見せて欲しいんだけど…良いかな?」って話し掛けられたんだよ。特に問題無かったし、見ただけで全部暗記してたから無言で隣にいる蒼夜君の机の上にポイツて投げたんだよね。

いやあ、まさか教科書を投げたらラブコメが始まるなんてその時は思っても居なかったよ。しかもラブコメの相手が私だから余計にねえ。

「本当に何が起きるか分からないね。…うん？鈴ちゃんにクーちゃんにマーちゃんに白騎士に白式？何でそんなにジト眼なの!?ごめんつて!?テンプレなラブコメを期待させたのは謝るから!?」

「[[[:.]]」

「うっ…五人の視線が痛い…。」

は、話を戻すよ。教科書を投g…貸した次の日に蒼夜君が教科書のお札にクツキーを焼いてきて来てくれたんだよね。しかもお店に並んでも可笑しくない位に綺麗なラツピングもされててビックリしたよ。で、そのクツキーを放課後に受け取っ…

「?どうしたんですか?」

(ヤツバアアアア!?どうしよう!?あれ受け取ったって言えないよね!?!言ったら絶対さつきよりも引かれるよ!?!イツ君!?どうしよ…オウ…あの表情は絶対に察して…そうだよね!?!イツ君、昔の私を知ってるから私が何したか分かって呆れてるよね!?!うわあ!?!過去に戻ってあの時の私をぶん殴りたい!?!)

「お母さん!放課後にどうなったの!?!」

(あ…これ…逃げれない奴だ…)

あ、えーと、ほ、放課後に自作のノートパソコンで作業したら、その…蒼夜君が私に話し掛けて来て「篠ノ之さん、昨日は教科書を貸してくれてありがとう。これ、お札にクツキーを持ってきたから良かったら食べてよ。」って私にくれたんだよ。そして私が…「ハア…教科書貸したくらいでお札とか…気が向いたら食べるから置いて、地味眼鏡。」って言っちゃったんだよねえ…ア、アハハ…ごめんって!?!言い

訳になるけどあの頃の私は中学の頃よりかは少しは良くなってるんだよ!私だって過去に戻れるならぶん殴りたいくらいだからね!?:コホン、話を戻すけど私は蒼夜君がクツキーを私の机の上に置いたら帰るとばかり思ってたんだよね。けど、帰らずに椅子の背もたれを私の方に向けて腕を乗せて私の方をずっと見てたんだよ。ずっと私を見てたから蒼夜君に「:何?他に何か用でもあるの?」って聞いたなら「用って言うか:そのクツキー、僕が作ったから感想を聞きたいな」とって。「その時初めて私は作業を辞めて蒼夜君の方を向いて」:お前の手作り?ふーん:良いよ、今食べて酷評してあげる。」って言ってるね、つい「美味し:」って呟いたんだよ。それを聞いてた蒼夜君が「本当?それは良かった。」って笑ってたんだよ。

「分かった!その時からお母さんは蒼夜さんの事が気になったんだ!」

「うくん、確かに気になりはしたけど、異性として気になり始めたのはもつと後なんだよね。それに私は蒼夜君に気になった事を聞いたんだよね。」

「気になった事:ですか?それって一体:??」

まあ、大した事じゃなかったんだけど、基本的に私は永久ちやんと彼奴としか話してなくて、他のクラスメイト達も私とあまり関わろうと:いや、今思えばあの頃関わろうとせず関わりたくない雰囲気を出してたのは私か。おつと話がずれたね、蒼夜君は他人と関わろうとしなかった私に初めて話し掛けて来たのが蒼夜君だったから、「何で私に話し掛けて来たの?教科書なら私のじゃなくて他のクラスの奴から借りる事も出来たよね?」って聞いたなら蒼夜君は笑いながら「篠ノ之さんと話してみたかったし、友達になりたかった:じゃ、駄目かな?」って返答してきたんだよ。それを聞いた私は「私と話してみた

かった？友達になりたい？…フフ、お前…いや、君、面白いね？如月…だっけ？君みたいに私と純粹に仲良くなりたい物好きは初めてだよ。良いよ、友達になろう。精々私を退屈させない様に…ね♪」そこからだね。私と蒼夜君が友達になって、私、永久ちゃん、蒼夜君の三人で一緒に居る事が増えたんだよ。だからかな？永久ちゃんと蒼夜君と過ごす程に彼奴への興味が薄れていったのは。

…ま、彼奴の事は置いておいて私の話だね。蒼夜君と友達になった最初の頃は呼び方も如月だし、印象だって私を退屈させてくれない面白い奴が変わって、この時の私はこの印象はずっと変わらないと思ってたんだ。けどそれは三学期のある日の昼休みに言われた永久ちゃん言葉で崩れたんだよね。

「何と言われたんですか？」

「うん？まあ、今では確かに…って納得出来るけど、あの時は本当に困惑した言葉だよ。」

昼休みに私と永久ちゃんだけでご飯を食べた時があったんだけどその時に「…最近の東は如月と友人になって雰囲気柔らかくなったな。」それを聞いた私は意味が理解できなくて固まってたら、続けて「…それにお前が私達以外の奴の事を楽しそうに話して居るなんてな。」それ聞いた瞬間反論したよ「…はあ!?!私か？如月の？話を？楽しそうにしてる？冗談は辞めてよ永久ちゃん!?!別に如月はそんなじゃないからね!?!蒼夜と一緒に居ると退屈しないし、休憩用のお菓子を作ってくるし、気分転換に私の話し相手になってくれるし、私の夢を笑わないどころか応援してくれるし、兎に角！私にとって蒼夜は何て事の無いただの友達なの！分かった!?!」って返したんだよ、でも永久ちゃんは「…東、気付いて無いのか？…お前、途中から如月の事を名前で呼んでいるし、凄く嬉しそうに話していたぞ。」ってそれを聞いて私は本当に訳が分からなくなって、一言だけ永久ちゃんに謝って席を離れて屋上に逃げたんだよ。逃げて少して早く落ち着こうとし

ても色んな事が頭の中でぐるぐるして胸の奥底がもよもやして気持ち悪くなつたから寝転んで空を見上げてたんだよ。そしたら私の目の前に蒼夜君の顔が出てきて「やっほ東、こんな所で何してるの？」その瞬間に頭の中のぐるぐるや胸のもよもやが無くなってホッとしたんだよ。その時に私は目を背けてた事に気付いちやっつたんだよね。

「それってもしかして!」

「うん。最初は面白い奴だったのに、いつの間にか私の中で蒼夜君の存在は大きくなって、ただの男友達から好きな異性になっちゃったんだよ。初めて話したのが九月だから約半年で蒼夜君に惹かれた事になるのかな?」

「成る程。それで東さんはどう反応したんですか?」

うん? まあ、気付いちやっつたから、普通の反応はしてないんだよね。確か「…蒼夜?…のおおおおおわあああああ!?!何で!?!何で此処に蒼夜が居るの!?!此処立ち入り禁止だぞ!?!てかいきなり顔出すなよ!?!驚くだろ!?!てか近い!?!避ける時結構スレスレだったぞ!?!と言うか何で蒼夜が此処に居る!?!」って、まあ、凄く焦ってて軽くブーメランだったし、私らしくない反応だったから蒼夜君が「何か…東らしくない反応だね?何時もの東なら、おやおや?如月じゃないか?どうしたの?サボリ?って言いそうなのに。と言うか蒼夜?僕の事名字で呼んでたよね?」って、凶星まで突かれて更に焦って「話を逸らすなよ!?!私は何で此処に居るのか聞いてるんだけど!?!」って、何時もなら蒼夜君の言った通りに返すんだけど、あの時は本当に焦ってたからね。それでも蒼夜君は私の方を真っ直ぐ見て「何でって…東が苦しそうに走ってたから心配したんだよ。それ以外に何かある?僕としてはそれだけで充分だけだね?」…正直に言うとその言葉だけで私は駄目だったよ。小さい頃から私なら大丈夫、私なら心配ない、そう言っただけに手を差し出す人は居なかった、彼奴もその一人だね。逆に永久

ちやんだって手を差し出さずに背中を軽く押すくらいだったけど、蒼夜君は差し出してくれた。：人って面白いよね。恋に堕ちた途端に相手の言葉や動きの一つ一つが魅力的になるんだから。

「ね？ イツ君に鈴ちゃん？ 二人なら私の言ってる事が分かるでしょ？」

「そうですね、東さんの言う通り今でも言葉や動きの一つ一つに惹かれていきますね。ただ側に居るだけで幸せを感じる事が出来ますね。」

「確かに、好きになったらもつと好きになって気付いたらどんどん惹かれて更に好きになっていきますね。」

「でしょう？ あ、大丈夫だよ、きつと三人にもそう言う人が現れて分かる時が来るからね。」

蒼夜君の事が好きだと気付いてからの行動は速かったよ。まず最初に蒼夜君に「はあ…本当に私は君に驚かされてばかりだよ。色んな意味で…、さて、私が苦しそうにしてたのはちよつと悩みがあったからなんだ。でもその悩みは解決したから心配しなくて大丈夫だよ。蒼夜…いや、蒼夜君。私が此処まで他人に興味を持って名前と呼んだのは君で二人目だよ。スウ…蒼夜君！これから覚悟してよね！本気になった私は止められないからね！」って、まあ、決意表明と遠回しの射止める宣言したんだよね。んで蒼夜君が「そうなの？ まあ、何の覚悟をすれば良いのか分からないけど、楽しみにしてるよ。」って格好良く返してくれたんだよ！その日からかな？ 私がどんどん変わっていったのは。今までは蒼夜君からしか話し掛けてきて来なかったんだけど私から積極的に話し掛ける様になったんだよ。それから二年生になった頃から蒼夜君と居る時間が増えると同時に友達も増えて、何でかは知らないけど二年生になってから告白される様になったん

だよねえ…正直、蒼夜君への気持ちに気付いてからだから何とも思わなかったし、告白の言葉は上っ面だけで心に響かないし、視線は常に胸にあって気持ち悪かったしね。ま、私の告白された話は良いんだよ、私にとつては既に過去の話だからね。それから私と蒼夜君の友人としての関係は続いて楽しかったけど学園祭が近付いて来て、私は永久ちゃんに学園祭で告白するって言ったんだよ。そしたら「…付き合ってるのに告白するのか？」それを聞いて本当にびっくりしたよ。永久ちゃんの中では私達はもう付き合ってる事になってたんだよね、それはそれで嬉しかったけど。そして永久ちゃんは私の話を何も言わずに聞いてて、聞き終わったら少し考えて私に「…回りくどい事をせずに束の気持ちを伝えれば良いんじゃないか?…少なくとも私はそれで充分だと思うぞ。」って永久ちゃんらしいアドバイスだったよ。

「多分だけど、その時の私この中には告白する事は決まってる、永久ちゃんが何て返すのかも分かったのかもね。ただ永久ちゃんに私の決意と覚悟を聞いて欲しかっただけかもね。」

「へえ、あ、束さんの母校の学園祭ってどんな感じだったんですか?」「どんな感じって言われれば色々自由だったよ。決まりさえ守つてれば教師陣も大抵の事は目を瞑ってたよ。それこそ注意してたのは服装くらいだったしね。」

「そうなんだ、因みにお母さん達のクラスは学園祭で何をやったの?」

「私達のクラス?確か…教室を使った私完全監修の巨大迷路だったかな?色んなトラップとか仕掛けを作って大人気みたいだったよ。」

「束さんの完全監修の迷路…考えただけ凄そうですね。」

「確か回転式の隠し扉とか床を踏んだら風が吹くとか、いきなり暗転したりする装置を作ったよ。勿論きちんと予算内でね。」

「想像より凄かった!？」

「ふふ、でしょ?。」

さて、それで完全監修した私と放課後の殆どの時間を手伝ってくれた蒼夜君は学園祭当日に長めの自由時間を貰ったんだよね、明らかに私の友達にやけてたし、永久ちゃんに関しては私達と責任者を変わる時に無表情でサムズアップしてたから確実に仕組まれてただろうね。だから私は全力で蒼夜君と学園祭を回る事にしたんだよ。楽しかったなく色々な出店も出てたし色々な出し物もあつて蒼夜君と一緒に回ってたから兎に角テンションが高かったんだよ、それこそ今思い出しても私自身が引くくらいにね。それでも蒼夜君は嫌な顔をせず、むしろ楽しそうに私に付き合ってくれたんだ。それだけで私はもつと蒼夜君の事が好きになって、あまりにも楽しすぎてどんどん時間が過ぎていったよ。そして集会と片付けが終わって打ち上げを教室でしようつてなつて、私はその打ち上げが始まる前にこっそり蒼夜君と抜け出して屋上に向かったんだよ。ほらほら、気持ちは分かるけどラウちゃん以外の女の子達は静かにしようね。ふう：私は夕陽が沈み始めてる屋上で蒼夜君を前に話し始めたよ。「蒼夜君、最初私は君の事は眼鏡を掛けた地味な奴って印象だったし、興味すら無かった。でも君が教科書を貸したお返しにクツキーを作ってきて真面目な奴だと思つたし、仕舞いには私と仲良くなりたいたいか可笑しい奴だと思つたよ。でも蒼夜君が居れば私は退屈しないと直感で感じた、だから君と友達になった。事実君と一緒に居ると永久ちゃんと同じくらい退屈：いや、凄く楽しかった。でもある日、永久ちゃんに言われた言葉を聞いて訳が分からなくなつて、私の中で色々な物がぐちゃぐちゃになつて、正直気持ち悪くて訳分かんなくて永久ちゃんか

ら逃げ出したんだ。でも蒼夜君はそんな逃げ出した私を心配して此処まで来てくれて蒼夜君の顔を見た瞬間に私の中にあつた気持ち悪い感覚が無くなったんだよ。で、その時に気が付いたんだよ、私は蒼夜君と過ごす内にどんどん惹かれて好きになつたんだ！だから…その…スウ…蒼夜君！私と…付き合ってください！」そう告白したんだ。そしたら蒼夜君は頭を掻きながら「そっか…束は僕を好きになつてくれたんだね…はあ…まさか先を越されるなんてなあ…でも、凄く嬉しいよ。僕も君の事が…束の事が好きだ！だからこれからは友人としてじゃなくて、恋人として宜し…うおっ!?」って、私は蒼夜君の言葉を最後まで聞かずに無我夢中で抱き付いて過去最高の笑顔で「ありがとう！こんな私を好きになつてくれて！私の告白を受け入れてくれて！私の恋人になつてくれて！本当に嬉しくて、幸せで、大好きだよ！」って言ったなら「束らしいと言うか…何と言うか…せめて最後まで聞いて欲しかったなあ…まあ、それを含めて好きなんだけどね。」もう最っ高だったよね!?ふう…それで私達は晴れて恋人同士になつてから教室に戻つて、学園祭の打ち上げに参加して楽しんでたら永久ちゃんが私と蒼夜君の側に来て「…おめでどう、束。…如月、こいつは自由過ぎるし、何を仕出かすか分からない時があるし、行動の一つ一つが問題に発展しかねない奴だ。…だが、基本的には良い娘で、全力で動いているだけだ。…だから、私の親友の事を頼んだぞ蒼夜。」って永久ちゃんらしい祝福の言葉を伝えるだけ伝えて別の友達の所に行つたんだ。

「これが私と永久ちゃんと蒼夜君のお話だよ。さて、時間も時間だしこれでお開きにしようか。話を聞いてくれたお礼に片付けは私がしておくからイツ君はお風呂に、鈴ちゃんはイツ君の部屋にお布団敷いてるから其処で、ラウちゃんはクーちゃんの部屋で一緒に寝てね。(まあ、あの時蒼夜君への告白は囁んじやったけど私と蒼夜君しか知らないから捏造しても良いよね?)」

イチカ達は束の言葉に甘えそれぞれ就寝の準備を始め、束は嬉しそ

うに片付けを始めた。そしてイチカは浴槽に浸からずシャワーを浴びて自分の部屋に向かう。部屋に入ると鈴が布団の上でスマホを弄っており、イチカが戻ってくると弄るのを辞めて話し始める。

「東さんの昔話、凄く素敵だったね。それに言葉の一言一言を全部覚えてるのも凄かったなあ。」

「だな、俺的にも東さんが何で急激に変わった理由が分かって自然と納得出来たな。でも…」

「うん…」

「告白噛んだ事隠してた（わね）な。」

東の告白の真実は自分しか知らないと思っているが、イチカと鈴は告白された蒼夜自身から聞いていたので、東が噛んだ事を隠していたと分かっていたが東本人が知る事は無い。

通常編

零話

俺はいつも周りから優秀な姉と比べられていた。学校に行けば虐められ、テストで満点を取ろうが先生からは「千冬さんの弟なら出来て当然。」満点を取れなければ「千冬さんの弟のくせにこんな問題も解けないの？」などと比べられた。ふざけるな、俺は一夏であつて千冬姉じゃない。だから千冬姉を追い越すために努力した。人一倍に努力した。時々、千冬姉に結果を知らせたり相談したりした。だけど帰ってくる言葉はいつも同じで「私の弟なのだから出来て当たり前だ。」それはお前の努力が足りないからだ。「出来て当たり前？ふざけるな俺はあんたじゃない。努力が足りない？俺の何を知っている。だけど俺には心の支えとなっていた人が四人いた。名前は鈴、弾、数馬、束さん。この四人だけは俺を認めてくれた、励ましてくれた。この四人の前なら本気で笑えた。

だけど、長くは続かなかつた。鈴が中国に帰ることになった。鈴が帰る一週間前に告白された。俺は鈴の気持ちに気付き、俺自身の気持ちに気づいた。俺は鈴が好きだ。だから俺は鈴の告白を受けて恋人同士になった。俺と鈴は弾、数馬、束さんに報告して祝福された。そして鈴は中国に帰った。また会おうと約束して。

千冬姉がISの世界大会、モンドグロツソで初代ブリュンヒルデになった。俺は言葉だけ「おめでとう」と言った。そこまでは良かった。だけど世界はそうはいかなかつた。世界は更に俺を否定した。なんで俺一人として見ない。俺は一夏であつて千冬姉じゃない。そして、二回目のモンドグロツソが開催されることになった。千冬姉が応援に来てくれと言ってきた。俺は仕方なく応援の為に千冬姉と共にドイツへとむかつた。

俺は飛行機に乗っている間俺は考えていた。この大会が終われば更に俺への態度が悪化するだろう…。そのまま行けば弾や数馬にも被害が広がるだろう。それだけは避けたいどうせ千冬姉に相談した

ところでお前が弱いからだと言われるだろうな……。今信頼できる大人といたら束さん、弾と数馬の親御さん達だけだ。：家族ってなんだろうな？俺の親はマドカを連れて蒸発、千冬姉は家族と思いたくない。俺に家族って：「次に会ったらずっと一緒だからね!!」「ああ、ずっと一緒だ!!」っ！そうだったな俺には鈴がいる。心に決めた大事な人が。「鈴、今頃頑張っているんだろうな。」俺はあいつが代表候補生になるため頑張っていることを知っている。だから俺は自分が頑張れることをやり、あいつに胸をはって会えるようにしたい。さてと、ドイツに到着したようだな、降りるとするか。

この時、俺はこの後の自分の運命をまだ知らない……。

一話

ドイツに着いた俺はまず、ホテルに向かった。千冬姉から地図をもらっていたため迷うことは無かった。チエツクインを済ませた俺は用意された部屋に到着した。ドイツ語は既に習得していたので問題は無かった。

「にしても、親族一人に金かけすぎだろ……。千冬姉が脅してもしたか？流石にそれは無いか。」

実際千冬は日本政府を脅していた。それが千冬の愛情だとしても一夏はそれを愛情として受け取らないだろう。すでに一夏は千冬を家族として見ていない。その頃の千冬はというと。

「ふふ♪今頃一夏は喜んでいるだろう。何せ政府を脅して最高級ホテルのスウィートルーム用意させたのだからな。」さて、目指すは優勝だな。」

「そうですね！先輩！」

だが千冬は知らなかった。一夏が部屋を変えようとしていることを……。

「さてと、あまりにも一人で過ごすには広すぎる。…ホテルに相談してみるか。」

「あの一、すみません。」

「はい、どうかされましたか？」

「ホテルの部屋の変更ってできますか？」

「えっ？あ一、失礼ですが部屋は何処でいらつしやいますか？」

「最上階のスウィートルームです。」

「…は？すみません。もう一度お願いできますか？」

「いや、だから最上階のスウィートルームです。」

「あの一少してお時間を頂いてもよろしいでしょうか？」

「構いません。」

「すみません。(すみません、オーナー。部屋を変えて欲しいと言うお客様がいらつしやるのですが…) (どの部屋のお客様だ?) (スウィートルームに泊まられている織斑様です。何でも一人で泊まる

には広すぎるそうです。(スウィートルームから変えてくれ!?そんな馬鹿な!?)とりあえず預かった金額を減らすことになるからそれをどうするか聞いてくれ。(わかりました。)あのく。」

「なんででしょうか?」

「預かっております金額はどうされますか?」

「あー、そちらで自由に使ってください。」

「!? (こちらで自由使って良いそうです!) (なんだと!?)」

「あつ、そうだ部屋を変えたら日本政府には教えないでください。」

「(はく、部屋を変えてやれ。)(わかりました。)(ではこちらが部屋の鍵になります。)」

「ありがとうございます。それとこれ。」

一夏は部屋の鍵をもらいスウィートルームの鍵を返して荷物をまとめて部屋に向かった。

そして第二回モンドグロツソ決勝戦

「(ついにこの日が来た!ここで優勝すれば一夏がもつと尊敬してくれるはずだ!一夏は私が優勝すれば嬉しいに決まっている!速く終わらせて一夏の元に行かなければ!)では山田君行ってくる。」

「頑張ってください!」

千冬は知らないその考えは間違いだと言うことを。そして一夏が千冬の元から離れることをまだ知らない…。

その頃一夏はというと。

「お前が織斑一夏か?」

「そうだが?」

「そうか…。ならば。」

ゴス。大柄な男が一夏の腹を殴った。

「カハッ!」

一夏が膝から崩れた。そして一夏は気を失った。

「よし、連れて行け。」

「了解。」

その頃とある研究所では。

「いつ君!!くそっ!何でちーちゃんはいつ君を見てないんだ!いつ

たいどうすれば……。そうだ！あの人達なら助けてくれるかもしれない。そうと決まったら早速。」

束通信中

「どうしたの束？」

「いつ君を！いつ君を助けて!!」

「とりあえず落ち着きなさい！で、一夏君がどうしたの？」

「いつ君が誘拐されたの！」

「！、わかったわ。それで場所は！」

「場所はそっちに送るね！」

「ここね……。オータム、マドカ出掛けるわよ！」

「何処に？」

「ドイツよ、一夏君を助けにね。」

「！了解！（わかった！）」

その頃一夏は……

「っ！ここは何処だ？」

「目が覚めたみたいだな。」

「俺に何のようだ！」

「お前は人質だ。」

「人質？ああ、そういうことか……」

「フツ。理解したようだな。まー精々姉の助けを待つことだな！」

「おい！大変だ!!」

「どうした！」

「織斑千冬が決勝戦に出てる！」

「何！」

「やはりか……」

「どう言うことだ！」

「簡単な話だ。俺出来損ないだ。名誉と出来損ないどちらを取ると言われたら名誉を取るだろう。」

「チッ！おい！こいつを殺すぞ！」

「（殺すだど？ふざけるな！俺には守らなくちゃいけない約束があるんだ！）俺は関係ないだろ！」

「じゃーな、坊主。恨むなら自分の姉を恨むんだな。」
バン！

「カハツ!」

一夏は銃で撃たれて死んだ……。筈だった。

「ここは…何処だ?」

「起きたかい?」

「!?誰だ!」

「僕かい?僕は人々から天照と呼ばれているよ。」

「天照?あの日本神話のか?」

「そうだね。」

「その天照が何のようだ?」

「君は今、強い思いがあつてここにいる。」

「強い…思い…。」

「そう…誰かとの約束を守りたいって言う思いに。」

「…。」

「凶星みたいだね。それでなんだけど。君には二つの選択肢がある。1つはもう一度あの世界で生きる。ただし、半分幽霊でだけだね。もう一つは、別の世界で別の人生を歩むか。君はどっちを選ぶ?」

「そんなの決まつている!俺はあの世界で生きて約束を果たす!」

「そっか…。なら君にこれを。」

パチン!天照は指を鳴らした。すると一夏の腰に不気味なデザインのベルトが出てきて、手には目玉の様な物が握られていた。

「これは?」

「その腰にあるのがゴーストドライバーって言って手に持つてるのが君の眼魂って言うんだ。」

「ゴーストドライバーに眼魂?」

「そう、それは君の力になってくれるよ。」

「ありがとうございます。っ!?なんだこれ?」

「へー、やつぱり君面白いね。ねー、一夏君僕と同じことをその三つにしてみて。」

天照は、目を描くように手を動かした。

「こう…ですか？」

一夏はまず、日本刀に天照と同じ様にて手を動かした。すると。
「なっ、なんだ!？」

日本刀がパーカーの様な物に変わって浮遊している。

「こいつは？」

「そいつはムサシゴーストだよ。一夏君そいつを呼んでみて。」

「あっ、はい。こい！ムサシ！」

ムサシゴーストはゴーストドライバーに吸い込まれ眼魂に変わった。

「眼魂に…なった？これって？」

「そのゴーストドライバーは英雄達の力を使うことができるんだ。」

「英雄達の…力。」

「後この子が君を導いてくれるよ。」

そう言うといきなり可愛らしい幽霊が出てきた。

「俺様の名前はユルセンだ。これからよろしくな。」

「ああ、よろしく！」

「さてと、もう時間だ。」

「え？」

「これから頑張ってね。一夏君。それとこれは僕からの贈り物だ。」

天照は真っ黒な眼魂を一夏に投げた。

「はい！ありがとうございます。そしてお世話になりました。」

「じゃなく。」

そして一夏とユルセンは光輝き消えた。

「頑張っつてね一夏君。君の未来は君自身が掴みとるんだ。」

二話

一夏を誘拐した男達が話しをていた。

「ククッ。」

「どうしたんだ？」

「いや、この坊主を見て思ったけど、弱いつて罪だな！」

「確かに言えてるな！」

「男のくせにうるさいのよ！少しは黙りなさい！それともこの出来損ないみたいになりたいの？」

「「チツ！」」

「というか、ここから逃げなくていいのか？」

「これだから男は。どいつもこいつバカなのかしら？」

「なんだと!？」

「何のために別の場所から日本政府に連絡したと思ってるの？」

「そ、そうだよな！」

この時この場にいる全員気が付いていなかった。血溜まりに倒れている一夏が微かに光り撃たれた場所が塞がった。そしてゆっくりと立ち上がった。

「戻って…これたのか？」

「!?おいっ！何でてめえが生きてんだ！」

「教える義理はない。」

「（一夏！ゴーストに変身だ！でも大切なことは絶対に忘れるなよ！）」

「わかってる。」

一夏は眼魂を手にした、そして腰にゴーストドライバーが現れた。カチッ。一夏は眼魂のボタンを一回押し眼魂をゴーストドライバーに入れトリガーを引いた。

「アイイ♪バツチリミナー♪バツチリミナー♪」

「変身！」

「カイガン！オレ！レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！」

「「「なっ!?!」」」

「これがゴーストか…。」

「どうせ、ハツタリか何かよ!」

「お前ら全員かかれ!」

「「おう!」」

男三人が一夏に襲いかかってきた。だが、一夏はその三人を浮かんで避け攻撃を繰り返し三人を気絶させた。

「チツ!これだから男は使えないのよ!こうなったら私が相手よ!」

「…すみません。この三人を連れて逃げてください。」

「えっ?」

「速く!!」

「おっおう!」

「何のつもりかしら?」

「邪魔だから逃がしたただけだ。」

「ふーん。他人の心配より自分の心配したらどうなのかしらっ!」

ISを纏った女性は話終わるとマシンガンを乱射してきた。

「遅い!」

一夏はマシンガンの弾を全て避けISを纏った女性に攻撃をヒツトさせた。

「ぐっ!」

「効いたみたいだな。」

「(一夏!トリガーを引いてオメガドライブだ!)」

「わかった!」

カシャンッ!「ダイカイガン!オレ!オメガドライブ!」

「はあー!」

「キヤー!!」

一夏の片足にパワーが溜まりISを纏った女性に蹴りを入れ、ISが解除され女性が倒れた。

「これが…ゴーストの力…か。」

「初めての割りには良くできてんじやね〜か。最初に言ったとおり大切なことを忘れるなよ〜。」

「ああ、わかってる。」

一夏は変身を解除して元の姿に戻った。
その時いきなりドアが破壊された。

「!？」

「オイオイなんだなんだ!？」

壊されたドアから二人の女性と一人の少女が入ってきた。三人共
もI Sを纏っている。

「一夏君！無事!？」

「坊主！大丈夫か!？」

「兄さん！大丈夫!？」

「マド…カ？マドカなのか!？」

「兄さん!」

マドカと呼ばれた少女が一夏に抱き付いた。I Sを解除せずに…。

「ちよっ！マドカ！ギブ！ギブ！ギブ!」

「兄さんが無事でよかった！本当によかった！兄さんにもう一度会
えて本当によかった!」

「マドカー！俺も会えて嬉しいが痛い！ギブ！ギブ！マジでギブ
!」

「フフ、仲が良いわね」

「そうだな。(笑)」

「すみません！その二人！見ていないでマジで助けてください！
ちよっ！マドカ！骨折れる!」

「仕方ないわね。マドカそろそろ放しなさい。」

「さっさと放せよ、話が進まねーだろうが。」

「うわーん！本当生きてるー!」

「(これはダメね。(ダメだな。))」

「おいー!？ユルセンなんとかしてくれ!」

「(オイオイ一夏忘れてないか?）」

「なにが!？」

「(今お前半分幽霊だろ。)」

「だからなんだなんだ!？」

「(幽霊なら物を通り抜けることができるだろう。)」

「なるほどそう言うところか!」

「大丈夫かしら?この子?(大丈夫か?こいつ?)」

一夏は自分の体を幽霊に変え姿が消えてマドカがこけた。

「!?!」

「兄さん!何処に行ったの!?!兄さん!お兄ちゃん!何処ですか!?!」

「ふー、助かったー。マジで死ぬかと思ったー!あつ、俺もう死んでたわ。」

「(のんきだな。)」

「!?!」

三人はいきなり姿を消したり現れたりする一夏に驚いている。

「えーと、一夏君で良いのよね?」

「あつてますよ。ところで貴女方は?」

「ごめんなさいね、私はスコール。スコール・ミューゼルよ」

「俺はオータムだ。よろしくな!」

「マドカ・ミューゼルだよ。スコールさんの養子つてことになってるよ。」

「養子?両親はどうしたんだ?」

「亡くなったよ。私を捨てる前にね。」

「そうか…。ところでスコールさん達は何故ここに?」

「束に頼まれたのよ。貴方を助けてっつね。」

「束さんが?」

「ええ。それで貴方のこれからどうするの?」

「そう…ですね。」

「兄さん…。」

「さっさと決めろよな。」

「!?!」

「…何で出てきてんだ?ユルセン?」

「いや〜なんか面白そうだから。」

「オイオイ。」

「兄さんこいつ何?」

「ああ、こいつはユルセンって言う幽霊だ。ってあれ？どこに行つた？」

「というかオータムもいないわね。」

「いゝちゝかゝ、たゝすゝけゝろゝ。」

「「えっ？」」

三人はユルセンの声が聞こえた方向を向くとそこには笑顔でユルセンを撫でまくっているオータムの姿があった。

「なく、坊主この生意気だけど可愛いやつ名前なんて言うんだ!？」

「あつ、そいつはユルセンって言います。」

「ユルセンかく名前も可愛いなく。」

「スコールさん、マドカ、オータムさんっていつもああなんですか？」

「いいえ。いつもは私達との模擬戦に明け暮れているわ…。」

「あんなオータムさん見たことないよ…。」

「話さないでいいから速く助けろゝ！」

「わかった、わかった。オータムさんそろそろ話に戻りますよ。」

「ハッ！すまねーな、取り乱しちまった。」

「別に気にはしていないわ。(それにオータムの珍しい姿も見れたしね。)」

「助かったゝ。」

「それで貴方はどうするの?」

「俺も連れて行ってください。そして俺を強くしてください。」

「ふっ、歓迎するは一夏君。私の養子で名前はイチカ・ミューゼルで構わないかしら?」

「構いません。」

「なら、早速ここから出るわよ。」

「「わかった。」」

「わかりました。」

「わかったぜゝ。」

四人十一体?はこの場を去った。

この日、織斑一夏が死に、イチカ・ミューゼルが誕生した。

三話

「はい、到着。イチカ君、ユルセンちゃん、ここが私達が住んでいる家よ。さっ、入って。」

スコールは家と言ったが家というよりは豪邸に近い。

「大きいですね…。」

「まっ、とにかく入ろうぜ。」

「そうだな。」

「おじやまします。(じやまするぜ。)」

「おい!?イチカ!ユルセン!危ない!」

「兄さん!ユルセン!避けて!」

「えっ?」

バシッ!イチカとユルセンが豪邸に入るといきなりでこに衝撃が来た。

「ぎゃー!?でこがー!でこがー!でこが無茶苦茶痛いー!」

「痛って〜!頭が!頭が割れる〜!」

「今日から貴方達は私達の家族なのよ?だからここは必然的に貴方達の家でもあるのよ?つまり貴方達は家に帰ってきたのよ。帰ってきたらおじやましますじゃないでしょう?」

イチカとユルセンのでこの痛みの正体はスコールが二人にデコピンを喰らわせていた。

「すいませんでした!」

バシッ!またもやイチカとユルセンのでこに衝撃が来た。

「ぎゃあー!」

「違うでしょう!」

「うわ〜、スコールのデコピンを二回喰らいやがった…。」

「兄さん、ユルセン大丈夫?私も喰らったことあるけど二回連続は流石に無いよ。」

「(…ユルセン何が原因だと思う?)」

「(さっきのスコールの姉ちゃんか俺達は家族って言ったからなら、もしかしたら「おじやまします」じゃなくて「ただいま」なんじゃ

ないか。)」

「(なるほど！試しに言ってみるか。)」

「(だな。)」

「えーと、ただいま？」

「ただいま。』」

「フフ、お帰りなさい。イチカ、ユルセン。』」

「…なんか良いなこう言うの。』」

「だなく。』」

「じゃあ、私もただいま！』」

「お帰り、マドカ。』」

「良かったなく。それじゃ、ただいま。』」

「お帰りなさい、オータム。』」

四人十一体は豪邸に入り話をする事になった。

「さてとイチカ、あそこで何があったの？そしてユルセン貴方は何なの？』」

「(…ユルセン全て話してもいいか？)」

「(お前が決めたことだからいいんじゃないか。)」

「(そうか…) 全て話します。』」

イチカは今までのことを全て話した。

「そう言うことがあったのね…。』」

「つまりイチカは今、半分幽霊ってことだよな。それはスゲーな。』」

「兄さん！ユルセン！』」

いきなりマドカがイチカとユルセンに抱きついた。

「うおっ！、マドカ？どうしたんだ？』」

「く、苦しい。』」

「例え兄さんとユルセンが何者であろうと私達は兄さん達の味方だ。』」

「マドカ…。』」

「(しばらくそのままにしてやるか。)」

「東さん達もイツ君とユー君の味方だよ！』」

「「？」』」

「束さん？」

「束？何処にいるの？」

「束さんはここだよー！」

「おじやましてます。」

パカッ、いきなり天井の一部が開き機械で出来たうさ耳を着け不思議の国のアリスを思わせる服装をした女性と目が閉じている少女が出てきた。

「久し振りだねイツ君。」

「お久し振りです。束さん。そちらの少女は？」

「初めまして、クロエ・クロニクルといます。」

「あつ、イチカ・ミューゼルといます。」

「ユルセンだ。よろしくな。」

「こちらこそよろしくお願ひします。」

「ありがとね。スーちゃん。」

「？束さんとスコールさんは知り合いなんですか？」

「知り合いと言うより友達よ。」

「え？えー!？」

「ぶーぶー、ひどいなーイツ君は。」

「あつ、すいません。」

「うん、許すよ。」

「ところで束、上でなにやってたの？」

「そりゃー、改z…じゃなくてちよつと改良を。」

「「「「(今改造って言うおうとしたな。)(したね。)(しましたね。)(したなく。)」」」」

バシッ！束のでこにスコールのデコピンが炸裂した。

「うおー！束さんのおでこに強い痛みが来たー！」

「改造にしる改良するときには私に一言言ってからしなさいって言ったわよね？」

「はい…。すいませんでした…。」

「今度は何時からして何を作ったのかしら？」

「スーちゃん達が帰ってくる5分前に私達が住むための部屋を作り

ました…。」

「申し訳ありません…。」

「はく、仕方ないわね。どうせもう出来ていて荷物もあるんでしよう？なら、今更追い出すわけにいかないから貴女達もここに住んでいいわよ。」

「いいの？」

「ただし、私達のISを定期的にメンテナンスをすることに。良いわね？」

「うん！」

「ありがとうございます！」

「二人とも良かったな。」

「良かったですね、東さん、クロエさん。」

「うん！（はい！）」

こうして六人十一体が共に住むことになった。

同時刻のドイツでは

千冬はモンドグロッソの決勝戦が終わった直ぐにドイツから一夏が誘拐されたことをしり誘拐されていた場所に到着していた。

「おい？これはどう言うことだ!?一夏が居ないではないか!？」

千冬が来たときには誰も居らずただ、十数発の空薬莖と血溜まりがあるだけだった。

「それを私に聞くな、だが約束どおりドイツ軍で一年間教官をやつてもらおうぞ。」

「ふざけるな！一夏はいなかっただろうが！」

「ならばその血液をDNA鑑定して一致したらやつてもらおうぞ。」

「いいだろう！」

結果から言えばDNA鑑定で一致し千冬はドイツで一年間教官をやることになった。千冬はこの後イチカと再開することになるがそれは千冬が望んだような再開にはならない…。

四話

イチカはスコール、オータム、マドカ、東、クロエ、ユルセンと共に住むことに決まった次の日にある人物に電話をかけていた。

「はい、どなたですか？」

『久し振りだな。弾。』

「!?一夏…なのか？」

『ああ。』

「お前一体何処にいるんだよ！そして今何してやがる！」

『すまない…。今俺は一応日本に住んでる。それでな俺新しい家族が出来たんだ。今その人達に特訓してもらってる。』

「そうか…。とりあえず元気なんだな？」

『おう。それと名前が織斑一夏からイチカ・ミューゼルに変わったから。』

「了解。数馬にも電話するのか？なんなら今呼ぼうか？」

『ああ、頼む。』

数分後

「で？一体なんのようなんだ？」

「いいからこの番号にかけてみる！」

「わかったから！耳元で騒ぐな！かかったか。はい、どちらですか？」

『久し振りだな。数馬。』

ポチ。数馬は電話を切った。

「弾、ふざけてるのか？」

「ふざけてねーよ！」

数馬の携帯がなった。

『いきなり切るな！』

「本当に一夏なのか？」

『連絡取れなくてすまなかった。』

「遅すぎるわ。それで何があったんだ？」

イチカ説明中

『ということがあったんだ。』

「なんほどな、ならこれからよろしくな、イチカ。」

『おう。』

「ところで鈴には会ったのか？」

『いや、これから会いに行く予定だ』

「そうか、気を付けろよ。」

『おう。それと近いうちにそっちに顔を出しに行くから。』

「了解。弾にも伝えとく。」

『ああ、頼む。それじゃ。』

『おう。』

「イチカなんだって？」

「近いうちに俺達に顔を出すってさ。」

「そうかそれは楽しみだな。」

イチカが電話し終わった時にオータムがやって来た。

「オーイ、イチカーそろそろ行くぞー。」

「わかりました。そういえば。」

「うん？どうしたんだイチカ？」

「オータムさんのことってなんて呼べばいいんですか？」

「なんだそんなことか。別に好きに呼んでいいぞ。」

「じゃあー、姐さん？」

「ウン、デキレバホカノヨビカタデタノム。」

オータムは姐さんと呼ばれた瞬間、話し方が片言になった。

「…何かあったんですか？」

「イイヤ？ベツニナニモナイゾ。ウン、ナンニモナイ。」

「おーい、イチカ、オータム、何やってんだ？遅いぞ。」

ユルセンがイチカ達の元にやって来た。が一瞬でオータムの姿が
きえた。

「!？」

「イチカ、助けろ！」

オータムは一瞬でユルセンの所まで移動しユルセンの頭を撫でて

いた。

「いや、本当にユルセンは可愛いなく。」

「またか……。というかユルセンお前通り抜けれるだろ。」

「それが出来たら既にしてるぞ。」

「え?。」

「理由はこれだろうなく。」

オータムが首に掛けていているものをイチカに見せた。

「何ですかそれ?」

「お札が入った御守り。」

「それでかつ!」

「(どうするか……。こままじゃ話が進まないし、確かオータムって秋の事だよな、なら。) そろそろ離してやって下さいよ秋姐。」

ビクツ、オータムが驚きユルセンを離しイチカの方を向いて固まった。

「イ、イチカ?」

「どうしました?」

「あー、えくとな、そのく、も、もう一度呼んでくれないか?」

「秋姐。」

「ま、ま、いいんじゃねーか? イ、イチカがそう呼びたいなら。」

「わかりま……。し……。た!?!」

「?どうし……。た!?!」

イチカとユルセンは発見してしまった。オータムの後ろの方にスコール、マドカ、東、クロエがニヤニヤしながらこちらを見ていた。スコールに限ってはビデオカメラを持っていた。

「(どうする? ユルセン?)」

「(黙っていた方が良さそうだな。)」

「(だな。)」

「どうした? イチカ、ユルセン?」

「いいえなんでもありません。それより義母さん達の所に急ぎましよう!」

「おっとそうだな。」

「(あれは、見なかったことにしようぜ。)」

「(そうだな。)」

「遅れてすまん。」

「やつと来たわね。」ニヤニヤ

「兄さん達遅いですよ。」ニヤニヤ

「東さん達すぐ待ちくたびれたよー。」ニヤニヤ

「何かあったんですか？」ニヤニヤ

「い、いや、べ、べつに？」

「それで誰と中国に行くんですか？」

「それは私とユルセンよ。」

「義母さんも？」

「ええ、それじゃ行きましょうか。」

「わかった。」

「わかったぜ。」

イチカ、スコール、ユルセンは家を出て空港に向かい。そして飛行機に乗り中国に向かった。

「…義母さん一体何をみているんだ？」

「ビデオよ。」

「いや、それは見て解る。俺が言っているのは中身だ。」

「(どういうことだ？)」

「(ユルセン義母さんの持っているビデオを見てみる。)」

「(どれどれ？なっ!?映っているのがオータムの嬢ちゃんだけだと!?)」

「オータムはたまに見せる表情や慌てっぷりがとても可愛いのよね。」

「(これは話題を変えた方が良いな。)」

「(そうだな。)」

「そ、そう言えばマドカはいつもどんな感じですか？」

「は、マドカはね。」

ビクッ「!?!」

「(…ユルセン何故だろうかいきなり背筋が凍りそうになったんだが。)」

「(奇遇だなく。俺も凍りそうになったぜ。)」

「マドカは普段は礼儀正しくてね。」

「(よかった！さっきのは気のせいみたいだな。)」

「(そうだな。)」

「ただ、マドカは慌てるとねー。」

「慌てると?」

「口調が幼くなつて可愛いのよね。」

「(背筋の寒さの原因はこれか!)」

「(…嬢ちゃん達ってギャップ萌が多いのかね。)」

この後イチカとユルセンは中国に着くまでオータムとマドカの話
を聞かされた。

「や、やっと着いた。」

「(な、長かった。)」

「さ、移動しましょうか。」

「は、はい。(お、お。)」

その頃中国の施設では。

「(一夏が死んだ?なんであいつが死ななきやいけないのよ?なん
であいつは一夏を助けにいなかったのよ!)」

「凰鈴音。」

「あ、はい。」

「もうすぐお前に元に昨日連絡してきた人達が来くるそうさ。準備
しておけ。」

「…はい。」

数分後

「(私に会いたい人って誰よ…。織斑千冬なら一発殴る!)」
コンコン

扉が二回ノックされた。

「凰鈴音、来られたぞ。」

「…入ってもらってください。」

「失礼するわね、凰鈴音さん。初めまして、スクール・ミューゼルというものよ。」

「はあ…（誰？）それで私に何の用ですか？」

「用があるのは私じゃないのよ。私はただの付き添い。入って来なさい。」

「わかりました。」

「（あれ？この声一夏に似てる…。）」

「久しぶりだな。鈴。」

「!!? い、一夏？本当に一夏なの？」

「ああ。うおっ！」

鈴はイチカに抱きついた。

「バカ、バカ、バカー！あんたが死んだって聞いたときどれだけ悲しかったことか！」

「すまなかつたな…。」

イチカは鈴と話をするために離そうとするが鈴は離れなかった。

「鈴？」

「…もう少しこのままで居させて。」

「わかったよ。」

「（ラブラブだなく。）」

「（そうね〜。）」

「（…二人は気にしはいでおこう。）」

数分後鈴は離れた。

「落ち着いたか？」

「うん。」

「なら俺の話をするぞ。」

イチカ説明中

「…一夏は一夏だよ。例えば一夏が半分幽霊だとしてもそれは変わらないよ。」

「鈴…。」

「スクールさんもありがとうございます。」

「私は別に何もしてないわ。」

「と言うことは一夏はスコールさんの養子になってイチカ・ミューゼルになったんだよね。」

「ああ。」

「じゃあー、これからもよろしくねイチカ。」

「おう！」

そしてイチカ達は鈴に別れの挨拶をしていた。

「じゃあー、またね。」

「ああ、日本で待ってる。」

そういうとイチカ、スコール、ユルセンは鈴と別れた。このあとイチカは飛行機内で先程の映像を見せられ、いじられた。そして、家に到着した。

「ただいまー。」

「ただいま。」

「ただいま。」

「二「おかえりー。（おかえりなさいませ。）」「」」

「そうだ、兄さん。」

「どうした？マドカ？」

「兄さんにお届け物です。」

「俺に？誰から？」

「差出人は天照さんです。」

「！わかった。」

「どうぞこれです。」

「ありがとう。さて、開けるか。」

イチカが箱を開けると黒電話が入っていた。

「黒電話？なんでこんなものが…。」

イチカは黒電話を箱から出しテーブルの上に置くといきなり黒電話がなり始め、イチカは電話を取った。

「はい、イチカです。」

『躊躇なく取ったねー。』

「送り主が貴方の時点で掛けてくるのは貴方だけですから。」

『確かにそうだね。ま、とりあえず幼馴染みとの再開おめでとう。』

「その節はありがとうございます。」

『別に構わないよー。…僕もニヤニヤ出来たからねー。』

「何か触れたくない話題が聞こえましたでしたがそれは置いといて、それより二つ質問していいですか?」

『構わないよー。』

「この黒電話って何なんですか?」

『まー、気になるよね。とりあえず見た方が速いから、手の甲に乗せてみて。』

「手の甲…にですか?」

『うん。』

「はあ…。」

イチカは言われた通り黒電話を手の甲に乗せた。すると黒電話が鳥のような姿に変わった。

「なっ!?!」

『驚いたかい?』

鳥のような物から天照の声が聞こえた。

「何なんですか!?!これ!?!」

『この子はね、コンドルデンワーって言うんだ。イチカ君、君はロボットの眼魂を持ってるよね。』

「ええ、持ってますね。」

『それに必要になるしたまに連絡するから君に送ったんだよ。』

「なるほど。最後の質問なんですけど、あの真っ黒の眼魂って何なんですか?」

『あれね、あの眼魂は意思を持つ物と共鳴して眼魂にその意思を宿すことができるんだよ。』

「意思…ですか?」

『うん。とりあえず今は使えないってことを覚えておけば良いよ。』

「わかりました。ではまた。」

『またねー。』

天照が電話を切る音が聞こえた。

「これからよろしくな。コンドルデンワー。あと、コンドルデンワーって長いからコルーって呼んで良いか？」

「キイー♪」

「気に入ってくれて良かった。それにしても意思を持つ物…か。そんな物があるのか？とりあえず今は良いとして、ユルセンや義母さん達は何処に行ったんだ？というより何故こんなに寒気がするんだ？すまないが一緒に探して来てくれないか？」

「キイー。」

イチカ、コルー探索中

「キイー！」

「見つかったのか？」

「キイー、キイー。」

「ありがとう！じゃあ、案内してくれ。」

「キイー！」

イチカはコルーに案内された部屋に着いた。

「ここって、東さんが作ったって言った上映室…だよな？とにかく入ってみるか。コルーは肩にでも乗っててくれ。」

「キイー。」

コンコン、イチカは扉をノックした。

「イチカです。義母さん、秋姐、マドカ、東さん、クロエ、ユルセン入るぞ。」

「良いわよー。」

「一体何を見ているん…だ!?!」

イチカは固まった。何故なら流れていた映像は先程のイチカと鈴が抱き合っている所であった。数秒後イチカは物凄い速さで土下座をした。

「すみません。今すぐそれを消してください。」

「良いわよ。」

メインデータを消されたがこの後イチカは無茶苦茶いじられた…。

五話

イチカは鈴と再開した数日後にスコールと束が作った会社PRC《フアントム・ラビット・コーポレーション》のトレーニングルームでオータムに鍛えてもらっていた。

「つ、強すぎですよ秋姐…。一撃も入らないってどういうことなんですか!？」

「そうは言うがイチカもなかなかだったぞ？前に比べて かなり良くなってるし。」

「確かに。オータムの嬢ちゃんの攻撃を三分の一は防いだからな。」

「それに今のところオータムさんの攻撃を防げるの義母さんと束さんと兄さんだけですよ。」

「それにもう少して攻撃が当たりそうだったからな。」

「そうなんですか？」

「おう。」

「うしつ、ならもう一戦お願いします。」

「いいぜ。あ、そうだ。」

「?どうしたんですか？」

「なー、イチカ。ゴーストだっけ？あれになって試合してくれねえか？一回どんなものか見てみたい。」

「秋姐はどうするんですか？」

「俺はコイツを使わせてもらう。こい！アラクネ！」

オータムは一瞬にしてISを纏った。

「なるほど。なら俺も。」

イチカは眼魂を取り出しゴーストドライバ―を出現させ眼魂をセツトした。

「アーイー！バツチリミナー！バツチリミナー！」

「変身！」

「カイガン！オレ！レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！」

「これがゴースト…。」

「なかなか強そうじゃねえか。」

「確か、こい！ガンガンセイバー！」

「オーイ、マドカー、審判頼む。」

「わかりました。それでは始め！」

先に動いたのはイチカであった。

「はあー!!」

イチカはオータムに斬りかかったが防がれた。

「なかなか筋がいいじゃねえか。だが、まだまだだな！」

「ぐっ！」

イチカは六本の装甲による攻撃を受けた。

「やっかいだな…。なら、コイツでどうだ！」

イチカは赤い眼魂を取り出しセットした。

「アーイ！バッチリミナー！バッチリミナー！」 「カイガン！ムサ

シ！決闘！ズバット！超剣豪！」

「！赤くなつた!?!」

「行くぜ！秋姐！」

「こい！イチカ！」

「命、燃やすぜ！」

イチカは二刀流で、オータムは六本の装甲で攻撃を仕掛けている。

だが経験の差でオータムが圧倒的に有利だ。

「オータムの嬢ちゃんが有利だなく。」

「そうですね。あつ！兄さんがオータムさんを崩しました！」

「しまった！」

「！今だ！」

イチカはガンガンセイバー《二刀流》をゴーストドライバーにかぎした。

「ダイカイガン！ガンガンミナー！ガンガンミナー！」 「オメガス
ラッシュユ！」

「はあー！」

「チツ！仕方がない！イチカー！これを見やがれ！」

オータムはイチカにある映像を見せた。

「なっ!？」

「隙あり!」

「グハッ!」

「(; 。 ㊦) はっ! この勝負、オータムさんの勝ち!」

「ちよっ! なんて秋姐がその動画持つてるんですか!」

オータムがイチカに見せたのは中国でイチカと鈴が抱き合っている映像であった。(イチカにとって他の人に見られたくない映像であった。)

「スコールにコピーを貰った。因みにお前以外全員持ってし、消去不可だ。」

「義母さあーん!!? 何やってんのー!?!」

その頃スコールがいる社長室では。

「へくち! 風邪かしら?」

「大丈夫ですか?」

「大丈夫よ。それよりもう少しで取材の人達が来られるから準備しましょう。」

「そうですね。」

この日はPRCの社長であるスコールがテレビの取材を受けることになっていった。

一方束が使っている開発室では。

「あ、そういえば今日マーちゃんのサイレントゼルフィスのメンテナンスの日だった。早速呼ばなきゃ!」

同時刻トレーニングルームでは。

「さてと、今から俺は受付に行ってテレビ局の人達を待たなきゃな。」

「? 今日何かあるんですか?」

「兄さん、今日はテレビ局の人達が来て義母さんに取材をするんです。」

「なるほど。」

「というわけで行ってくる。」

「行ってらっしゃい。(頑張りなく。)」

「おう。」

「どうか他の社員はいないのか？」

「今のところいませんよ。」

「ふん。」

するといきなりマドカの携帯の着信音が鳴った。

「あ、東さんからだ。はい、マドカです。」

「マーちゃん今日サイレントゼルフィスのメンテナンスだったから開発室に来てー。」

「わかりました。今から向かいます。」

「東さんなんだって？」

「サイレントゼルフィスのメンテナンスをするから開発室に来てくれだそうです。」

「へー、俺も行っていいか？一度ISを間近で見たい。」

「いいですよ。」

「俺も付いて行っていいか？」

「いいよー。」

そして受付では。

「さてと、後どれぐらいで来るのかね？」

すると入り口から四人の男達と一人の少女が入ってきた。

「お待ちしております。 (なんで女の子がいるんだ?)」

「始めまして！ハーメルンTVのリポーター兼アナウンサーの明空真昼《あきぞら まひろ》です！PRCの社長であるスコール・ミューゼルさんはいらっしゃいますか！」

「社長は社長室にいますのでご案内致します。(違った！テレビ局の人だったー)」

「ありがとうございますー！」

オータム達は社長室に向かった。

コンコン、オータムは社長室をノックした。

「失礼します。テレビ局の方々をお連れしました。」

「わかったわ。入ってもらって。」

「かしこまりました。では、どうぞお入りください。」

「失礼します!」

「失礼します。」」

「子ども?」

「なっ!」

「「ブツ! (笑)」」

「(言いやがった! ストレートに言いやがった!)」

「ちよっと! 私子どもじゃないです! カメラさん達も笑わないでくださいよー!」

「ごめんなさい。では自己紹介をさせてもらうわね。PRCの代表取締役のスコール・ミュウゼルです。」

「ハーメルンTVのリポーター兼アナウンサーの明空真昼です! 歳は30歳です! 今日はよろしくお願いします!」

「30!」

オータムは素で驚いた。何故なら真昼の身長は140ぐらいだった。そして挨拶が終わり撮影に移ろうとしていた、

「それでは撮影を始めます。5、4、3。」

そしてカメラマンからどうぞの合図が出た。

「こんにちは! 「真昼の突撃!」の時間です! 今日私が来ているのはIS業界で急成長しているFRCです! 私は今からPRCの代表取締役のスコールミュウゼルさんに話を聞きたいと思えます! よろしくお願いします!」

「よろしくお願いします。それにしても真昼さんは元気ですね。」

「ありがとうございます! それでは質問をしていきます!」

その頃研究室では。

「失礼します。東さん来ましたよ。」

「待ってたよー。入っていいよー。」

「失礼します。(失礼するぜ)」

「あれ? イツ君とゆうー君も来たんだ。」

「ええ、ISを間近で見てみたかったので。」

「俺は暇だったからだなく。」

「なるほど。それなら始めようか。マーちゃん準備して。」

「わかりました。来てください。サイレントゼルフェイス！」

「じゃあー、一旦降りて。」

「わかりました。よつと。」

マドカはサイレントゼルフェイスから飛び降りた。

「へえー、これがマドカのISかー。蝶をイメージして作ったんですか?」

「そうだよー。マーちゃんの希望なんだ。」

「なるほどなく。」

「なあ、マドカ少し触ってもいいか?」

「いいですよ。でもやっぱり憧れるんですか?」

「確かに憧れはあるな。」

そう言うといチカはサイレントゼルフェイスに触れた。するとサイレントゼルフェイスが光だした。そして光が収まるとそこにはサイレントゼルフェイスを纏っているイチカの姿があった。

「「なっ!?!」」

「…なんでこうなった?」

「!?!な、な、なんでおにちゃんがあいえすをまとってるの!?!」

「俺が聞きたいよ…。」

「イツ君ってもしかして女の子でイツちゃんだったの!?!」

「違いますよ!!」

「あーはっはは!!おもしろ〜!笑いすぎて腹が痛て〜!」

「お前は笑いすぎだ!!」

「もしもし!スーちゃん!?!今すぐ開発室に来て!凄いいことが起きてるの!」

「どうしたの?そんなに慌てて?」

「いいから!」

「わかったわ。今開発室の前にいるから。入るわよ。」

「急いで!」

そして開発室の前では。

「この中で凄いことがあるらしいから見ますか？」

「是非！是非お願いします！カメラさん準備！」

「はい！」

「さてと、入るわよ。」

「失礼しまーす！」

「スーちゃん！大変だ…よ？」

「どうしたんで…す…か？」

「何かありました…か？」

「……………イチカがISを纏ってる!？」

（男がISを起動してるー!!!）「……………」

こうして世界初の男性IS操縦者の存在が世界に広まった。

六話

ここでは始めましてかな？俺の名前はイチカ・ミューゼル、歳は15だ。

結論から言おう。俺がISを使えることが解って一年半、この一年半は地獄だった。

まず最初にIS学園への入学が強制的に決まった(束さんが世界中政府を脅して入学させるのは一年六ヶ月後の四月にさせた)。まだ入学するだけならな！二年生になったときに整備科が選べないってどういうことだよ？しかも家にいてもマスコミやら研究者やら女尊男卑権利団体が来てそのたび義母さんや秋姐が追い払ってくれた。さらには入学しても遅れをとらないように義母さん、クロエさんからISに関することを教わり、秋姐とマドカは俺を鍛えてくれた。かなりハードだったが。

束さんとユルセンは俺のゴーストドライバー(外すことができないなんて初めて知った。)とゼロの眼魂(束さん命名)を預かっていたが三日でゴーストドライバーだけが返ってきた。俺が何をしたか聞くと束さんが「イツ君のゴーストドライバーにISと同じ機能を付けてみたよ。それからスーちゃん話し合った結果イツ君をFRCのテストパイロットしようってことになったからそこはよろしく。あつ、そうそうゆー君が居てくれて助かったよ。ゆー君が居なかったら付けられなかったからね。」だそうだ。

そして義母さんがいきなり「あつ、そうだイチカこれから移動が不便になると思うからバイクの免許でもとってきたら？」って言われたから言ってみれば一週間で取れた。(義母さんがFRCにバイクの教官を呼んだ。)うん？バイク？束さんが作ってた。(マシンゴーストライカーを白くしたもの)まー、いろんな事があったわけで今俺はIS学園の一年一組の教室にいる。…一つ言わせてくれ。視線が痛い！それになんて篠ノ之がいるんだよ!?!はく、なんかめんどくさい事になりそうだな…。とりあえず先生が来るから静かに待っておくか。

すると教室のドアが開いて一人の女性が入ってきた。

「皆さん、おはようございます！このクラスの副担任の山田真耶です。これからよろしく願います。」

「「「「「「「……。」」」」」」」

「…(泣)」

「(おいっ!?挨拶位しろよ!あつ、ヤバイ先生が泣きそうになつてる。)よろしく願います。」

「!よろしく願います!では、一人づつ自己紹介をお願いしますですね。」

「(なんとか泣かせずにすんだな。)」

「(あれは流石にびびった。)」

「(どうかイチカ。)」

「(うん?)」

「(あれつてさ、なんか中学生が背伸びして大人っぽく見せようとしてるみたいだな。)」

「(:多分、先生に言ったら絶対泣くだろ。)」

「(だなく。おつとそろそろ順番が来るぞ。)」

「(そうだな。)」

「それでは、次イチカ・ミューゼル君お願いします。」

「わかりました。イチカ・ミューゼルです。趣味は読書と料理。将来はISの開発をしていきたいと思えます。これからよろしく願います。」

「「「「「「「き……。」「」」」」」」

「きゃ。(きゃ。)」

「「「「「「「きゃー!!!」」」」」」

「っ!？」

「(イチカ!耳が痛い!)」

「(こつちも痛いんだよ!)」

「騒がしい!」

騒ぎを沈めた声の主を見てみるとそこには織斑千冬がいた。

「このクラスの担任の織斑千冬だ。いいか、ここでは私がルールだ!返事は全てyesかハイで答えろ!」

「キヤー!!千冬様よ!」

「今年からこの教師になるっていう噂は本当だったのね!」

「は、ここでもか。もしかしてこんなしかないのか?」

「キヤー!もつと罵ってー!」

「そしてたまには甘やかしてー!」

「ハアハア、あつ、漏れて来ちゃった。」

「(最後のやつヤバイな〜!)」

「!? (そんなことより、なんでこいつがここにいるんだ!)」

「それで? 貴様がこの騒ぎの原因か?」

「勘違いしないでもらいますか? 俺はただ自己紹介をしただけです。」

「ふん。で? なんだあの自己紹介は?」

「ごくごく普通の自己紹介だと思いますが?」

「貴様の将来はIS操縦者と決まっています。既に決定次項だ。」

「貴女は馬鹿ですか? 将来は自分で決めるものですよ。誰かに指図されて決まるものではありません。」

「ほう…。口答えするか。」

「口答えも何も事実を行ったままでです。俺的には貴女の自己紹介のほうがどうかと思いますけど?」

「さつき私が行ったとおりここでは私がルールだ。」

「下らないですね。」

「何?」

「貴女がしようとしているのは教育じゃない。単に力で支配しようとしているだけだ。」

「言いたいことはそれだけか?」

「ええ。」

ブオン! 千冬は持っていた出席簿でイチカを叩いた。が、当たりはしなかった。

「…何故防いだ?」

「攻撃されれば防ぎますよ。」

その時チャイムが鳴ったら。

「…時間だ。次の授業に遅れるな。」

「言われなくとも。」

「ふん。」

千冬は教室から出ていった。

「は、謝罪も無しか。皆さん時間を取ってしまったてすいませんでした。こんな俺ですがどうかよろしくお願いします。」

イチカは深々とお辞儀をし自分の席に戻った。

「(よくあそこまで言えたな。)」

「(アイツを見た瞬間怒りがこみ上げてきた。)」

「ね、ね、イチチー。」

「?イチチーって俺のことで良いのか?」

「そうだよ。イチカ・ミューゼルだからイチチーだよ。もしかして気に入らなかつた?」

「いや、あだ名を付けられたのは初めてだったから嬉しいんだ。だからそのままイチチーで構わない。布仏さんであってるか?」

「そうだよ。布仏本音って言うんだ。布仏でも本音でものほほんでもいいよ。」

「じゃあ、のほほんさんで。これからよろしく。」

「(こちらこそ。)」

「(なんか、まったりした子だな。)」

「おい。」

篠ノ之が呼び掛けているが二人は気にせず話続けている。

「ところで、のほほんさんは平気なのか?」

「何が?」

「さっきのこと。」

「あれは流石に織斑せんせーが悪いよ。だからイチチーは悪くないよ。」

「ありがとう。」

「(理解者がいて良かったな。)」

「(ああ。)」

「おいー」

「のほほんさんちよつとごめん。」

「ほえ〜?」

「はく、…何の用だ?今取り込み中なんだが?」

「着いてこい。」

「断る。着いていく理由がない。それに何故初対面のやつから命令さらなければならぬ?」

「初対面?ふざけるな!私達は幼馴染みだろうが!」

「イツチーそうなの〜?」

「いや。俺の幼馴染みは三人いるがこいつとは紛れもない初対面だ。」

「ふざけるのもいい加減にしろ!」

「(全く変わらないなこいつは。)別にふざけていない。そしてお前は幼馴染みと主張するだけなら二度と来るな。」

「主張ではない!事」

チャイムが鳴り山田先生が入ってきた。

「さっさと戻れ。」

「くっ!」

そして篠ノ之は自分の席に戻った。

「ほら、のほほんさんも。」

「うん、解った〜。」

「(はく、めんどくさい事になった。)」

「(ドンマイだな〜。)」

これからイチカの苦勞する学園生活が始まる。

七話

イチカがIS学園に入学する数週間前の事、千冬はある施設に訪れた。すると、施設の前に一人の女性が立っていた。

「…待っていたぞ。千冬。」

「久しぶりだな。黒姫。暮桜の開発以来だな。」

「…束もいたがな。無駄話は終わりだ、さっさと入れ。」

「わかってる。」

千冬は 応接室に連れてこられた。

「…それで？一体何のようだ？」

「実は政府の指示で男性操縦者に専用機を作ってもらいたい。」

「…何時までに？」

「入学までにだ。」

「…却下だ。その入学までに仕上げなければならない機体がある。」

「その機体を放棄して作れば良いだろうが！」

「…お前馬鹿か？作っているのは日本の代表候補生の機体だ。」

「代表候補生？ああ、更識の出来損ないか。尚更放棄して作るべきだ。」

「…ふーん、代表候補生を出来損ないか。」

「事実だろ？現に世間から既にそう呼ばれてる。」

「…あの子は死に物狂いの努力で代表候補生の座についているぞ。」

「だが、姉と比べれば出来損ないに違いはない。一夏と違ってな。」

「（…どの口が言っているんだ？束から聞いた話だとイチカ君も千冬と比べられ姉と思っていないと言っていたぞ？）…兎に角、作るならば1ヶ月くらい後だ。そして、作ると仮定して機体の資料があるだろうか？」

「（1ヶ月だと!?そんなに待てるものか!）あ、ああ。今持ってきている。」

「見せる。」

「な、何故だ!？」

「何故って、どうせお前の事だ。ここ以外に作らせる気無いだろ。そもそも日本にはPRCがある。」

「ふん!」そんな無名な所に任せるより暮桜を作った倉持に任せの方が断然いい!」だろ?」な、何故わかる!?!」

「…お前とは長い付き合いだ。それと言っておくがPRCは今IS業界で世界一だ。」

「そんな事はどうでもいい!何故見せなければならぬ!」

「…偉くなったものだな。」

「何?」

「…お前は一体何がしたいんだ?代表候補生の機体を放棄して専用機を作れ?あの子を出来損ない扱い?作らせようとしているのに資料を見せない?本当に何をしたいんだ?」

「……(くっ!ここで何とか主導権を握らなければ!…仕方ない一度見せて読んでいる最中に気絶させて勝手に話を進めればいいか。)ああ、わかった。これが機体の資料だ。」

「…やつと渡したか。(…どうせ読んでいる最中に気絶させようとするだろうがな。)」

黒姫は千冬から持ってきていた資料を渡され読み始めた。

「(フフ、油断したな黒姫!)」

千冬は資料を読んでいる黒姫に殴りかかった。が簡単に止められた。

「!?!」

「…邪魔をするな。静かに座っている。」

そして、黒姫が読み終わり黒姫が千冬に言い放った。

「…正気の沙汰では無いな。」

「何?これの何処が正気の沙汰では無いんだ!」

「…なら、教えてやる。まず武装が近接ブレード1本のみ、更に機体の機動力を極限までに上げるために装甲は無いに等しい、しかもシールドエネルギーは100しか無い。おまけにセカンドシフトもしていないのに単一能力で零落白夜。初心者が扱う様な機体ではない。

…まるで暮桜の後継機だな。」

「うるさい！仕事を持ってきているんだ代表候補生の機体などさつさと放棄してこれを作れ！」

「…お前は何か勘違いしているな。」

「何？」

「…お前は仕事を持ってきている訳では無い。ここに持つてござるを得ないだけだろ。」

「……。」

「…凶星か。兎に角お前からの仕事を受ける訳にはいかない。さあ、用は終わった筈ださつさと帰れ。」

「ふざけるな！貴様は私に黙って従えばいい！」

千冬は黒姫に再び殴りかかった。

「…はあ。」

黒姫は溜め息を吐きわざと千冬からの攻撃を受けた。

「な!？」

「…これで正当防衛だ。」

黒姫は千冬にボディブローを喰らわせた。

「!？」

千冬は声も出ずに気絶してしまった。

「…これがブリュンヒルデと騒がれている今の千冬か。まだ高校時代のほうが10倍ました。」

黒姫は千冬を肩に担いで応接室を出て行った。

八話

「ふうー。(…束さんからの課題でISを一人で考えてはいるが中々難しいな。本当にあの人は凄いな一人で計画して開発までしている。…あの人が天才ならこっちは努力で追い越してみせる。)」

「少しよろしいでしょうか?」

イチカが新に決意していると一人の少女が話しかけてきた。

「君は確かイギリスの代表候補生の…。」

「セシリア・オルコットですわ。以後お見知り置きを。」

「それでオルコットさんは俺に何か用があるのか?」

「いえ、世界初の男性操縦者がどの様な方か気になりましたして声をかけたのですわ。」

「なるほど、それで代表候補生から見て俺はどういう風に見えたんだ?」

「一言で言えば面白い方だと。」

「…と言うと?」

「あのブリュンヒルデにあそこまで言えるのですから面白い方以外に見つかりませんわ。」

「…それは褒めているのか?」

「ええ、今まで貴方のような男性は私が知る限りでは一人しか知りませんので。ところでISの事で何か解らない事はありますか? あったなら手伝おうと思うのですが。」

「いや、大丈夫だ。知り合いに教えてもらって何とかなってる。」

「そうですか?では何かあれば私を頼ってください。」

「ああ、そうさせてもらう。」

「そろそろ時間なので後程。」

そう言うときセシリアは一礼し自分の席に戻っていった。

(あのタイプの女子は初めて見たな。)

(確かに今時淑女なんて聞いたことも無いからな。)

(それよりさつきからモツプテールが睨んでるぞ。)

(モツプテールって誰だよ?)

(篠ノ之箒ってやつだ。)

(ああ、なるほど。)

「何時まで立っている！早く席に着け！」

千冬の一声で生徒全員が席に着いた。

「さて、授業を始める前にクラス代表を決める。推薦、自薦は問わない誰かいないか？」

「はい！ミューゼル君を推薦します！」

「なら私も！」

(なくイチカゝこのままだとお前がクラス代表になるぞ。)

(：俺からすれば今更だけどな。)

「他にいないか？(と言うよりも他に挙げるな！このまま行けば一夏の格好いい姿が見れるからな。)」

(：あれつてさゝ、威圧してるよなく。)

(視線だけで人が殺せるならあれでどれだけ殺せるんだ？)

「はい、私はクラス代表に立候補しますわ。」

「別に構わないがどうやって決めるんだ？(チツ小娘め余計なことを。)」

「ミューゼルさんは何かありませんか？」

「そうだな…。模擬戦はどうだろう？」

「模擬戦だと？」

「ええ、ちょうど俺がPRCのテストパイロットでオルコットさんがイギリスの代表候補生、模擬戦で決めるのが一番良いと思ったので。」

「なるほど。(つまり一夏は私に格好いい姿を直ぐに見せないんだな！)オルコットもそれで良いな？」

「ええ、構いませんわ。」

「では、模擬戦は一週間後だ！」

そして放課後

(イチカゝ、帰ろうぜ。)

(そうだな。)

「ミューゼル君はいますか？」

「?どうしたんですか山田先生?」

「ミューゼル君にこれを渡しに来ました。」

山田先生はイチカに一枚のカードを渡した。

「何ですかこれ?」

「寮の鍵です。」

「:政府から一週間は自宅通学と聞いたんですが。それに荷物もありませんし。」

「安全を考慮して今日から寮に入ってもらうことになったんです。荷物は:。」

「私が持ってきた。荷物は着替えと携帯の充電器だけで良いだろ。」

「(:わー懐かしい鞆だー):何ですかこれ?」

「貴様の荷物だ。私から持ってきたんだありがたいかと思え。」

「:山田先生、一度家に電話していいですか?」

「?構いませんよ。」

♪♪♪♪

『どうしたんですか?イチカさん?』

「クロエさん今日家に織斑先生来ましたか?」

『?今日は誰も来ていませんよ。』

「そうですね、ありがとうございます。」

『あまり道草食わずに帰ってきてくださいね。』

「わかりました。それでは。はく。」

「どうしたんですか?」

「あー、山田先生。家に帰ります。」

「はい?どういう事ですか?」

「:織斑先生が持っているのは俺の荷物じゃありません。なので帰ります。」

「貴様は何を言っている?貴様の荷物はここにあるだろ。」

「:今家にいる人に電話したところ織斑先生おるか誰も家に来ていないそうです。それにその荷物は俺のではないので。」

そう言うといちは教室を出ていった。

九話

「……ここは何処だ？」

「何処だって良いじゃねーか。」

イチカが見知らぬ場所に立っているといきなり声をかけられ振り向くと『イチカ』がいた。

「ッ!？」

「ククッお前は誰だ!?! って顔をしてんな。んな事どうでも良いんだよ!。」

『イチカ』はゴーストドライバーを出現させ眼魂を取り出しセツトした。

「アーイ! バツチリミナー! バツチリミナー! バツチリミナー!」

「変身!!」

「開眼! オレ! レツツゴ! 覚悟! ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!」

「なっ!？」

「何で俺がこの姿をしているか、だろ? それよりてめえも変身したらどうだ?」

(…俺と同じ顔といいゴーストドライバーと眼魂といい何なんだこいつ?)

イチカもゴーストドライバーを出現させ眼魂を取り出しセツトした。

「アーイ! バツチリミナー! バツチリミナー! バツチリミナー!」

「…変身。」

「開眼! オレ! レツツゴ! 覚悟! ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!」

「さあー始めようぜ!」

「!」

『イチカ』はそう言うのとイチカに斬りかかったがガードした。

「まっ、これくらいガード出来ないとな!」

「お前は誰だ。何故ゴーストドライバーと眼魂を持っていて俺と同じ顔なんだ!」

「はっ! 戦いで話が出るなんて随分余裕があるじゃねえかよっ

！」

「くっ！（ここは距離を置いてエジソンになるか。）」

イチカは『イチカ』から離れてエジソンの眼魂を取り出しセットした。

「ア―イ―バツチリミナー！開眼！エジソン！」

エレキ！ヒラメキ！発明王！」

「くらえ！」

イチカはガンガンセイバーをガンモードにして『イチカ』に向かって射撃した。

「無駄だ！」

『イチカ』は射たれた弾を全て斬った。

「!？」

「オイオイ、一々驚くなよ。」

「チッ！なら！」

「ダイカイガン！ガンガンミナー！ガンガンミナー！」

オメガシヨット！」

ガンガンセイバーから膨大なエネルギーが放たれたが『イチカ』は青色の眼魂を取り出しセットした。

「ア―イ―バツチリミナー！開眼！ニユートン！」

リングが落下！引き寄せまっかー！」

「ハア―！」

『イチカ』によってエネルギーが押し返されイチカに当たった。

「ガア!？」

「ククツ自分の技を喰らった感想はどうだ？」

「…」

「チッ！黙るか。まっ、仕方ないか、所詮は織斑千冬の弟だもんな！」

ピクツ「…」

「（もう少しか…。）動かないなら仕方ないな、お前と代わってアイツを殺すか。何て言ったけな―アイツ？確か…凰鈴音だっけ？アイツどんな顔するだろうな好きな奴から殺されたらな！」

「…けるな。」

「おー立った立った。で？何だつて？」

「ふざけるな！」

イチカは叫ぶと同時に『イチカ』に向かって射撃し『イチカ』に当たった。

「!? (俺に攻撃を当てただと？まさかコイツ…無心で攻撃したのか!?)」

「何故お前が俺と同じ顔でゴーストドライバーや俺の知らない眼魂を持つているかなんてもうどうでもいい！ここでお前に勝つて元の世界に戻ってみせる！」

「(何故だ！何故コイツは人を恨まない？怒りはしても恨むことはない？そしてコイツは何故折れない！)」

「(…多分コイツは俺の心や考えを読んでいる筈だ。どうすれば良い?)」

イチカと『イチカ』がそれぞれ考え事していると周りの風景が崩れてきた。

「!?」

「チッ！こんなところで時間切れか！オイ！この勝負はお預けだ！(やはりあれくらの怒りじゃ意味がない！アイツにどうにかして恨みの感情を産み出さなければ！)」

「なっ!?逃げるのか！」

「逃げる？バカ言うな逃がしてやるんだよ！」

そして完全に風景が崩れイチカの意識が途絶えた。

「おーい、イチカ、起きろ。」

「ハッ!?ツ〜!?」

イチカは勢い良く起きユルセンと頭がぶつかりユルセンが吹っ飛んだ。

「痛つて。てかやつと起きたか。てかお前スゴく魘されていたぞ。」

「…夢を見た。」

「どんな夢だったんだ？」

「…全く思い出せない。」

「ふうん。まー、とりあえず先に行ってるぞ〜。」

「ああ。(さて、着替えて俺も向かうか。) ツ！」

イチカはベットから着替えるために上を脱ぐと腹部に痛みを感じた。

「アザ?・何でこんなところに?」

イチカは不思議に思ったが気にせず着替え部屋を出ていき食事を済ませてIS学園に向かった。

十話

「いいな！私が勝つたら貴様は剣道部に入れ！」

「…何故そうなる。」

イチカ・ミューゼルだ。今俺は篠ノ之に強制連行され剣道部の道場に来ている。俺はやる事があると云って断つたがそれを無視して連行された。何故コイツは人の話を聞かないんだ？更には、いきなり剣道部の入れと言ってきた、俺は興味が無いと言ったら勝負を仕掛けてきた。意味がわからん…。

「話を聞いていたか？俺は剣道に興味がない。」

「ならば私と勝負しろ！そして剣道部に入れ！」

「(俺が負けることは確定か…) ならば俺が勝てば俺に関わるな。」

「良いから準備しろ！」

「…コイツ本当に何様だよ？」

(イチカく、頑張れよ。)

(ああ。)

「おい一夏！貴様ふざけているのか！」

「何がだ？」

「何故防具を着けない！」

「はあく。お前バカか？」

「何だと!？」

「元々IS学園は女子校だ。女子のサイズが俺に入ると思っか？」

「…。」

「そろそろ始めるぞ。すみませんが誰か審判をお願いできますか？」

「では私が。」

「ならお願いします。それと俺がやるのは剣道では無いので。」

「わかりました。篠ノ之さん始めて宜しいでしょうか？」

「ええ。お願いします。」

「それでは…始め！」

「めーん!!!」

「…。」

篠ノ之は勢い良く打ち込んできたがイチカはそれを難なく回避した。それが4回ほど続くといきなり篠ノ之が。

「貴様！ 剣道をする気はあるのか!？」

「言った筈だ俺がやるのは剣道ではないと。」

「ふぎけるな！ 貴様は剣道を黙ってやればいい！」

（もはや命令だな。）

（もう終わらせれば?）

（だな。）

「今度は避けるなよ！」

「ああ。（避けはしないさ。避けはな。）」

「（ようやく剣道をする気になったか。）めーん!!」

バシツ!!

篠ノ之はもう一度打ち込んできたがイチカは竹刀で篠ノ之の竹刀を叩き落とした。

「!？」

「面。」

「面あり！ 勝者イチカ・ミューゼル！」

「ありがとうございます。」

「今の試合は無効だ！」

イチカが礼をし退場しようとする。篠ノ之が審判をした女子に異議を申し立てていた。

「? 篠ノ之さん何故今の試合が無効なのですか？」

「貴女は私が竹刀を落とされたのに試合を止めずに続けたからでしょう！」

「なら試合を落とした貴女が反則を1回貰いますよ? それにミューゼル君はやるのは剣道では無いと言っていた筈ですよ? この時点で剣道のルールは適用されません。それと剣道に興味がない人を無理に剣道部に入れるのは賛成できませんね。」

（なくイチカ、モップテールって何様なんだ?）

（さあな?）

「私は篠ノ之束の妹ですよ！」

(うわー、アイツ言いやがった。)

(まー、アイツは束さんに縁を切られた事を知らないからな。周りが騒いでいる中あの人はどう対応するかだ…。)

「それで？」

「え？」

「篠ノ之博士の妹だから何でしょうか？もしかして篠ノ之博士の妹だって言えば言うこと聞くとおもうのですか？もしそうなら随分嘗められたものですね。凄いのには篠ノ之博士であって貴女ではありません。」

「貴女では話になりません！」

「そうですか。」

「なので眠っておいてください！」

篠ノ之は少女に竹刀を降り下ろした。

「オイ!？」

「これで正当防衛ですね。」

「なっ!？」

少女は篠ノ之にボディーパーローを喰らわせた。

「さて、保健室に運ぶとしますか。」

(((((何で平気なの!?!))))))

「あ、そうだ、ミューゼル君。」

「何でしょうか？」

「時間がある時で良いから手合わせをお願いしますか？」

「わかりました。えーと…。」

「黒姫、黒姫刹那です。二年生です。」

「知ってると思いますがイチカ・ミューゼルです。では再来週くらいに。」

「ええ、では気を付けて。」

「ありがとうございます。」

イチカとユルセンは道場を出て職員室に寮の鍵を受け取りに向かった。

「はい、これが寮の鍵になります。」

「ありがとうございます。山田先生。」

「いえいえ、でも良かったんですか？」

「？何がですか？」

「来週には一人部屋が出来るのに今日から住んで良かったんですか？」

「ああ、その事ですか。今日から住まないと織斑先生が面倒そうなので…。」

「あー、なるほど。」

「では寮に向かいますね。」

「道草したらいけませんよ。」

「わかりました。ではまた明日。」

イチカは職員室を出て寮に向かった。

十一話

「……か。」

イチカは職員室を出て直ぐに寮に向かい今は部屋の前にいる。

(ちゃんとノックしろよく。)

(わかってる。)

コンコンコン。「相部屋になった者だ、今入っても問題ないか？」

「どうぞ。」

イチカが入ると水色の髪と真紅の眼をした少女がいた。

「俺は「知ってる、イチカ・ミューゼル」知っていても自己紹介は大
事だろ？」

「確かに自己紹介は大事だね。私は更識簪、これからよろしく。」

「ああ、よろしく、更し「お姉ちゃん」と間違えるから名前で良い。」簪
さん。それよりお姉ちゃんって生徒会長の？」

「うん。それにロシアの国家代表。」

「そうか…、なあ、簪さん1つ聞いて良いか？」

「簪で良い、それでどうしたの？」

「なら俺もイチカで良い。…今まで周りに姉と比べられた事ってあ
るか？あつ、別に答えたく無かったら答えなくていい。」

(イチカ…。)

「…何回もあったよ、よく周りから更識の恥とか言われたことも
あったし、努力するだけ無駄だって言われたこともあった。それでも
諦めずに努力し続けた、お姉ちゃんに追い付くために。」

「…。」

「でもある日お姉ちゃんに言われたんだ。『簪ちゃんの内している努
力は無意味よ。私が出来る事をして意味がない。』その時、私は泣き
そうになった、私の全てを否定されたから。そしたらお姉ちゃんが私
を抱き締めて『簪ちゃんがすべきなのは私に追い付く為の努力じゃな
い、私を追い越す為の努力。簪ちゃんは簪ちゃんしか出来ない事をし
なさい。大丈夫、簪ちゃんにはちゃんと味方がいるから。』つて。」

「…良いお姉さんだな。」

「うん、私の自慢のお姉ちゃん。イチカはお姉さんか、お兄さんがいるの?」

「…いた…が正しいな。」

「?どういうこと?」

「あー、これは他言無用で頼む。」

「わかった。」

「…簪は織斑の出来損ないや織斑の恥って聞いたことあるか?」

「うん、聞いたことある。でも確か織斑…一夏だっけ?ドイツで亡くなっただって聞いたけど…。」

「世間ではそうなってるな。」

「世間では?」

「…実を言うと俺が織斑一夏なんだ。」

そう言うといチカは自分に起こったこと(死んだことや天照、ゴーストは伏せて)話した。

「そうだったんだ…。でも良かったね今の家族で。」

「ああ。」

「でも…やっぱり復讐とか考えてるの?」

「復讐?まさか。俺は初めから復讐なんて考えていない。復讐をやれば後には何も残らないからな。」

「そっか、それを聞いて安心した。」

(姉によって全く逆だなく。)

(そうだな。)「全く羨ましいな自慢できる姉がいて。」

「あ、でもお姉ちゃんデスクワークをサボって虚さんがよく愚痴りに来るからそれが無くなればもっと好きになれるな。」

「なんか…その虚さんって言う人が可哀想に思えてきた。」

コンコンコン。イチカ達が話していると誰かがノックをした。

「…簪様、虚です。失礼ながら、その…。」

「噂をすれば…イチカいれても良い?」

「…ああ。」

「虚さん入って良いですよ。」

「失礼します。?そちらの方は…」

「初めましてイチカ・ミューゼルです。」

「あ、初めまして布仏虚です。」

「布仏？もしかしての…本音のお姉さんですか？」

「はい。そう言えば昨日本音が言っていましたねイッチーと友達になつたと。貴方でしたか。」

「ええ、まあ。」

「ところで虚さんやっぱり今日も？」

「ええ…。」

♪♪♪

いきなり音楽が鳴り出した。

「あ、すみません、私ですね。」

「構いません。」

「出ても大丈夫ですよ。」

「ありがとうございます、はい、虚です。えっ？あの量をお嬢様が！一人で!?こんな短時間に!?他に書類は無いか!?ちよつと待っていてください今そつちに向かいますから！」

「どうしたんですか？虚さん？」

「かなり慌てていましたが…。」

「お嬢様が1週間分の仕事を終わらせたそうです。なので今から生徒会室に向かいます。」

「え？」

「では失礼します。」

「あ、はい。」

そう言う虚は 部屋を出ていった。

時間を戻してその生徒会長は。

(流石にあの量は無理ね。デスクワークが苦手な私では尚更。) 仕事から逃げていた。これでよく生徒会長が務まるものだ。

(さて、これからどうやって時間を潰そうかしら？そうだと噂の男の子に挨拶でもしようかしら♪となると第一印象は大事よね…はっ！ビキニエプロンなら！あれ？でも確か相部屋って簪ちゃんよね？

…止めてきましょう、簪ちゃんに変態だと思われたら絶対立ち直れないわね。」

余計なことを考えていると脳内に声が聞こえた。

『あ、でもお姉ちゃんデスクワークをサボって虚さんがよく愚痴りに来るからそれが無くなればもつと好きになれるな。』

「フッフ。これはやるしか無いじゃない！簪ちゃんの為ならデスクワークなんか一瞬で終わらせてやる！」

そう言うで一瞬で生徒会室に行き、仕事を始めた。

「いくぞデスクワークよ、書類の貯蔵は十分か？」

最強のシスコンここにあり！

十二話

「オルコットの専用機はBT兵器を搭載した一対多を目的とした中距離型か、マドカのサイレントゼルフィスと似たような機体と言うことは調べて解ったからロビンかエジソンで遠距離戦…。もしくはムサシで距離を詰めて接近戦…。いや、どちらも運が良く引き分けだな。」はる。

（イチカ、察に着いたぞ。）

（うん？あ、本当だ。）

（考え事か？）

（ああ、クラス代表決定戦をどう闘うかで考えてる。）

（勝てるのか？）

（運が良く引き分けだな。）

（えらく弱気だな？何で？）

（多分オルコットは何か隠してる。）

（つまり今まで本気で闘って無いつて事か？）

（いや、本気で闘ってるけど奥の手を出していないって感じだな。だから過去の映像なんかは役に立たない可能性が高い。）

（ふくん。ま、とりあえず入ろうぜ。）

（そうだな。）

イチカとユルセンは自室に入ると簪が何か作業をしていた。

「あ、お帰り。」

「ただいま。何してるんだ？」

「プラモデル作ってる。」

「ネットで注文したのか？」

「うんうん、さっきお姉ちゃんが来て『ありがとう、簪ちゃん。簪ちゃんのお陰でデスクワークをするのが楽しくなったの、お礼に簪ちゃんが欲しがってたこれをあげるわ♪』って言って貰った。」

「何をしたんだ？」

「わからない。」

「え？」

「だってお姉ちゃん昨日までデスクワークが嫌いだったから…。お陰と言われてもわからない。」

「マジか…。」

「うん。」

コン、コン「こんばんわ、山田です。ミューゼル君は居ますか？」
イチカと簪が話していると山田先生が訪ねてきた。

「どうしました？山田先生？」

「ミューゼル君にFRCの夢兎さんからお届け物です。」

「(束さんから?) ありがとうございます。って小さい！」

「私も驚きましたよ。では、確かに渡したので失礼しますね。」

「ありがとうございます。さて、開けるか。」

「イチカそれ何？」

「俺の所属している企業から送られてきた。」

「随分と小さいね。」

「ああ、それに何の連絡も『♪♪♪♪』(束さん?) はい、どうしたんですか？」

『ハローイツ君、束さんからの贈り物は届いたかい？勿論届いたよね。』

「届きましたけど何が入っているんですか？随分と小さいですけど…。」

『それは開けてからのお・た・の・し・み。あ、そう言えばイツ君I Sの設計は進んでる?』

「ええ、競技用が30、もう1つが60%くらい完成してますよ。」

『おく中々進んでるね!』

「まだまだですよ。」

『ま、楽しみに待ってるよ。じゃ、束さんは仕事に戻るね。』

「ありがとうございます。」

「企業から連絡?」

「ああ、狙ったように電話してきて驚いたけどな。」

「それしても何で黒電話?スマホ持ってたよね?」

「大切な連絡とかはこれに来るんだ。」

「へえ。：ねえイチカ、それって変形とかする？」

「よく解ったな。」

「ねえイチカ！変形させてみて！」

「あ、ああ。コルー頼めるか？」

「そう言うのと黒電話から鳥形に形を変えた。」

「キイー！」

「うおーっ！変形したーっ！」

「簪、口調が変わってるぞ。」

「あ、ごめん。」

「いや、大丈夫だ。もしかして簪って特撮やガン〇ムとか好きなのか？」

「うん。昔から好きでよくテレビとかで見てたんだ。」

「(数馬と気が合いそうだな。)なるほど。」

「ところで開けなくて良いの？」

「ああ、そうだな。」

イチカは手に収まるくらい箱を開けると中に真っ白な眼魂が入っていた。

「(何故この眼魂を見ると懐かしいと感じるんだ？もしかして俺はこの眼魂をいや、この中にあるものを知っている?)」

「イチカ、何が入ってるの？」

「これから俺に必要な物。」

「そう言うイチカは簪に真っ白な眼魂を見せた。」

「オイオイ、イチカ。見せてもいいのか？見た目ほぼ目玉だぞ(？?)」

「(多分大丈夫だ。俺の予想では…)」

「何これ!?目玉!?イチカそれよく見せて！」

「(かなり食い付く。)」

「本当に何これ!?スイッチみたいな物もあるし、下にはピンもあって、上にはプレートに2枚の翼があって顔みたいになって、プレートの下の方にBYAKUSIKIって書いてある！仮面ライダーの

変身アイテムで出てきそう！」

(まー、仮面ライダーだからな。)

(本当に食い付いたなく。そしてハイスピードでネタバレ。)

(てか、驚き方も数馬に似てるな。後、ユルセン気にしたら負けだ。)

(だなく。)

「ありがとうイチカ。お姉ちゃんからプレゼント貰った時並に興奮した。」

「どういたしまして。」

その後イチカ、ユルセン、簪は眠りに着いたがイチカだけは眠りから覚めると見たことが無い場所にいた。

「ここは……」

「お久し振りです。イチカ様」

声が出た方を見ると白い鎧を纏った1人の女性がいた。

「もしかして白騎士か？」

「もしかしなくても白騎士です。」

「でも何で白騎士が……いや、そう言う事か。」

「解りましたか？」

「ああ、白式はISで白騎士のコアが使われている。そしてISには意思があり、ゼロの眼魂と共鳴し眼魂になった。であってるか？」

「完璧です。イチカ様。」

「それで何故俺を呼んだんだ？」

「イチカ様に聞きたい事があります。」

「聞きたい事？」

「はい、貴方は何の為に力を求めますか？そして貴方が目指す物は何ですか？」

「何の為に力を求めるかと目指す物……か、1つ目はある人の笑顔を守るためだな。」

「ある人の笑顔を守るため？」

「ああ、こんな俺を好きになってくれた人の笑顔は眩しい位に綺麗なんだ、だからかその笑顔を守るために俺は力を求める。それと目指す物は場所なのか？それとも目標か？」

「どちらともです。」

「ならどっちも決まってる。目指す場所は大空の先にある宇宙だ。そして目指す目標は俺を好きになってくれた人を幸せにする事だ！」

「なるほど。ならば私達は貴方の剣となり、盾となり、翼となって貴方を支えましょう！」

「私達？」

「ええ、これから宜しくお願いします。My Master！」

「これからよろしくね！マスター！」

「君は…」

白いワンピースを着た少女がいつの間にか白騎士の隣にいた。

「初めましてマスター、私は白式よろしくね♪」

「ああ、これからよろしく頼む！白騎士、白式！」

「はい！（うん！）」

そしてイチカは現実世界へと戻っていった。

「ねえ、お姉ちゃん。」

「どうしました？」

「なんでマスターにあんな質問したの？私達がマスターを支えるって私達で決めたのに。」

「それは…」

「それは？」

「秘密です♪」

十三話

「言っている意味が解りませんので説明を願います。それと何故篠之が居るんですか？」

イチカは経験したことが無いほどに目の前の二人にイライラしていた。その二人は。

「私が居て当然だろ？なんせ私とお前は幼馴染みだからな。それと私の事は箒と呼べー！」

「説明も何も貴様は試合が出来ないといっている。篠ノ之は私が許可した。」

「だから何故試合が出来ないか聞いているんです。後、篠ノ之、友達でも無いのに何故名前と呼ばなければならぬ？それに俺に関わるなどと言った筈だ。」

「あんなの無効に決まっているだろ？それと一夏お前は剣道部に入るべきだ！」

「ミューゼル、貴様の専用機が届いていない。どう考えても試合が出来るわけ無いだろ。」

「…は？」

「織斑先生、何を言っているんですか？ミューゼル君は専用機を既に持っていますよ？それに勝手に許可しないでください。関係者以外立ち入り禁止ですよ。」

「私は一夏の幼馴染みです。なので私は関係者です。」

「ミューゼルにはそんなガラクタよりも政府からの高性能機が届きますので。」

(なんかもう、妖怪婚期逃しとモップテールは自己中心的な考えがなく。)

(私に妖怪婚期逃しが搭乗したと言う事実は黒歴史でしかないです！)

(白騎士大丈夫か？)

(あーっ！こんな不名誉な塊に搭乗されたなんて不愉快なんじゃー！母様には感謝しているが妖怪婚期逃しをどうして搭乗させたんだ！もっと良い人が居た筈だろうが！オータム様とか！スコール様とか！)

(お姉ちゃん落ち着いて!?キャラが崩壊してるよ!?それに妖怪婚期逃しはお姉ちゃんにもう乗る事は無いから落ち着いて！)

(∴カオスだな。)
「とりあえず山田先生、準備は出来ていますか？」

「ええ、何時でもバッチリです！」

「なら、オルコットを待たせて居るので今すぐ出撃します！」

「わかりました！」

「おい！勝手に話を進めるな！」

「それは此方の台詞だ！(それは此方の台詞です！)」

「アリーナの使用時間があるし、何よりもオルコットを待たせてんだぞー!」

「それに初めて使う機体よりも使いなれた機体の方が扱いやすいでしよー! ミューゼル君は至急準備してください!」

「わかりました!」

イチカはゴーストドライバーを出現させ白い眼魂を取り出した。

(いくぞ、白騎士! 白式! 愚痴なら夜に幾らでも聞いてやる!)

(了解しましたMaster! 絶対ですよ!)

(わかったよマスター!)

イチカは白い眼魂をゴーストドライバーにセットしゴーストドライバーから白いパーカーゴーストが出てきた。

「アーン! バッチリミナー! バッチリミナー!」

「変身!」

「開眼! 白式! 白き翼! 掴むぜ夢! 目指すは空!」

「イチカ・ミューゼル、ゴースト出ます!」

「おい! ミューゼル勝手は許さんぞ!」

「勝手なのは織斑先生です!」

試合前に一悶着あったがイチカは漸くオルコットと対峙した。

「ずいぶん時間がかかった様ですけど、どうかなさいましたの？」

「…すまない、色々あった。」

「…なるほど、何があったかは聞かないでおきますわ。」

「助かる。だが手加減はしない。」

「此方もですわ。」

二人は共に武装を展開した。イチカはガンガンセイバーと白銀の盾をオルコットはライフルを構えたが。

『ミューゼル、オルコット試合は中止だ。』

千冬が邪魔をした。イチカとオルコットは千冬に向かって言いたいことを言った。

「黙ってろ。」

「耳障りですわ。」

「試合の邪魔するなら失せろ。(試合の邪魔をしないで頂けますか?)」

『え??.』

「な!?!」

「さて、邪魔物は放っておいて…始めるぞ。」

「ええ、全身全霊を持って相手になりますわ！」

オルコットはビットを四機展開し、ビットを操りながらライフルと同時に射撃してきた。イチカは持っていた盾でガードし、瞬時に距離を詰めオルコットに斬りかかったがいつの間にか展開されていたナイフのような近接ブレードで防がれていた。

「随分とI Sの操縦に馴れていますのね。」

「教えてくれた人がかなりのスパルタでな、何度か走馬灯が見えた程だ！」

(Master! 後ろに注意してください!)

(了解だ!)

イチカはオルコットから離れビットからの射撃を避け、ガンガンセイバーをガンモードにしビットの一機に向かって撃ち破壊することに成功した。しかしオルコットは驚きもせずライフルでイチカを撃ったがイチカは難なく回避した…

「がっ!？」

…筈だった。

「どうでしたか？」

「…驚いたな。レーザーが曲がるとはな。」

「案外貴方もやれば出来るのでは？一度やってみてはどうでしょう？」

(やれば出来るものなのか?)

(Master!やってみましょう!)

(マスター、お姉ちゃん、流石に出来ないと思うよ。その前に試合だよ。)

(そうだな。オルコットに勝つにはアレしか無いな…。)

(アレ?)

(何をするんですか?)

(…見れば解る。)

イチカはガンガンセイバーをナギナタモードにし、ゴーストドライブバーに翳した。

「ダイカイガン！ガンガンミナー！ガンガンミナー！」

「…させませんわ！」

オルコットは三機のビットとライフル、更に二機のミサイルビットを同時に操り決着を付けようとした。だがイチカも決着を付けようとゴーストドライブバーのトリガーを引きガンガンセイバーのトリガーも押した。

「ダイカイガン！白式！オメガドライブ！」

「オメガストリーム！」

（なるほど！そう言うことですか！）

（ああ！白式、限界までスピード出してくれ！）

（次の日どうなっても知らないよ？）

「はぁー!!」

「ッ！」

イチカはオルコットからの攻撃を受けながらオルコットに限界のスピードで接近し何度も斬りやがて決着が付いた。

「ブルーティアーズ、シールドエネルギーエンプティー。勝者イチカ・ミューゼル。」

「ふう、ギリギリだな。」

イチカはシールドエネルギーの残量を確認すると一割も無くあと一撃喰らっていれば負けていた。

「立てるか？」

「ええ、ありがとうございます。」

「しかし、よく高速移動しているのに当たることが出来るな。」

「それほどでも、九割は勘ですし。」

「勘…。」

「今回は負けましたが次は私が勝たせて貰いますわ。イチカさん。」

オルコットはそう言うといつの眼魂を取り出しイチカに見せた。

「！いや、次も俺が勝たせて貰う。それとこれから宜しくなセシリア。」

二人は互いに握手をし、試合は僅差でイチカの勝利に終わった。

十四話

クラス代表決定戦があった放課後、イチカとセシリアは現在アリーナで対峙していた。しかしセシリアをよく見るとイチカと色違いのドライバーをしていた。

(イチカフアイト。)

(Master頑張ってください！)

(マスター頑張つてね！)

「(ああ！さてと。)まさか俺と似たような奴が居るとは思わなかったな。」

「それは此方も同じですわ。」

「さて…そろそろ始めるか？」

「そうですね。」

二人は眼魂を取りだしスイッチを押してドライバーにセットした。

「「アイー！」」

イチカのドライバーからオレンジのライン、セシリアのドライバーからは青のラインが入ったパーカーゴーストが出て来て互いにぶつかり合っている。

「バッチリミナー！バッチリミナー！バッチリミナー！バッチリミナー！バッチリミナー！」

「バッチリミロー！バッチリミロー！バッチリミロー！バッチリミロー！」

セシリアのドライバーからはイチカとは別の待機音声が鳴っている。

「変身。」

「開眼！オレ！レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！」

「開眼！スペクター！レディゴー！覚悟！ド・キ・ド・キ・ゴースト！」

二人は変身と同時に武器を出現させた。イチカはガンガンセイバーに二刀流モードにし、セシリアに向かって走り出した。それを迎え撃とうとセシリアは青い銃を構えイチカに発砲した。

「…。」

しかし、イチカは止まる事は無く放たれたエネルギー弾を全て斬り裂きながら近づき、セシリアに斬りかかったが青い銃で防がれイチカはカウンターを喰らってしまった。

「くっ！なら！」

「アァー！バッチリミナー！開眼！ロビンフッド！ハロー！アロー！森で会おう！」

「はぁ！」

イチカは緑のパーカーゴーストを纏うとガンガンセイバーとコルーを連結させたアローモードでセシリアに向かって矢を十数本放った。しかし、セシリアは難なく矢を全て打ち落とした。

「うーん、流石は代表候補生だな。まさか全部打ち落とすなんて思いもなかった。」

「ありがとうございます。ですが此方としては弓を使えるのは驚きでしたわ。」

「手数を増やせば戦術も広がるからな。」

「二理ありますわね。ならば私も。」

セシリアは水色の眼魂を取りだしドライバーにセットし、トリガーを引いた。

「アーイー！バッチリミロー！開眼！ツタンカーメン！ピラミッドは三角！王家の資格！」

セシリアは水色のパーカーゴーストを纏い、青い銃が機械的なコブラと連結し鎌の様な武器になった。

「やっぱりゴーストチェンジも出来たか…。」

「ええ。それでは…覚悟！」

「！」

セシリアは斬りかかったて来たがイチカはそれを後ろに回避し、矢を放った。しかし難なく回避されてしまった。

「喰らえ！」

「!？」

イチカはガンガンセイバーをアローモードからソードモードに戻し凄まじい速さでガンガンセイバーを振った。イチカの振ったがガンガンセイバーはセシリアに届いていないがセシリアはダメージを受けた。だがそこでタイムアップとなり二人は変身を解いた。

「先程のは…衝撃波？」

「正確には斬撃波だけだな。」

「これは便利ですわね。」

「つて言ってもまだ俺の奴は未熟だから最大五メートルが限界だな。」

「未熟…と言う事は誰かに習っているのですか？」

「ああ。俺と比べ物にならないくらい強い人に。」

「どれくらいお強いのですか？」

「どれくらいって言われれば…。…ISを竹刀一本で圧倒出来るくらいだな。あ、因みに女性だから。」

「…凄いですわね。それほどの方ならば普通にモンドグロツソ等々有名になっている筈ですのに。」

「その人ISには乗ってないからな。」

「何故ですか?」

「何でもISがその人の動きに着いてこれないらしい。」

「なるほど。それより話は変わるのですけれど。」

「うん?」

「あの試合が終わってから何があったのですか?」

「あー、実は…」

イチカ回想

イチカが試合を終え戻ると千冬が何かを企んでいる顔をして仁王立ちしていた。そしてイチカにあることを言った。

「ミューゼル、貴様の機体を寄越せ。」

「は?言っている意味が分かりません。」

「織斑先生何を言ってます…」

「貴様に拒否権は無い。貴様の機体は明らかに第三世代の性能を越えている。因みに企業に許可は取っている。」

「(はく、企業が許可をすれば操縦者に直ぐに連絡が来る筈だし、何より企業の情報を簡単に渡す分けないだろ。しかも理由が第三世代の性能を越えている? 一体何を覗いていたんだ?) 山田先生、織斑先生が言っている事は本当ですか?」

「いいえ、織斑先生はただ試合を観ているだけでした。それに織斑先生、第三世代の性能を越えていると言っていましたが無処がですか？説明をお願いします。」

「…。」

「は、ミューゼル君貴方は戻って構いません。私は学園長に今日の事を報告に行きますので。」

「分かりました。では失礼します。」

回想終了

「と言う事があった。」

「織斑先生は子供ですか？」

「さあ？」

「イチカ、お疲れ。」

「ユルセン？見せていいの？」

「良いんだろ別に。」

「…まあ、ユルセンが良いなら。あ、セシリア、紹介す…セシリア？」

「イチカ、助けろ！」

「ユルセン？何が…」

イチカが声の方向を見ると笑顔でユルセンの頭を撫でているセンチアの姿があった。

「イチカさん！この可愛くて憎たらしいこの子はなんと言うのですか!?!」

「ユ、ユルセンって言う奴だ…。」

「ユルセンと言うのですか！名前も可愛いらしいですね！」

(…デジヤブだ。)

十五話

「やっと着いた。…早くイチカに会いたいな。」

我らが天使そしてこの作品のヒロイン、凰鈴音がようやくIS学園に到着した。着いて早々鈴音は周りをキョロキョロし始めた。

「…周りに人は居ないわね。よし！IS学園……」

「来た〜！」

鈴音は周りに人が居ない事を確認すると仮面ライダーフォーゼの様に叫んだ。

「二度やってみたかったのよね〜、これ。」

「その気持ち凄く分かる。」

「でしよ〜。………うん？」

鈴が振り向くとそこには簪が居た。

「…誰？」

「更識簪、日本の代表候補生。よろしく。あ、私は簪で良い。」

「あ、私は凰鈴音よ、中国の代表候補生をやっているわ。よろしく。じゃあ私の事は鈴で良いわ。じゃなくて！何時から居たの!？」

「来た〜！の時に。」

「待って!?!私が確認した時は誰も居なかったわよ!?!」

「一緒に言えると思って走ってきた。」

「(何でだろう?・簪を見てると数馬を思い出す。)そ、そうなんだ。」

「処で鈴は此処で何をしていたの?」

「実は…」

鈴は簪に今の自分の現状を話した。

「なるほどね、それじゃ私が案内しようか?」

「お願い。」

「了解。ねえ鈴。」

「何?」

「私と友達になって。」

「良いわよ。」

「ありがとう。」

鈴は簪に連れられて目的の場所に向かった。そして少し時間が過ぎた頃。

「と言う訳で!」

『ミューゼル君、クラス代表決定おめでとう!』

イチカはクラツカーの乱射と共に祝福の言葉を掛けられていた。周りを見ると既に飲み物を飲んでいる子や食べ物を選んでいる子まで居た。

「ありがとう。(それにしてもよく見たら別のクラスの子まで居るな。)」

(数からして57人は居ますね。)

(既にクラスの人数をオーバーしてるね。)

(しかしよく集まったな。)

(全員楽しみたいんじゃないか?)

(なるほどな。)

「楽しんでいますか?イチカさん?」

イチカがユルセン達と話しているとセシリアが話し掛けてきた。

「後ろの殺気の籠った視線さえ無ければな。」

「ああ、篠ノ之さんですか。」

「あの程度の殺気なら怖くもないが正直言って鬱陶しい。」

「お気の毒ですわね。」

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、イチカ・ミュール君に特別インタビューをしてみました〜!」

一人の少女がカメラを持ってイチカとセシリアに近づいて来た。

「インタビュー…ですか?」

「そうそう、あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やつてます。はいこれ名刺。」

「ありがとうございます。随分と本格的な名刺ですね。」

「全ては形からってね。じゃ、それでは、ずばりミュール君! クラス代表になった感想を!」

そう言うとボイスレコーダーをイチカに向け、無邪気な子供のよう
に瞳を輝かせている。

「そうですね…クラスの期待に応えられるように頑張ります。」

「シンプルすぎるけどまあ良いか。じゃあ、決め台詞を一つ!」

「決め台詞ですか?」

「そ、何かある? 無かったら此方で捏造するから。」

「捏造って…、なら、命…燃やすぜ! これでどうですか?」

「うん、バッチリ。捏造の必要は無いね。」

「良かった。」

「ついでにセシリアちゃんも。」

「分かりましたわ。」

「ミューゼル君の事はどう思ってるの？」

「そうですね：イチカさんは勝つべき相手であり、良き友人ですわね。」

「それはライバル宣言と言う事かな？」

「ええ、その認識であっていますわ。」

「面白くなって来た〜！それじゃ最後に専用機持ち二人で写真OK？」

「良いですよ。」

「構いませんわ。」

「はいじゃ並んで〜。それじゃ撮るよ〜。35×51÷24は〜？」

「74. 375」

「正解。つてありや？皆入ってるよ。ま、いつか。じゃ、私はこの記事を新聞にしなくちゃいけないから。じゃあね〜。」

「なんと言うか嵐みたいな人でしたわね…。」

「そうだな…。」

(だなく。)

(そうだね。)

(そうですね。)

やがてパーティーは終わり生徒達は自室に戻っていった。

そして次の日

「イチカさん、おはようございます。」

「おはよう、セシリア。処で皆は何を話しているんだ？」

「どうやら転校生が来ると噂になっているらしいですわ。」

「転校生？この時期にか？しかもIS学園への転入は入試より条件が厳しい筈だ。つまり…。」

「ええ、何でも中国の代表候補生とお聞きになりましたわ。」

「中国…か。」

「イッチーどうしたの〜？」

「うおっ!?!のほほんさん!?!何時からいたんだ？」

「うんとね〜、セツシーがイッチーに挨拶した所から〜。」

「つまり最初っからだな。」

「そうだよ。処でイッチーは何で中国に反応したの〜？」

「実は中国に再会を誓った人が居るんだ。」

「なるほどね〜。」

「再会出来ると良いですね。」

「ああ。」

三人が会話していると女子達が集まって来るとイチカにエールを送り出した。

「ミューゼル君、頑張つてね！」

「フリーパスの為にもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ。」

「…その情報、古いよ。」

「!？」

「二組も専用機持ちがクラス代表になったから。そう簡単に優勝出来ないわよ。」

教室の入口からイチカの聞き覚えのある、いや、最も聴きたかった声が聞こえイチカは驚いた。

「鈴？鈴なのか？」

腕を組み、仁王立ちしている鈴の姿があった。

「イチカ！久し振り！」

「おっと、いきなり抱き付くなよ。危ないだろ。」

「良いじゃん別に減るもんじゃないし。」

鈴はイチカに抱き付き、すぐに離れた。教室のほとんどは思考が追いつけないでいた。

「しかし久し…！鈴！避けてろ！」

「言われなくとも！」

鈴は後ろに避けると鈴がいた場所に出席簿が降り下ろされていた。

「…随分と独特な挨拶ですね。織斑先生。」

「ミューゼルは口出しするな。貴様には関係無い。そして風はさつさと自分のクラスに戻れ。」

「…言われなくても戻りますよ。…一夏を見捨てた世界最強さん。」

鈴は他の人に聞こえないように千冬に呟き自分のクラスに戻っていった。

十六話

「イチカー！お昼行きましょ！」

四時間目の授業が終わると直ぐに鈴が一組にやって来ると笑顔でイチカを昼食に誘った。

「そうだな。友達も一緒に良いか？」

「勿論♪私も友達呼んでるから♪」

「友達？随分と早いな。何時友達になったんだ？」

「昨日よ。それじゃ先に行って場所取っとくわね。」

「了解。俺も直ぐに向かう。」

鈴は一組を出て食堂に向かって行った。やはり一組のほとんどの生徒が思考が追い付けないでいた。

「て言う訳だから来るか？セシリア。」

「ええ、お言葉に甘えさせてもらいますわ。」

「イツチー、私も良い？」

「構わないぞ。」

「わーい。」

イチカはセシリア達と食堂に向かったが三人はあることに気が付

いていた。しかし三人は関わるのも面倒なのであえて気付かない振りをしていた。後ろから殺気を放ちながら付いてきているモツプテールに…。

(はく、何で毎日毎日殺気を向けられるんだ?)

(さあ?)

(本当に母様の妹かと疑いたくなります。)

(どうするのマスター?)

(放っておく。別に害があるわけじゃ無いからな。)

殺気を向けられている三人は食堂に着くと席を確保している鈴を探し始めた。

「鈴とその友達は何処に居るんだ?」

(あ、Master 彼方に鈴様が居られました。)

(うん? 何処に居…)

イチカが見た先には満面の笑みを浮かべ此方に向かって大きく手を振っている鈴とそれを必死に辞めさせようとして顔を真っ赤にしている簪の姿があった。しかし、それだけならまだ良かった。鈴と簪の席から少し離れた席に食事をしながら性能が高そうなカメラを構える生徒会長の姿があった。そう、簪の姉である更識楯無である。

「…セシリア、のほほんさん、鈴達を見付けたから行くか。」

「…そうですね。」

「…そうだね。」

イチカ達は鈴と簪の居る席に向かった。しかし簪がイチカ達と目が合うと更に顔を赤くしてしまった。

「紹介の前に何で篠ノ之が居る？」

席に座ると呼んでもいない篠ノ之が何故か平然と居座っていた。同席の許可も取らずに居座っている篠ノ之にイチカ達は呆れていた。

「居ては駄目なのか？それと篠ノ之では無く箒と呼べ！」

「何度言えば解る？何故友達でも無いのに名前と呼ばなければならぬ？」

「いい加減にしろ！私達は幼なじみでいずれ結ばれる者同士だ！それよりもこの小娘は誰なんだ!?!」

「…さつきから聞いていれば、あんた何様のつもり？イチカの幼なじみ？私はあるたのような奴は知らない。いずれ結ばれる者同士？勝手にイチカの運命を決めないでくれる？それに私はあるたと同年なんだけど。」

「貴様に聞いていない！私は一夏に聞いているんだ！一夏！さつきと説明しろ！」

「…はあく、鈴、言って良いか？」

「ええ、構わないわ！存分に言ってやって！」

た黒姫刹那であった。

「何故？今日の昼休み剣道部は集まれと言われた筈ですよ。皆さんは昼食を取らずに貴女を待っていたんですよ？なのに貴女は何をしているのですか？」

「そ、それは…」

「しかも何故この生徒を殴ろうとしたのですか？」

「…」

「もう一度聞きます。貴女は何をしているのですか？」

刹那は一度目と二度目とは違い、覇気の籠った声で篠ノ之に質問した。

「…すみません。理由を話すので離してもらえませんか？」

「…分かりました。それでは理由を聞かせてもらいましょうか？」

「ええ、…貴女に話す事などない！」

そう言うと篠ノ之は刹那の顔を殴った。しかし、思い出して欲しい。十話で篠ノ之に竹刀で殴られても何ともなかった。それが拳に変わった処で刹那には無意味だ。

「…貴女は学習しませんね。はあ！」

刹那は前回の様に篠ノ之にボディブローを喰らわせ、篠ノ之は気絶してしまった。刹那は気絶した篠ノ之を肩に担ぎ、楯無の元へ移動し

た。

「楯無さん、迷惑を掛けてすみません。」

「気にしないで黒姫さん。貴女のお陰で事態が悪化しなかったわ。」

「それでもすみません。」

刹那は篠ノ之が落ちないように楯無に頭を下げて謝罪した。そしてイチカの元へ移動した。

「ミューゼル君、来週を楽しみにしています。」

「ええ、その時はよろしくお願いします。」

「はい、それでは失礼します。」

刹那は急ぎ足で食堂を出ていった。

十七話

「あいつって何様のつもりなの？4。」

「さあ？ただ言えるのは頭の中は広いお花畑、と言う事でしょう。5ですわ。」

「私は篠ノ之さんの事は知らないけど何だか苦手だな。6」

「しののんと友達になるのは難しいかな。7。」

「とりあえず学園がどうにかするだろ。多くの生徒がああ光景を見ていたからな。…8。」

「「ダウト！（ダウト。）」」

イチカがカードを出した瞬間にセシリア、簪、本音、ユルセンの声
が重なった。しかし、鈴だけは必死に笑いを堪えていた。

「イチカさん、分かりやすいですわ。」

「イチカは嘘が下手だね。」

「イッチー、顔に出てるよ。」

「もうちょっとポーカーフェイス頑張れよ。」

「十六枚か、丁度四枚づつだな。」

「「「えっ。」」」

イチカがカードを表にするとスペードの8が描かれていた。

「アハハハハッ！皆、普通に引っ掛かってる！」

ついに堪えきれなくなつたのか鈴は大声を出して笑いだした。鈴はイチカが嘘をついていないと過去の経験から分かつていた。

「いやー、相変わらず凄いわね。イチカの偽りの嘘は。」

「ま、鈴達には全く効かないけどな。」

「そりゃあ何度も見れば分かるわよ。」

「鈴さん、その偽りの嘘と言うのは何なのですか？」

「簡単に言えば本当のカードを違うカードの様に振る舞つて多くのカードを取らせるイチカの技よ。」

「一回それで一人に十三枚取らせた事あつたな。まー、鈴は三回目で見破られたけどな。」

「当然よ。大好きな人なら嘘か本当か簡単に分かるわ！」

鈴は堂々とイチカの事が好きだと言うとイチカと鈴は顔を赤くしてしまった。

「熱々ですわね〜。」ニヤニヤ

「リア充だ〜。」ニヤニヤ

「イッチーとリンリンは初々しいね〜。」ニヤニヤ

カシャッ！「一枚頂きました。」ニヤニヤ

セシリア、簪、本音はニヤニヤしながらイチカと鈴を見ており、ユルセンはニヤニヤしながら写真を撮っている。

「ニヤニヤするなー！」

「後、ユルセン！それをどうするつもりだ!？」

「どうって…スコールの嬢ちゃんに贈るつもりだけどく。」ニヤニヤ

「やめろ!?!コピーを取られて永久保存される！」

「え!?!何それ!?!」

「義母さんは家族の気に入った写真や映像をコピーしてFRCの開発責任者と強固なプロテクトを何重にも掛けて永久保存するんだよ!！」

「でも、私は家族じゃないよね？」

「いや、鈴は既に義母さんに気に入られていて、俺が家に帰ると…」

「帰ると?..」

「…俺の机の上に『絶対に幸せになれる結婚式!』とか『式を挙げるなら此処にすべきベスト10!』なんて言う結婚式のパンフレットが三冊くらい乗ってる。」

「結婚式!?!誰と!?!」

「…鈴。」

赤かったイチカと鈴の顔が更に赤くなりセシリア達のニヤニヤが止まらなくなっていた。

「他にも言ってただろ〜?」

「おい!?ユルセン!」

「えっと、そのスクールさんは何て言ってるの?／／／」

「鈴!」

「聞きたいか〜?」

「うん。／／／」

「させるか!」

イチカはユルセンに話されないように捕まえようとした。が。

「イチカさん、すいません。」

「イチカ、ごめん!」

「イツチー、覚悟〜。」

「!」

セシリア達に押さええられてしまった。更にユルセンにお札まで貼

られイチカは動けなくなった。

「ちよ！三人とも何で!？」

「気になるので。」

「セシリアに同じく。」

「二人に同じく。」

「と言うわけで〜！スコールの嬢ちゃんに言われた事を物真似で発表〜！」

「「イエーイ！」」

「イ、イエーイ！／／／」

「じゃあ行くぜ〜。『イチカ、孫が産まれるの楽しみにしてるわ♪あ、勿論学生の内はちゃんと避妊しなきゃダメよ♪』」

「うわあああああああああ!？」

「「「うおおおおおおおお!」」」

イチカは大きな声で悲鳴を挙げ、セシリア達は歓喜の声を出し叫んでいた。そして鈴は。

「(孫?と言う事はイチカと私の子供、それに避妊って事は…!?)
きゅー／／／」

鈴は自分が考えた事で全身を真っ赤にし、後ろに倒れてしまった。

「鈴!?おい!鈴!しつかりしろ!」

「うん。えへへ、イチカにやっと会えた。」

「はは、そうだな。そしてお帰り、鈴。」

「むにやむにや、イチカ、だーいすき。」

「!?!?!(ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ!?!可愛すぎて死ぬ!あ、俺死んでたわ。)」

「いやー、お茶が進みますわね。」ニヤニヤ

「そうだね。もしかしたらコーヒーも合うんじゃない?」ニヤニヤ

「お菓子も進むね。」ニヤニヤ

「ヒュ〜ヒュ〜、熱いね〜、お二人さん。」ニヤニヤ

「ハッ!」

イチカがゆっくりと後ろを振り向くとそこにはニヤニヤしながらティータイムを始めているセシリア達の姿があった。

「あの〜、皆さん?俺達は見せ物じゃないから後ろ向いててくれませんか?」

「イチカさん。」

「イチカ。」

「イツチー。」

「イチカ〜。」

「二「大丈夫だ、問題ない。そのまま続けて構わない。」三」

「いや、こっちが大丈夫じゃn」イチカと結婚♪イチカと結婚♪イチカと結婚♪イチカと結婚♪楽しみだ〜♪」∴」ドンドンドン

鈴が寝言で歌った歌を聴くとイチカは無言で床を叩き始めた。

そして次の日、セシリア、簪、本音、鈴、イチカは肌が艶々していた。しかし、イチカに関しては眼が充血していたという。

十八話

「…初めてやってみたが上手く出来たみたいだな。」

学園のISを保管している倉庫にイチカが居た。いや、『イチカ』が顕現した。

「俺からてめえに贈り物をくれてやるよ。ただし！こいつに勝てたらの話だな！」

『イチカ』は 何もない空間から眼魂を作り出し空中でキャッチした。そしてメンテナンス中のラファールリヴァイヴに眼魂を入れ込んだ。眼魂を入れ込まれたラファールリヴァイヴは黒いオーラが発せられたが直ぐに収まった。

「さてと、目的は果たせし退散するか。精々足掻けよ？てめえ。」

『イチカ』はそう言うど霧の様に消えていった。そして学園の監視カメラには何も映ってはいなかった。

クラス対抗戦の前日

「いよいよ明日ね。」

「そうだな。殺るからには全力で殺ってやるよ。」

「当たり前よ、本気で殺らなきゃ意味が無いもの。」

「イチカさん、鈴さん？気のせいでしょうか？文字が違うと思いませんけど。」

「セシリア。」

「は、はい!？」

文字の違いを指摘したセシリアだったが二人に呼ばれ何故か緊張していた。

「恋人だからと言って手を抜いて言い訳じゃ無い。むしろ殺す気ではないと一瞬で勝負が着く。」

「言いたい事は分かりますけども、今のお二人に言われても説得力がありませんよ?。」

「何で?。」

「はあく、今のお二人の現状を言ってみてください。」

「現状? 鈴が俺の膝の上に座ってて…」

「イチカが後ろから抱き締めてる。」

「その時点で疑問に思わないのが凄いですね。」

「…。」

「どうしました? イチカさん、鈴さん?。」

「一回、猫みたいになった鈴を見て鼻血を出したセシリアに言われたくない。」

「同じく。」

二人はセシリアに自分達が思った事をハッキリ言った。が、セシリアは二人にある事を言った。

「フツ、私が一番尊敬する方からある事を教わりましたわ。『可愛い物を見つけたら愛し、そして可愛い物への愛を追求しろ。』とね。」

「何でだろ？セシリアを格好いいと思ってしまった。」

「奇遇ね、私もよ。」

イチカと鈴がセシリアの事を格好いいと思っている頃、セシリアに自身の教えを教えた人物は。

「へくちっ！」

「オーちゃんどうしたの？風邪？」

「いや、気にする事はねー、どっかの誰かが噂でもしてんだろ。」

くしやみをしていた。

そしてクラス対抗戦当日

「はあく。」

イチカと山田先生が溜め息を吐いていた。何故なら又もや篠ノ之がイチカが待機するピットに居たからである。

「山田先生。」

「ええ、構いません。」

「ありがとうございます。」

イチカと山田先生は短い会話を済ませた。千冬と篠ノ之は何の話をしているか分からなかった。そしてイチカはムサシ眼魂を取りだしゴーストドライバーにセットした。

「アーイー！バッチリミナー！バッチリミナー！バッチリミナー！」

「変身！」

「開眼！ムサシ！決闘！ズバット！超剣豪！」

「ミューゼル勝手にISを展開するな！そして政府が用意した専用機を使いえ！」

「許可なら山田先生から貰いました。それに俺の専用機はこのゴーストです。山田先生！」

「準備完了してます！」

「ありがとうございます！イチカ・ミューゼル、ゴースト、命…燃やすぜ！」

「おい、待て！ミューゼル!!」

イチカはアリーナに出ると鈴と対峙した。

「待ってたわよ、イチカ！」

「ああ！待たせたな、鈴！」

イチカと鈴は何時もの甘い空間ではなくピリピリとした緊張感のある空間を作り出していた。

「3」

「さあ、私達の。」

「2」

「俺達の。」

「1」

「『戦争』《デート》を始めようぜ！（始めましょう！）」

「試合開始！」

二人はそれぞれの武器を呼び出し互いに突撃し、武器同士がぶつかり合い、金属の高い音がアリーナに響いた。

「へえ、鈴の武器は双剣か。」

「そう言うイチカも二刀流じゃない。」

「ま、それだけじゃないからな！」

「それは此方も同じよ！」

二人は話ながらも攻撃を止める事は無く、激しさを増すばかりであった。が、先に鈴が手札を一枚切った。

「喰らえ！」

鈴は持っていた双天牙月を連結させイチカに向かって投擲した。

「うおっ!? (双剣を連結させて投げた!? だけど! 今がチャンスだ!)」

「…。」ニヤリ

「! (何か来る!) 後ろか!」

イチカは返ってきた双天牙月をギリギリで回避する事に成功した。しかし。

「甘い!」

「そっちもな!」

イチカと鈴は互いの攻撃が届いていないのにどちらもダメージを受けた。だが、二人は笑っていた。

「面白い攻撃をするじゃねえか! 鈴!」

「それは此方の台詞よ! イチカ!」

(楽しそうですわね。しかし…)

「それにしても一年半で此処まで強くなるとわね!」

「それはお互い様だろ!」

(よく、話ながら激しい攻撃が出来ますね。そう言えば、お二人は賭けをしていましたわね。確か…)

昨日の回想

「ねえ、イチカ。」

「うん？」

「明日の試合で賭けない？」

「良いけど何を賭けるんだ？」

「そうねえ、あ、勝った方がデートした時に奢るって言うのはどう？」

「勝った方が奢るか…乗った。ま、勝つのは俺だけだな。」

「言ってなさい。勝つのは私だから。」

回想終了

(…普通逆じゃありません?)

セシリアは心の中で二人の賭けについて突っ込みを入れていた。

「うおおおおおおおおお！」

「はあああああああああ！」

♪♪♪

二人の戦闘は更に激しさを増そうとしたその時、何処からかピアノ

の音が聞え、次の瞬間。

「ドオオオオオン！」

「!?」

アリーナのシールドを破り一機のISが二人の前に現れた。

「何者だ！所属を言え！」

「…。」カチャ

謎のISは何も言わずに銃を構え、イチカ達に発砲し始めた。

「チッ！」

イチカは発砲された弾を切り裂いた。そして山田先生から通信が入った。

「ミューゼル君！鳳さん！今すぐピットに戻ってください！教師部隊が対処します！」

「山田先生、それは無理です！どうやら彼奴の狙いは俺達みたいです！それに今俺達は…」

イチカは弾を斬り、鈴が龍砲で弾を撃ちISからの攻撃を全て無力化していた。

「かなり頭に来ているんですよ！だから俺達（私達）に殺らせてください！」

「…本来は止めるべきですが事情が変わりました。教師部隊が既に避難しているようなのでお二人にお願いします。しかし、私と約束してください。二人とも無事で帰ってきてください！」

「はい！」

(白騎士！白式！セシリア、簪、黒姫先輩に繋げ！)

(了解！)

(分かりました！)

「イチカさん！どうされたのですか!?!」

「イチカ！どうしたの?」

「ミューゼル君！どうしましたか!?!」

「三人ともアリーナにいる生徒の避難誘導をしてください！それまで俺と鈴で時間を稼ぎます！」

「分かりました！お気を付けて！」

「了解！気を付けてね！」

「分かりました！無茶はしないでください！」

「て言う事だ、鈴！」

「つまり時間を稼げばいいんでしょ！」

「ああ！」

謎のISは銃での攻撃が意味が無いと分かったのか銃を捨て、ピアノを引くようなポーズを取ると光の鍵盤が現れ、光の鍵盤を引き始めた。すると光の音符が出てイチカ達に向かって行った。

「攻撃方法を変えたところで無意味よ！」

鈴は光の音符を撃つと光の音符が爆発を起こした。

「！鈴あの音符に触れるな！あれは多分アリーナのシールドを破った奴だ！」

「みたいね！」

「二夏！男なら、男ならその程度の奴に勝てないでどうする！」

アリーナの放送室から今一番聞きたくない声が聞えると謎のISは目標を変え光の鍵盤を引き、光の音符を幾つも放った。

「イチカさん！放送室にまだ生徒が！」

「何!?!チツ！」

「アーイー！バツチリミナー！カイガン！白式！白き翼！掴むぜ夢！目指すは空！ダイカイガン！白式！オメガドライブ！」

「うおっら！」

イチカは白式魂にゴーストチェンジし、持っていた盾を投擲すると盾は強力なエネルギーを放ち、光の音符を放送室から護っている。し

かし、それも時間の問題である。

「セシリア！後何人だ！」

「全員気絶していますが簪さん達の協力もあり無事に避難が完了しましたわ！」

「サンキュー！セシリア！」

「マスター！あの機体、人が乗ってないよ！」

（それに眼魂の反応もあるぞ。）

「（なるほどな！）鈴！」

「どうしたの!?イチカ！」

「どうやらあの機体に人が乗って無いみたいだ！」

「へえ、つまり…」

「「思いつきり殺れる！」」

「そうと決まったら遠慮は要らねえな！」

「そうね！私達の邪魔をした怒りを受けて貰いましょう！」

イチカと鈴は何の躊躇いもなく謎のISに突っ込み何度も攻撃した。無人機は防御を優先したがその防御が二人の攻撃に追い付けずシールドエネルギーが尽き、装甲もボロボロになっていた。そして無人機の足元にはグレーの眼魂が落ちていた。

(ユルセン、この眼魂を天照さんの所に持って行って調べて貰ってくれ。)

(了解。)

「イチカ。」

「ああ。」

「お疲れ様！」

パシンツ！静かになったアリーナに二人がハイタッチした音が響いた。

十九話

現在、ユルセンは天照に会いに神界に来ていた。天照の場所は知っていたので直ぐに見つける事が出来た。

「お〜い、天照〜。」

「うん？やあユルセン。久し振り。」

「久し振り〜。」

「珍しいね、ユルセンが神界に来るなんて。僕に何か用？」

「聞きたい事があって来た〜。これってさ〜、天照が寄越したのか〜？」

「それってベートーベンの眼魂だよ？何処でそれを？」

「実はカクカクシカジカ〜。」

「四角いムーヴと言うわけだね。分かった、調べてみるよ。」

天照がベートーベン眼魂を調べてみるが何も不振な点は見付からず普通の眼魂と何も変わらなかった。

「うん、普通の眼魂だね。これなら使っても問題ないよ。」

「眼魂の追加ってイザナギとイザナミの許可が必要じゃ無かったけ〜？」

「父上と母上なら心配ないよ。」

「何でだ〜?」

ユルセンが疑問に思っていると天照の元に一人の女性の神が向かって来た。

「兄上、今回も良き物が見れました。新しいのが出来ましたらまた見せてください。」

「それは何よりだよ。次回も楽しみにしててね月詠。」

「ええ、楽しみにしています。お体にはお気を付けて。ユルセンさんも。」

「じゃあな〜、月詠〜。」

「ええ、それでは。」

月詠が立ち去るとユルセンは天照と月詠の事で話始めた。

「いや〜、何時見ても月詠は綺麗だな〜。」

「妹はあげないよ。」

「神に求婚なんてするわけないだろ〜。てか月詠から何を返されたんだ〜?」

「イチカ君と鈴ちゃんの一チャイチャを僕が編集した物。」

「ふ〜ん。」

天照はとんでもない事を暴露した。しかし、ユルセン余り驚いては無かった。

「あれ？反応薄いね。」

「それならスコールの嬢ちゃんが作ってるからなく。」

「へえ。」

ユルセンが訳を話すと天照は目を輝かせていて、不適な笑みを浮かべていた。

「よし！決めた！久し振りにイチカ君に会いに行こう♪セシリアちゃんにスペクター渡した神も気になるし。」

そしてその頃イチカ達は。

「鈴！さっきの決着を着けるぞ！」

「望む所よ！イチカ！」

二人は拳を構え戦闘体制を取っていた。二人は又もや緊張感のある空間を作り出しており、今にも殴り合いが始まってもおかしくない空気だった。

「イチカさん！鈴さん！お辞めください！二人が怪我しては意味がありません！」

「止めるなセシリア！」

「そうよ！これは私達の問題よ！」

セシリアが止めに入るが二人は聞き入れず、もう誰にも止める事は出来ない状態であった。

「鈴には悪いが勝たせてもらおう！」

「それは此方の台詞よ！」

「絶対に勝って初めてのデートで奢ってみせる！」

「やはり逆ですわよね!? しかも初デートですよ!?!」

「行くぞ!鈴!」

「ええ!此方も準備万端よ!」

イチカと鈴の決着が決まる時が遂に訪れた。イチカと鈴は大きく振りかぶった!

「最初はグツ!じゃんけんぽん!」

「いおっしやああああああああああ!!」

「にいやあああああああああああ!?!」

「まさかのじゃんけんですよ!?!」

イチカは歓喜の声を挙げ、鈴は猫の様に悲鳴を挙げ、セシリアは全力で突っ込んだ。

「よし!これで俺が奢りだからな。」

「あそこでチヨキを出していれば！」

「本当に仲が良いですわね。」

「そうだね。」

「!?だ、誰ですの!?!」

「天照さん!?!」

「え!?!この人が!?!」

「はいその天照です。それとハイこれ、問題なく使えるから渡しに来たよ。」

天照は簡単な自己紹介をし、ベートーベン眼魂をイチカに渡した。

「ありがとうございます。」

「あのー！」

「うん? なんだい鈴ちゃん。」

「イチカの事、ありがとうございます！」

「どういたしまして♪あ、それとセシリアちゃん。」

「はい、何でしょうか?」

「気になってたんだけど誰にスペクターを貰ったんだい?」

「これですか？これはアテナ様に貰いましたわ。」

「アテナ？ああ！あの合法ロリ神か！」

天照が一人で納得していると何処からか一本の槍が天照に向かって飛んできた。

ガシツ！「よつと！」ヒュン！

しかし、天照はその槍を掴みそのまま投げ飛ばした。

「なるほどね、合法ロリ神がね。」

（何も無かったようにした!?!）

しかし、今度は二本の槍が天照に向かって飛んできた。

ガシツ！「ほい！」ヒュン！

天照は難なく二本の槍を掴みそのまま投げ飛ばした。

「いやー、これ以上言ったら二本じゃ済まなくなるね。だから辞めとこ。処でセシリアちゃん。アテナの事どう思う？」

「可愛いの一言ですわ！まず、なんとと言ってもあのロリロリしい体型にロリや小さいと言ったら一生懸命に否定する姿！そして普段はツンツンしているのに可愛いと言えば顔を真っ赤にして照れるツンデレ属性！初めての見た瞬間にはアテナ様を抱えてダッシュしたほどですわ！流石に他の神様が追いかけてきた時は驚きましたが追いかけてきた神様全員を振り切りましたわ！更には…」

「ストップ。」

「何故ですの!?! 少なくとも六時間は語れるというのに!?!」

「多すぎだよ。それにほら。」

「え?。」

セシリアが後ろを見ると怯えながら『セシリアコワイ、セシリアコワイ』と言いながらイチカに掴まっている鈴の姿があった。

「鈴さん、心配しなくとも襲いませんわ。」

「…ホントウニ?。」

「ええ。本当ですわ。」

「…猫化した鈴もか?。」

「それは約束出来ませんわ!。」

「ヒツ!?!」

鈴はセシリアの言葉を聞いた瞬間小さく悲鳴を挙げて掴む力を込めた。

「よしよし、大丈夫だ。俺が守ってやるから。」

「うわーん! イチガー! ごわがっだー! (泣)」

イチカが鈴の頭を撫でると鈴は泣き出してしまった。

「心配するな、多分あれはセシリアの冗談だ。(セシリア、話を合わせろ。)」

「分かりましたわ。ではユルセンの写真を幾つか。(ええ、イチカさんの言う通りですわ。)」

「(義母さんに聞いてみる。) な? 言っただろ?」

「うん! それと、もっとなでて!」

「ああ、鈴が気がすむまで撫でてやるよ。」

「やったー!」

鈴は自分が気が付かない内に精神年齢が一時的に下がっていた。しかし、イチカがそれを気にすることは無い。何故ならイチカは鈴が可愛いければそれで良く、鈴が正義だからである。そしてセシリアと天照は。

「凄いねえ、二人のイチヤイチヤがお茶請けになるなんて。お茶が美味しく感じるよ。」

「そうですわね。処で天照様は此処に居て大丈夫なの?」

「問題無いよ、来る前に结界を張ったから。神にしか干渉出来ない、外から見えない、存在を感じない、でも外からの声や電波は通る。便利な结界なんだよね。」

「あ、本当ですわ。しかもWi-Fiに繋がってますわ。凄いです

わね。」

「でしょ？それにしてもお茶が美味しいねえ。」

「そうですわね。」

二人のイチヤイチャを茶請けにしながら優雅にティータイムを満喫していた。

二十話

「ふう。（何で東さんはいきなりバイクをメンテをしようと思ったんだ？俺が毎日調べてた筈だけどな？）それにしても早すぎたか？」

現在八時半、イチカは初デートと言うことで待ち合わせの一時間前に来ていた。

「え!?!イチカ!?!何で!?!早くない!?!」

「そう言う鈴こそ。」

「だって私は『ごめん鈴、待ったか？うんうん！私も今来たところ！』をやりたかったから…。」

「それ逆だろ。まあ、早く来たなら来たで早めに行動すれば良いだろ?。」

「それもそうね♪」

二人は一時間前にデートを開始する事にした。しかし、イチカは立ち止まり鈴の方を向き話しかけた。

「そうだ鈴。言い忘れてた。」

「?どうしたの?。」

「服、凄く似合ってるぞ。」

「あ、ありがとう／＼／＼」

イチカは一見落ち着いているように見えるが実際は。

「(言えない…鈴の私服が可愛すぎて一瞬呼吸が止まっていたなんて。)」

「イチカ！早く行きましょ！」

「ああ！（畜生！鈴が可愛すぎるからこの後気絶しないか心配になつてきたぞ!?）」

かなり焦っていた。そして鈴は。

「(私服姿のイチカ：凄く格好良すぎでしょ!?!うゝ、何時もと雰囲気が違うからさつきからドキドキしっぱなしよ！そ、それにイ、イチカに服が似合つて言われた／＼この後私気絶しないよね!?)」

「(はあく、初デート大丈夫かな?)」

二人とも同じ事を心配しており、二人は気付かずに手を繋いでいた。そして。

「こちらスナイパー。ターゲット二人、行動を始めましたわ。」

『ええ、此方も確認したわ。貴女達も行動を開始してちょうだい。』

「了解しましたわ。」

「了解です。それにしても…」

「どうかされましたか？お嬢様？」

「うん。／＼／＼」

(ヤバイ! 今気が付いたけどこれって顔がもの凄く近い!?)

カップルが目的地を決めて、二人同時にはずかしがっている時、コ
ンビはと言うと。

「スナイパーさん。」

「どうされました? お嬢様。」

「…もうその設定は決まりなんですね。それはそうとあれは狙って
やっているのでですか?」

ブラックが言うあれとはイチカが鈴を膝に乗せ後ろから抱き付い
ている事を言っている。

「ああ、あれは自然にやっているのですよ。」

「そうなんですか? それは微笑ましいですね。」

「ええ、一部の方からはお茶が進むと言われています。お嬢様も試
してみますか?」

「ありがとうございます。ですが私は今お茶を持っていませんよ
?」

「心配ありません。こうなる事を予想し此方で準備致しましたか
ら。」

そう言うとスナイパーは何処からか水筒を取りだしブラックにお

茶を入れたカップを差し出した。

「どうぞ。それと私の事は呼び捨てで構いません。」

執事キャラが何故か似合っているスナイパーであった。

イチカ達はシヨツピングモールに着き入るとそこには信じられない光景があった。

「貴様ら！俺が作ったスイーツが欲しいかー！」

『サー！イエツサー！』

「ならば並べ！列を乱すなー！」

『サー！イエツサー！』

『『蒼キ夜』では男も女も権力も力も関係ない！スイーツが欲しければ順番を守れ！』

『サー！イエツサー！』

「ルールーを守らない者は俺の隣にいるガーディアンズが即刻排除する！なお、お一人様五つまでだ！解ったか！」

『サー！イエツサー！』

「よろしい！それではこれより『蒼キ夜』の開店開始を宣言する！」

『うおおおおおおおおおおお！』

「ガーディアンズ！ミッション…スタート！」

『サー！イエツサー！』

「凄くカオスだな…。」

「そうね…。」

二人が今の現状に混乱しているといきなり

「おいそこのバカップル！」

「!?!」

「そこはこのショッピングモールの入り口だ！並ぶか退けるかどちらかにしろ！」

「すみません！」

「違う！返事はサー！イエツサー！だ！そして彼氏！並ぶなら彼女の手を絶対に離すなよ！彼女は彼氏から何があっても離れるな！解ったか！」

「サ、サー！イエツサー！」

二人は急いで列の最後尾に並ぶために大きく返事をして手を繋いだまま向かった。

「よろしい！それでは未長くお幸せにな！」

『注意しながらも二人を祝福！そこに痺れる！憧れる！！流石は蒼』

夜様!』

「さあ!先程のバカップルに祝福の気持ちを込めて拍手を送れ!」

『サー!イエッサー!』

イチカ達の周りの客やガーディアンズの皆さん、更には近くに居た店員までが大きな拍手を送っていた。

「うゝ!／／知らない人から拍手なんて恥ずかしすぎる!／／／ごめんイチカ!少しこのまままで居させて!／／／」

「ちよっ!鈴り!／／／」

鈴はイチカと向き合うようにして顔をイチカに押し付け手を腰に回した。周りから見れば抱き付いている様にしか見えない。

「何とも大胆な彼女だな!皆の衆やることは解っているな!」

『サー!イエッサー!既に理解しております!』

「ならば今すぐ始めろ!」

『サー!イエッサー!』

イチカ達以外の人達がイチカに向き直り視線が二人に集中した。

「何をするつもりだ!」

視線を向けている人達は何もせずただニヤニヤしていた。目を半開きをしてただニヤニヤしていた。

「…えつと、一体何を？」

『二人を見てニヤニヤしているだけですけれど何か？』

「いや、何でそんなに揃うんだ!？」

『知らんな。』

「打ち合わせでもしてんのか!？」

『え？多分ほとんど初対面ですけど？』

「取り合えずニヤニヤを辞めてくれー!！」

ニヤニヤはイチカと鈴の順番が来るまで続いた。

「はあ、何だか疲れた。(てか、あれは反則だろ!？彼処に人が居なかつたら思わず鈴をギュツとしていたぞ!？／／／)」

「そうね。(恥ずかしい!私ってどれくらいイチカに抱き付いていたの!？あ、でもイチカから良い匂いがしたな／／／)」

「うし、気分転換にでもブラブラしてみるか？」

「それも良いかもね♪イチカは何処に行きたい？」

「そうだな…取り合えずアクセサリーショップかな。」

「へえ、意外。イチカってアクセサリーとか興味あるんだ。」

「まあ、ちよつとな。(俺のじゃないけどな。)」

そしてコンビの方では。

「お嬢様、ターゲットが移動するようです。」

「スナイパー」お嬢様。今の私の事は呼び捨てで構いません。「私は呼び捨てで相手を呼ぶのに慣れていないのですが…。」

「どうか私を呼び捨てで呼んでくれませんか？」

「うゝ／＼／ス、スナイパー。」

「はい。ありがとうございますおじ」そ、そのかわり私の事も呼び捨てで呼んでください！」しかし…。」

「お、お願い致します。／＼／(何故私はこんな事を頼んでいるのでしょうか!?)」

「…ターゲットを見逃すわけにはいきません。さ、行きましょう。刹那。」

「!? (ほ、本名!?)それに何故こんなにも私はドキドキしているのでしょうか!?) はい／＼／」

セシリアがイケメンの紳士を見事に演じている件について。そして、刹那にフラグが建ちそうな件について。

イチカと鈴はアクセサリーショップに着くと二人は一時的に別行動することになった。

「さてと、鈴に似合いそうな奴は…」

「その男、これ全部の代金払つといて。」

「うん。(ブレスレットはISの待機状態と被るし…)」

「ちよつとちゃんと聞いているの!？」

「(かと言ってブローチとかは目立つし…) はあー。」

「いい加減にきなさいー!」

女性はイチカの肩を掴んだ。

「? 誰?」

イチカは肩を捕まれた事でやっと女性に気が付いた。しかし、それを聞いた女性は激怒した。

「男の癖に私を無視するなんて良い度胸ね!」

「(ああ、くだらない風潮に染まった奴か。)それで? 俺に何の様だ? 此方はプレゼントを探すのに忙しいんだが?」

「男の癖に! まあ、良いわ。これ全部の代金を払っておいて。」

「断る。払う理由がない。それともあれか? 貴女は成人にもならない高校生に奢らせるのが趣味なのか?」

「な!？」

「それにこんな事をする時間があるなら彼氏ぐらい探したらどうだ？」

「うわーん！彼氏が居ればあんたみたいな餓鬼に奢らせないわよ！全世界のリア充めー！爆発しろー！」

女性は泣きながら走り出してしまい、周りに居たカップルから拍手を送られた。

「罪悪感が凄いんだが…。うん？これは…」

そして鈴はイチカと合流したが鈴はあることに気が付いた。

「ねえイチカ。」

「？どうした？」

「何でイチカは周りから拍手されてるの？」

「気にしないでくれ。」

「分かった。そう言えばお昼どうする？」

「もうそんな時間か。どうする？」

「あれ？君達はさっきの…」

二人が話していると一人の眼鏡をかけた男性が話し掛けてきた。しかし、二人はその人物に面識は無い。

「えっと、何方ですか？」

「あー、ごめんごめん。これなら分かるか？」

そう言うのと男性は眼鏡を外し髪を乱した。するとそこに居たのは先程の如月蒼夜であった。

「「ああ！」」

「さつきは本当にごめん。」

「い、いえ俺達はあまり気にしていませんので…。それよりさつきとキャラが変わっているのが驚いているんですが…」

「あー、僕はちよつと熱が入ると性格が変わるからね。ところでさ、二人はお昼は済んだ？」

「えつと、これから食べようかと思いましたが。」

「それなら良かった。僕にお昼を奢らせてくれないかな？さつきのお詫びとして。」

「え！でも…」

「頼むよ僕に奢らせてくれ。」

「「じゃあ、お願い致します。」」

「良かった。何かリクエストはあるかい？」

「俺は何処でも良いです。」

「私も何処でも良いです。」

イチカ達は近くのレストランに向かった。途中、少しばかり話して如月蒼夜は優しい人物だと分かった。

「そう言えば如月さんは緊急帰国ってありましたけど何か日本に様があつたんですか？それと俺の事はイチカと呼んでください。」

「そうだね。あ、僕の事も蒼夜で構わないよ。ちよつと仕事と彼女に会いに来たんだ。」

「へえ、彼女いらつしやるんですね。あ、私の事も鈴で良いです。因みにどんな方なんですか？」

「そうだね…基本的に自由な性格で少しばかり人と関わるのが苦手だったな。でも頭が良くてね、それこそ世界の常識を変える程だったからね。」

「そんな凄い人が彼女なんですね。」

「うん。僕の自慢の彼女だよ。」

しかし、この時イチカはある事を考えていた。

(まさか…いやでも、そうと決まった訳じゃない。世界の常識を変えた人なんて沢山いる。まさかな?)

「三年前に撮った写真があるけど見る？」

「見ます！」

「はい、これ。」

蒼夜が見せた写真には蒼夜と嬉しそうにピースをしている紫の髪をした女性が写っていた。

「やっぱりか。」

「え!?!イチカ、この人知ってるの!?!」

「知ってるも何もこの人は東さん。本名は篠ノ之東。ISを作った本人だ。」

「えっ!?!それホントなの!?!」

「正解、イチカ君はもしかして東と知り合いなの?」

「ええ、よくお世話になってますよ。」

「そっかー、東が言ってたイツ君って君の事だったんだ。意外と世間は狭いね。」

「そうですね。」

「そう言えばどっちから告白したんですか?」

「やっぱり鈴ちゃんは気になる?」

「はい!」

「告白はあっちからだよ。でもあの時は本当に驚いたな。なんせ『蒼にゃキュン!わ、私とっ、付き合ってください!』って顔を赤くしながら言ってきたからね。勿論僕も好きだったからOKしたん

だ。」

「へえ、意外ですね。」

「でしょ？でもね、お互いに忙しいからまだ恋人止まりなんだよね。でも何時かは束を妻として受け入れたいね。」

「多分束さんそれを聞いたら喜びますよ。」

「そうだね。毎日電話してるけど何時も嬉しそうに話してるからね。」

その束と言うと。

「うわーん！蒼夜君に妻になって欲しいって言われたー！しかもいきなり過ぎるよ!?そ、それにわ、わ、私に会いに来た!?もう、幸せすぎるー!」

顔を手で押さえながら開発室の床を何度も転がっている。スコールにその場面を撮られている事を知らずに。

「お昼、ありがとうございます。」

「どういたしまして。それじゃ二人ともまた何処かで。」

「はい、ありがとうございます。」

「じゃあね。」

「結構良い人だったね。」

「そうだな。しかし驚いたな東さんに彼氏が居るなんて。」

「うん。」

「さてと、久し振りに彼処に行ってみるか？」

「あー、彼処ね。そうね、行きましょう♪」

二人はショッピングモールを出て二人の思い出の場所に向かった。

「此処は何時来ても変わらないね。」

「そうだな。何時も四人で此処に来て遊んで過ごしたな。此処はこんなに広いのに全く人が居なかった。今も全く人が居ない。何でだろうな？」

「さあ？でも私は人が居なくてこんな静かな空間は嫌いじゃないよ。」

「俺もだ。（渡すなら今だろうな。）鈴。」

「どうしたの？イチカ？」

「はいこれ、俺からのプレゼント。」

「え？」

イチカは鈴に綺麗にラッピングされている長方形の箱を渡した。

「ほら、俺達は付き合っではいたけどそれらしい事をした事が無いだろ？それに鈴が帰ってきたお祝いもしてないから。だから受け

取っつけてくれ。」

「うん！ねえ、今開けても良い？」

「ああ。」

鈴は笑顔でイチカからのプレゼントを受け取り、箱を開けた。中には翼を模様したネックレスが入っていた。

「綺麗…。」

「気に入ってくれたか？」

「うん！ありがとうイチカ！」

「どういたしまして。（やっぱり鈴の笑顔は眩しすぎるくらいに綺麗だな。…どんな事があってもこの笑顔は守ってみせる。）」

「イチカ、似合う？」

「ああ、凄く似合ってるぞ。」

「ありがとう／＼／＼」

「?どうした鈴?」

鈴は恥ずかしそうに頬を赤らめモジモジしていた。

「えっとさ、イチカ／＼／＼」

「何だ鈴？」

「その、何て言うか／＼／＼えっと、キ、キスして欲しい：／／／」

「わ、分かった／＼／」

「あ、ありがと／／／」

イチカと鈴は互いに目を閉じ少しづつ近づけた。だが、鈴はイチカの事が気になり目を開けて閉まった。

「ち、近い!? キュー／／／」 バタン!

「!? おい鈴!? 大丈夫か!」

鈴は恥ずかしさのあまり気絶してしまった。普段二人は自然にイチヤイチヤしているがキスなどは未知の領域であったため鈴が恥ずかしさに耐えきれずに気絶したと言う事だ。そしてそれを見ていたコンビは

「どうやらワンステップ進むにはもう少し先の様ですね。」

「そのようですね。」

「さて、イチカさん達に気づかれる前に行きましょうか? 刹那?」

「そうですね。エスコートをお願いできますか? セシリア? (何故私はまだドキドキしているのでしょうか? ですが何故かこのドキドキが心地良く感じられますね。)」

「勿論。さ、参りましょう。」

「ええ。」

二十一話

「と言うわけでお引越しです。」

「分かりました。」

デートの数日後、イチカと簪の部屋に山田先生が訪ねており簪が別の部屋に移ることになった。

「簪、手伝おうか？」

「ありがとう、イチカ。」

そして数分後

「よし！完了！」

「凄いですね〜。」

「そうですね。」

簪の荷物は衣類より趣味関係の方が多く、荷物の6割を占めていた。

「じゃ、イチカ。また後で。」

「おう。新しいルームメイトと仲良くな。」

「分かってるよ。」

そう言うと簪と山田先生は部屋を出て目的の部屋に向かった。

「さてと、鈴達が来る前にあれを終わらせるか。」

コンコン。また誰かがイチカの部屋に訪ねてきた。

「(鈴達か?えらく早いな。)」

「早く出た方が良いんじゃない?」

(そうだな。)

「はー…篠ノ之か。」

イチカがドアを開けるとそこには何時もの様に殺気を放っている篠ノ之が居た。

「いい加減に私の事は名前で呼べ!一夏!」

「はあく、用件は何だ?此方はやる事があるんだが?」

「一夏!幼馴染みとくだらない事、どっちが大事なんだ!」

「…俺がやる事は企業関係への報告書と資料製作だ。勝手にくだらない事扱いするな。」

「ならば、それが終わるまで部屋で待つとしよう。」

「…は?言ってる意味が分からん。」

「お前は相変わらず物分かりが悪いな!ならばお前の為に簡単に言っつてやろう!お前の用事が終わるまでこの部屋で待つと言っつてい

るのだ！」

「はあく。帰れ。」

イチカはただ呆れるしか無かった。

「何だと!？」

「此方は企業に関する事をしなければならぬのに何故部外者を部屋に入れなければならない？」

「ならばさつきまで居た小娘は良いのか!？」

「簪が居ない時にやっているに決まっているだろうが。と言うよりさつきと帰れ。」

イチカはそう言うどドアを閉め、鍵をかけて作業に取り掛かった。しかし。

ドンドン！「一夏！開けろ！」

「どうするんだイチカく？」

「放っておく。一々彼奴に構っていたら何時まで経っても終わらないからな。」

「それもそうだな。」

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン

「あー！うるせー!?!いい加減にしろ！」

イチカは余りにも鬱陶しい為にドアを開けた。やはりそこには篠ノ之が立っていた。

「一体何の用だ！此方は忙しいんだよ！」

「私が学年別個別トーナメントで優勝したら私と付き合え！」

「断る。」

イチカはハッキリと篠ノ之からの言葉を断った。

「何故だ!?!私とお前は結ばれる運命にあると云うのに!?!何故あんなくだらない小娘を「おい。」ツ!?!」

イチカは篠ノ之に向かってとてつもない殺気を放った。それこそ、今まで篠ノ之や千冬が放っていた殺気と比べ物にならないくらいに。そしてイチカの篠ノ之を見る目は恐ろしい程に冷たくそして鋭かった。

「勝手に俺の運命を決めるな。そしてお前に鈴の何が分かる?これ以上鈴を侮辱するならお前を滅する。」

イチカの放つ殺気が更に濃くなった。その殺気を浴びている篠ノ之は何も喋れずイチカに怯えながら廊下に座り込んでしまった。

「これ以上俺に関わるな。」

イチカはそう言うと自室に入り鍵を閉めた。

「オイオイ、イチカ。今の殺気は何なんだ？」

「…。」

イチカはユルセンの質問に答えずただ立ち尽くしているだけだった。

「？おい、イチカ？」

ドサツ！イチカは音を発して前に倒れてしまった。

「!?おい、イチカ!?大丈夫か!?コルー！セシリアの嬢ちゃんに連絡！」

「キューー！」

そしてイチカは見知らぬ場所で目覚めた。

「此処は…くっ!?ハア、ハア…」

イチカは頭を抑え呼吸が荒くなっていた。

「久し振りだな！てめえ！」

「お前は！」

イチカの視線の先には『イチカ』が立っていた。しかしイチカは気付いた。目の前の自分に似た存在は前回よりも強くなっている事を。

「取り合えず落ち着けよ。殺気が駄々漏れだぞ。つて言っても無駄

だよな！」

「…俺に何の用だ。」

「二つてめえに教えてやるよ。一つ、てめえの心の七割は闇で染まっている。二つ、てめえは今、消滅と生存の丁度真ん中にいる。」

「どう言う事だ！答えろ！」

「ハッ！俺はそこまで教えるほど甘くはねえよ！そして時間切れだ！」パチン！

「なっ!？」

『イチカ』が指を弾くとイチカの足元に黒い渦が発生しイチカを引きずり始めた。

「じゃあな、てめえ。ま、現実に戻れば此処の事は忘れていゝがな！」

イチカの意識は此処で途絶え、目覚めた時には鈴達が心配そうに見ていた。

「…何で鈴達が居るんだ？」

「ユルセンからイチカさんが倒れたと連絡が来ましたわ。」

「倒れた？そう言えばさっきまでの記憶が無い…。」

「イチカ、大丈夫なの？」

「ああ。疲れていたのかもな。」

「なくな〜イチカ〜。」

「うん？どうしたユルセン？」

「さっき感じた殺気は何なんだ〜？」

「殺気？何の事だ？」

「もしかして覚えてないのか〜？」

「いや、篠ノ之の話の途中から記憶が無いんだ。」

「ま〜、良いや〜。」

「じゃあイチカ、今日はゆっくり休んで。」

「ああ、そうさせてもらうよ。」

鈴達は部屋を出て行き、イチカは休む事にした。しかしこの時誰も気付いていなかった。イチカの運命が動きだしている事を。

二十二話

現在、イチカのクラスメイト達は何かのカタログ等を持ちながら談笑していた。

(イチカく、クラスの嬢ちゃん達は何を話しているんだく?)

(ISスーツの申し込みが今日から出来るようになるからな。何処の会社のが良いか話しているんだ。)

(なるほどなく。ま、イチカには関係無い話だからなく。)

(確かに俺はISの授業は何時もジャージだからな。)

(てかさく、ISスーツってほぼスク水じゃねく?何でだく?)

(作った人の趣味じゃないか?詳しくは知らないけど。)

「ISスーツは肌表面の微力な電位差を検知する事によって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止める事が出来ます。あ、衝撃は消えませるのであしからず。」

山田先生がISスーツの説明をしながら教室に入って来た。

「山ちゃん詳しい!」

「二応先生ですから。…ってや、山ちゃん?」

「山ぴー見直した!」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。…ってや、山ぴー?」

入学から大体二ヶ月、山田先生には多くの愛称が付いていた。本人は凄く気にしているようだが。

(今、山田先生の愛称って幾つだっけ?)

(確か…8くらいか?)

「グツジヨブ!山つち!」

「それほどでも。…って山つち?」

(あ、これは初めて聞いたな。)

「あ、あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちよつと…。」

「えー、いいじゃんいいじゃん。」

「まーやんは真面目っ子だなあ。」

「ま、まーやんって…。と、兎に角ちゃんと先生を付けてください
!」

「早く席に着け、時間だ。」

山田先生が生徒に注意していると千冬が教室に入って来た。

(教室の外に人の気配?しかも二人?)

(どっちとも女だなく。ま、こんな時期に転校生って言ったたら絶対に代表候補生だよなく。)

「では山田先生、HRを。」

「は、はいっ!」

千冬は山田先生が眼鏡を拭いている時に頼んだ為に少々慌てていた。

(てか、何で妖怪婚期逃しはHRを山田先生に任せるんだ?)

(面倒だからだろ。)

(なるほどなく。)

「さて、今日はなんと転校生を紹介します!しかも二名です!」

「え…」

『えええええっ!?!』

クラスのほとんどが騒ぎだした。

「さ、入ってください!」

「失礼します。」

「…。」

金髪で男装した少女と銀髪で眼帯をした少女が入って来た。

(銀髪の少女はクロエさんにそっくりだな。)

(そうだな。)

イチカとユルセンが話していると金髪の少女から自己紹介を始めた。

「シャルロット・デュノアです。フランスから来ました。この国では不馴れな事も多いかと思いますが、皆さんこれからよろしくお願ひします。」

シャルロットと名乗った少女はにこやかな顔でそう告げて一礼する。

「お、男？」

「あ、一応この格好していますがちゃんとした女です。」

「き」

「きゅ。」

(ユルセン、耳栓準備。)

(りよ〜か〜い。)

『キヤー!!』

「男装女子よ！まさか本当に居たなんて！」

「デユノアさん！取り合えず抱いて！いや、抱かせて！」

「それよりも薄い本のモデルになって！」

「やかましい！ラウラ、自己紹介をしろ。」

「…ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ出身だ。」

「…」

銀髪の少女も自己紹介をするがその続きがなく沈黙が続いた。

「あ、あの、以上…ですか？」

「以上だ。」

そう言うのとボーデヴィツヒは歩きだしイチカの席の前に来た。

「俺に何か様か？」

『ほう…ドイツ語を話せるとは驚いたな。それはそうと貴様がイチカ・ミューゼルか？』

『そうだが？』

『ならば私と闘え。』

『…理由は？』

『簡単な事だ。私は強い奴と闘いたい。ただそれだけだ。』

『何故俺なんだ？』

『この中で強者はイギリス代表候補生と貴様だけだからだ。そして貴様の方が少しばかり強い。』

『…分かった。それで？何時やるんだ？』

『日程はアリーナの予約が取れ次第連絡する。』

そう言うのとボーデヴィツヒは自分の席に向かった。

(周りがポカンとしてるぞ。)

(ま、一部分かっている奴も居るけどな。)

「…ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

(さて、此方も移動するか。)

(そうだな。)

イチカは走って空いている第二アリーナ更衣室に向かった。すると。

「此方A班、ターゲットを確認した。これより任務を執行する。」

「チッ！早速来たか！」

イチカの前方には多くの女子がイチカに向かってきた。イチカが

ら様々な情報を得るために。

「者共、出会え出会えい！」

(…何時から武家屋敷になったんだ?)

(さあ? って後ろかも来たぞ。)

(知ってる! こうなったら仕方ない!)

イチカは近くにあった窓を開け、そこから外へと飛び降りた。

『ええー!! 飛び降りた!?!』

イチカは第二アリーナ更衣室に着くと急いでジャージに着替え第二グラウンドに向かった。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する。」

「はい！」

一組と二組の生徒が気合いよく返事をした。

「さて、今日は戦闘を実演してもらおう。そうだな…凰! オルコツト！」

千冬は迷う素振りをして鈴とセシリアを指名した。しかし、何人かの生徒は気付いていた。千冬が初めっから決めていたことを。

「それで、相手はどちらに? 私は鈴さんでも構いませんが?」

「私もセシリアで構いませんけど？」

「慌てるな小娘ども。対戦相手は……」

キイイイン。「あああああーっ！ど、どいてくださいー！」

(上から？あ。)

イチカが上を見上げると悲鳴をあげながら落ちてきている山田先生の姿があつた。イチカはゴーストドライバーを出現させ眼魂を取りだしセツトした。

「アーイ！バッチリミナー！開眼！オレ！レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！」

イチカはゴーストに変身し、落ちてきている山田先生の腕を掴んで助けた。

「大丈夫ですか？山田先生。」

「あ、ありがとうございます！お、重くないですか？」

「大丈夫ですよ。此方もISを起動してますから。」

「おい、ミューゼル。何故白い奴にしなかった？あれなら簡単に助けられただろ。」

「はく。」

イチカと山田先生は同時に溜め息を吐いた。

「忘れたか？白式はあの時の攻撃で盾が完全に破壊されて修復が必要になり、現在修復中だ。誰かさんのせいだな。」

「それにちゃんとレポートにも書かれていますよ。ちゃんと目を通しました？誰かさんの罰を勝手に軽くした織斑先生？」

「……二人の相手は山田先生だ。」

この後、鈴&セシリアVS山田先生は山田先生が経験と戦略の差で勝利した。

二十三話

「山田先生は凄かったわね。イチカあーん。」

あむ、モグモグ、ゴクン「鈴達も初めてのタツグなのに中々良かったぞ。山田先生もかなり褒めてたし。ほい、あーん。」

あむ、モグモグ、ゴクン「それに山田先生から貰ったアドバイスは分かりやすく助かるわ。」

「そうですね。何処をどうしたら良い等と詳しく丁寧に教えてくださいますわね。」

今現在、イチカ、鈴、セシリアは同じテーブルで昼食を取っていた。しかし、周りは。

「あれ？可笑しいな？ブラックを頼んだのに凄く甘い？」

「カハッ!?まさかこんなに砂糖を吐くとはね…。もう限界…。」バ
タツ！

「そんな!?また人が倒れた!?誰か！誰か！お医者様は居ませんか!?」

「私が見ましよう。…フム、これは!?吐糖転倒病だ!?…残念ですが今の医学でこの病気は直せません。私も限…界だ…。」バタツ！

砂糖を吐きながら倒れていた。

「それにしてもあの暴君は何を考えているんだ？彼奴の罰を勝手に軽くするとか。俺もあの時初めて知ったけど。」

「どうせ、負傷者が居なかつたから罰を軽くしても良いと思つたんじゃない?」

「あれはイチカさんが助けた結果が負傷者が居なかつたに過ぎませんのにな。」

「相席良いだろうか?」

イチカ達が話していると一人の少女が話し掛けてきた。イチカ達は話し掛けてきた少女を見るとそこに居たのはボーデヴィツヒだった。

「構わない。」

「私も良いわよ。」

「断る理由がありませんからね。」

「感謝する。」

イチカ達はボーデヴィツヒが座る事を許可し、ボーデヴィツヒは礼を言つてから席に座つた。

「それで何で此処に来たんだ?他にも席は空いていただろ?」

「簡単な事だ。この三人は私が強いと感じ、闘いたいと思つているからだ。そう言えばちゃんと自己紹介をしていないな。私はラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生でドイツ軍に所属、『シユヴァルツェ・ハーゼ』通称黒ウサギ隊の隊長をやっている。階級は少佐だ。私の事はラウラで構わない。」

「イチカ・ミューゼル。『PRC』のテストパイロットをやっている。俺の事もイチカで良い。」

「凰鈴音よ。中国の代表候補生をやっているわ。私の事は鈴で良いわよ。」

「セシリア・オルコットですわ。イギリスの代表候補生をやっていますわ。私の事はセシリアとお呼びください。」

「よろしく頼む。」

「ああ、こちらこそ。処でラウラ。」

「む？何だ？」

「その持っている袋は何なんだ？」

ラウラの腕には白い袋が二つぶらさがっていた。しかも袋はかなり膨らんでいた。

「ああ、これか。よく分からんが此処に来る途中で多くの生徒に菓子类を渡された。何故だ？」

ラウラはコテンと首を傾げた。

「(嫌な予感がする。)…。」

「イ、イチカ、セ、セシリアがこ、こわい…。」

鈴に言われセシリアの方を見てみるとセシリアはラウラの方を向

き、頬を赤く染め息が荒くなっていた。

「セシリア、ストップ。鈴が怖がっている。」

「私はまだ何もしていませんよ?」

「まだと言っている時点でアウトだからな?」

「ふぁにはおふうふぁひいへえふいふうんふぁ? (何を話しているんだ?)」

「ラウラ。取り合えず口一杯にお菓子を含んで喋るな。」

ラウラの頬はリスの様に膨らんでいて何を喋っているか分からなかった。

「セシリアコワイ、セシリアコワイ。」

「ほら、落ち着け鈴。」

「にゃくん。」

イチカは怯えている鈴の頭を撫でてやると鈴は目を細め猫の様な声を出した。

「はぁふうはぁふうふぁふぁ。(ラブラブだな。)」

「ハア、ハア(猫の様になった鈴さんも良いですがリスの様になったラウラさんも良いですわねえ。そうですね!この二人を写真に撮って会長にも見てもらいましょー!)」

此処に猫の様に甘える少女とその少女を撫でる少年とリスの様に頬を膨らませている少女と二人の少女をカメラで連写している少女と言う何ともカオスな空間が出来ている。

「ちよつと良いかな?」

「どうした?デユノア?」

「あ、僕の事はシャルロットで良いよ。ミューゼル君ってさ…ロリコン?」

「……………は
?」

昼休みが終わる少し前、シャルロットがイチカに話かて来たがシャルロットの言葉を聞いたイチカはかなり間が空いてから言葉を発した。

「いやいや、何で俺がロリコンになるんだ?あと、俺の事はイチカで良い。」

「え?だってイチカの彼女って見た目って小学生だよね?」

「シャルロット、一つ言わせてくれ。俺はロリコンじゃない、鈴が大好きなだけだ。」

「それってどう違うの?」

「全然違いますわ!ロリコンは小さな女の子全般を好きですがイチカさんは鈴さんだけが好きなのですわ!」

二十四話

イチカとラウラはアリーナで対峙していた。しかし周りにはあまり人がおらず居るのは鈴、セシリア、簪、本音、刹那、山田先生だけであった。

「では二人ともI Sを展開してください。」

「分かりました。」

「ア—イ！バツチリミナー！」

「変身！」

「開眼！オレ！レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！」

「了解した。来い、シュヴァルツエア・レーゲン！」

「それでは始めてください！」

山田先生の合図と共にイチカはガンガンセイバーをガンモードにしラウラに向かってエネルギー弾を放った。しかしそのエネルギー弾はラウラに当たる事は無かった。

「（バリアか？いや、何かが違う気がする…。ま、取り合えず）ほい。」

イチカはラウラのリボルバーカノンから放たれた弾丸を何事も無く斬った。

「ほう…あれを斬るとはな。」

「まあ、速いと思うがこのくらいなら慣れてるしな。さて、あれを試してみるか。」

イチカはグレーの眼魂を取りだしゴーストドライバーからオレ眼魂を抜いてグレーの眼魂をセットした。

「アーイー！バッチリミナー！開眼！ベートーベン！曲名！運命！ジャジャジャジャーン！」

イチカはグレーのパーカーゴーストを纏いベートーベン魂になった。しかしラウラはイチカに攻撃せずにただ笑みを浮かべていた。

「何故攻撃しない？」

「そんなの決まっている！そんな無防備な奴を攻撃したら直ぐに終わって面白く無いだろ！それに日本では姿が変わっている時に攻撃してはいけないと教わったぞ！」

「…。（…誰だラウラに間違った日本の知識を教えた人は!?）」

「さて、姿も変わった事だ。私を楽しませろ！」

ラウラはプラズマ手刀を二本展開し、イチカに斬りかかった。イチカもガンガンセイバーを二刀流モードにしラウラに斬りかかった。二人は互いに斬り合い激しさを増した。

「これだ、これだ！この様な闘いを私は待っていた！」

「（流石は軍人と言った処か…） ツー！」

イチカはラウラのプラズマ手刀を弾き追撃しようとしたがラウラ

の不適な笑みに嫌な予感がし、左手に持っていたガンガンセイバーをラウラに投擲した。しかし、ラウラに当たる事無く、空中でとまっていた。

「…なるほど先程感じた違和感はこれか。」

イチカが先程の違和感の正体を知った時、外野は。

「山田先生、質問して良いでしょうか？」

「はい、何でしょう。黒姫さん。」

「先程、ボーデヴィツヒさんが使用した物は何なのでしょう？」

「あれはA I Cと言います。アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略で慣性停止能力とも言われ、P I Cを応用した物ですね。」

「ありがとうございます。とても解りやすいです。」

「いえいえ、では此処で凰さんに復習問題です。P I Cの何の略で、どんな意味でしょうか。」

「P I Cはパッシブ・イナーシャル・キャンセラーの略で浮遊、加速、停止を意味していて全てのI Sの基本となっています。」

「正解です。良く覚えていましたね。では他に質問ありませんか？」

何故か授業が始まっていた。

「これでどうだ！」

イチカは体に付いている鍵盤を左手で弾き光の音符を出現させてラウラに向かって飛ばした。

「そんな物効かん！」

しかしラウラのA I Cに防がれてしまい全くダメージが入らない。

「チツ！（もしかしたら…賭けてみるか。）」

イチカは先程より多く鍵盤を弾き光の音符を連続出現させ、一気に放った。

「喰らいやがれ！」

「…中々やるな。」

イチカが放った光の音符はラウラに幾つか当りやつとダメージを与える事が出来た。

「賭けが成功したみたいだ…何故I Sを解除している？」

「今に分かるさ。」♪♪♪♪

ラウラは何処からか少し大きめの機械を取りだし左腕に装着すると機械的な音声が鳴った。更にラウラはイチカとセシリアが持っている眼魂とは違う形の眼魂を取りだしスイッチを押した。

「スタンバイ！」

「まさか…」

「私は本当に感謝している。此処には強者が多く、これを使って本気で闘える相手が居る事になー!」

「イエツサー! ローディング!」

ラウラは眼魂を機械にセットし、ユニットを起こしてスイッチを押すと黒にグリーンのラインがあるパーカーゴーストが出てきて待機音声で鳴っている。

「変身。」

「テンガン! ネクロム! メガウルオウド! クラッシュ・ザ・インベイダー!」

「さあ! 第二ラウンドだ!」

ラウラは変身を終わると同時に走り出し、イチカも走り出した。二人は互いに格闘技等を使い闘いを始めた。

(経験は分かっていたが性能までも上か…。少しばかり厳しいか…。)

「もっとだ! もっと私を楽しませろ!」

「チツ! なら!」

「ダイカイガン! ベートーベン! オメガドライブ!」

イチカはラウラから距離を取りゴーストドライバーのトリガーを

引きオメガドライブを発動し、イチカの右足にエネルギーが集まった。

「はあああああ！」

イチカはジャンプしラウラに向かって蹴りを放った。

「決め技か。ならば！」

「デストロイ！ダイテンガン！ネクロム！オメガウルオウド！」

ラウラは再びユニットを起こしスイッチを押すと機械的な音声が流れラウラの左腕にエネルギーが集まった。

「これで終わりだ！」

ラウラは集まったエネルギーをイチカに向かって一気に放った。

「（押し戻される!?）負けてたまるか！」

「落ちろ！」

イチカとラウラの放ったエネルギーはぶつかり合った、が、イチカが徐々に押し戻されていた。

「イチカー！ファイトー！」

何時の間にか授業が終わった鈴がイチカを応援していた。

「鈴に応援された俺が負ける理由はねええ！」

「何だと!?!」

イチカは放たれたエネルギーを押し返しラウラに渾身の一撃を決めた。イチカとラウラの勝負はイチカの勝利で決着が着いた。

「大丈夫か?」

「ああ。大丈夫だ、師匠。」

「ちよつと待て、何で俺が師匠になってるんだ?」

「?何故って日本では尊敬する相手を師匠と呼ぶと教わったぞ?」

ラウラは首を横に傾げながらイチカに理由を言った。

「ふう、誰だラウラに間違つた日本の知識を教えた人は!?!」

イチカの叫びは虚しく響いた。

二十五話

ハロー。イチカの彼女で中国の代表候補生をやっている凰鈴音よ。呼びにくいだろうから鈴で良いわ。それで私と一緒に走ってるのがドイツの代表候補生のラウラよ。うん？何で走ってるかって？

「フフフ、鈴さくん、ラウラさくん見つけましたわ〜♪」

「ヒッ!?!」「何だと!?!」

セシリアに追いかけているからよ！しかも何あの格好!?!黒いスーツにサングラスって逃○中のハン○の格好じゃない!?!何で持ってるのよ!?!本当にあの時の私をぶん殴りたいわ！そう全てはあの時から始まった。

五分くらい前

「鈴さん、ラウラさん。一つ、私とゲームをしません?」

「ゲーム?何の?」

「?」モグモグ

「ルールは簡単ですわ。一時間、私がお二人を追い、お二人は私から逃げる。ただこれだけですわ。もしお二人が勝てばこれを差し上げますわ。」

そう言うとセシリアは二枚のチケットを取り出した。

「私達が負ければ?」

「私のお願いを叶えてもらいますわ。」

「よし、乗った！」

「ふあらひもふおつふあほお！（私も乗ったぞ！）」

本当にぶん殴りたいわ！けど言わせて！セシリアが物凄く速い！しかも笑顔で走ってるから本当に怖い！

「チツ！仕方無い！鈴！私に良い考えがある！」

「本当!?!何するの!?!」

「これを使う！」

そう言うとラウラはクリアグリーンズの眼魂を取り出し、鈴に見せた。

「まさか此処で変身するの!?!」

「違う、こうするんだ！」

ラウラは眼魂のスイッチを押し、セシリアに向かって投げた。すると眼魂はパーカーゴーストになった。

「グリム！セシリアを足止めしてくれ！」

グリムは頷きニブシヨルダーを伸ばしてセシリアに向かって放った。

「これでセシリアを足止め出来る！」

「凄いわね！これで逃げ切れるわね！」

しかし、二人の考えは甘かった。何故ならセシリアは自分に放たれたニブシヨルダーを難なく避けた。グリムは負けじと先程より速くニブシヨルダーを放った。だが、今のセシリアには無意味だった。

「フッフ、幾ら速くしたところで関係ありませんわ♪」

「(; 。 ∩。)」

どんなに速く攻撃しようが関係無い。可愛い物が関わっているセシリアは無類の強さを発揮する。

「あら？よく見たらこのパーカーゴーストも可愛いですわね♪」

「…。」

グリムは自身の危機を感じたのか攻撃を辞め、鈴とラウラと共に逃げる事を選んだ。

「グリム!？」

「…。」フルフル

グリムラウラに訴えるように首を横に振っている。パーカーゴーストは泣かない筈なのにグリムは泣きそうになっている。

「誰か助けてー!」

ゲーム終了まで残り二十三分

その頃イチカはと言うと。

「よし！報告書も計画書も完了！早速これを義母さんと束さんに送ってと。」

「イチカく、お疲れく。処で白騎士と白式は何時帰って来るんだく？」

「個別トーナメントには間に合うみ…！」

「どうしたく？イチカく？」

「鈴が大変な事になってるから急いで行ってくる！」

そう言うイチカは部屋を急いで出て行き、鈴が居る所に向かった。

「鈴の嬢ちゃんのピンチが分かるとか人間辞めてるよなく。……あ、半分幽霊だから実質辞めてるかく。さくしてイチカが帰ってくる前に動画でも見るかく。」

ユルセンはイチカが出て行くと束お手製の端末を出し、一つのファイルを選んだ。そのファイルには『二人の再開と初デート』と書かれていた。

「ラウラどうするの!?!この状況!?!」

「…正直打つ手が無い。」

「何で!?!」

「恐らくセシリアは本気を出していない…。」

「…は!? え!? ちよっ! 何で!?!」

「先程からセシリアは私達との距離を保っている。多分セシリアが本気を出せば私達は一瞬で捕まる。」

「そんな!? ちよつとセシリア! あんたは私達に何をお願いするつもりなの!?!」

「そんなの…恥ずかしくて言えませんわ／＼／＼」

セシリアは頬を赤らめ恥ずかしそうに走っている。

「うわああああああん! せしりあがこわいー!」

「鈴!? (鈴のスピードが落ちている!?! このままでは鈴が捕まってしまふ! そうなれば師匠に顔向け出来ない! こうなれば!) 鈴、ちよつと失礼する!」

「ふえっ!?!」

ラウラは鈴を背中に担ぎ、鈴が捕まらないようにセシリアから逃げた。鈴は所謂おんぶをされている。

「フフフ、ラウラさん? 鈴さんを担いでは直ぐに捕まりますわよ。」

「フツ、軍人を嘗めるなー!」

ラウラは先程より速く走り出した。しかしセシリアは。

「ラウラさんが鈴さんをおんぶ、フフフ、ありですわね! ですがそろ

そろ終わらせましょうか。」

セシリアは二人を捕まえる為に本気を出した。そして鈴のピンチを察知したイチカは。

「あれは…ラウラ！」

「！師匠！」

「いちかだ！」

鈴はイチカを見つけるとラウラから降り、直ぐにイチカ抱きついた。

「おっと、よしよし。ラウラ、これって。」

「うむ。一時的に精神年齢がさがっている。」

「…セシリアか。」

「うむ。実はな…」

ラウラは今までの事を説明し始めた。その間イチカはずっと鈴の頭を撫でており、鈴は気持ち良さそうに目を細めていた。

「なるほどな。てか、黒いスーツにサングラスってハン〇ーじゃねえか。何で持ってたんだ？」

「少し前に必要になりましたので購入したのですわ。」

「ふん。……うん？」

「ごきげんよう。イチカさん、鈴さん、ラウラさん。」

イチカとラウラが振り向くとそこには手を胸に当て紳士の様に挨拶しているセシリアの姿があった。

「何時の間に！鈴とラウラに何をやる気だ！」

「決まっていますわ。鈴さんとラウラさんには…」

「…。」

その場には静寂が訪れており、今にも戦いが始まりそうな雰囲気であった。しかし、ある二人の格好があまりにも雰囲気にあっていた。一人は黒いスーツを纏いサングラスを掛けた金髪の少女、もう一人は前にツインテールの少女を抱えて後ろに銀髪の少女を背負っている少年、かなりシニールである。

「これらを着て貰いたいのですわ！」

そう言うときセシリアは何処からか様々な衣装を取り出した。

「メイド服とかアニメのコスプレとかあるじゃねえか。てか着て欲しいなら普通に頼めば良かったんじゃないか？」

「それでは鈴さんとラウラさんと戯れる事が出来ませんもの。」

「相変わらずだな。で？鈴とラウラはどうするんだ？」

「…こわいことしない？」

鈴は怯えながらセシリアに質問した。

「ええ、怖い事はしませんわ。ただ、鈴さん達がこれらを着て私が写真を撮るだけですから。」

「ちけつとは?」

「勿論差し上げますわ。」

「写真は貰えるのか?」

「ええ、必要とあれば。」

「いちかはみてみたい?」

「まあ、見てみたい…かな?」

「じゃあ、きる!」

この後、鈴とラウラは様々な衣装に着替え、写真撮影が始まった。俺は何時までもこんな時間が続くと思っていた。そう、この時までには。俺はこの時、気付く事が出来なかった。俺の心の闇の大きさと深さを。

運命は既に動き出している。 いや、狂い始めている。

二十六話

イチカは黒い霧の様な物に縛られて動けずにただ目の前の光景を見るしか出来なかった。

「た、すけて、イチ、カ…」

「…。」

「辞めろ、辞めてくれ！その子に、鈴に手を出さないでくれ！」

「…。」

イチカの目の前にはボロボロになりながらイチカに助けを求め、鈴とガンガンセイバーを鈴に向けている禍々しいオーラを放っているゴーストの姿があった。

「頼む、鈴だけは殺さないでくれ…」

イチカは泣きながらゴーストに鈴を殺さないように頼んでいる。

「…。」

ゴーストは何も言わずに鈴に向けていたガンガンセイバーを降ろした。イチカは鈴が助かったと安堵した。だが現実はあまりにも非情だった。

「ダイカイガン！ガンガンミナー！ガンガンミナー！」

「なっ!?!」

ゴーストはガンガンセイバーをゴーストドライバーに翳すとガンガンセイバーは禍々しいオーラを纏いゴーストはそれを振り上げた。

「辞めろおおおおおおお！」

「…。」「オメガブレイク！」

ゴーストは鈴に向かってガンガンセイバーを降り下ろした。そして鈴は声も出せずに斬られてしまった。

「うわああああああああ!? ハア、ハア、此処は…。」

イチカは大声を出しながら目覚めた。そして見渡せば自分の部屋だと言う事が分かった。

「また、この夢か…。何なんだあの夢は…。」

「イチカく、またかく?。」

「ああ…。この処毎日同じ夢を見てるな…。」

「何時からだっけ?。」

「確か…。俺が部屋で倒れた日からだな。…すまん、ちよつとシャワー浴びてくる。」

「行ってら〜。」

イチカは着替えとタオルを持ってシャワーを浴びに行った。

(…あの夢は本当に悪夢としか言いようがないな。だけど絶対に、

絶対にあの夢の様にはしない！例え命を落としたとしても鈴だけは救ってみせる！)

イチカはシャワーを浴びながら拳を壁に打ち付け新たに決意した。しかし、一瞬だけイチカから黒い霧の様な物が出てきたが直ぐに消えてしまった。そして次の日

「イチカ…。」

「うん？鈴、どうした？」

「最近何か元気が無いよ？大丈夫？」

「…ああ、俺は大丈夫だ。」

「本当に？」

「ああ、少し疲れているだけだ。だから心配するな。」

「うん、なら良いんだけど…。」

「…ほい。」ギョツ

「フエツ!?イ、イチカ!?!／／／」

イチカは後ろから優しく、そして少し力を込めて鈴を抱き締めた。いきなり抱き付かれた鈴はパニックになっている。

「ほら、そんな暗い顔するなよ。鈴にそんな顔は似合わないし俺は見たくない。だからさ、笑ってくれよ。」

鈴に抱き付いているイチカの顔には微かながら恐怖が浮かんでいた。あの夢と同じ様に鈴が消えてしまうかもしれない、力に溺れて鈴を殺してしまうかもしれない。そんな、もしもの可能性にイチカは恐怖していた。

「…デート。」

「え?」

「だから、デート! 個別トーナメントが終わったらデートに行こう? 丁度セシリアから貰ったチケットもある事だし。それで心配させた事はチャラにしてあげるわ。」

「ああ、個別トーナメントが終わったらデートに行こうな。」

「うん!」

鈴はイチカに笑顔で返事をした。イチカはその笑顔を見ると抱いていた恐怖が薄れていった。

「此処に居られましたか、イチカさん、鈴さん、これを見られましたか?」

セシリアは二人を見付けると一枚のプリントを二人に差し出し、その内容を確認させた。

「何々、『学年別トーナメントのルール変更のお知らせ。今年度より個別戦からタッグ戦にする事になりました。そしてペアの申請は二人揃って教員か生徒会に申請して下さい。なお、ペアが出来なかった生徒はランダムになるので注意して下さい。』へえ、タッグ戦に変わるんだ。」

「セシリアは誰と組むんだ？」

「それは「私が組む。」そう言う事ですわ。」

「意外な組み合わせだな。よし、なら俺達も相方を探すか。」

「そうね。最高のパートナーを見付けて勝ってみせるわ！」

「返り討ちにして差し上げますわ！」

三人はバチバチと火花を散らしていた。しかし、ラウラは三人に向かつてある事を言った。

「？師匠と鈴がタツグを組むんじゃないのか？」

「「……え？」」

「む？違うのか？」

「「アツー!？」」

「何で気付けなかったんだ!? 鈴と組んで無双すれば良いじゃないか！」

「そうじゃない！イチカと組めば優勝出来るじゃない！」

「失念していましたわ!? イチカさんと鈴さんが組むのは必然であり決定事項でしたわ！」

「賑やかになったな。ハムツ」モグモグ

ラウラは三人を見て感想を言いつつ持っていたお菓子を袋から取り出し食べ始めた。袋が六つに増えているのは気にしないでおう。

「よし鈴、今から申請に行くぞ！それとラウラ、今度好きな物作ってやる！」

「ええ！私達のコンビネーションで絶対に優勝を掴みとりましょう！」

「いいえ、優勝するのは私達ですわ！」

「ひいひおう、ふえつはあほ！（師匠、絶対だぞ！）」

イチカと鈴はタッグの申請をしに職員室に向かい、セシリアとラウラはアリーナの使用申請をする為に生徒会室に向かって行った。

二十七話

「はい、分かりました。それではまた後で、はい、ありがとうございます。クロエさん。」

タッグトーナメントが間近に迫る中、イチカはクロエと通話していた。そしてその通話を聞いていた人物が居た。

「(クロエ?まさか!?) 師匠!」

「ラウラ?どうした?」

「さっき電話で話していた人ってもしかしてクロエ・クロニクルって言う名前!」

「(あれ?ラウラってこんなキャラだっけ?) あ、ああ、そうだけど…もしかしてクロエさんを知ってるのか?」

「うん!クロエ・クロニクルは私の姉さんだよ!」

「そう言う事か。道理で似てるわけだ。」

「師匠、私も姉さんに会って良い?」

「ああ、良いと思うぞ?」

イチカは何時もと違うラウラに少々驚いており、少々混乱していた。ラウラはイチカの事を気にする事無く目をキラキラさせていた。そして数十分後。

「お待ちせしました。イチカさん。」

「いえ、此方こそお忙しいのにありがとうございます。」

「これも私の仕事ですから。そしてこれが白式達になります。」

「ありがとうございます。処でクロエさん。」

「何でしょうか？」

「時間ありますか？会って欲しい人物が居るんですけど。」

「時間ならありますけど、会って欲しい人物…ですか？」

イチカは白式達を受け取るとクロエにもう一つの本題を話した。

「ええ、出てきて良いぞ。ラウラ。」

「え？。」

「姉さん！」

「ラ、ウラ？本当にラウラなんですか？」

「うん！本当にラウラだよ！姉さんにまた会えて嬉しいよ！」

「私もです！またラウラに会える日が来るなんて夢にも思いませんでした！」

ラウラは近くの物陰から出てきてクロエに抱き付き、クロエは泣きそうになりながらも優しく受け止めた。二人は嬉しそうに会話しており、再会した事に幸せを感じていた。

(Master、あのクロエ様に似た少女は?)

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ軍の部下に間違った日本の文化を教えられ、模擬戦が終わってから何故か俺を師匠と呼んでいる少女だ。」

(マスターは本当に人気だね♪ハーレムでも作る?)

「ハーレム?まさか、likeは多く居るがloveは今までもこれからも鈴一人だけだ。」

(冗談だったのに普通に返された!?)

「姉さん!?どうしたんですか!?!」

「!?!」

イチカ達が会話しているといきなりラウラの叫び声が聞え振り向くとクロエが倒れていた。イチカは急いでラウラとクロエの元に向かった。

「クロエさん!大丈夫ですか!?!って凄く良い笑顔だな。ラウラ、何があつたんだ?」

「う、うむ、実は姉さんにお気に入りの写真を見せたら鼻血を出して倒れてしまったんだ。」

「写真?何の?」

「これなんだが…」

ラウラがイチカに見せたのは某精霊とデートするライトノベルに登場する左手に眼帯をしたウサギのパペットを着けてウサギをモチーフにした緑の服（分からない方はデート・ア・ライブ 四糸乃で調べて頂ければ分かります。）を着ていたラウラの姿があつた。

「あの時の奴か…クロエさん、ラウラのコスプレを見た感想は？」

「我が生涯に一片の悔い無し！」

「ラウラ、クロエさんなら大丈夫だ。」

「本当!?!なら良かった！」

「ラウラ、心配を掛けましたね。処であの写真を撮った方の名前は何と言うのでしょうか？一度お会いしたいのですが。」

「その写真を撮ったのはセシリアって言うんだよ！」

「呼びましたか？」

「丁度良かった。姉さん、紹介するね！今来たのがセシリア・オルコット。私の友達でさっきの写真を撮った人だよ♪」

「…」ガシッ

「…セシリア、お前の言いたい事は分かる。取り合えず肩を掴む力を弱めろ。さっきから肩がミシミシ鳴ってる。」

「…」ギギギ

「セシリア、今のお前は良い笑顔をしている。それこそ何も知らない男が見たら絶対に惚れる位の良い笑顔だ。それと男は苦痛を欲しがる奴と苦痛を嫌がる奴、この二種類がいる、俺は勿論後者だ。たがらその手を放せ。」

「何なのですか!?!あのラウラさんは!?!天使ですか!?!それとも女神ですか!?!」ギシギシ

「話聞いてたか!?!いい加減に肩から手を離せよ!?!」

イチカの肩は鳴ってはいけない音まで鳴っていた。一体セシリアの何処にそんな力があるのだろうか?!

(何かこう言うのを見ると帰ってきたって感じがするね。)

(そうですね。何時もの風景が戻って来ましたね。)

「やっと放してくれたか…!」

「申し訳ありません…ですが…」

「あのラウラの事だろ?ラウラは超が付くほどのお姉ちゃん大好き子だ。で、多分あれが本来のラウラでクロエさんと別れた寂しさを隠すために俺達が何時も見ているラウラの姿になった。そう言う事だ。」

「何故そんな事が分かるのですか?」

「本人から聞いた。処でセシリア。」

「はい、何でしょうか?」

「クロエさんに甘えるラウラを見た感想は？簡潔にな。」

「初めてギャップ萌に出会えて嬉しかったですわ！」

「うん。分かりやすい感想ありがとう。」

「ラウラ、そろそろ私は帰りますね。」

「うん…。」

ラウラはクロエが帰ると聞いて落ち込んでいた。余程クロエと離れたくないのだろう。

「フフ、心配しなくても大丈夫ですよ。休日になれば家に遊びに来ればまた会えますから。」

「でも私は姉さんの家知らないし…。」

「それなら俺が時間がある時に案内してやるよ。」

「本当か!？」

「ああ、約束だ。それではクロエさん、今日はありがとうございました。た。」

「いえ、此方こそありがとうございます。ラウラ、イチカさん達に迷惑は掛けないように。」

「うん！またね、姉さん！」

クロエはラウラに笑顔で見送られ、FRCへと帰って行った。

(良かったねらラウラちゃんとクロエさんが再開できて。)

「ああ、そうだな。それと白騎士、白式。」

(どうされました？Master？)(どうしたの？マスター？)

「お帰り。」

(はい！ただいま戻りました！)(うん！ただいま！)

イチカの元に白騎士と白式が戻ってきた。だが、

「さてと、目的の物は完成した。後はてめえの闇を解放するだけだ。てめえがどう足掻こうが無意味だ。てめえの運命は消滅、ただそれだけだ！」

『イチカ』が動き始めた。

二十八話

「…ねえ、イチカ。」

「どうした?」

「うんうん、何でもない。」

「そっか。」

現在、イチカと鈴は自分達の試合が始まるまでベンチに背中を合わせ座りながら話していた。しかし、何時もの様な楽しそうな会話ではなく何処か寂しそうにしていた。そして、もう一度鈴から話しかけて来た。

「…イチカはさ、…私の前から突然居なくなったりしないよね?」

「ツ!…いきなりどうしたんだ?」

「ちよつと昨日、嫌な夢を見てね…。」

「夢…か、どんな?」

「…イチカがいきなり居なくなつて、どんなに探しても見付からなくて。それにセシリア達に聞いたたらそんな人は知らないって言うから。だから!」

「鈴。心配しなくても俺は今此処にちゃんと居るし、いきなり居なくなるなんて事はない。だから心配するな。」

「イチカ…。フフ、それもそうね。イチカは今私の後ろに居るし、

ちやんとこうして話も出来る。もうこんな弱気になるのは辞めたわ。」

イチカは鈴を落ち着かせる為に手を握りながら優しく返事をした。それを聞いた鈴は何時も通りの雰囲気になっていた。イチカと鈴は互いの顔が見えないが気付いていた、互いに笑顔になっている事に。

「さて、そろそろ時間だし行くか。」

「そうね。それとイチカ。」

「分かってる。」

「背中には任せた!」

二人は立ち上がり顔を合わせずに拳を軽くぶつけ合った。互いに信頼し合っている二人にはこれだけで十分であった。

「あの小娘のせいで一夏は変わってしまった!本来一夏の隣に居るべきなのはあの小娘ではない!この私だ!待っててくれ一夏、私がお前をあの小娘から救ってみせる!」

篠ノ之は人気の無い所で決意をしていたがその決意は無駄だと言う事を知らない。何故ならイチカは何も変わってはおらず、既に多くの人に救われているからである。

「一夏、お前は私が居て初めて幸せになれる。そして今お前が感じている幸せは偽りの幸せだ。お前の事をよく知っているこの私がお前を戻して共に幸せになろう!」

篠ノ之の考えはどうやったたら出てくるのだろうか? 幸せは他人が

決める物ではなく、本人が決める物である。篠ノ之の考えはただ自分が幸せになる為だけの幻想に過ぎない。

「セシリア、ちよつと良いか？」

「何ででしょうか？」

「私達は何故こんなにゆっくりとお茶を飲んでいるんだ？次の相手は確実に師匠と鈴だぞ？」

「だからですわ。」

「？.どう言う事だ？」

「焦って何時も通りの力を出せないよりリラックスして何時も以上の力を出した方が良いではありませんか。」

ラウラとセシリアは現在自分達の試合が終わり、ゆっくりとティータイムを楽しんでいた。ラウラは茶請けに手を伸ばしながらセシリアに質問した。

セシリアはカップを静かに置き、ラウラの質問に答えた。ただ質問に答えただけが今のセシリアは一つ一つの行動が優雅に見えた。これが本来のセシリアの姿なのであろう。

「そう言う事か。ならば私も今はこの時間を楽しむとするか。話は変わるが師匠達とはどうやって闘うつもりだ？」

「その事なのですがこれを使いますわ。この日の為にイギリスから許可を貰いましたわ。」

「なるほどな。私もこれを使ったかったが許可が降りなくてな。」

セシリアとラウラはそれぞれ眼魂を取り出した。セシリアは金色、ラウラは青色の眼魂であった。おそらく二人の持つ眼魂の中で最も強力な眼魂だろう。

「それは残念ですわ。処でラウラさん。」

「何だ？」

「ラウラさんはイチカさんをお願い出来ますか？私は鈴さんを対処いたしますわ。」

「良いのか？」

「ええ、今回の私の仕事はサポートですから。」

「了解した。次の試合は絶対に勝つぞ！」

「ええ！あのお二人に私のチームワークを見せて差し上げますわ！」

二人は自分達の目標を越える為に手を組みイチカと鈴に牙を向く。しかし

『寄越せ、彼奴を倒す為の力を寄越せ！』『力が欲しいなら全てを否定しやがれ！』『本当にすまない、僕がああの際にちやんと知らせていれよ。』『天照さんは何も悪くないですよ。悪いのは俺の心の弱さなんですから。』『…警告だ。もう一度倒す為だけに使えば君は存在が消えてしまうよ。』『消える覚悟ならもう出来てます。』

様々な思いや真実が渦巻く学年別タッグトーナメントが遂に始ま

二十九話

「二人とも頑張れよう。」

「ありがとう、ユルセン。イチカ、絶対にあの二人に勝とうね。」

「ああ。それとセシリアは任せた。」

「勿論よ、あの時のリベンジを果たして優勝は私達が貰うわ。あ、そうだ、先に墜ちた方が奢られるっていうのは？」

「乗った。ま、墜ちる気はないけどな。」

「そうね。」

二人はセシリアとラウラに対して静かに闘志を燃やしていた。いや、楽しみにしていると言った方が正しいだろう。しかし、それはセシリア達も同じである。

「さて。」

「アーイー！バッチリミナー！バッチリミナー！」

「変身。」

「開眼！白式！白き翼！掴むぜ夢！目指すは空！」

「来て、甲龍！」

イチカはゴースト白式魂になり、鈴は甲龍を纏って戦闘準備が完了した。

二人がアリーナに出ると既にセシリアとラウラが待っていた。し

かし、何時もと違う処が一つだけあった。それはセシリアがスペクターに変身しているということだ。

「……」

四人は何も喋らず、ただ勝つべき相手を睨んでいた。そして四人の放つプレッシャーにアリーナの観客席にいる人々も何も喋れずに居て、アリーナ全体が静寂に包まれていた。

「3…2…1…試合開始！」

静寂を破つたのはカウントダウンを数えた機械的な音声であった。そして四人は試合開始の合図と共にそれぞれの相手に攻撃を仕掛けた。

観客達はまたもや喋れなかった。理由は簡単である。四人の闘いはレベルが想像以上に高く、全員が驚いているからである。

「はやり鈴さんは成長が速いですわね！もはやその成長スピードは脅威その物ですわ！」

「ありがと。ま、取り合えずあの時のリベンジで勝たせてもらおうわ！」

「フフ、勝たせると思いますか？」

「ハッ！余裕なのも今の内よ！喰らいなさい！」

「ッ!?!これは…なるほど。」

セシリアは鈴が何をしたかを理解した。あの時と同じ見えない斬撃。そう、イチカが使用している斬撃波を鈴が放ったのだ。

「まさか鈴さんもそれを使えるとは、驚きましたわ。しかもこんな短時間で。しかし！勝つのは私ですわ！」

「！（一発なら避けられる！）ツ!?!」

セシリアはエネルギー弾を一発放ち鈴はそれを回避した。だが、エネルギー弾が拡散して鈴に幾らか当たってしまった。

「やはり全ては当たりませんでしたか。」

「拡散するなんて誰も考えないわよ、普通。」

「そうですか？それよりも名残惜しいですが…ファイナーレと参りましょう。」

「アイー！バッチリミロー！」

「！させるかああああああ！」

セシリアは金色の眼魂をセットし、鈴はゴーストチェンジを阻止しようとしてセシリアに斬りかかった。しかし少しばかり遅かった。

「言ったはずですわ。ファイナーレに参りましょうと。」

「開眼！ジャンヌ！勝利の女神！いざ参らん！」

セシリアは金色のパーカーゴーストを纏い、ガンガンハンドの代わりに金と蒼のカラーリングをした槍を持っていた。そしてセシリアが動いた。

「え？」

「探し物は後方にありますわ。」

「!?」

鈴が後ろを振り向くと左手に持っていた筈の双天牙月の片方がアリーナの壁に刺さっていた。

「(攻撃が：見えなかった!?ならセシリアに攻撃をさせないだけよ！)」

鈴はセシリアのゴーストチェンジによつて窮地に陥ったが鈴の闘志はまだ消えていなかった。

そしてイチカとラウラの闘いは。

「やはり師匠との闘いは心が震える！しかしネクロムが使えないのが惜しい！使えれば更に喜びを味わえるというのに！」

「相変わらずの戦闘狂だな！ラウラ！」

「戦闘狂か、それは私にとって誉め言葉だ！そして師匠に勝って姉さんに一杯撫でて貰うんだああああ！」

「後半は関係ないだろ!？」

話ながら斬り合っていた。そしてラウラは斬り合っている最中、ずっと笑顔でイチカとの闘いを楽しんでいた。

「(守っていてもラウラ相手には無意味か…。だったら!)」

イチカは持っていた盾を収納し、ガンガンセイバーを二刀流モードにしてラウラの背後に回り込んで斬りかかった。

「…(速い!?!なるほど、師匠のこの姿はスピード特化というわけか!ならば!)」

ラウラは左目に着けていた眼帯を外し、イチカの攻撃を防いだ。眼帯を外したラウラの左目は紅ではなく、金色だった。

「(反応速度が上がった?金色の目に何か秘密があるか?だったらその反応速度を越えるまでだ!)」

「ダイカイガン!白式!オメガドライブ!」

イチカはオメガドライブを発動しトップスピードでラウラに斬りかかった。イチカのスピードは凄まじく誰も目で追えない程であり、観客席にいる全員がイチカの勝利を確信した。しかし。

「ズドン!」という大きな音がアリーナ中に響き渡った。その音の正体はイチカがアリーナの壁に衝突した時の音であった。

「イチカ!」

「余所見している場合でしょ?」

「しまっ!?!」

イチカを心配し、隙が出来た鈴をセシリアは槍で風ぎ払った。この時のセシリアとラウラは圧倒的な強さであった。この二人の強さの秘密はセシリアが使ったジャンヌゴースト眼魂の『自分と味方のステータスを格段に上げる』という能力のお陰である。そしてこの時、

二人は自分達の勝利を、観客席に居るほとんどの人はセシリア達の勝利を確信した。

しかし誰も気付いていなかった。試合終了を告げるアナウンスがまだ鳴っていない事に。

「ダイカイガン！白式！オメガドライブ！ダイカイガン！白式！オメガドライブ！ダイカイガン！ガンガンミナー！オメガスラッシュ！」

「ッ!？」

「ラウラさん!？」

膨大なエネルギーを纏った斬撃波がラウラを直撃した。ラウラはジャンヌの能力で防御力も上がっているが五分の一まで削られてしまった。

「オイオイ、まだ勝負は終わってないからな？」

「師匠!?!いや、例えまだ動けるとしても師匠のシールドエネルギーは既に一割も無い!この勝負は私達の勝ちだ!」

「シールドエネルギーが一割も無い?ハッ!知った事か!これ以上攻撃を受けなければ良いだけの話だ!そうだろ!鈴!」

「!?!鈴さんが居ない!?!」

「!セシリア!上だ!」

「ッ!?!」

「どう？最大火力の龍砲は？」

「以外と効きましたわ…。」

「良かった♪さて、決着の時よ！イチカ！」

「ああ！」

「「此処からは俺達の（私達の）ステージだ！」」

「「ッ!？」」

イチカと鈴はそれぞれセシリアとラウラに攻撃を仕掛けた。そこからは凄まじい光景であった。イチカは残像が見える程の速さでラウラを連続で斬り、鈴は荒々しい攻撃をセシリアに叩き込んでいた。イチカ達の攻撃を連続で受けているセシリア達のシールドエネルギーはどんどん削られていった。幾らステータスが上がっていたとしても攻撃、防御、回避等が出来なければ意味がない。

（これが師匠の力か！だからこそ、だからこそ私は師匠に勝ちたい！）

『願うか？汝、自ら変革を望むか？より強い力を欲するか？』

（？その力は師匠に勝つ事が出来るのか？）

『可能だ。後は汝が望むだけだ。』

（ならば寄越せ。師匠に勝つための力を私に寄越せ！）

Damage Level…D.

Mind Condition:Uplift.
Certification:Clear.
《Valkyrie Trace System》:boot

イチカはラウラから嫌な予感がし、直ぐに離れた。するとラウラのシユヴァルツエア・レーゲンが黒い泥になり姿を変え始めた。

「ラウラ！」

「師…匠。」

ラウラは黒い泥に完全に飲み込まれ、一体のISの姿になった。誰もがその姿に見覚えがあった。

「！（まさか…。）」

「！イチカさん！あれはヴァルキリー・トレース・システム、通称V Tシステムですわ！ですから急いで救出しなければラウラさんの命が！」

セシリアはイチカにあれが何なのかを教えたがイチカの耳には残念ながら届いていなかった。

「暮…桜！」ドクン！

イチカがあれの正体が暮桜と解ると直ぐに攻撃を仕掛けた。だが、防がれた。

（まだまだ！まだ足りない！）

イチカは攻撃を続けるが全て防がれた。そして防がれる度に思い

が強くなっていった。

(彼奴だけは、暮桜だけは絶対に倒す！)

(おいイチカ!?それだけは駄目だ！)

ユルセンがイチカを注意するが既にイチカは暮桜を倒す事しか頭になかった。

(寄越せ、彼奴を倒す為の力を寄越せ！)

(力が欲しいなら全てを否定しやがれ！)

(彼奴を倒せるなら何だってしてやる！)

(なら受け取りやがれ！)

イチカから一つの眼魂が出て来てイチカはそれを掴んだ。その眼魂は黒と紫のカラーリングで禍々しいオーラを放っていた。

(辞めろ！イチカ！)

(Master！)

(マスター！)

ユルセン、白騎士、白式がイチカを止めるが無意味であった。

「ディザスター！アーイ！バッチリミナー！バッチリミナー！開眼！ナイトメア！見える悪夢！希望は絶無！飲み込むぜ全部！」

不気味な音声と共に紫色のパーカーゴーストが現れ、イチカはそれを纏った。その姿は禍々しく『闇』と表現した方が良さだろう。そしてもう誰の声もイチカには届かない。

再びイチカは暮桜に攻撃を仕掛けた。そして拳が暮桜を捕らえ、中からラウラを引きずり出した。

「!？」

「…。」パチン

「「え？」」

イチカが指を鳴らすと鈴、セシリア、ラウラが黒い球体に包まれ気が付けばISを解除された状態で観客席に居た。

更にイチカが静かに手を振るとアリーナのシールドが黒い霧に包まれ観客席から何も見えなくなった。

「鈴さん！私はラウラさんを保健室へ運びますので鈴さんは第二ピットに向かってください！」

「了解！（イチカ、一体何があつたの？さっきのイチカはイチカらしく無いよ？まるで何かに支配されてるみたいだったよ？）」

鈴はイチカを心配しながら多くの人を掻き分けて第二ピットに向かった。

「…。」

イチカはラウラを引きずり出してもなお動き続ける暮桜をただ攻撃していた。そしてイチカはゴーストドライバーのトリガーを四回引いた。

「ダイカイガン！ナイトメア！オオメダマ！」

ゴーストドライバーから巨大な眼魂が出て来てイチカはそれを蹴り、暮桜に叩き込んだ。巨大な眼魂は爆発しシュヴァルツエア・レーゲンが解除されたラウラだけが残っていた。

「…。」ドサツ

イチカは強制的に変身が解け倒れ、アリーナのシールドから黒い霧が無くなった。

「イチカ！」

鈴はアリーナに出ると倒れているイチカを発見した。直ぐに駆け付けると息があることに安堵した。しかし、その光景を見ていた『イチカ』は

（チツ！あの銀髪を助けたっ事は完全に全てを否定していないって事か。まあ良い、てめえにあれを使わせる事が出来ただけでも良しとするか。それにてめえは残された道は消滅。ただそれだけだ！）

三十話

あの時、私は何も出来なかった。その結果が私の目の前で三日も目を覚まさないイチカだ。

悔しい、イチカを助けるために代表候補生になったのに逆に助けられてばかりいる。ねえ、イチカ？イチカがして欲しい事をやってあげる。だから

「起きてよ、イチカ。起きてまた一緒に沢山話そうよ。一緒に笑おうよ。一緒に出掛けようよ。」

鈴はイチカに一生懸命語りかけていた。悔しさと寂しさで涙を流しながら。

「…鈴？」

「！イチカ！大丈夫なの!？」

「ああ、少しばかり体がきついが俺は大丈夫だ。」

「そっか、良ッ!？」

イチカは倒れて三日目に目を覚ました。イチカが言った通り少しばかり体がきつそうだが何とか大丈夫そうであった。しかし、鈴はあることに気が付いた。

「イ、イチカ!？そ、その目どうしたの!？」

「目?。」

「イチカの左目が紫色になってるよ!？」

イチカの左目は鈴が言った通り紫色に変わっており、所謂オツドアイと呼ばれるものになっていた。そしてその左目は呑み込まれそうな程深く、恐怖を覚える程美しかった。

「本当だ。目が紫になってる。けどちゃんと見えるから大丈夫だろ。…鈴、悪いけどユルセン達を呼んできてくれないか？」

「？わかったわ。」

この時、鈴はイチカに対して違和感を感じていたが急いでユルセン達を呼んでくる事にした。

「そこに居るのは解っていますよ。天照さん。」

「…何時から気付いていたんだい？」

「俺が目覚めた時からですよ。そしてゴーストの制限の話ですよね？」

「ッ!?!何故それを!？」

「もう一人の俺に教えられました。俺の状況、彼奴が何なのか、そしてゴーストの制限の事。」

「(もう一人の俺？彼奴？)本当にすまない、僕があの時ちゃんと知らせていれば…」

「天照さんは悪くないですよ。悪いのは俺の心の弱さなんですから。それにあの時、制限の事を聞いていれば確実に混乱していたと思います。」

「イチカ君……。警告だ。もう一度倒す為だけに使えば君の存在が消えてしまうよ。」

「消える覚悟ならもう出来ています。」

「ッ!?まさかイチカ君、君は……」

天照は気付いてしまった。イチカからある物が欠けている事に。

「恐怖を感じなくなっているのかい!？」

「そうですね。恐らくこれを使ったからだと思います。」

そう言うイチカはあの禍々しい眼魂を取り出し、天照に見せた。

「(!?何なんだこの眼魂は!?禍々しいっていうレベルじゃない!？」

むしろ闇その物って言われた方がまだ納得出来るよ!これ以上この眼魂をイチカ君に持たせる訳にはいかない!）イチカ君、その眼魂は危険すぎるから僕に預けてくれ。」

「解りました。どうぞ。」

「ありがッ!？」

イチカは眼魂を差し出し、天照が受け取ろうとすると眼魂がその手を拒絶した。

「天照さん!？」

「大丈夫だよイチカ君。（拒絶した?という事はイチカ君しか触れ

る事が出来ないのか?)…不本意だけどそれをしばらく預かってくれないか?それは僕にはどうする事も出来ないみたいなんだ…。」

「解りました。」

「ありがとう。後、出来るだけそれは使わないで欲しい。事が起こってからでは遅いんだ…。じゃあ僕は仕事に戻るね。」

「はい、ありがとうございます。」

天照はイチカと別れ仕事に戻っていった。そしてイチカは鈴が戻ってくるまである事を考えていた。

(俺の運命には逆らえない…か。ならその運命を覆してみせる。例え俺が全てを失ったとしても。それと天照さん、貴方に一つだけ言っていない事があります。)

イチカは何も言わず三つの眼魂を取り出し、眺めていた。その三つ全てが白く、元はムサシ、エジソン、ロビン・フッドの眼魂だった物だ。

(それにしても此処に白騎士と白式が居なくて助かったな。さつきの話が聞かれてたら余計な心配を掛けるかもしれないな。)

イチカが眼魂を仕舞うと鈴がセシリア達を連れて戻ってきた。そこにはラウラの姿もあり、イチカは安堵した。そしてユルセンの話では二つの端末にスクール達からの連絡が届いていたそうさ。

俺は沢山の人に助けられた。弾、数馬、束さん、天照さん、義母さん、秋姐、マドカ、クロエさん、永久さん、セシリア、山田先生、簪、黒姫先輩、ラウラ、シャルロット、こんな俺を助けてくれて本当にあ

りがとう。

そして鈴。何時も俺の隣に鈴が居てくれたから絶望せずに居られた。俺は鈴と一緒にいるだけで本当に幸せだ。だからこそ俺は鈴の幸せを望む。なあ、鈴？鈴にとつて本当の幸せって何なんだ？

少し時間を戻しイチカが目覚める二日前の事

♪♪♪「電話？誰からだろう？今イツ君は意識不明だし…もしかして蒼夜君!?!…チツ。はい、皆のアイドル、束さんだよ。(棒)」

「…切りますよ。」

「私としては早く切って欲しいんですけど？」

「ま、今回は許しますよ。」

「話聞いてた？此方は早く切りたいんですけど？」

「姉さんに頼みがあります。私だけの力をください。私が一夏の隣に立つ為の力を。」

「お断りするよ。君は代表候補生でも無ければ国家代表でも無いからね。それに私は今忙しいんだよ。後、IS は本来、宇宙に行くための翼であつて自分の欲望を叶える為の道具じゃないよ。じゃあね。」

「待ってください！私は貴方の被害…」

「ふう、被害者？それは此方の台詞だよ。偽りの白騎士のお陰でISは間違つた方向に使われたんだから。」

三十一話

「鈴、大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ。それにしてもイチカはバイクの運転上手だね。」

現在、イチカと鈴は一緒にバイクに乗って出掛けていた。勿論二人乗りなので必然的に鈴がイチカ抱き付いている。正直、羨ましい限りだ。

「まあな、免許取ってからにはよくこれで出掛けてたし、FRCで壁とか天井とかを走らされたからな。」

「えっ!?!何それ!?!」

「このバイクの開発者は束さんって言えば解るか？」

「ああ、成る程ね。確かにそれなら壁とか天井を走れるわね。」

「だろ?ま、こういう出掛ける時には重宝するし、こうやって可愛い彼女を後ろに乗せて一緒に出掛けれるから本当にありがたいよ。」

「ツ!?!///ありがと:~///」

イチカの不意打ちを聞いた鈴は、顔を真っ赤にしながら小さな声でイチカに「ありがと」と言った。しかし、鈴はイチカと密着している訳であり、しっかりイチカの耳に届いていて、イチカも顔を赤らめていた。

「と、取り合えず目的地に急ぐぞ!///」

「うん！」

消滅する事を覚悟を決めたイチカと、イチカを助けられて無いと後悔する鈴。何時も通りであり、何時も通りじゃない非日常。二人が行き着く結末は一体どうなるのだろうか？

因みに余談ではあるが二人を見ていた男性達は目から血の涙を流し、女性達は羨ましそうに見ていた。

「到着つと。さて、行くか。」

「そうね♪そう言えばイチカは水着どうするの？」

「うーん、一応PRCで支給されてる奴があるにはあるんだけどデザインがな…。」

「どんなデザインなの？」

「…トランクスタイプの水着に小さくFRCの文字と幽霊とウサギの可愛らしいイラストが大きくプリントされた奴。」

「あー、確かにイチカがそれを履くなんて想像出来ないわね。」

「な？それで鈴はどうするんだ？」

「私はイチカに選んで欲しいんだけど…。」

「わ、わかった。／／／」

二人は水着コーナーに向かった。そして水着コーナーに着くと見覚えのある二人が買い物をしていた。

「何だ、ラウラとシャルロットも来てたのか。」

「二人も水着を買いに来たの？」

「む？師匠と鈴ではないか。ああ、その通りだ。」

「うん？あ、やつほく、神速の翼と鬼神の刃。」

「ちよつと待て!？」

イチカと鈴は周りの人達の迷惑にならない様に小さな声で叫んだ。

「何そ…何なのですか!?!その中二病全開のあだ名は!?!」台詞取られた…。てかセシリア!?!」

「セシリアも来たんだね。後、この二つのあだ名はタッグトーナメントから付いた二人のあだ名だよ(笑)面白そうだからこのあだ名で呼ぶ事にしたんだ(笑)それに、二人の顔が赤くなるのは見てて飽きないからね♪」

((黒い…、黒い金が居る!))

「成る程!これが師匠と鈴の二つ名という奴か!ならば私も呼ぶべきだろうか?」

「ラウラ…ケーキ。」

「うむ、師匠達はこれからも普通に呼ぶとしよう。」

((買収!?!))

「…チッ！」

(舌打ち!?)

一同はシャルロットの黒さが分かった処でそれぞれの買い物のためにイチカ、鈴、セシリアは水着コーナーに残り、シャルロットとラウラは洋服コーナーへと向かって行った。

「イチカく、これとこれ、どっちが良い？」

「うくん。」

右手に持っている奴はフリルの付いたワンピースタイプの水着、左手に持っている奴がビキニタイプの水着か…。正直どちらも似合っいそうだな。

ワンピースなら鈴が持つ可愛らしさをより引き立たせる…。あれ？天使じゃね？

ビキニなら鈴の健康的な体が露になって可愛いというより綺麗な方が合うか…。あれ？此方は女神じゃね？でも、どちらを見たいと言われればどちらも見たい！いや、何時もとは違う綺麗な方の鈴も見てみたい！いや待て!?!そんな邪な考えで決めて良いのか!?!

「私はイチカが見たい方を着たいんだけどイチカはどっちを見たい？」

「なら、ビキニタイプの奴かな。」

鈴の水着の事で考える事、僅か0.2秒。鈴の言葉により、イチカは迷わずに即決した。

「分かったわ。じゃ、支払いしてくるね。」

「ああ、なら俺は自分のを選んで待ってるな。」

「私が選んじやダメ？それに今回は私の奢りっていう約束だよ？」

「(しまった…。すっかり忘れていたな…。)分かった、なら鈴の支払いが終わるまで待ってるよ。」

「うん♪」

そう、今回の支払いは鈴である。皆を心配させた罰としてイチカは奢られる立場となったのだ。普通は逆であるが二人は関係の無い話である。

「あのくすいません、少し良いですか？」

「はい、俺に何の用でしょうか？って秋姐かよ。久し振り。」

イチカが振り向くとそこに居たのは秋姐事、皆の姉貴のオータムであった。

「よっ、てか本当に左目が紫になってオツドアイになってんだな。マドカが見たら絶対に発狂するな。」

「？何でマドカが発狂するんだ？」

「うん？知らないのか？マドカは中二病患者だぞ。」

「…は？ごめん秋姐、今聞こえちゃいけない単語が聞こえたんだが…。え？何？中二病？何時から？」

「九歳の時から。因みにP R Cが開発する物全てのデザインを担当しているぜ。」

「予想以上に早い!? ってデザイン担当!? 俺のバイクや支給される水着もマドカが?」

「yes!」

「マジか…。」

イチカは衝撃の事実によくショックを受けていた。それもそうだろう、実の妹が自分の知らない内に中二病患者、兄としては複雑な気分だろう。

「イチカく、お待たせく。」

「おう。しかし時間掛かったな。」

「レジが混んでてね、それよりもこの人は?」

「俺は巻紙オータム。イチカの姉的存在で、P R Cの総合責任者をやってる。そして可愛い物が大好きだ! ま、これから宜しくな、イチカの彼女。」

「はい! あ、私の事は鈴って呼んでください。」

「おう、なら俺の事はオータムで良いぜ。そんじや、俺はこれから用事があるから行くわ。じゃあな、二人とも。」

オータムは手を振りながらイチカ達と別れた。その姿は男らしく

殆どの女性が見惚れていた。そして二人はイチカの水着を選んで購入し、少しばかりブラブラしていると弾、数馬、蘭と再開し茶化されたり笑いながら話をした。そして。

「ねえ、イチカ。話したい事があるから彼処に行つて欲しいんだけど…良い？」

「…了解。」

鈴の願いにイチカは鈴の顔を見てただ短く返事をした。いや、そうするべきだと鈴の表情から感じたからだ。

イチカは来た時の様に鈴を後ろに乗せて、あの場所に向かった。イチカ達の思い出の場所へと。

「それで話つて？」

「…イチカはさ、私と居て楽しい？勿論私はイチカと居るだけで楽しいし、幸せだよ。でも…。」

「でも？」

「…時々、本当に私がイチカの恋人で良いのかなって思う時があるんだ。」

「ッ!?!…何でそんな事言うんだ？」

イチカは鈴の言葉に驚き、自信を落ち着かせながら鈴に疑問をぶつめた。それもそうだろう、いきなり恋人にこんな事を言われれば当然の反応だろう。

「…私ね、イチカを理不尽な事から守るって心に決めてたんだ。で

も現実には助けられてばかり、それ処かイチカが傷つくばかり！何で！何でイチカばかりが傷つかなきゃいけないの!？」

「…。」

「イ、チカ？」

イチカは、今にも泣きそうになっている鈴を何も言わずに優しく抱き寄せた。鈴は訳が解らず、ただイチカの名前を呼ぶ事しか出来なかった。

「ありがとう、こんな俺をそんなに思ってくれて。だけど助けられているのは俺の方だ。鈴が居てくれたから今の俺があつて、鈴の笑顔を見るたびに鈴が恋人で良かったと実感するんだ。

だから、これからも一緒に俺と居てくれないか？」

「で、でも、私が居たら迷惑になるよ？」

「今まで鈴と居て迷惑だと思つた事は無いし、これからも絶対に無いよ。」

「何気無い事で泣くかもしれないよ？」

「その時は泣き止むまで鈴の側に居るよ。」

「今まで以上に甘えるかもよ？」

「好きなだけ甘えれば良いさ。鈴の気が済むまで、幾らでも。」

「…ずるいよ。そんな事言われたらイチカと離れられないじゃない…。」

「泣いてるのか？」

「泣いて、無いよ。けど、もう少しこのままで居させて。」

「ああ、時間の許す限りこのままで居るから。」

鈴は泣いていないと言っているがイチカは、鈴が泣いている事に気付いている。しかし、それを言わずにただ優しく鈴を抱き締めている。

だが、運命の歯車が止まる事は無く、最悪の結末は既に迫っている。イチカは最悪の結末を覆す事は出来るのだろうか？

三十二話

「…。」

イチカはバスに揺られながら何時も通り、静かに本を読んでいた。いや、一部だけ違う所があった。それは、右手首に付けられている赤い龍を象ったブレスレットであった。

「海だー!」

クラスメイトの一人がトンネルを抜け、海が見えると叫びだした。イチカはその叫び声を聞くと読書を止め、窓の外に映る海を見た。

「…綺麗だな。」

「そうですね。何処までも青く、ゆつくりと揺られていますわね。処でイチカさん。」

「うん?」

「そのブレスレットはもしかや鈴さんからの贈り物でしょうか?」

「その通りだ。だけどよく分かったな?もしかして鈴から聞いたのか?」

セシリアが言った通りで、イチカが付けているブレスレットは先日、鈴からの贈り物であり、鈴との思い出の品でもありと同時に鈴の自分に対する想いを聞いた証拠でもあり、もう一度鈴を守ると誓った証でもある。

「いえ、鈴さんに聞いたのではなく、イチカさんが嬉しそうにしてい

て、そのブレスレットが目に入ったのでもしやと思ったのですわ。」

「そう言うセシリアも嬉しそうにしてるけど何か良い事でもあったのか？それで何でカメラを持ってきているんだ？」

「フフ♪私にも凄く良い事がありました、ついテンションが上がってしまったのですわ♪それとカメラは淑女の嗜みであり、美しい海（をバックに可愛らしい天使達）を撮るためですわ。」

「成る程な。（セシリアの顔が少しばかり危なくなっているのは見なかった事にしよう。）」

（ああ、早く着いて欲しいですわ。海と言えば天使達の水着姿！そして海で戯れる天使達の姿はまさに樂園《エデン》！先日から可愛さを増した鈴さんを筆頭に学園公認のマスコットとなっているラウラさん！第二のマスコットとなりつつある本音さん！三人に遅れを取らない簪さん！そしてまだ見ぬ天使達！今日は貴女方を狙い撮らせて貰いますわ！）

ビクッ 『!?!』（何この嫌な寒気!?!）

バスに乗っていたほぼ全ての少女達は謎の寒気に襲われてしまった。その正体は言わずとも一人しか居ない。セシリアだ。

そのセシリアのキャラが崩壊している様に思えるが普段の彼女の心の中は何時もこの様な感じである。まあ、感情が高まれば暴走してしまうが。

（それにしてもユルセン達は何れだけ海を楽しみにしてたんだ？ユルセンはまだしも白騎士達も昨日は騒ぎまくって今は普通に寝てるし。ま、と言う俺も知らない内に浮わっているみたいだしな。）

「師匠！しおりに海で自由時間と書かれているが一体どんな訓練をするんだ!?!そして海ではポロリがあると聞いたがポロリとは一体何だ!?!」

「…。」

イチカとセシリアはラウラの台詞を聞いた瞬間に絶句してしまった。主に後半の台詞にだが…。そして、三人のやり取りを見ていた一人の少女が笑いを堪えていた。

「ラウラ、ちよつと待ってる。」

「?うむ。」

「…シャルロット、今度はラウラに何を吹き込んだんだ?」

「吹き込んだなんて聞き捨てならないなく(笑)僕はただ、ラウラに楽しい事を教えただけだよ(笑)」

それとも…やるかい?ペドフェリア君♪」

「ああ?もしかして挑発しているつもりか?なら、その挑発に乗ってやるよ。快樂主義者?」

「イチカさん、落ち着いてくださいな。売り言葉に買い言葉ではないけませんわ。」

「別に僕は二対一でも構わないよ?ね♪変態淑女さん♪」

「ああ?後からフルボッコにされて、泣いて後悔しても知りませんわよ?男装腹黒少女さん?」

「ハハ♪面白い冗談だね？なら、僕は二人をこれでもかと言うほど泣かせて、その泣き顔を永久保存してあげるよ♪」

最近、ますますシャルロットが黒くなってきているが、これでもまだ押さえている方だ。何故なら、彼女が本気を出せば 台詞の九割が規制が掛かってしまうからだ。

さて、そろそろ目的地に着く頃だろう。だが、着いたとしても一悶着は免れないだろうが…。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘です。皆さん、きちんと挨拶をしてくださいね。」

『宜しく願いしまーす！』

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があつてよろしいですね。」

歳は三十代くらいの、しつかりとした大人の雰囲気を漂わせる女性がいチ力達全員を出迎えた。

「それで貴方が噂の？」

「イチカ・ミュールです。この度はご迷惑を掛けるかもしれませんが宜しく願います。」

「いえいえ、そんな。それにこの仕事は私達の生き甲斐ですから、困った事があれば何でも言ってく下さいね。」

「ありがとうございます。」

旅館の方への挨拶が終わり、生徒達は部屋へ荷物を置きに向かっ

た。やはり、海での自由時間が楽しみなのであろう。殆どの少女達が
急ぎ足で移動していた。イチカも移動しようとするすると本音が話し掛
けてきた。

「ね〜ね〜、イツチ〜。」

「のほほんさん？どうしたんだ？」

「イツチーの部屋って何処にあるの〜？しおりに書いてなかったか
ら気になったんだ〜。」

「俺の部屋？確か山田先生と同じ部屋だった筈だけど。」

「ほえ〜、そうなんだ〜。」

「それはそうと友達が待っているんだろ？急がないと自由時間が無
くなるぞ。」

「は〜い。それにしてもイツチーってお父さんみたいだよね〜。
イツチーの事、お父さんって呼んでみて良い〜？」

「同じ年の娘が居てたまるか。それにのほほんさんのお父さんが泣
くぞ？ほれ、回れ右して友達の所に行ってこい。」

「は〜い。」

本音を見送ったイチカも着替えるために更衣室に向かった。しか
し、更衣室に向かう途中で様々な話が聞こえてきたが、イチカはあま
り気にせずにスルーしながら移動した。

三十三話

「チッ！二対一で相手しているのに圧倒するとか化物か!?てか彼奴どんな身体能力してんだ!？」

「それに全くと言っていい程隙がありませんわ!? 一体何をしたらあんな覇気を纏えるのですの!？」

イチカとセシリアは目の前の倒すべき相手に二対一というアドバンテージがありながらも苦戦していた。しかし、二人はまだ諦めておらず、何か打開策が無いかと考えていた。

二人が打開策を考えていると、対戦相手、いや、シャルロットが狂喜に包まれた黒い笑みを浮かべながら見ており、やがて口を開いた。

「アハッ♪それだよ、その顔だよ！僕は二人のそんな顔が見たかったんだよ！やっぱり人が悔しそうな顔を見てるだけでゾクゾクするよ！でも僕は思うんだ♪人が一番綺麗になる瞬間は恐怖を抱きながら泣く姿だつてね♪」

それはそうと次は君達の攻撃だよ♪折角のチャンスなんだから無駄にしない様にね♪」

(セシリアどうする？彼奴完全に俺達を馬鹿にしているぞ?)

(そうですね…、先に私が先陣を切り、この状況を打開しますわ。なのでイチカさんは防御に徹してくださいまし。)

(了解だ。)

イチカとセシリアはアイコンタクトで作戦を決め、直ぐ様実行に移した。イチカはシャルロットを睨みながら腰を低く構え、セシリアは目を閉じ、精神統一をしていた。

やがて、セシリアは目を開き、イチカと同じ様にシャルロットを睨み、ゆつくりと構えた。そして、セシリアは美しいフォームで見事なジャンプサーブを決めた。しかし、シャルロットは素早く移動し、難無くボールを返した。だがシャルロットは返したボールを追い、そのボールを真上にトスした。そして一旦下がりが、助走を付けて鋭いスパイクを打った。だが、イチカも負けじとシャルロットが打ったスパイクをレシーブし、上がったボールをセシリアが打つ。

「へえ、さつきよりも上手くなってるね♪なら僕ももう少し本気を出そうかな！それに速く終わらせて君達の泣く姿が見たいからね♪」

「お前の思い通りになると思うなよ！」

「そうですね！私達は絶対に負けませんわ！」

「なら来なよ！今すぐその綺麗な顔を泣かせて、絶望で埋め尽くしてあげるよー！」

「「はあああああああ！」」

『あれ？ビーチバレーってこんなだっけ？』

三人の戦いを見ていた生徒達の心が一致した瞬間であった。

「アツハハハ！ほら、ほら、ほら！絶対に負けないんじゃないやなかったのかい！ペドフェリア君に変態淑女さん♪」

「「アア？クサマラムツコロス！」」

シャルロットはイチカ達を更に煽り、二人は何故かオンドウル語で

切れていた。しかし、このままではイチカ達の負けが確定してしまう。そう、このまま行けばの話である。

「（これはもう、僕の勝ちが決まったね♪一体二人はどんな風に泣くのか…）「ズドン…」…え？」

シャルロットは轟音が聞こえた方向を見てみるとボールから煙が出ており、小さめのクレーターを作っていた。

（セシリアのスパイクを打つ瞬間が見えなかった!?しかも何、さっきのズドンっていう音!?明らかにビーチバレーで聞こえる音じゃないよね!?)

「フフ♪私達な勝利は約束されたも当然ですわね。何せ私達には天使達が応援しているんですもの♪」

「ああ!そう言えばセシリア。確かやるべき事があつたんだよね?」

「そう言うイチカさんも、確か守るべき約束があるのでしよう?」

「…。」

「なら、速く終わらせる!と言う訳で、命…燃やすぜ!」

「そうですわね。即刻に勝負を決めましょう!なので私も、貴女に美しき鎮魂歌《レクイエム》を!」

（何で?何で!何で!?!何でいきなり二人は強くなったの!?!）

シャルロットは二人がいきなり強くなった理由をビーチバレーを

しながら探し始めた。そして直ぐに見つかった。

「イチカー、ファイトー！セシリアも頑張れー！」

「負けるな師匠！セシリア！」

「(応援《ドーピング》！クソ！二人を泣かす事で頭が一杯である二人の存在を忘れてた！)！?しまった！」

シャルロットのルビが明らかに可笑しいが間違いではないだろう。何せ、応援一つで本気以上の力が出るのだから、間違い無く一種のドーピングだろう。

しかし、シャルロットも食らい付くが、無敵状態になった二人に敵う筈もなく直ぐに決着は着いた。

「ナイス、セシリア。」

「イチカさんこそ。」

「…イチカ、セシリア。今回は僕が負けただけど次は絶対に勝つ。そして、僕のコレクションに二人の泣き顔を追加してあげるよ。」

「ああ！何時でも受けてたつ！」

「ですから、その日が来るまで何時も通りの良き友人で居てくれませんか？」

「わかったよ。(あくあ、あの二人には敵わないや。ま、時間はあるんだしゆつくりと攻略していけばいいか。それにあの二人の泣き顔を想像するだけで興奮するから別に問題は無いんだよね〜♪)」

此処でシャルロットの説明。自らの快樂の為だけに生きている。特に他人の不幸や泣き顔を見ることが好きな少女。そのため何時も男装をしており、よく少女や女性の心を折っている。一部例外を除いて男性に興味が無い。

三十四話

「イチカ、大丈夫？首は痛くない？」

「いや、大丈夫だ。むしろ気持ち良いくらいだな。それよりも俺に甘えるんじゃないかなかったのか？どう見ても俺が甘えているようにしか感じないんだが？」

「良いの。例えどう見えようが私が甘えてるの。それとも…こう言う風にされてるのは嫌？」

「この顔が嫌がつてる様に見えるか？」

「全然♪むしろ嬉しそうにしてるよ♪」

「そう言う鈴もな。」

先程行われたビーチバレー？が終わりイチカは鈴と共に幸せの一時を過ごしていた。ただし、何時もと違ってイチカは鈴に膝枕をされており、二人は何時も以上の笑顔で過ごしていた。そして、周りの生徒達は様々な反応を見せていた。

「な、何なんだ!?!この甘い空間は!?!以前より更に甘くなってる!?!」

「そんな、まさか!?!そんな事があるわけが無い！人間があれを使える筈が無い！」

「いいえ、残念ながらこの空間は間違い無くあの空間よ。その証拠にあれを見なさい。」

「なっ!?!次々と皆が羨ましそうに口から砂糖を吐いている!?!ならば本

当にこの空間は!？」

「ええ、古から伝わる伝説の固有結界、無限の砂糖精製〈アンリミデットシユガーワークス〉!でも上には上が居るものね。ほらあれ。」

「!?!あの二人を見ながらティータイムを堪能している!?!」

イチカと鈴を見ながら砂糖を吐く者達、少しばかりこの光景に慣れ、ネタと混ぜて現実逃避をする者達、完全に慣れてティータイムを開始する何時もの面子。だからと言ってイチカと鈴がイチヤイチヤを辞める筈が無い。と言うより、全く気にしていないようだ。

するといきなり、シャッターの切る音が聞こえた。二人は音が聞こえた方に視線を向けるとやはりと言うべきか、そこにはカメラを持つセシリアの姿があった。

「何だセシリアか。撮影は終わったのか?」

「ええ、先程終わった処ですの。処で私が撮った写真をご覧になります?」

「見る!セシリアがどんな写真を撮ったのか気になるし!」

「やはり、鈴さんは元気があってよろしいですね。それではどうぞご覧になってくださいませ。」

「ありがと。イチカも見ろ?」

「頼めるか?」

「了解♪」

(やはり、他人の恋路と言う物は邪魔する物ではなく、見て楽しむ物ですわね。と言うより、邪魔する意味が全く理解出来ませんわ。本当に好きなら邪魔ではなく、応援すべきですのに。)

「…。」

セシリアが他人の恋路について考えている時、イチカと鈴はセシリアのカメラを見ながらある事に気が付いていた。

(海の画像より少女達の画像が圧倒的に多いな。って!?何気に山田先生まで写ってる!?)

「処で、イチカさんと鈴さんの写真を撮らせて貰えませんか?あ、そのままが良いので。」

「別に良いわよ。」

「ああ、俺も構わない。」

セシリアは二人から許可を貰い、撮影を開始した。二人の写真を撮っているセシリアは、とても嬉しそうにしていた。

「そう言えばセシリア。セシリアの事で気になった事があるんだけど。」

「何でしょうか?」

「セシリアって好きな人って言うより、気になる人とか居ないの?」

「気になる人…ですか? (そう言うのは考えた事も無かったですわね。気になる人、「エスコートをお願いできますか?セシリア?」…何

故、刹那先輩の事が浮かんだのでしょうか?…ああ、成る程。最初に浮かんだという事はそう言う事なのでしょうね。何故、聞きたいのですの?」

「何でって言われたらセシリアもそう言う年頃だからそんな人が居るのかな?…って思ったから。」

「そう言う事でしたか。そうですね…居ない、と言えば嘘になりますわね。」

「ホントに!?セシリアにも春到来か。」

「だな。セシリアが気になってる位だからとても良い人なんだろう?」

「ええ、それは勿論。」

二人はセシリアの答えに冷やかす事はせず、それぞれの感想をセシリアに言っていた。セシリアも二人の言葉を聞き、嬉しそうにしていた。鈴が爆弾を落とすまでは。

「そう言えば最近、セシリアって黒姫先輩と仲が良いよね。あつ!もしかしてセシリアの気になる人って黒姫先輩?なんてね、そんな訳無いか。」

「ツ!?え、いえ!そ、それは!?!?!はう?!?!」

「え?マジ?」

「?!?!」コクコク

鈴の言葉にセシリアは顔を紅くしながら頷き、肯定していた。そしてセシリアは、どう反応すべきか分からず、顔を紅くし、俯いていた。イチカと鈴も初めて見るセシリアの姿に戸惑っており、沈黙が続いていた。

少しばかり続いた沈黙を破ったのはイチカであった。イチカは鈴の膝枕から起き上がり、面と向かってセシリアと話始めた。

「セシリア、取り合えず今は黒姫先輩が気になってる状態で良いんだよね？」

「ええ、鈴さんに聞かれ一番最初に浮かび、今も考えるだけで胸が少しばかり痛みますわ。」

「そっか、なら俺から一言言わせて貰っても良いか？勿論、聞きたくないかったら聞かなくても良い。判断はセシリアに任せる。」

「…何でしょうか？」

「周りの目なんて気にするな。セシリアは自分の心に従えば良いさ。」

「へ？否定しないのですか？」

「確かに普通なら止めるべきなんだろうけど、これはセシリアの問題だ。それ以前に俺達は応援するだけだからな。それとも俺のライバルは、気になる人が出来ただけで弱気になるような奴なのか？」

「フフ、おっしゃる通りですわね。もう考えるのは辞めましたわ！女は度胸！当たって砕けるですわ！私、セシリア・オルコットはこの想いを刹那先輩に伝えますわ！」

「その意気だ！セシリア！」

「はいー！」

「砕けたら駄目じゃない？」

鈴のツツコミは二人には聞こえず、ただ虚しく波の音が聞こえていた。鈴は気にせず何度かツツコミ続けた。しかし、二人には聞こえず、遂に鈴はツツコミを諦めた。

「イチカさんのお陰で目が覚めましたわ。お礼としてお受け取りください。きつと喜んで貰えると思いますわ。」

「写真？何の？…キュー／／／」

「イ、イチカ!?どうしたの!?大丈夫!?えっ!?何で鼻血を流してるの!?」

イチカは写真を見た瞬間、顔を紅くして鼻血を出しながら倒れてしまった。そしてセシリアは微笑ましそうに二人を眺めており、悪戯が成功した子供の様な笑顔になっていた。

(フム、やはりイチカさんにこれを見せるのははまだ早かったみたいですわね。鈴さんも初ですがイチカさんも負けじと初でしたわね。)

セシリアがイチカに渡した写真。その写真には水着に着替えている途中の鈴の姿が写っていた。つまり、水着を完全に着ていない状態をイチカは見てしまったのである。イチカが気絶するのは当たり前前である。そして、鈴はイチカの持っていた写真と体の一部を見てイチカと同じく顔を紅くしていた。

三十五話

合宿二日目、この日は午前中から夜まで各種装備試験運用、データ取り等があり、一年生全員が専用機を持つ生徒とそうでない生徒で別れて整列していた。しかし、専用機を持っていない筈の篠ノ之がイチカ達と共に並んでいた。そしてセシリアが手を挙げ千冬に質問した。

「何故、専用機を持っていない篠ノ之さんが此方側に居るのでしょうか？」

「簡単な事だ。今日から篠ノ之は専用機を持つ事になる。だから専用機のグループに並ばせている。」

「え？何それ？私は初耳だし何の連絡も来てないんだけど？」

「東さん!?!何で此処に!?!」

「ハロー、イツ君。何で私が此処に居るかは直ぐに分かるよ。と言うより此処に私が居ても問題ナッシング！」

「それって…ああ、そう言う事ですか。」

イチカは何故此処に束が居るのかを束の服装で理解した。現在の束の服装は何時ものアリスの様な服装ではなく、仕事用のスーツを着用しており、首から二つのカードを下げていた。一つはFRCの社員証、もう一つはIS学園の校章が描かれている物であった。

「漸く来たか、束。さっさと用事を済ませて帰れ。お前が居ては邪魔だ。」

「フフ。アハハ！いや、暫く見ない内に面白い冗談を言うように

なったから私は驚いたよ。ね？織斑千冬？」

「何？それはどう言う事だ？」

「ま、丁度良いからそれを踏まえて自己紹介をさせて貰おうかな？」

「何？」

「初めまして、今日一日皆さんのサポートを担当するFRC技術開発部最高責任者の篠ノ之束です。本日は宜しくお願いします。あ、後篠ノ之箒、その視線辞めてくんない？そんな視線送った処で専用機はあげないよ。と言うより君に作る気すら無いから。」

「な!？」

「何故、篠ノ之に専用機を作らない！そして私は何も聞いていないぞ！」

束の言葉にし篠ノ之は驚き、千冬は怒りを露にしていた。その光景を見て束は再び笑いだし、イチカと山田先生は大きな溜め息をついた。そして、束は笑いながら篠ノ之と千冬に言葉を発した。

「いやいや、私が篠ノ之箒に専用機を作る理由が無いし、そもそも篠ノ之箒は代表候補生おろか企業に属してる訳でもないよね？それに私はFRCの専属だから専用機を作って欲しいのなら正式な手続きを通して貰いたいね。と言っても専用機を作る為のコアはもう無いけどね。」

「コアが無ければつくれば良いだろうが！それにお前の妹なのだから作るべきだろ！」

「は？馬鹿じゃないの？私はこれ以上コアを作らないって言った筈だよ、それなのに何で妹の為だけにそれを破らないといけないの？それに私はIS学園にちゃんと許可を貰って此処に居るんだから文句は言われたくないね。」

「ふぎけ r 「ふぎけてんのはお前だろうが！織斑千冬！」 た、東？」

『ザワザワ』

千冬の言葉を東は声を荒くし遮った。突然の事に周りに居た生徒達、教員達、そしてイチカまでもが驚いており、千冬を見据える東の瞳には悲しみ、憎しみ、怒り等が映っていた。

(初めて見たな。東さんがあんな風に声を荒げて怒りを露にしたのは。過去に何かあったのか?)

(そうじゃないか?)

(でも、あそこまで怒るって何があったのかな?)

(…)

(白騎士?)

「ISは誰かを傷付ける剣じゃない！宇宙を目指す為の翼だ！それに忘れたとは言わせない！あの日お前が私にした事を！」

「ッ！」

「これ以上ISを間違った方向に使わせはしない！どんなに時間が掛かったとしても絶対にISを本来の姿に戻してみせる！『♪♪♪』
…はい、東だよ。！それは本当なの!?!」

東が千冬に向かつて怒鳴ると突然、東の携帯が鳴り出し、イチカは音から緊急用の回線だと判断した。東の焦りの声と表情からして悪い状況だと直ぐに理解出来き、一方で山田先生も何処かと連絡を取っており顔が少しばかり青ざめていた。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移ります！今日のテスト稼働は中止とし、皆さんはISを片付けて旅館に戻って待機しててください！なお専用機持ちの皆さんは片付けが終わり次第私に着いてきてください！篠ノ之博士もお手数ですが着いてきてもらえませんか！」

『はい！』

生徒達は山田先生の指示を聞くと一斉にIS片付け始めた。イチカ達も片付けをしていたが、イチカは東の事が気になり見てみると東は手を強く握り締めており、そこから赤い液体が垂れ落ち小さな水溜まりを作っていた。

「東さん！」

「うん？ああ、心配しなくても大丈夫だよ。これくらいの血の量なら死ぬことは無いし、直ぐに塞がるから。それにほら、山田先生が呼んでるし急ごうか。」

「…分かりました。ですが一応止血と手当はさせて貰います。」

「イツ君は相変わらず優しくして世話をするのが好きだね。それにちゃんと方が一の時を考えているね。」

「俺はただ心配性なだけですよ。」

「フフ、ならそう言う事にしておいてあげるよ。」

「ええ。手当も終わりましたから山田先生の所へ急ぎましょう。」

「そうだね。」

イチカと束は山田先生の元へ急いで向かって行った。しかし、イチカは束が急いでいる間も悲しそうな顔をしているのを見逃さなかった。

あの日から覚悟を決めたイチカ、自身の無力さに悲しむ鈴、この二人が向かう結末は希望か絶望か。

三十六話

「では、現状を説明します。」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間では、イチカ達専用機持ち全員と教師陣が集められており、照明を落とした薄暗い室内に大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいた。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三代型の軍用I S『銀の福音』《シルバリオ・ゴスペル》が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡がありました。」

（軍用I S、暴走、そう言う事か……。だから束さんは悲しそうな顔をしていたのか……。そして俺達専用機持ちが集められたという事は十中八九、俺達がこの機体を止め事になるのか。）

「そして、この事態を私達が対処する事になりました。まず教員が学園の訓練機を使用し、空域及び海域の封鎖を行います。そして専用機持ちの皆さんには本作戦の要を担当してもらいます。」

イチカの予想は当たっており、周りを見渡すと全員が予想出来ていたのか余り驚いておらず、特にラウラの眼差しは真剣その物だった。

「それでは作戦会議を始めます。意見がある人は拳手をお願いします。篠ノ之博士も何かあれば同じ様をお願いします。」

「分かりました。」

「はい、目的I Sの詳細スペックデータを要求します。」

東は山田先生の言葉に頷き、早速セシリアが手を挙げていた。

「分かりました。ただし、これは二カ国の重要軍事機密です。皆さんは分かっていると思いますが決して口外してはなりません。情報漏洩した場合、皆さんには査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられます。」

「了解しました。」

ディスプレイに銀の福音のスペックが表示されイチカ達専用機と教師陣は開示されたデータを元に相談を始めた。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型：私のティアーズと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね。」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上では私の甲龍をうわまわってるから向こうの方が有利……。」

「この特殊武装が曲者って感じがするね。丁度本国から防御パッケージが来てるけど、連続で防御するのは難しそうだね。イチカの盾なら行けそう?。」

「防御面に関しては問題は無いが、広い範囲を防御するなら数秒のロスが生まれるから今回の作戦には向かないな。簪は?。」

「私も防御用パッケージがあるけどシャルロットと同じく連続での使用は難しいかな。」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルも分からん、偵察は行えないと見て間違いないか……。いや待てよ?セシリア。」

「どうされました？」

「学年別タッグトーナメントで使った眼魂を使えないだろうか？」

「…残念ながらあの眼魂は一度使うと暫くの間使えなくなるので今回は使えませんわ。」

「そうか…。」

イチカ達は互いに意見を出しあっている中、束と千冬はそれぞれ違う反応を見せていた。束は深刻そうな顔をして、千冬は少しばかり頬が緩んでいた。

(…これって本当にISの暴走なの？軍が開発したISの試験稼働が暴走して、そして試験稼働には多すぎる武装の数…。まるで何か別の目的があつてISが暴走したように見せている様にしか思えない…。一応コアネットワークに接続して何か情報が無いか探ってみよう。幸いにも作戦内容は確実に成功する為の奴みたいだから心配は必要無いけど一応念には念を。)

(これはチャンスだな。見た所、この機体を沈めるには一撃必殺でなければならぬ。此処で漸く一夏に雪片を持たせる事が出来るな。)

「取り合えず確認するぞ。俺、セシリア、シャルロットのA班が福音を発見次第捕縛。その後鈴、ラウラ、簪のB班が福音を撃つ。「その必要は無い。」…それはどう言う事でしょうか？」

「そんな面倒な事はせずミューゼルが雪片を使い一撃で仕留めろ。この中で最も速いのがミューゼルの機体だからな。」

『ハア…。』

千冬の提案に東と山田先生を含めた八人が大きな溜め息を吐いた。特に山田先生に関しては頭を抑えていた。呆れて物も言えないとは正にこの状況の事を言うのであろう。

「今から君達の I S のパッケージをインストールするからインストール次第出撃出来る様に準備してて！ イツ君は私の手伝いをお願い！」

「「「「はい！」」」」

「勝手な行 d 「因みに織斑先生には指揮権及び作戦の決定権がありませんのでお忘れなく。」 チツ！」

千冬は山田先生の言葉に舌打ちをしたが眼はまだ諦めていなかった。それ所かその眼は、自身の勝利を確信していた。だが、その目論みが成功しない事をまだ千冬は知らない。

三十七話

旅館から少しばかり離れた砂浜にイチカ達は集まっており、各自の武装確認等の作戦の準備をしていた。

『皆さん、聴こえますか？こちら山田です。皆さんの専用機のネットワークからバイタルの確認が取れましたので展開次第、出撃してください。』

「「「はい！」」」」

「「アイ！」」

「スタンバイ！」

「バッチリミナー！バッチリミナー！」

「バッチリミロー！バッチリミロー！」

「イエッサー！ローディング！」

イチカ、セシリア、ラウラはそれぞれ眼魂のスイッチを押し、ドライバールとユニットセットするとグレー、群青、ダークブルーのパーカーゴーストが現れ三人の周りを浮遊していた。

「「変身！」」

「開眼！ベートーベン！曲名！運命！ジャジャジャジャーン！」

「開眼！フリーデューニ！マジイイじゃん！すげえマジシャン！」

「テンガン！ジャック・ザ・リツパー！キル・イズ・レディ！」

「行くよー！甲龍！」

「頼むよ、ラファール・プリンセス・ノワール！」

「来て、打鉄式式！」

イチカ、セシリア、ラウラは今回の作戦に必要な姿になり（セシリアに関しては何時の間にか現れたバイクと合体しているが）、鈴、シャルロット、簪はパッケージがインストール済のISを展開しそれぞれ飛翔した。そして六人が飛翔した同じ頃。

「…山田先生。少しやる事ができたので皆を任せても良いですか？
終わり次第直ぐに戻りますので。」

「分かりました。あ、もし織斑先生を見つけたら私が呼んでいたと伝えて下さい。先程から姿が見えませんが…。」

「分かりました。」

束は風花の間を出ると、とある場所に向かった。静かにそして急いで目的の場所に向かっていった。しかしその場所が本当に目的の場所という根拠は無い。それでも束はその場所に向かっていた

「到着つと。…イツ君達なら大丈夫だと思うけど何だろうね、この嫌な感じは？取り合えず無駄に終わって欲しいけどやるだけやろうかな。」

束は目的の場所で電子キーボードとディスプレイを投影し作業を開始した。束の作業スピードは凄まじく、ディスプレイのデータが入力されたかと思うと直ぐに消えたりしていた。すると、ある二人がそ

の場所を訪れて束の姿を見て驚いていた。

「此処で何をしている！束！」

「やあ、織斑千冬。お前こそ愚妹を連れて何をしに来たのかな？あ、別に答えなくてもいいよ。どうせイツ君達の邪魔をしに来たんだよね？そこの愚妹にイツ君がピンチだと嘘を吐いて。」

「邪魔ではない！助けに行くんだ！」

「邪魔だよ。イツ君達からすれば邪魔以外の何でもないよ。それに愚妹が参加した所でマイナスしかない。」

「違う！一夏のマイナスになっているのはあの小娘だ！彼奴のせいで一夏は可笑しくなり、銃や弓、盾などを使う様になったんだ！」

「ハア、まさか此処まで愚妹が愚かなんてね。いや、愚かだから愚妹なのか。因みにお前達はISに乗れなくなってるから此処に来ても時間の無駄だから。」

「ふざけるなああああああ！」

「相変わらず動きが単調で事実を言われれば力で何とかしようとする愚妹。それに…。」

「ガハッ!？」

「不意討ちは卑怯だと言うくせに自分は普通に使う元親友。本当に救えない二人だね。」

箒は束に殴り掛かったが軽く流れ床に激突し、千冬は束の死角から

仕留めようとしたが逆に鳩尾に蹴りを入れられてしまい鳩尾を抑えながら束を睨んでいた。

「何その目？まるで私が悪くて自分が悪くないとでも言いたいのか？」

「あたり、mガツ!？」

「当たり前じゃない。元はお前のせいでこんな事が起きたんだ。忘れたとは言わせないからな？偽りの白騎士。」

束は千冬の台詞の途中で腹をギリギリ気絶しない位の力で蹴った。千冬は呻き声を出しているが束はただ冷たく、瞳に怒りを宿しながら千冬を見下ろしていた。

場所は変わりイチカ達の作戦実行グループは現在、福音を目指して教員達に封鎖された海域を飛んでいた。

「！前方に福音の姿を確認！現在、エネルギーの消費を抑える為か空中で停止している！今がチャンスだ！師匠、セシリア、シャルロット！」

「ああ！」

「了解ですわ！」

「オーケー！」

「『ダイカイガン！』」

「『ガンガンミナー！オメガストリーム！』」

「フリーデーニ！オメガドライブ！」

「ハアアア！」

「喰らいなさい！」

「良い声で泣いてね♪」

イチカはガンガンセイバーナギナタモードから五線譜を、セシリアは前輪と後輪の四つの車輪部分から鎖を放ち、シャルロットは両手持ちの蛇腹剣を鞭の様に使い福音を捕縛した。

「…。」

しかし福音は捕縛されているにも関わらず抵抗せずに静かにある一点を見ていた。その静かさが為か捕縛している三人は少しばかり恐怖を抱いていた。

「三人とも速く！何やら嫌な予感がしますわ！」

「言われなくとも！」

「決める！」

「ダイテンガン！ジャック・ザ・リッパー！オメガウルオウド！」

「マルチ・ロックオン・システム起動！『山嵐』フルバースト！」

鈴は最初に分離させた青竜刀で福音を斬り炎を纏った衝撃砲を放ち、ラウラは逆手に持った膨大なエネルギーが収束した機械的なナイフで背後から斬り、簪は四十八発の高性能爆薬弾頭ミサイル全てを福

音に放ち爆発に呑み込まれた。勿論、鈴とラウラは山嵐の発射と同時に福音から距離を取っており爆発から逃れていた。

「……。」

六人は何も言わずに追撃の準備をしていた。流石にあの攻撃量はオーバーキルかと思えるが福音の反応が消えていない為に追撃の準備をしているのである。

爆発の煙が無くなり無傷の状態で先程とは全く違う姿となった福音が現れた。その姿は右手に刀型の近接ブレード、左手にレールガン、背面に三対六枚の翼。まるで三機のISが合わさった様な姿をしており、何より変わったのが先程の美しい銀色から夜を連想させる黒色に変わっていた。

イチカ達は福音の変化を気にする事無く一斉に攻撃を開始した。だが、福音は攻撃が当たる前に姿を消した。

「消えた!?!」

(!Master後ろです!)

「!?(一撃が重い!?)なら!」

「ダイカイガン!ベートーベン!オメガドライブ!」

イチカはナギナタモードにエネルギーを収束させて福音に斬り掛かり、福音も同様にブレードにエネルギーを収束させて応戦した。だが福音のブレードにナギナタモードが触れた瞬間、収束したエネルギーが消滅し弾かれブレードが胸部を掠めた。

(掠めただけでシールドエネルギー五割を切った!?)

「イチカから離れなさい!」

鈴達五人はそれぞれ福音に攻撃を仕掛けた。しかし福音に五人の攻撃は届かなかった。近づけばブレードで防がれ、遠距離からの攻撃はレールガンで無効化された。イチカも攻撃に加わったがそれでも福音に攻撃が当たる事は無かった。

「…。」

「「「「!?」」」」

福音はイチカ達から距離を取ると六枚の翼を大きく広げ翼の先端から無数の鋭利な羽を放った。放たれた羽はイチカ達に向かって行った。

イチカ達は回避しながら羽を撃ち落としていた。しかし気になる事がある。明らかにイチカを追う羽の数が他の五人に比べて多いという事だ。鈴達を追う羽の数が約二十枚程度に対してイチカを追う羽の数は軽く百枚を超えている。

「チッ！数が多いなら一掃するまでだ！」

「ダイカイガン！ベートーベン！オメガドライブ！ダイカイガン！ベートーベン！オメガドライブ！ダイカイガン！ガンガンミナー！オメガストリーム！」

イチカは光の音符や五線譜を放ち羽は全て爆発した。しかしその判断は最悪の事態を招くことになる。

「ガハッ!?!…っの…ま」

「…。」

「イチカアアアアアアアアアアアア！」

イチカは爆発の中から現れた福音に斬られてしまい変身が解け、海に向かって落ちていった。鈴達はイチカを助けようとするが福音はそれを阻む。

何で皆は俺の名前を呼んでいるんだ？何で鈴は泣いているんだ？それにさつきから体に力が入らないし、皆の姿が霞んで見える？おか…し…いな？だ…だ…ん…し…き…う…れ…

そして鈴達の専用機に事実が告げられる『LOST』つまりイチカの生体反応が無くなった事を意味していた。

「あ、

あ、

あああああああああああああああああああああああ！」

「鈴さん！落ち着て…ぼす。」え？」

「滅ぼす。滅ぼす！滅ボス！彼奴ダケハ私ガ滅ボス！コノ手デ絶対ニ滅ボシテヤル！」

鈴の怒りに反応するかの様に鈴の周りに真紅の焰が現れ次第に焰は大きくなり、やがてその焰は鈴を包み込んだ。そして焰が消えると紅蓮の龍を連想させる真紅のISを纏う鈴の姿があった。

今此処に紅き霸王が降臨した。

三十八話

SCARLET, S FLARE

イチカの生体反応が消えてから記憶が曖昧で不思議な声が聞こえたけどもうどうでもいいや。イチカの居ない世界なんて私にとっては無意味で、生きている価値なんて無い。だから全てを終わらせる。私自身を含めた全てを。

「ヘルインフェルノ！」

鈴は怒りを宿した瞳で福音を捉えながら言葉を叫ぶと両手に真紅の焰が収束する。やがて焰が消えると鈴の両手には真紅の長剣が二本握られていた。そして鈴は福音との距離を一気に詰め長剣で斬り掛かった。

「滅べ、滅べ、滅べ！滅べエエエエエエエ！」

「…。」

鈴の攻撃は何時も以上に荒々しく、ただ福音を仕留める為だけに長剣を振るうが福音は全ての攻撃を難無く防ぐ。だがイチカの時とは違い全く反撃をせずただ防ぐだけであった。まるで鈴には興味が無いかの様に。

「鈴さん！私達も手伝いますわ！」

「邪魔ヲスルナアアアアアアアア！」

「[[[[[?!]]]]」

セシリア達が援護しようとする、鈴は四人に向かって長剣を殺気

を込めながら風ぎ払うと灼熱の焰が出現し四人の行く手を阻む。

今の鈴は怒りに囚われており、福音を仕留める事しか頭に無い。そしてセシリア達は鈴から放たれた殺気に恐怖を抱き、その場から動く事が出来なかった。

「コイツハ私ガ仕留メル！邪魔スルナラ誰デアロウト葬リサル!!」

「…。」

「!?鈴さん!」

「チツ！鬱陶シイ!」

福音はまたもや鋭利な羽を大量に放つ。放たれた羽の数は三百を超えており、それら全てが鈴に向かって行った。

「災厄ヲ運ビシ龍翼ヨ！ソノ翼テ全テヲ無ニ還セ！レイジングテンペスト!」

鈴の纏うISの翼が真紅のエネルギーを纏うと翼の先端が伸びた。そして鈴は自身を翻すと翼の先端が鞭の様にしなり、三百以上あった羽を全て爆破した。

福音は鈴が羽を対処している内に逃走した。しかし、羽を全て爆発させた鈴は先程よりも速いスピードで福音に追い付き、斬り掛かった。そして、福音の右の翼を全て切り裂いた。

NIGHTMARE'S NAME

イチカは黒い空間に立っており、その空間でイチカは頭を抑えながら苦しんでいた。

こんな事も出来ないなんて本当に千冬さんの弟なの？

「デイザスター！ア－イ！バツチリミナー！バツチリミナー！」

「終わらせてたまるか。俺にはまだ、やるべき事がある！」

「ア－イ！バツチリミナー！バツチリミナー！」

「変身！」

「開眼！」

「白式！白き翼！掴むぜ夢！目指すは空！」

「ナイトメア！見える悪夢！希望は絶無！飲み込むぜ全部！」

イチカは白式魂になり、ガンガンセイバーを二刀流モードにした。そして『イチカ』はナイトメア魂になり、ガンガンセイバーを出現させて互いに駆け出した。二人は斬り掛かり、互いの剣を弾きながらも何とか一撃を入れようとした。

「苛つくんだよ！闇に堕ちる事の無い心！絶対に復讐しないという決意！何より傷つけられているのに誰かを護ろうとする甘い考え！それら全てが観てるだけで苛つくんだよ！」

「…。」

「だから此処でめえを闇に堕とし、俺を否定してきた奴等に復讐を果たす！」

イチカは『イチカ』の言葉に無言で攻撃を防ぎながら耳を傾けていた。そして、イチカは口を開いた。

「…確かに俺は誰かを護りたいと思っていた。」

「ああ？」

「だけど、あの日に気付かされた！俺が本当に護りたいのは誰かじゃない、鈴だという事を！」

「ッ!？」

イチカの攻撃が『イチカ』を捉え、ダメージを負わせる事が出来た。しかし『イチカ』は納得していない様だった。

「ふう。やっと攻撃が当たったな。」

「何でてめえの攻撃が当たった！てめえの考えは全て解る筈だ！」

「だろうな。最初に会った時に攻撃が全て防がれたからな。だから今回は何も考えずに攻撃した。」

「ふざけるなあああああ！俺はてめえの様な力を護る為に使う奴に負ける訳にはいかねえんだよ！」

「ダイカイガン！ナイトメア！オメガドライブ！」

「生憎だが俺も負ける訳にはいかない！例え何と言われようが俺は俺の信じた道を進み続ける！」

「ダイカイガン！白式！オメガドライブ！」

『イチカ』の背後に紫色の禍々しい紋章が現れ、右足に漆黒のエネルギーを纏わせてイチカに向かって走り足した。イチカの背後にも白

色の神々しい紋章が現れ、右足に純白のエネルギーを纏わせて『イチカ』を目掛けて走り足した。そして、二人は同じタイミングで飛び上がり蹴りの構えをし、やがて二人は衝突した。

二人の衝突した衝撃はとてつもなく、衝撃の威力で空間に亀裂が走る程だった。二人の強さは互角であったが次第にイチカが押しつていった。

「何故だ!?何故、俺が押されている!?!」

「それはお前が全てを否定したからだろうが!正面から向き合ってくれた彼奴らや、助けてくれた人達、支えてくれる彼奴ら、そして一番大切な人を否定したお前に俺は絶対に負けない!」

「ダイカイガン!白式!オメガドライブ!ダイカイガン!白式!オメガドライブ!」

「はあああああああああ!」

『イチカ』はイチカの蹴りを喰らい、後方に吹き飛ばされ地面に衝突した。そして『イチカ』は変身が解けて仰向けになり、イチカが変身を解いて駆け寄った。

「…何の用だ?」

「聞きたいことがある。お前は本当に復讐を望んでいたのか?」

「…何が言いたい?」

「お前は復讐を果たすと言っているが、具体的に何をやるんだ?」

「…。」

「やっぱりな。」

イチカの言葉に『イチカ』は何も言い返せずに、ただ黙る事しかできず、『イチカ』の表情には悔しさが浮かんでいた。

「…俺は、てめえが憎かった。俺が持たない物を多く持つてめえが。だから、全てを否定して力を手に入れた！ま、結局はてめえに敗北したがな。さて、そろそろ時間切れだ。てめえは、さっさと帰りやがれ。」

「…お前は どうするんだ？」

「さあな？俺は、空間の維持とお前の蹴りでもう動けねえ。斬るなり、撃つなり、止めを刺すなり好きにしゃがれ。」

「そうか。なら好きにさせてもらう。」

そう言うイチカは仰向けになっている『イチカ』に手を差し出した。手を差し出された『イチカ』いきなりの事に呆気にとられていた。

「…何のつもりだ？」

「別に。ただ、これから俺と共に戦ってくれないか？誰かじゃなく、鈴を護る為に。」

「馬鹿か、てめえは？俺は、彼奴すら否定した。そんな俺が彼奴を護る為に戦えだど？馬鹿馬鹿しい。そんな事、出来る筈がねえだろうが。」

「出来るさ。俺とお前なら。それに、一度否定したならそれ以上に

受け入れれば良い。だから鈴を護る為に俺と共に戦ってくれ。」

「…はあ。どうなつても知らねえからな！」

『イチカ』は、自身に差し出された手を掴み、立ち上がった。そして、手を掴んだ時の『イチカ』の顔に少しばかりの笑みが浮かんでいた。

「これから宜しくな。…え〜と？そう言えば、お前の事は何て呼べば良いんだ？」

「あ？てめえの好きに呼べば良いだろうが。だが、てめえと同じ名前は辞めろ。」

「好きに呼べって…。う〜ん。なら、これからメアって呼んで良いか？」

「…好きにしやがれ。」

「なら、改めて宜し…！メア！今すぐ此処から出してくれ！何か嫌な予感がする！」

「彼奴か？」

「ああ！だから急いでk!？」

イチカの台詞が終わる前に、先程居た空間は消え、代わりに蒼く美しい世界が広がっていた。

(Master!? 一体何処から!?)

(そうだよ！いきなり生体反応すら消えたから、心配したんだよ!?)

それに今大変な事になってるんだよ！)

(すまない。白騎士、白式。大変なのは分かってる。だから止めに行く。)

そう言うといチカの手には、紫と白のカラーリングの眼魂が握られていた。

(Master!?!それは!?)

(それを使ったらまたあの時みたいになるよ!?)

(大丈夫だ。今回は絶対に。)

(でも!)

(いいから黙ってやがれ。)

(!?!Masterと同じ声の貴方は一体!?)

(後で話す。でも今は。)

「ブレイカー！アイ！バツチリミナー！バツチリミナー！」

ゴーストドライバーから、ローブの様な紫と白のカラーリングのパーカーゴーストが現れ、イチカの周りを黒く光る粒子を撒き散らしながら回遊し始めた。

(変身!)

「開眼！ナイトメア！喰らうは絶望！魔剣を抜刀！心の闇を解放

！」

イチカがトリガーを引くと、頭上からパーカーゴーストを纏い、仮面ライダーゴースト・ナイトメアブレイカー魂になった。そして、ゴーストの体が、黒にオレンジのラインから、白に紫色の焰の模様がある姿になっていた。

変身を終わるとイチカは、猛スピードで海面に向かって行った。もう一人の自分と共に大切な人を護る為に。

LOST TIME

鈴と福音の戦いは、先程より激しさを増していた。しかし、福音は先程、右の翼を全て切り裂かれた為にスピードが落ち鈴に押されていた。

「墜チロ！墜チロ！墜チロオオオオオオオ！」

「…。」

鈴は、福音を仕留める為に二本の長剣を振るう。福音も負けじと鈴の攻撃を防ぐ。だが

「シマツ!?ガツ!？」

「…。」

福音が、鈴の右手に持っていた長剣を弾くと同時に腹部に蹴りを入れて吹き飛ばし、鈴に斬りかかった。

「「鈴（さん）！」「」

ああ、私は此処で終わるのか。でも、これで良いのかもしれない。

無意味な世界で生きるより、此処で終わった方がましだ。だけど、けどもつとイチカと一緒に居たかったな。……あれ？福音の攻撃が来ない？それに何だか抱えられてる？

「大丈夫か、鈴？」

「イ…チカ？」

鈴が目を開けると、そこには最愛の人であるイチカが鈴を抱えていた。そして、鈴の目から大量の涙が流れ始めた。

「大丈夫か？ジャナイワヨ！生体反応ガ消エタカラ本当ニ死ンじやったと思っただよよ！」

「それに関しては本当にごめん。セシリア達も心配掛けたな。」

「全くですわ。後日、何か奢って貰わないと割に合いませんわ。」

「それは高く付きそうだな。まあ、取り合えず。」

イチカ達の視線の先には、明確な殺意を持った福音の姿があった。そして、福音が動き出した。

「俺と鈴が前に出る！援護は頼んだ！」

「分かりましたわ！」

「任せろ！」

「了解！」

「仕方ないね♪」

「と言う訳だ、鈴！俺に着いてきてくれるか？」

「愚問ね。私は、何があろうとイチカに着いて行く！例え、その先が地獄であろうとね！」

「それは頼もしいな！さあ、鈴！反撃の時だ！」

「ナイトメアカリバー！」

イチカは紫の剣『ナイトメアカリバー』を出現させ、鈴は長剣を左手に持ち替え、連結させた双天牙月を右手に出現させて、福音を迎え撃つ。

「しかし鈴！いきなり姿が変わって驚きだな！」

「それはお互い様でしょ！あの時の奴と似てるけど大丈夫なの!？」

「大丈夫だ！もう、あの時みたいにはならない！」

「！マスター！また、あれが来るよ！」

白式の言うとおり福音は再び、鋭利な羽を放つが右側の翼が無くなっていく為、先程より羽の数が少なくなっているのは幸いだろう。

（イチカ殿！拙者を使え！）

（ムサシ!?!何で!?!）

（お主はもう、力に支配される事ないと拙者達が判断したからだ。

だから思う存分拙者達を使え！)

(ムサシ…、ありがとう！ムサシ達の力、使わせてもらう！)

イチカはムサシ眼魂を取りだし、ナイトメアカリバーにセットした。そして、眼魂をセットしたスペースにある白い宝玉を押した。

「セット！ムサシ！大開眼！BREAK SPELL！オメガエンド！」

イチカはナイトメアカリバーを振り上げると周りに闇で出来た剣が多く生成され、ナイトメアカリバーを降り下ろす。そして、闇の剣は全て福音の羽に向かい、羽を全て切り裂く。

「凄い…！私も、私も負けてられない！だから私に力を貸しなさい、甲龍。いや、紅龍！」

「単一能力『煉獄の霸王』発動。LINK800%OVER」

鈴の掛け声に反応するかの様に機体が、まるで煉獄の焰の様に紅く染まる。更に双天牙月と長剣、翼、腕、足は紅蓮の焰を灯す。そして、福音との距離を一気に積み、斬りかかった。福音は近接ブレードで防ごうとしたが、長剣に触れた瞬間に接触部分から先が溶けてしまった。

「…!?!」

「イチカ！」

「ああ！これで終わらせる！」

「絶！大開眼！ナイトメア！オメガゲッツドライブ！」

イチカの背後に白と紫の美しい紋章が現れ、右足に闇の力を纏い、福音に強烈な蹴りを放つ。そして、福音のシールドエネルギーが無くなり、操縦者が海へと落下するが、セシリアが優しく受け止めた。

「セシリア、その人は大丈夫か？」

「意識を失っていますが大丈夫ですわ。」

「ふう。任務完了…か。」

イチカ達の戦いは、任務達成と言う名の勝利で幕を下ろした。そして、もう一つの戦いも幕を下ろそうとしていた。

「はい、分かりました。それでは後で合流します。…イツ君達、福音を鎮圧して操縦者を保護したってさ。これから私はイツ君達と合流して、ありがとうとお疲れ様を伝えに行くよ。」

「…！」

束は縛られている二人に語りかけていた。縛られている二人は、束を睨む事しか出来ずにいた。それでも束は二人に語り続ける。

「それでどうだい、元親友？私の夢を壊してまで造った世界の自身自身の結末は？」

「…！」

「まあ、良いや。多分、この先会う事はもう無いだろうから、これが最後の言葉かな？」

「……？」

「楽しかったよ。あの日まで過ごした君との日々は。嬉しかったよ。君が産まれてから私が嫌いになるまでは。そしてさようなら、元親友と愚妹。君達の事は絶対に忘れないと思う。だから、もう一度言わせてもらうよ。さようなら。織斑千冬、篠ノ之箒。」

東は二人に最後の言葉を言い終えると、静かに部屋を出ていき、静かに部屋の扉を閉じた。

七月七日、この日から世界は少しずつ変わり始める。

三十九話 悪夢と騎士の対話

「(ふーん、アメリカとイスラエルはあの件以降ISを持ってなくなり、コアは世界中に配られ操縦者であったナターシャ・ファイルスは日本の企業にヘッドハンティングされた…か。ま、自業自得だな。と言うより)…ハア、俺のやりたい事…か。ま、そんな直ぐに見つかったら苦労はしないな。」

福音事件から数日。メアはIS学園の屋上で紫、黒、白のカラーリングのタブレットを弄りながらベンチに腰掛けていた。そしてメアはタブレットを弄じるのを辞め、そのままタブレットを放り投げる。するとタブレットはドラゴンに姿を変える。

「クラー！」

「…相変わらずお前は俺の頭の上が気に入っているみたいだな。バーン。」

「クラー♪」

ドラゴンの名前はワイバーンタブレット。通称バーンである。バーンは先日、天照から送られてきたタブレット型のガジェットで、そして何故かメアの頭の上がお気に入りである。

「…やっぱ、お前の事が良く分からねえわ。俺の何処が良いんだよ？」

「クラー？クラー。」

「ああ？前？…。」

「こんにちは、メアさん。」

メアとバーンの前に現れたのはイチカと共に居る筈である白騎士であった。

「うわあ…。面倒臭い奴が来やがった…。」

「面倒臭いって…。それは失礼じゃないですか？まあ、それは良いとして。隣、良いですか？」

「…断る。」

「何ですか!？」

「…逆に何でOKが出ると思ったんだよ？」

「普通こう言う場面はOKが出ると決まっています！ですから断られるなんて思いもしませんでしたよ!？」

「おい待て!?!何普通に隣に座ってんだよ!?!」

「…え？ほら、私はメアさんの事が知りたいですから。その為にはお話をして仲を深めないといけませんからね♪」

「答えになってねえよ委員長…!」

白騎士はメアの質問に笑顔で答えるがそれを見たメアは嫌な顔をしながら今決めたあだ名で白騎士を呼ぶ。しかし白騎士はそのあだ名を気にせずメアに話し掛ける。

「メアさんの好きな事って何ですか？」

「ああ？俺の好きな事？」

「はい！人にはそれぞれ好きな事があります。例えばMasterと鈴様はお互いと過ごす時間、セシリア様は可愛い娘や可愛い物とふれ合い、ラウラ様は戦いと食事。他にも色々あります。それは私達ISも例外ではありません。ですから私はメアさんの好きな事が気になりました。」

「…ハア、成る程な。…無いな。」

「無いん…ですか？」

「ああ、今まで彼奴に受け入れられるまでは別の事を考えて行動していた。だから自分が好きな事なんて考えた事も無かったな。」

「メアさん…。」

「…で？勿論、お前にも好きな事があるんだろ？暇潰しに聞いてやる。」

「え？。」

「フツ、お前でもそんな顔になるんだな。…良いから答えろよ。お前の好きな事って奴を。」

白騎士はメアの返答に思わず顔がキョトンとなる。メアはその顔を見ながら面白がり勝手に話を進める。そして白騎士は笑顔で自分の好きな事を語り出す。

「私の好きな事は空を見る事です！」

「ふーん、空を見る事ねえ？空を見る事がそんなに面白いとは俺には思えないがな。」

「面白いですよ？時間帯によって色んな風景に変わっていくのが。例えば、夜が明けて黒から蒼く変わっていく瞬間や黄昏時の空がオレンジに変わる瞬間、そして夜になって見える綺麗な星や月。それらを見るのが私はとても好きです。」

「星や月…か。それは天災兎と関係があるのか？」

「天才兎？…あ、母様の事ですね。確かに、最初は母様が宇宙に憧れていたから自然と私も憧れ、そして空を眺める様になり、徐々にその美しさに惹かれて行きました。ですから好きになるきっかけは何でも良いんですよ。」

「好きになるきっかけは何でも良い…ねえ？ま、俺自身やりたい事を探してる最中だ。その中で自然と好きな事も見つかるだろうな。」

「なら私はメアさんがやりたい事と好きな事が出来るのを応援します！」

「…勝手にしろ。」

「クラー？」

「…な訳ないだろうが。」

「クラーラ♪」

「…フン。」

バーンはメアの態度の変化に気付き、少しからかう様に問い掛ける。それをメアは否定するするが、そのやり取りをバーンは楽しんでいた。そして、その光景を白騎士は微笑ましく見ている。

「メアさんとバーンさんは仲がとても良いんですね♪あ、良かったらバーンさんを触らせて貰えませんか？」

「…だとよバーン。おい委員長、手を前に出しとけ。そしてバーンはその手の上に飛べ。」

「分かりました。」

「クラー♪」

バーンはメアの頭の上から白騎士の手のひらに乗り移る。そして白騎士はバーンの頭や翼を撫でたりメアのようにバーンを自身の頭の上に乗せたりしており、子供の様にはしゃいでいる。その光景をメアは自身でも気付かない内に少し笑いながら眺めていた。

「それにしてもバーンさんは可愛いですね。…あ、もしかしてバーンさんは格好いいの方が良いんでしょうか？ワイバーンの姿で雄ですし。」

「クラ？」

「…あ？…なあ、委員長？お前何か勘違いしてないか？バーンは雌だからな？」

「…え？えっ!?バーンさんは雌だったんですか!?す、すいません！バーンさん！私、てつきり雄だとばかり！」

「クラー。」

「別に気にしてねえってよ。」

「本当ですか！良かった。…あの、メアさん。もつと貴方とお話しても良いですか？」

「ああ？何故？」

「何故って言われると…そうですね、もつと貴方とお話して貴方の事を知りたいから…でしょうか？あ、あと貴方とお話していると楽しいからです。」

「…成る程な。…まあ、俺も丁度良い暇潰しになったしな、委員長長の好きにしろ。」

「！はい！宜しくお願いします、メアさん！」

「…フン。」

白騎士はメアの言葉に満面の笑顔になりながら喜び、メアはその笑顔を見ると少し笑いながら素っ気無く返す。そして二人はしばらくして再び話始める。

四十話 蒼き風嵐

夏休み目前に迫ったとある日の事。イチカとセシリアはアリーナで対峙していた。無論、アリーナに居るのは二人だけであり、他の面子や多くの生徒達は邪魔にならない様になっている。

「イチカさん、今日は私の為にお時間を頂きありがとうございます。今度、何かお礼させてください。」

「気にすんな。俺もティアーズの新しい力に興味あるし、何よりこの力をもっと使いこなしたいからな。…フフ。」

「?どうかされたのですか?」

「いや、入学早々にもこんな風に闘う前に話してたなーって 思い出してな。」

「そうですね。そしてあの時の戦いはタイムアップで引き分けになりましたわね。ならこの模擬戦…いえ、この闘いはあの時のリターンマッチと言う事になりますわね。」

「そう言う事になるな。…さて、悪いがセシリア、此方は試運転だろうと関係無い。この闘い…勝たせて貰うぞ。」

「あら、それは此方も同じですわ。新たなティアーズとの初陣は勝利を飾らせ貰いますわ。…ですからこの闘いは私が勝利を掴み取りますわ。」

「…。」

「ブレイカー! アイ! バッチリミナー! バッチリミナー!」

二人はお互い無言になり、イチカはゴーストドライバーを出現させナイトメアブレイカー眼魂をセツトするとゴーストドライバーからパーカーゴーストが紫の粒子を出しながら出現し、セシリアは眼を閉じ右手を心臓がある位置に置く。

「…変身！」

「開眼！ナイトメア！喰らうは絶望！魔剣を抜刀！心の闇を解放！」

「舞いなさい！クリアティアーズ！」

掛け声と共にイチカは仮面ライダーゴーストナイトメアブレイカー魂に変身する。一方セシリアはブルーティアーズと大きく異なるフォルムのIS『クリアティアーズ』を纏う。その姿はブルーティアーズと比較すると全体的に鋭利な姿になり、青かった装甲が濃ゆめのクリアブルーになっていた。

『綺麗…』

クリアティアーズの美しさに自然と言葉が漏れ、周りはその言葉に共感する。無理も無い、今のセシリアは蒼く輝く水晶の鎧を纏う騎士の様な姿であった。

『ナイトメアカリバー！』「…。」

「…。」

二人はそれぞれナイトメアカリバーとスターライトmk111が強化されたテンペスタスターを無言で構える。静寂の中で二人

が待つのは試合開始の合図のみ。それ以外の音声は受け付けておらず、他の生徒達もそれを分かっている為に先程の眩き以降は何も話さない。そして遂にその時が訪れる。

「3 2 1 試合開始！」

「…。」

合図と共にイチカは走り出す。一方セシリアは此方に走り出しているイチカに照準を合わせ四発程射撃する。しかし、イチカは放たれたレーザーを全てナイトメアカリバーで斬り裂き、連続でナイトメアカリバーを振るう。それを見たセシリアは後方へとバツクするとセシリアが立っていた位置に幾つもの斬られた様な傷が付く。

ガキイイイイイン！

イチカがセシリアに追い付きナイトメアカリバーで斬り掛かる。しかし、それをいつの間にか出現させていた大槍、ロンゴミニアドで防ぎアリーナ内に金属同士がぶつかり合った甲高い音が鳴り響く。

「流石はイチカさんですね。挨拶代わりにあれを全て斬ると思ってもいませんでしたわ。」

「それは此方の台詞なんだが。さっきの斬撃波を避けられるなんてな。…さて、ギア上げて行くぞ！セシリア！」

「ッ!？」

「ガンガンセイバー！」

イチカはゴーストドライバーからガンガンセイバーをセシリアに

向かって勢い良く出現…いや、この場合は射出と言った方が良さだろう。零距离からのガンガンセイバーの射出はセシリアに少なからずダメージを与えガンガンセイバーをキャッチし、追撃しようとする。

「(成る程。確かにこれには驚かされました。…ですが!) ティアーズ!」

「ツッ!」 カチャ 「セット! ロビンフッド!」

セシリアの号令と共に二つある非固定浮遊部位アンロックユニットから八機のティアーズがイチカに向かって高速で襲い掛かる。それを対処するためイチカはガンガンセイバーをガンモードにし、ナイトメアカリバーの持ち手部分をずらしロビンゴースト眼魂をセットする。そしてティアーズ八機とセシリアの持つテンペスタスターによる同時射撃が始まった。死角等の様々な所から射撃にセシリア自身が放つ変則的な射撃。それら全てをイチカは回避し、ガンガンセイバーガンモードとナイトメアカリバーシューティングモードで相殺する。

「チッ! (二次移行してからティアーズが四機から八機に増えたのか…厄介だな。だが…) この位は何て事は無い。」

「なら、これならどうでしょう!」

「!」

ティアーズからレーザーが放たれる。それだけなら良かっただろう。放たれたレーザーは回避したとしても曲がり追尾し拡散する。しかしイチカはそれら全てを回避や相殺、時折闇の力で造り出したヴェールの様な物で防いでいる。

「(ここままじゃ切りが無いな…。なら強引に突破する!)…此処だ

！」

「…。」

イチカは一気に加速し、セシリアに接近する。そして自身の間合いに入った瞬間に斬り掛かる。だが

「なっ!？」

イチカの攻撃は四機のティアーズが発生するバリアに防がれる。そしてイチカは一旦セシリアから離れる。

「イチカさん、クリアティアーズの進化はティアーズの数だけではありません。そして…この様な事も出来ますの。」

そう言うのと八機のティアーズはエネルギー状のブレードを形成する。そしてセシリアは右手にテンペストブラスターを、左手にロングミニアドを構えてイチカに向けると周りにブレードを形成したティアーズが集まる。

「さあ、イチカさん。お覚悟はよろしくて?」

「上等!セシリアが本気で来ると言うならば此方も本気で迎え撃つ!」

そう言うのと二人はほぼ同時に動き出す。セシリアの動きは先程と違い接近戦を仕掛け、ティアーズが斬り掛かる。しかし、イチカはそれらを冷静に対処しカウンターを入れようとするがティアーズのバリアに防がれる。そしてこの時、イチカは攻撃を仕掛けながらある事を考えていた。

(…何なんだ?この違和感は何?セシリアがクリアティアーズを展開

してから…展開してから？いや、違う。違和感を覚えたのはクリア
ティアーズを展開した後。まさか…！)

(！マスター！下から熱反応！)

(分かってる！)

イチカは迫り来るレーザーを射撃で相殺する。そしてイチカは射
撃が放たれた方向を確認するとブレードを形成したティアーズとは
別の形をしたティアーズが銃口を向けていた。

「やはり防がれましたか…。もしかしたら…と思ったのですが中々
上手くいきませんわね。」

「って言いながら九機目を用意していた辺り本気で勝ちに来てる
な。」

「勿論ですわ。私はイチカさんに本気でそして本当の意味で勝ちに
来ていますから。」

「(本当の意味…?) 成る程な。だけどセシリア、俺は九機のティ
アーズなら何の問題は無い。」

「…フフ。」

「…何が可笑的い？」

「いえ、失礼しました。ですがイチカさん？私はティアーズが九機
だと言った覚えがありませんが？」

「マジか…。」

(うっわ?!滅茶苦茶多いな~?!)

(…これは予想外だな。)

(どうしよう?!どうしようマスター?!流石にあの数は初めてだよ!?)

(お、落ち着きましょう?!確かに数は多いですが見極めれば何とかなります!)

「何とかしたいのは山々だが…白式の言う通りあの数は俺にとっても未知の領域だな…。」

イチカ、ユルセン、メア、白式、白騎士はセシリアが微笑みながら展開したティアーズの数に驚いていた。それもそうだろう、公式でのBT兵器の最大稼働数はセシリアのミサイルを含めた六機であり、イチカが知る上ではマドカの専用機であるサイレントゼルフィスの十機が最大稼働数である。しかし、セシリアが展開しているティアーズの数は既に展開されていた九機+腕と脚部から展開された十一機の計二十機である。

「ではイチカさん。これより嵐吹き荒れる舞踏会を始めましょう。」

「ッ!」

セシリアの言葉と共に二十機のティアーズが一斉にイチカに襲い掛かる。様々な方向からの襲い掛かる射撃や斬撃、更にはセシリアのテンペストブラスターによる砲撃。接近すればティアーズのバリアで防がれ、ロンゴミニアドで穿たれる。

(チツ！今は何とかなっているけど圧倒的に手数が足りない！)

(おい、てめえは兎に角避けまくれ！俺がタイミングを測るからロビンのオメガファイナーレで一掃するぞ！そして委員長とロリっ子はサポートしろ！)

(分かりました！)

(了解！ってだから私はロリっ子じゃないよ！)

(落ち着け白式！兎に角頼むメア！)「大開眼！BREAK SPE
L！」

(ああ！)

イチカはセシリアの猛攻を回避しながらナイトメアカリバーの宝玉を押すとイチカの周りに闇の力で精製された無数の矢が出現する。しかしセシリアはその光景を見ても慌てる事も無く、攻撃を続ける。

(…！てめえ！今だ！)

(ああ！)「オメガファイナーレ！」

引き金を引くと無数の矢は一斉に二十機のティアーズとセシリアに放たれる。闇の矢は凄まじいスピードで迫るがセシリアは焦る処か笑みを浮かべながらティアーズと共に一斉射撃を開始する。そして

「嵐の前にはどんな力も無意味ですわ。」

「単一能力『テンベスト・オーバーロード風嵐の霸王』発動！」

「[[[[[...は？]]]]」

イチカ、メア、ユルセン、白式、白騎士は目の前で起こった事に啞然としていた。何故ならばセシリアに迫っていた無数の闇の矢が何事も無かったかの様に全て消滅したからである。そしてセシリアとティアーズは一斉射撃をしたばかりである。と言う事は

(...!?間に合え！)

セシリアとティアーズが放ったレーザーはイチカに直撃して爆発が起こり煙に包まれる。これを見ていた生徒達はセシリアの勝利を確信していた。しかし、一部の生徒はまだ終わっていないと確信している。それは当事者であるセシリアが一番理解していた。

「開眼！白式！白き翼！掴むは夢！目指すは空！」

「...！」

音声と同時に煙の中から斬撃がセシリアに迫るがロンゴミニアドで難なく防ぐ。そして煙が晴れるとそこにはナイトメアブレイカー魂の体に白式パーカーゴーストを纏い、右手にナイトメアカリバーを左手に白盾アイギスを装備したゴースト白式ブレイカー魂の姿があつた。

「やはり防がれますか。しかし、それでこそイチカさんですわ。：だからこそ、だからこそライバルである貴方に勝利する事に意味があるのですわ！」

「そうだな。だけどそれは此方も同じだ！ (...あつぶねええええ!? 三分の一以上削られたが何とか全損は免れた！てか斬つても斬つて

も終わらないし白式じゃなかったら終わってたぞ!？」

(さ、流石にキツイ…。もうあんな短時間に何度も盾を作りたくねえよ…。)

(私も防御力上げるために急いでメアさんと変わったけど普通にダメージもあってキツイよ…。)

(白式に同じくMasterとメアさんに致命傷の射撃ポイントを伝えるのに疲れました…。)

「イチカさん。」

「?どうした?」

「私のクリアティアーズ、イチカさんの白式ブレイカー魂。まるであの日の再現みたいですね。」

「そうだな。あの日から俺とセシリアはライバル同士になってお互いを高め合った。」

「だからこそ!」

「お前(貴方)に負ける訳にはいかない!(負ける訳にはいきません!)」

「セット!ナイトメア!」

イチカはナイトメアカリバーからロビンゴースト眼魂を取り出しナイトメアブレイカー眼魂をセットするとイチカの周りに紫色の靄の様な物が幾つも出現し、セシリアはテンペスタスターとロンゴ

ミニアドを連結させ大型の銃槍、テンペストミニアドへと姿を変える。

「行くぞセシリアアアアアアアアアアア！」

「ツ!?(何時もより速い!?!視覚で捉えるのは不可能に近い…なら。)」

セシリアは目を瞑り、視覚以外の感覚を研ぎ澄ます。音で、空気の振動でイチカが何処から攻撃を仕掛けるかを探る。

「…！そっ！…な!?!」

セシリアは確かに攻撃を防いだ。しかし、そこにあつたのはナイトメアカリバーのみであり、ゆっくりと地面に落ちていく。

「一体何処に!?!がっ!?!(後ろ!?!それにこの強い衝撃はまさか!?!)」

「剣で攻撃すると思っただろ?！」

「…普通は剣を囨にして盾を攻撃に使うなんて思いもしませんよ。」

「だろうな。あ、それとセシリア。下からの奇襲に気をつけろよ。」

「何を言つて…イチカさんは目の前にいらっしやいますし、下には落ちたナイトメアカリバーが…!?!」

(チッ！仕留め損なつたか。)

セシリアは咄嗟にテンペストミニアドで防ぐ。そして、そこには地面に落ちた筈のナイトメアカリバーが浮遊していた。

「…成る程。 囿であり本命と言う訳ですね。」

「そう言う事。 さて、 まだまだ行くぞ！」

「ええ！ まだまだこれからですわ！」

二人は一気に加速し何度もぶつかり合う。 お互いはぶつかり合う度に更に加速していき、次第に一般の生徒達は目で追うのが困難になり、ただ金属同士がぶつかり合う音が聞こえるだけとなった。

「それではファイナールと参りましょう。 集えティアーズ！」

セシリアはテンペストミニアドを天に掲げ掛け声と共に十機のティアーズがテンペストミニアド集まり連結する。

「…成る程、 そう言う事か。 あの言葉の意味がやっと理解出来た。 なら俺のすべき事はただ一つ！） ならば迎え撃つのみ！」

「大開眼！ 白式！ オメガドライブ！ 大開眼！ 白式！ オメガドライブ！」

オメガドライブにより精製された白いエネルギーが白盾アイギスに集まる。 更に一回オメガドライブを発動し白盾アイギスに集まるエネルギーが増幅する。

「貴方に…美しき鎮魂歌を！ はあああああああ！」

セシリアはイチカに向かってテンペストミニアドを全力で投擲する。 連結されたティアーズがブースターの役割をしている為に凄まじいスピードでイチカに迫る。

(速い…。それでも防いでみせる！)

「大開眼！白式！オメガドライブ！」

「はあああああああ！」

イチカは最後のオメガドライブを発動し白盾アイギスに最大までエネルギーを溜め、一気にそのエネルギーを解放する。

「グツ!? (一撃が重い…!? ティアーズ十機でこの威力か…十機? 残りの十機は!?)」

(マスター! 前!)

(!? そう言う事かよ…!)

白式の言う通りに前を見ると轟音と共に猛スピードで急接近するセシリアの姿があり、途中で蹴りの体制に変える。そして

「はあああああああ！」

「ガアア!? (そう言う事かよ…! 残りのティアーズをブースター代わりにして加速、そこから銃槍を押し込む様に蹴りを入れたのか…!」

「ティアーズ…」

「ツ!? (不味い!? これ以上はアイギスが持たない!?…なら!)」

「大開眼！LOST SPELL！」

「フルバースト！はあああああああ！」

イチカは白盾アイギスを両手から右手を離し腰に差していたナイトメアカリバーを引き抜き、太腿で宝玉を押す。すると何時もとは違う音声が鳴り、ナイトメアカリバーの刀身は紫色の闇を纏う。一方セシリアは全てのティアーズを一斉噴射し更に加速する。そして次第にセシリアは蒼い光に包まれる。やがて

ピキッ

セシリアによる一撃で強固な護りを誇る白盾アイギスに亀裂が生まれる。亀裂が生まれればそこから徐々に亀裂は広がっていく。

(マスター!?)

「ッ！（落ち着け…！タイミングを見誤るな…！）」

バキッ！音と共に限界を迎えた白盾アイギスは砕け散る。そしてイチカの目の前に映る光景にスローモーションで迫り来るセシリアの姿があった。

「ぜえええええあああああああああ！」

「オメガデッドエンド！」

イチカはナイトメアカリバーを全力で降り下ろす。そして紫色の禍々しい闇と蒼色の神々しい光がぶつかり合い、アリーナ全体を閃光が包み込む。

『…』

誰も一言も話さずにただ静かに見守るのみ。やがて光に慣れてくるとアリーナ内の光景が目映る。そこにはゴーストが解除され、剣を降り下ろした様な姿をしたイチカの姿と同じくクリアティアーズを解除され、イチカの反対側に膝を着いて着地しているセシリアの姿があった。そして勝敗を告げるアナウンスが鳴り始める。

「シールドエネルギーエンプティ―！勝者

セシリア・オルコット！」

「マジかあ…負けたく…！て言うか完全敗北かあ。正直行けると思ってたんだけどなあ…。」

そう言いながらイチカは悔しそうに仰向けに倒れる。しかし態度では悔しそうにしているが表情は少しばかり笑みを浮かべていた。

「大丈夫ですか？イチカさん？」

「うん？ああ、大丈夫だ。確かに悔しいが完全敗北されたと思うと逆に清々しく感じるしな。」

「いえ、そうではなくて…。左腕は大丈夫なのですか？」

「ああ、左腕か。かなり痛むが骨は逝ってない。念の為に後で保健室に行くつもりだ。よつと。ま、今回は俺の負けだ。だけど次は俺が…いや、俺達が勝つ！」

「フフ、いいえ。次も私達が勝利を掴み取りますわ！」

イチカは起き上がりセシリアに右手を差し出しながら笑顔で決意する。セシリアも同じく笑顔で差し出された右手を握り決意を伝える。そして二人の戦いを称えアリーナ内は拍手で包まれた。

四十一話 バイト

とある広場のステージ。そこには幼い子供達や保護者と思われる大人達、中高生の少女達が少なからず集まっており、今か今か何かが始まるのを楽しみにしていた。そしてその時はやって来た。

「みんなー！こーんにちはー！」

『こーんにちはー！』

ステージ端から赤い帽子と衣装を身を包み、可愛らしい猫のお面を着けて腰まである茶髪を後ろで束ねた小柄な女性が出て来て元気良く挨拶をする。そして其を見ていた子供達も元気良く挨拶をする。

「おやおや？元気が足りないぞ？もつと大きな声で！せくの！」

『こーんにちはー！！』

「はい、良くできました！じゃあ、みんなは私の名前分かるかな？」

『キヤットガールちゃん！』

「正しく解！そして何と！今日は私の相棒のラビットム君が来てくれてます！」

『わああああああ！』

小柄な女性もといキヤットガールが口に出した相棒のラビットム君。その名前を聞いた子供達や中高生の少女達が大きな歓声を上げ

る。

「それじゃあ！みんなでラビットム君を呼んでみよう！せーの！
『ラビットムくーん！』」

キヤットガールと子供達は元気良くラビットム君の名前を呼ぶ。
しかし、ラビットム君なる者は現れない。

「あれれ〜？可笑しいな〜？じゃあ、今度はもつと大きな声で呼んでみよう！せーの！『ラビットムくうううん！』」

「よつ、やあ！みんな！こんにちは！僕の名前はラビットム！みんなの夢と笑顔を守る事が僕の仕事だよ！」

『わあああああ!!ラビットム君だー！』

先程よりも元気な声で呼ばれ、アクロバティックな動きで出てきたのはウサギと幽霊が合体した可愛らしいゆるキャラ、PRCのマスコットキヤラクターのラビットム君である。因みにボイスチェンジャーを使っている為に可愛らしい声になっている。

「それじゃあ、まずはラビットム君ダンスから行ってみよう！」

「みんなも僕達と一緒に踊ってみよう！」

『はーいー！』

すると明るい音楽が流れ始めるとラビットムとキヤットガールと子供達が音楽に合わせて踊り始める。そしてこの時、ラビットムとキヤットガールはある事を思っていた。それは

(ヤバイ…！このバイト、凄く楽しい！子供達の笑顔を見ると何かこう…浄化される感じがする！)

曲の終盤に入りラビットムとキヤットガール、そして子供達処か保護者や中高生の少女達もテンションを上げていき、ラビットムとキヤットガールは観客で見ている人達を楽しませる為にラビットム君ダンスの目玉に移る。

「行くよーラビットム君！」

「うん！行こう！キヤットガールちゃん！」

ラビットムとキヤットガールはステージ上で少し助走をして二人同時にバク転を決め格好良くそして可愛くポーズを決める。

『わああああああ！ラビットム君かっこいいー！』

『キヤットガールちゃんかわいいー！』

(決まった！そして！子供達から贈られる声援や笑顔！そして今の俺は！(私は！)誰が何と言おうとラビットム君だ！(キヤットガールよ！))

ノリノリでラビットム君とキヤットガールを演じるこの二人。実は急遽このバイトをする事になったイチカと鈴である。何故この二人がこの様なバイトをしているかと言うと、それは数日前に遡る。

数日前

♪♪♪「電話？しかも義母さんから？もしもs『イチカ！今度の日曜は暇!?暇よね!?お願いだから暇って言ってええええええええええええ!?』うおっ!?一体何があつたんだよ…?」

『さっきい…ラビットム君…イベントオ…担当者あ…駆け落ちい…連絡う…中の人お…他の人お…バイトオ…鈴ちゃん…都合う…キヤットガールウ…お願いい…い…』

「…えーと、さっきラビットム君のイベントの担当してた人が駆け落ちしたって言う連絡があつてラビットム君の中の人をする人が他に居ないから俺が中の人をバイトしてくれ。ついでに鈴の都合も合えばキヤットガールもしてくれ？」

『お願いいいいいいいいいいい！ラビットム君を待つてる子供達のためにいいいいいいいいいい！バイト代弾むからあああああああ！』

「分かったから！空いてるから！鈴にも聞くから！だから落ち着いてくれ！」

『本当に!?絶対よ!?鈴ちゃんにも確認も宜しくね!?それじゃ私は仕事に戻るから！』ピッ

「…何か嵐みたいだったな。取り敢えず鈴に聞いてみるか。」

「だな。おい、噂をすれば何とやらだ。」

「やつほーイチカー!…ってどうしたのイチカ?何か困り事?もしかしてスコールさんに何か頼まれてついでに私の都合も聞いてくれとか言われたの?」

「正解。今度の日曜日にラビットム君ショーのバイトをしてくれって頼まれて鈴の都合が合えば一緒にバイトして欲しいってさ。」

「成る程ね。因みに土日は空いてるから私は大丈夫よ！」

「了解。なら義母さんに鈴も大丈夫って伝えとく。後で時間とか知らせるから。」

「分かったわ!」

ラビットム君ショーのバイトについて楽しく話している二人だが、このバイトがあれほど大事になるとは思ってもいなかった。

「さあ!今日のメインイベントのラビットム君との握手と写真撮影会の時間がやって来ました〜!」

「ルールを守って走らず割り込まないようにゆっくり並んでね!」

『はあああああああああああ!!』

(ああ…人を笑顔にするって気持ちいいなあ。)

キヤットガールの言葉に子供達や中高生更には保護者までもテンションが最高潮になっており、その光景を見たイチカと鈴は心が満たされていた。そして最後に並んでいた少女と握手をし写真撮影が終わり、ラビットム君ショーの終わりに近づく。そしてこのタイミングで事件は起きた。

「みんなー!そろそろラビットム君ショーの終わりの時間が近づい
「ここにいる全員動くな!」て?」

「…あ?」

セリフを遮られ、声が聞こえた方向を見ると慌てている三人組の男

性達が居た。一人は拳銃を持ち恐らくこの三人組のリーダーであろう体格の良い男性。もう一人はナイフを持ち平均的な体格の男性。最後の一人はかなり膨らんでいる黒いバツクを両肩に持つ小柄な男性。そしてこの時、ラビツトム君イとキャットガールチは自分達の運の悪さを呪いながら三人組に怒りを抱いていた。

『イチカー！聴こえる!?今、ニュースでイベント会場の近くで銀行強盗が起きたらしいから！そろそろイベントは終わってる時間だと思うけど片付けと帰りの時は気を付けてね!』

(…絶賛銀行強盗それに巻き込まれてるけどな。さて…この状況をどうすれば被害を極限まで抑え打破出来るか、それが問題だな。)

(…最悪な事態ね。…子供達や保護者さん達に被害が出ない様に尚且つ素早くあの三人組を仕留めるにはどうすれば?)

突然の出来事に中高生の少女達や保護者達は不安になり始める。それが子供達にも伝わり始め、次第に子供達は震えながら声を発し始める。子供達の声にリーダーの様な男性はイライラし始め遂には。

「うるせえええええ!!静かにしやがれ!」バアン!

「ツ!?!」

男性はイライラが頂点に達した為に持つていた拳銃を空に向けて発砲する。拳銃の発砲を見た子供達は恐怖のあまり泣き出してしまい、中高生の少女達も声を出してはいないが涙を浮かべている。この光景を見たラビツトム君イとキャットガールチの中で何かが切れた。

「チツ!静かにしろって言つて…子供達を泣かすんじゃないよ。なっ!?!何時のm「遅い。」があっ!?!」ドサツ

ラビットム君は男性の持っていた拳銃を叩き落とし顎に向かつて強烈な顎打ちを打ち込み脳震盪を起こしゆっくりと倒す。

「…！お、おい！此方には人j」…させると思う？」ツ！?このガキ！
「こんな拳が私に当たると思うな。」ふぎけん「ハアアツ！」ゴハツ！」

キヤットガールもラビットム君と同じ様に男性の持つナイフを叩き落とし、自身に放たれるパンチを全て回避して男性の顔に強烈な蹴りを繰り出す。

「…ふ、ふぎけん！何物なんだよお前ら…うつ?!」ドサツ

「僕の名前はラビットム。みんなの夢と笑顔を守るのが僕の仕事だよ。」

「私の名前はキヤットガール。ラビットム君を支えるパートナーよ。」

ラビットム君とキヤットガールは小柄な男性との距離を一気に詰めて腹部に目掛けて正拳突きを放ち、男性はゆっくりと膝から崩れ落ちる。そして二人さ何者と聞かれた為にきちんと自己紹介をした。

「二人共！これ使って！」

「分かりました！っと、みんな！もう大丈夫だよ！怖いお兄さん達は僕とキヤットガールちゃんが何とかしたからスタッフのお兄さんやお姉さん達の言う事をちゃんと聞いてね！」

二人はスタッフから投げられたガムテープを使い倒れている三人組を拘束していく。そして男性達が持っていた拳銃とナイフ、パンパ

ンに膨らんでいるバックを回収し一つに纏めながら子供達を安心させる為に声を掛ける。

「それじゃあ！悲しいけどお別れの時間です！今日は怖い事もあったけどそれ以上に楽しかったかな〜？」

『楽しかったー！』

『ラビットム君とキャットガールちゃんがかっこよかったー！』

『また見たーい！』

「みんなー！ありがとうー！それじゃあ、まったねー！」

ラビットム君とキャットガールはショーをお別れの挨拶をすると直ぐにステージの側にあるテントに引き下がりに着替える。

「俺達も片付け手伝います！」

「イチカ君と鈴ちゃんはそのまま本社に向かって！片付けとか後処理とかは私達に任せて！あ、それから、はい！お弁当とお茶！今日は本当にありがとう！途中危険な事もあったけど二人のお陰で何とかなったから、ゆっくり休んでね！」

「ありがとうございます！」

イチカは鈴をバイクの後ろに乗せP R Cの本社へと向かう。道中で二人は先程のバイトの事を話しており、とても楽しそうにしていた。そして小一時間程でP R Cの本社に着くと真っ直ぐスコールの元へと向かう。

コンコン「義母さん、イチカと鈴だけど。今入っても大丈夫か？」

「良いわよう。さて二人共お疲れ様。聞いたわよ、二人の活躍。イベントに乱入してきた銀行強盗を被害無しで鎮圧したそうね。でも銀行強盗と交戦したって聞いた時はヒヤヒヤしたけど二人が無事で何よりよ。」

「ア、アハハ…。(い、言えない…。つい頭にきて鎮圧したなんて口が裂けても言えない…。)」

「はい、二人共。今日はお疲れ様。本当にありがとうね♪お陰で助かったし、スタッフの皆からもありがとうって。」

「いえ此方こそありがとうございます。お陰で貴重な体験が出来ました。それに、やっぱり子供の笑顔って良いなって。」

「そっか。それは良かったわ♪そして、はい。バイト代♪」

「ありが…。う。なあ、義母さん？今日のバイト代って確か一人二万だったよな？何か…厚くないか？」

「当たり前でしょ？中に十万円入ってるだから。あ、因みに一人五万円ね。」

「いや、多いな!？」

「ほら、二人が銀行強盗を捕まえてくれたじゃない？だから特別手当で三万円プラスしたの。あ、因みに返金した場合倍にして返すからね。」

「ハア、分かったよ。そう言う事ならありがたく受けとるよ。それ

じや、俺達は I S 学園に戻るよ。」

「本当にありがとうございます。」

そう言うと二人は P R C を出て I S 学園へと戻り、イチカの部屋で少しばかり仮眠を取り体を休める。そして夕食時に二人はあるニュースを目にする。

『次のニュースです。今日、昼頃に〇〇銀行を襲った三人組を P R C のマスコットキャラクターであるラビットム君とキヤットガールちゃんが鎮圧しました。この活躍を切っ掛けに二人の人気は急上昇しています。』

「……。 (マジか……)」

「あの二人すごいですわね。かなりの実力を秘めていますわ。それにラビットム君もキヤットガールちゃんも私好みの可愛さですわ！」

「うむ、画面越しでも分かる。無力化している動きもそうだが的確に急所を捉えている。そして兎と言うのが私的にもポイント高いぞ！」

「二人に同感だね。後、これからの二人の活躍が楽しみだよ。」

「そうですね。これからお二人はくまオンと並ぶ日本のマスコットキャラクターになりそうですね。」

「それにしてもラビットム君とキヤットガールちゃんの正体は誰なんでしょうか？」

「うーん、何故だかあの二人の体運びに既視感を覚えるな。」

「そうね。(そりやそうよ!?あれは私とイチカなんだから!?)」

「ミューゼル君は何方かご存知なんですか?」

「!∴俺も実は知らないんですよ。知ってるのは義母さんと他数名くらいですから。(あつぶね!俺ですって普通に言いそうになったぞ!?)」

「成る程。もしかしたら、と思ったのですがやはり知っている人は極一部なんですね。」

四人の会話を聞いているイチカと鈴はラビットム君とキヤットガールの正体が自分だとバレないか内心焦っていたが表面上は普通になっている。これが夕食が終わるまで続いた。

四十二話 真の最強と夏祭り

夏休みに入りイチカ、鈴、セシリア、ラウラ、簪そして束はとある人物の別荘を目指している。因みにシャルロットは用事がある為に夏休みに入ると直ぐに母国であるフランスに帰国している。

「おー彼処に見えるのイケメンレディはもしかしなくて永久ちゃんだね！やっほー！永久ちゃん！」

「束さん！走ると危ないですよ！」

「大丈夫！大丈夫…のわっ!？」

「…ハア、落ち着け束。…はしやぎ過ぎだ。」

「あはは。ありがとう永久ちゃん。と言うか片手で支えてるけど重くない？もしかしてまた強くなった感じ？」

「…まあな、毎日鍛錬を欠かさず過ごしているからな。…そう言うお前は相変わらずだな。…つとそうだ。…今日から三日間君達に戦闘やISのメンテ、プログラミング等こIS関係を束と共に教える事になってる黒姫永久だ。…この三日間宜しく。」

「同じく皆にISの事を教える篠ノ之束だよ。と言っても君達とは臨海合宿以来だけだね。」

「…宜しく願います！」

永久は小石に躓き転びそうになった束を片手で支えそのまま自己紹介を始める。そして束は永久から離れ自己紹介を始める。そして鈴、セシリア、ラウラはこの時、永久を目にした瞬間に理解する黒姫

永久と言う人物の強さを。

「…さて、皆の部屋は二階で基本的に二人部屋で部屋に君達の名前が書いてある、各自その部屋を使ってくれて構わない。…では、三十分後にある一階のリビングに集まってくれ。」

「「「はい！」」」

「…良い返事だ。…それでは皆、遅れない様にな。特に束、遅れるなよ?。」

「何で!?何で私!?!」

「…束、うるさい。」

「ひどい!?!」

「…フツ、冗談だ。」

「分かりづらいよ!?!あ、皆ごめんね!?!少し時間を経つちやつたけど集合時間は変わらないから急いで準備してきて!」

「大丈夫ですよ束さん。準備なら直ぐに終わりますから時間内に集合出来ますよ。」

「…と、兎に角!皆遅れない様に集合だからね!?!絶対だよ!?!」

「分かってますよ。」

イチカ達は二階へ上がり『イチカ・ミューゼル』『鳳鈴音 更織簪』『セシリア・オルコット ラウラ・ボーデビイツヒ』と達筆な字で書か

れた部屋を見つけそれぞれ入り準備を始める。

イチカ+メア、白騎士、白式、ユルセン

「よし、準備完了。…何だろうな？あの部屋は何か嫌な予感がする。」

「嫌な予感？…ああ、そういう事か。」

「あー、成る程ね。」

「嫌な予感と言うよりは危険な感じでしょうか？」

「だなく。何せセシリアの嬢ちゃんと同室はラウラの嬢ちゃんだからなく。」

「…まあ、取り敢えずリビングに向かうか。待ってる間にPCの動作確認とか出来るし。」

「だな。」

鈴、簪ペア

「そう言えば簪、永久さんってどんな人？見た感じかなり…と言うよりヤバいくらいに強い事は分かるんだけどね。」

「うーん、何て言えば良いんだろう？私も詳しい訳じゃ無いからなあ。まあ、でも直ぐに分かると思うよ？それに永久さんから教わる事はかなり役立つから。それよりも大丈夫？」

「何が？」

「セシリア。最悪私達が呼びに行かないと不味いんじゃない？」

「あー、まあ、大丈夫でしょ。…多分。」

「ええ…。」

セシリア、ラウラペア

「♪〜♪」

「…。(耐えなさい…！耐えなさい！セシリア！今此処で愛を溢れさせたなら大惨事になる事は一目瞭然。ならば今は耐えるのみ！)」

「楽しみだなセシリア！あの人の強さは師匠を凌駕している。そんな人に様々な事を教わる事が出来るなんてそれを考えただけで楽しくなると思わないか？」

「…！(フツ、ラウラさんの素敵に笑顔、まるで私自身が浄化される様ですわ。それにラウラさんの細過ぎずそれでいて美しく引き締まった体、正直最高ですわ！)(♪〜♪)…！イチカさんから？」

『おーい、セシリアー？生きてるかー？後十分位だから早めに来いよ？そして間違ってもラウラに変な事はするなよ？』

「分かっていますわ。それとありがとうございます。今からラウラさんとそちらに向かいますので。」

『了解。』

セシリアとラウラは部屋を出てリビングに向かうとPCを操作しているイチカ、簪、東と永久と話をしている鈴の姿があった。セシリ

アとラウラは永久の元へ向かい、待たせてしまった事を謝罪するが集合時間前だと言う事で気にしていなかった。

「…さて、時間まで少しあるが全員が集まった事だ。…場所を移動しよう、訓練は其処で行う。…此方だ着いて来てくれ。」

「今から行く所は絶対に驚くよ?」

「驚く? 一体何処へ向かうんですか?」

「フフ、それは行ってからのお楽」…地下にある訓練場だ。「永久ちゃん!? ネタバレ早くない!? もっとこう…引っ張るとかさ!」

「…知らん。どうせ向かうんだ、隠す意味は無いだろ。…と言う訳だ。今から地下訓練場に向かう。」

「へえ地下訓練場…地下訓練場!? そんな物があるんですか!」

「…ああ、兎に角着いて来てくれ、最初にやる事もあるからな。」

そう言うのと永久は壁の一部に黒いカードを翳すと壁が開き大人が十人程入れるエレベーターが出現し、乗り込む。イチカ達も驚きながら永久の後に続きエレベーターに乗り込む、約一分程するとエレベーターの扉が開く。そこにはIS学園のアーリーナと同等の広さの白い空間が広がっていた。

「「「広っ!」「」」」

「…さて、訓練を始める前に鈴君、セシリア君、ラウラ君、君達の実力を確かめたい。…だから私相手に本気で掛かって来い。」

「…え？あ、あの、貴女が強いのは見ただけで分かります。だからって流石に三対一はいくら何でも無理なんじゃ…。」

「それに本気と言う事はISやライダーの力を使えと言う事で間違い無い…と言う事でしようか？」

「…そうだ。…むしろ本気で来なければ君達の実力を正確に把握出来ないからな。…それとセシリア君とラウラ君はISでの実力を把握する。」

「…分かりました。ですが私達三人を同時に相手にした事を貴女は後悔する筈。」

「…後悔？違うな。むしろ私からすれば丁度良いハンデでしかない。」

「言ってくれる…！なら遠慮無く…紅龍！」

「来なさい…クリア・ティアーズ！」

「…行くぞ、シュヴァルツエア・レーゲン！」

「（…ふむ。）…東、イチカ君と簪君をあの場合所に連れてプログラミン
グ等を教えてやれ。」

「りよーかーい♪ぎ、二人とも行くこうか。」

「分かりました。…三人共！ガンバ！」

「「ええ！（はい！）（うむ！）」」

イチカと簪は鈴、セシリア、ラウラの三人の方を向き良い笑顔でサムズアップをしながらエールを送る。しかしこの時、鈴達三人は勘違いをしていた。自分達に送られたエールは勝てる様に頑張れと言う意味ではなく、死なない様に兎に角頑張れと言う意味である。

「…さてイツ君、かんちゃん、鈴ちゃん達は正直何分位だと思う?」

「様子見だから十分。粘って十五分」

「まあ、その位が妥当だね。決して鈴ちゃん達が弱い訳じゃない。むしろ私から見てもイツ君達は強い部類に入るし、今の国家代表と比べても圧倒的にイツ君達に軍配が上がるよ。でも永久ちゃんはそう言うレベルじゃないんだよね。二人共どう?」

「はい、と言うより永久さんの強さは底が見えませんか。今は大丈夫です。…あ、イチカ。此処どうする?」

「まあ、此処にいる全員が束になっても勝てない事は分かりますけどね。何処?...ああ、其処か、其処はノータイムで切り替えれるのが良いと思う。」

「成る程ね。じゃあ、この形だからこう言う風にして良い?これならほぼノータイムで切り換えが出来るから。」

「...成る程、その手があったか。あ、武装のデータそっちに送るから意見とか他に要望があったら言ってくれ。」

「分かった。…凄い、ほとんど私の要望通りだ。…ねえ?イチカ?もう一つ要望を言って良い?これとこれを連結させて弓に出来る?」

「出来るぞ。と言うより、多分言うと思って既に連結して弓に出来

る様に設計してる。今から送るのがそのデータ。」

「流石イチカだね。」

「イツ君、私にもそのデータ送って。あ、かんちゃんのもお願い。」

「良いですよ。」

「…やっぱり二人は凄いなあ、知識があるとはいえ十五歳の時の私を越えている。と言うより薄々気付いてはいたけど私と同じ領域に踏み込もうとしてる。…いや、もしかしたら既に踏み込んでる。なら私のやるべき事は一つ、二人に色々な知識を教えて私を越えられる様に導こう。ま、でも）此処の装甲をこうすれば切り換えがもっとスムーズになるよ。それとこれの此処をこうすれば扱いやすくなって、弓にした時にエネルギーのチャージ時間が短縮出来るよ。」

「ありがとうございます！」

「どういたしまして♪（簡単には越えさせないけどね♪）」

「…あ、そろそろですn（ドゴオオオオオオオン！）ジャスト十分。まあ、予想通りですね。」

「うん。鈴達に悪いけどあの人には一撃すら入って無いと思う。」

「まあ、永久ちゃんだからね。二人共、永久ちゃんの所に行こうか。」

「はい。」

イチカ、簪、東の三人は聞こえてきた轟音を合図にPCの操作を辞

めて鈴達が居る訓練場へと向かう。三人が無事でいる事を願って。そして轟音が聞こえる十分前の事。

「…では三人共、早速始めるぞ。…さつきも言った通り本気で来い。…もし本気で来なければ死を覚悟しろ。」

「「ッ!?!」」

永久はイチカ達が移動した事を確認すると身に付けていた腕時計に触れると一本の木刀が現れる。そして木刀を握り締め鈴、セシリア、ラウラの三人に向けて構える。そして三人は目の前の人物は例え三対一で戦ったとしても勝てない事を理解するがそれでも自身の武装を構え戦闘体制に移る。

「…準備万端の様だな。…私がコインを弾く、そしてコインが地面に落ちた瞬間にスタートだ。…行くぞ。」

「「…。」」

永久がコインを弾き中を舞う。そして鈴達三人は直ぐに反応出来る様に全ての感覚を研ぎ澄ます。コインはある程度の高さまで上がるとゆっくりと落下していく。コインが落下していく時間はほんの数秒の筈だが三人には何倍にも遅く感じていた。

((…!?!今!?!))

(…反応は申し分無い。…ならば次は。)

「「ッ!?!」」

「なっ!?!」

コインが地面に落ちると同時に鈴とラウラは永久に向かつて一気に加速して攻撃を仕掛け、セシリアは様子見でレーザーを一発撃ち込む。しかし鈴とラウラは何かを感じ取ったのか咄嗟に守りの体制に入るると後方に吹き飛ばされ、セシリアが撃ったレーザーは突然消滅する。三人は何が起きたのか分からないでいた。それもそうだろう、永久はコインを弾いてから全く動いていなかったのだから。

「（：咄嗟にガードしたか、直感も中々だな。：しかし驚いて追撃をしておかない、これは減点だな。）：どうした？その程度か？：：なら今度は此方から行くぞ。」

「ツ!?!（見えなかった!?!とi）ガツ!?!」

「：：考え事とは随分と余裕の様だな。」

永久は鈴との距離を一気に詰め斬り掛かる。しかしそれを咄嗟に防ぎ事なきを得る。だが、永久は考え事をしている鈴の顔面に強烈な蹴りを入れ、地面に膝を着かせる。

「鈴!?!」

「鈴さん!?!」

「：：しゃべる暇があれば攻撃を仕掛けるなり、行動の準備をするなりしたらどうだ?」

「ツ!?!言われなくとも!セシリア!」

「分かりましたわ!ティアーズ!」

ラウラはセシリアに声を掛けて眼帯を外し、もう一度永久に向かつて走り出す。そしてセシリアはティアーズを全て展開し一斉射撃でレーザーを放つ。

「…ほう、BT兵器か。（…だが、狙いが適當すぎる。そしてラウラ君は何をするつもりだ?…まあ、此方には関係の無い事だ。）」

「（…そう言う事か!ならば!）」「チツ!やはり攻撃は通らないか!」

（…止められた?...確か、AICだったか?それにラウラ君が眼帯を外してから動体視力が上がった?...しかし、セシリア君の狙いの適当さはどうにかならな...!）」

「ガッ!」

「鈴さん!ラウラさん!」「...どうした?隙だらけだぞ。」カハッ!」

永久は斬り掛かって来たラウラを掴み後方に全力で投げ飛ばし攻撃を仕掛け様としていた鈴にぶつける。そして、その光景を見て驚いていたセシリアに一気に近付き強烈な一撃を喰らわせる。

「ケホッ、セシリア!あんたの射撃全く当たって無いじゃない!狙うならちゃんと狙いなさいよ!」

「二度も攻撃を当てる事の出来ない鈴さんに言われたくはありませんわ!」

「二人共辞めろ!今は争っている場合では無い!目の前の事に集中しろ!」

「邪魔しないでラウラ!今此処でセシリアと決着を着ける!」

「同感ですわ！此処ではつきりと白黒着けますわ！」

「ツ！勝手にしろ！その間私は私のやるべき事をやる！お前達は決着でも何でも着けている！」

「元からそのつもりよ！」

「…ハア。（…イチカ君と簪君の仲間と聞いて期待してみれば、期待外れも良い所だ。…セシリア君の射撃は素人と疑うレベル、先程の鈴君とラウラ君の反応速度は感心したが仲間割れを起こすは、それを止めないは、ふざけているとしか思えないな。…正直、この三人が代表候補生とは思えないレベルだな。）」

鈴とセシリア向き合い仲間割れを始め、ラウラはレールカノンで永久に砲撃後、攻撃を仕掛ける。この光景を見ていた永久はイチカや簪から聞いたイメージと違う為に呆れるしかなかった。

「ハア！せいっ！」

「…。」

「ツ！まだだ！」

ラウラは何としても永久に一撃入れようとするが、全ての攻撃を難無く防がれる。しかし、ラウラも攻撃が全て防がれる事は想定内な為に焦る事はせず攻撃のリズム等を変えるがそれら全ても対処されてしまう。

「（…成る程、個人で見れば中々の物だな。…戦闘技術に動体視力、判断能力も今の国家代表と比べても見劣りしない。…むしろ越えて

すらいる。…だからこそ惜しいな。)…いや、此処で終わりだ。」

「ガッ!? (見えなかった…だと?この眼を使ってもこの人の木刀を振るうスピードを捉える事が出来なかった!? この人は一体どれ程の強さなんだ?…だが、私のやるべき事はやった。)」

「…さて、残りは二人か。」

「煉獄を纏え!紅龍!」

「単一能力『煉獄の霸王』発動!LINK1000%OVER!」

「ティアーズ!」

「はあああああああああ!」

「…鈴君のISの出力が上がった?…恐らく鈴君のISの単一能力は条件を満たすと出力が上がるのか。…そしてセシリア君はBT兵器をISに連結させ機動力を上げた…か。…そう言う事か。ラウラ君は二人に意識が向かないようにする。…それが先程ラウラ君が言ったやるべき事か。)…成る程。…どうやら私は勘違いをしていた様だな。」

鈴は煉獄の霸王を発動させ紅蓮の焰を纏い、セシリアは二十機あるティアーズを全て自身に連結させ、そのまま永久に攻撃を仕掛ける。しかし永久は何時の間にか取り出していた二本目の木刀と元から持っていた木刀で二人の攻撃を防ぐ。二人は攻撃の手を緩める事は無く、即席ではあるが二人の槍と長剣によるコンビネーションで攻撃を仕掛けるが永久はそのコンビネーションすらも容易く防ぎ

「…すまない。私は君達を過小評価し過ぎていた様だ。…だから最

後は私も少しばかり本気を出そう。」

「…え？」

「…は？」

二人は何が起きたのか理解出来なかった。気が付けば轟音が響き二人のISは解除されていた。その光景を見ていたラウラですら状況が理解出来なかった。何故ならラウラが見た光景は攻撃を防いでいた永久がいきなり姿を消したと思うと、いきなり姿を現した永久が鈴とセシリアを吹き飛ばした光景だからだ。

「…あ。」

「永久ちゃん！終わったー？」

「三人共大丈夫か？」

「見た感じ大丈夫みたいだね。」

「…束。…一応、三人の実力確認は終わりはした。」

「お疲れ様々。はい、お水。鈴ちゃん達の分もあるからしっかりと水分を取ってね。」

「…すまないな。」

「「ありがとうございます。」」

「…よし、イチカ君と簪君はこのまま私と何時もの訓練、鈴君、セシリア君、ラウラ君は束の指示に従って訓練。…頼んだぞ束。」

「任せて！」

イチカと簪は目隠しをして生身の状態で永久と、鈴とセシリアとラウラは束との訓練を開始した。勿論、イチカ達と永久達の實力は桁違いな為に攻撃が当たる事は無い。(時折、永久が調子に乗っている束に向かって放つ斬撃波が当たっているが。)それでも五人は諦めず永久と束に一撃を入れようとしていた。そしてこの訓練は昼前まで続き、終わる頃に五人は疲労が溜まっており、束に関しては少しボロボロになっていた。

「束さん、大丈夫ですか？何か…俺達よりボロボロなんですけど…？」

「大丈夫、大丈夫！体は真つ二つになってないからセーフ！ま、本気出されたらISの装甲すら斬り裂く斬撃波が飛んで来るから私生きてないけどね！」

「…全部お前の自業自得だな。…さて、昼食にしよう。昼食が終われば…まあ、楽しみにしていってくれ。…後、昼食の時は私服で構わない。今日の訓練は一応實力の確認だからな。」

永久の言葉を聞き各自解散し、私服に着替えてからリビングに集まり全員が揃うと昼食を食べ始めた。普段なら会話が弾む筈であるがイチカ達四人はある一点を見て絶句しており、その光景を見ている束は苦笑している。そしてイチカ達の視線を集めている永久と幸せそうな表情をしているラウラは特に気にする事も無く食事を進めている。

((何!?あのダサイTシャツ!?…よく見たら上着も何かダサイ!?))

(相変わらずダッサイTシャツだなく。永久ちゃんはあんな糞ダサTシャツをよく着れるよね。てかあのTシャツ何処で売ってんの？あ、上着にもTシャツと同じ様な文字が書かれてる。)

イチカ達の視線にあつた物。それは『Tシャツだ!!』と力強く達筆で白く書かれた黒のTシャツを着て、上から袖部分に『上着です。』と書かれた黒と白の薄手の上着を着ている永久はの姿であつた。

「…どうした？食事が口に合わなかつたか？」

「あ、いえ！そう言う訳では無くも「永久ちゃんの着ているそのダサTとダサイ上着に皆驚いて絶句してるんだよ。」ちよつ!?東さん!」

「…?…言う程ダサイか?これ?...私的にはかなり良いセンスだと思うが。」

「ダサイよ。前に見た可笑しな星座シリーズ並みにダサイよ。と言うか永久ちゃんの持つてる仕事着とジャージ以外の私服は全部ダサイよ。」

「…いや、それは可笑しい。私の所持している服は全部良いものだ。…後、あれは可笑しな星座シリーズじゃない、素敵な星座シリーズだ。」

「ブツｗｗｗｗ素敵ｗｗｗｗ星座シリーズｗｗｗｗ名前からダサイｗｗｗｗ」

「…先程からダサイダサイ言っているが蒼夜との初デートの時にアリスの格好をしたお前に言われたくは無いんだが?」

「ちよつと待つて!?何でいきなり私の黒歴史を暴露したの!?しかも

二番目に知られたく無い奴を!？」

「「「ブツ」」」

「…何故って私の中でダサイと言ったらお前のアリスしか思い付かないからな。…まあ、昔に比べたら随分良くなったと思うが初デートでアリスは無いな。」

「だからその話はもう良いってば!?!…まったく永久ちゃんたら、私の黒歴史はISのコア並みにブラックボックス何だからね?」

「…そうか、それはすまなかつたな。」

束は頬を膨らませながら永久に向かって文句を言うが束の顔は何処か楽しそうな表情をしており、永久も表情こそ変わってはいないが満更でも無さそうな雰囲気だった。

そして時が過ぎ、日が沈みかける頃。イチカは束達の提案で永久の別荘近くで行われる夏祭りに来ていた。服装も私服ではなく、白地に紫色の焰の様な模様がある甚平を着ており右手に持った団扇で自身を扇ぎながら鈴達の到着を待っていた。

(♪〜♪)

(随分と楽しそうだな? ロリっ子にゆるキャラ? そんなに浴衣が気に入ったのか?)

(まーね♪ってだからメアさん! 私をロリっ子って呼ばないでよ! 私にはちゃんと白式って言う名前があるんだから!)

(そくだ、そくだ! 後、ゆるキャラじゃなくてユルセンだからなく!)

(知るか、お前らはロリっ子とゆるキャラで充分だ。)

(三人共、今日くらいは仲良くしましょう。折角メアさんのお陰で私達も浴衣を着て見て回れるですから。メアさんもあまり白式とユルセンを挑発しないで下さいね?)

(…チツ、委員長に免じてこれくらいにしといてやる。)

(ずるくない!?何でメアさんはお姉ちゃんに対してはそんなに素直言う事聞くの!?)

(ギャーギャーうるせえな!少しは黙ってろ!このぺったん娘!)

(なっ!?喧嘩売ってんのか!?それに貧乳はステータスだ!希少価値だ!…って言葉を知らないの!?)

(ハッ!所詮は負け惜しみだな!)

(いや、白騎士も言ったけど二人共喧嘩を辞めろよ?ほら、白式はメアを威嚇しない、メアもメアで白式を挑発するなよ。)

(…マスターがそう言うなら。)

(…フン。)

イチカが白式とメアの喧嘩を止めると二人は渋々威嚇と挑発を辞め互いに向き合う。

(ほら、二人共仲直りの握手をきちんとしてください。これからMasterを支える仲間なんですから。)

(…わかったよ、お姉ちゃん。)

(…チツ、仕方ねえな。…ほらよ。…まあ、さつきは俺も悪かったな。)

(メアさん…。うん！これからよろしくね、お兄ちゃん！)

この時、白式のメアに対する印象は口の悪い嫌な奴から口の悪い不器用な兄の様な人にならわっていた。その為、メアの呼び名をメアさんから白騎士と同じ様にお兄ちゃんと呼び名を変え、自身に差し出された手を握ろうとする。しかし

ゾワツ (…ツ!?)

(ちよつと!?!何でいきなり手を挙げたの!?!しかも何か嫌そうな顔してるし!)

(…いや、何て言うかお前が呼び名を変えた瞬間に背筋がゾワツとした。握手を避けた事と嫌な顔したのは謝罪するがなるべくその呼び名で俺を呼ぶんじゃねえ…!)

(ええ!?!良いじゃん！メアさんの事をお兄ちゃんって呼ぶ位良いじゃん！特に減るものでも無いし!)

(良くねえよ!?!兎に角、その呼び名で俺を呼ぶなよ!?!絶対だからな!)

(おやおや〜?それは呼ぶなよ!?!絶対に呼ぶなよ!?!と言うフリかな〜?)

(フリじゃねえよ!?しばかれないのか!?)

(ですから落ち着いてください!全くもう!)

(ハハ、確かに確かに白騎士は委員長だな。「おーい!師匠く!」お、鈴達も来たみたいだ…)

「ごめんイチカ、待った?」

「イチカさん、お待たせしましたわ。」

「お待たせ、イチカ。」

「…。」

イチカはラウラの声が聞こえた方を見ると固まってしまった。何故ならラウラの声が聞こえた方を見ると、蒼地に風の様な模様がある浴衣に蒼い装飾が付いた髪飾りを付け髪を纏めたセシリア、黒地に兎の模様がある浴衣に黒い装飾が付いた髪飾りを付け髪をサイドテールに結んだラウラ、空色の浴衣に水色の装飾が付いた髪飾りを付け眼鏡を外している簪、そして真紅の浴衣に真紅の装飾が付いた髪飾りを付け髪を下ろした鈴の姿があった。

「…あれ?どうしたのイチカ?」

「ごめん、待って。視界に映った情報に脳と理性が追い付いてない。スウ…よし!バツチ来い!」

「あー…そんなにしっかりと見られると…その…恥ずかしいんだけど…えっと…似合ってる…かな?」

「ご、ごめん！…でも凄く似合ってる。その…髪も下ろしてあるから新鮮な感じがする。あー…色々伝えたいのに上手く言葉に出来ないな、だけどこれだけは伝えられる。その姿は凄く似合って見惚れる程綺麗だ。」

「あはは、何か照れるね。でも、ありがと♪」

「この時、イチカの脳内には二つの選択肢が浮かんでいた。それはAこのまま鈴を押し倒し本能に身を委ねる。B鈴に押し倒され鈴に自身を委ねる。この二つの選択肢がイチカの中で葛藤していたのであった。」

「ちよいちよい簪さんや、想像で変なナレーションを付けるなよ。てか、何で選択肢が押し倒すと押し倒されるの二択なんだよ?」

「え?違うの?私的には鈴が水と間違ってお酒を飲んで何時もとは違う雰囲気になってイチカを押し倒してデープキスされるんじゃないの?」

「えらく具体的だな!?!てか俺が押し倒される側かよ!?!…たく、で?どうする?このままこのメンバーで回るか?」

「あ、ごめん。私は本音と回る約束してるから少し此処で待ってる。だからイチカ達で回ってて。」

「了解。セシリアは?」

「私も刹那さんと共に回る約束がありますのでまたの機会に。」

「分かったわ。ラウラはどうする?良かったら私達と一緒に回る?」

「良いのっ…いや、私の事は気にせず師匠と鈴は二人で回ってくれ。私は一人で回ろうと思う。」

鈴がラウラに自分達と一緒に回るかと尋ねると最初は嬉しそうな笑顔で答えようとするが二人の時間を邪魔しないように寂しそうな顔で断る。そして寂しそうな顔をしたラウラを見たイチカと鈴は互いにアイコンタクトをして頷き合う。

「そっか、でもラウラと一緒に回ったら楽しそうだと思ったんだけどなく？」 チラ

「まあ、無理強いは出来ないからな。ラウラが一人で回りたいってなら仕方ないな。色んな出店をラウラに知って貰いたかったんだけどなく？」 チラ

「うっ…。」

「ラウラが私達と回れないのはとっても残念ね。」 チラ

「仕方ないさ。ラウラにはラウラの考えがあるんだろ。…まあ、でも」 チラ

「ラウラと一緒にお祭りを回って色んな物食べたり遊んだりしたかったなく！」 チラチラ

「わ、私は師匠と鈴と共に回って良いのか？迷惑ではないのか？」

「全然。むしろ私達は本当にラウラと回りたいと思ってるし。」

「だな。で？どうするラウラ？俺と鈴と一緒に回ってくれるか？」

「も、勿論だ！私も本当は師匠達と回りたかった！」

「決まりだな。そしたら花火打ち上げの時にまた集合で良いか？」

「ええ。」

「了解。」

イチカ達はそれぞれ別れて別行動を開始する。イチカ、鈴、ラウラのグループは一足先に祭りを周り始める。そして待ち人を待っているセシリアと簪は時間を潰そうと会話を始める。

「そう言えばセシリア、最近はどうなの？」

「どう…とは？」

「え？黒姫先輩との進展だけど？「なっ!？」好きなんでしょ？黒姫先輩の事。」

「…ふう、どうやら簪さんにもバレバレだったようですわね。引きましたでしょう？異性ではなく同姓を好きになった私を。」

「いや、全然。別に人を好きになる事は悪い事では無いし、セシリアが黒姫先輩を好きになったとしてもセシリアはセシリアだよ。てか、ネガティブになりすぎ。もつと自分に自信持とうよ。と言うか私はセシリアの事を応援してるんだよ？」

「簪さん…ありがとうございます。イチカさん達にも同じ様な事を言われましたわ。どうしてもこの事になるとマイナスの事ばかり考えてしまいますわ。…このままこの気持ちを刹那さんに伝えても良

いのか、伝えたら伝えただで迷惑ではないか？イチカさんと鈴さんに応援されたにも関わらずそう考えてしまうのですわ…。」

「成る程ね。なら質問だけどき、セシリアは黒姫先輩の何処に惹かれて好きになったの？」

「私は…私はあの方の…刹那さんの全てに惹かれましたわ。あの美しく伸びる黒い髪に、真っ直ぐな瞳に」

セシリアは自身が刹那に惹かれている箇所を簪の瞳を見ながら伝えると同時に自身が惹かれて箇所を再確認する。例え実ら無かったとしてもこの気持ちを刹那に伝えるために。

「纏っている優しい雰囲気、刀を構えた時に見せる凛々しい姿に、時折見せる子供の様にはしゃぐ姿に、そして何よりも側に居て心が安らぎもつと共に居たいと自然に思え、どんなに事があるうと護り抜きたいのですわ。」

「その気持ちに嘘偽りは？」

「そんな物微塵もありませんわ！もう私は迷わず自分が決めた事を貫き通しますわ！」

「…ふふ、ちゃんと言えたね。私が思うにその気持ちを素直に黒姫先輩に伝えれば良いと思うよ？（それに私の勘が正しければ…）」

簪はセシリアの決意を聞き終わると、優しく微笑みながらどうすれば良いのかアドバイスを伝える。そしてそのアドバイスを聞いたセシリアは先程よりも晴れやかな表情になっていた。

「簪さん、アドバイスありがとうございます。…それはそうと一枚

「良ろしいでしょうか？」

「うん、最後ので台無しだよ。ま、それがセシリアらしくて良いけど。」

セシリアはカメラを取り出し、浴衣姿の簪に向けてシャッターを切り撮り納める。カメラを向けられた簪も満更でも無いのか満面の笑顔で返す。そして二人は刹那と本音が来るまで他愛無い話をして二人を待っていた。待っている最中に送られてきた画像を見たセシリアが変な声を挙げていたがそれ以外は変わった事も無く、そして刹那と本音が一緒に此方に向かって来ている姿が確認出来る。本音は簪とセシリアを見付けると長い袖に隠れた右手をバサバサ鳴らしながら二人の名前を呼び、刹那は小さく胸元で手を振っている。

「お〜い、かんちやくん！セツシ〜！」

「！……………ハッ！…簪さん、本音さんのあれは浴衣と呼べるのでしょうか？何と言うか…その…ちぐはぐし過ぎている様に見えるのですが…。」

「セシリア、本音のあれは間違い無く浴衣とは言えないよ。あんな浴衣とコスプレ巫女服を合体させた物が浴衣と呼べる訳が無いよ。と言うより誤魔化してるみたいだけど呼吸止まってたよね？」

「バレて居ましたか…簪さんの言う通り刹那さんの浴衣姿を目にした瞬間に…その…ときめきがオーバーヒートしたのですわ。」

「ときめきがオーバーヒート。」

「やつほ〜二人共々。楽しそうに何話してるの〜？」

「今晚はセシリアさん、簪さん。お二人の浴衣姿とても似合っていますね。」

「今晚は。そう言う黒姫先輩も似合ってますよ。そして本音のは何？浴衣なの？コスプレ巫女服なの？」

「えへへ、可愛いでしょう？お店で安売りされてる所を見てビッと来て買ったんだ。」

「成る程ね。狐耳と尻尾があれば完璧だね。」

「あるよ。」

「あるんだ。…ほら、セシリア。」

「…分かっていますわ。今晚は刹那さん、浴衣姿とても似合っていて思わず見惚れる程お美しいですわ。」

「あ、ありがとうございます。セシリアさんも雰囲気と浴衣の色が合っていてとても綺麗ですよ。」

「ありがとうございます。刹那さんにそう言われると光栄ですわ。」

簪は刹那に見とれているセシリアに軽く肘で突き意識を覚醒させ刹那の浴衣姿を褒める。自身の浴衣姿を褒められた刹那は顔を赤らめながら嬉しそうにしてセシリアの浴衣姿を褒める。

「あ、そうだ。セシリア、カメラ貸して。折角だから黒姫先輩と一緒に撮ろうか？」

「えっ!?良いんですの!?(ですか!?) あっ…そのお願いします。」

「ん、任された。なら二人共其処にならんで。ほらセシリア、もつと黒姫先輩に近付いて。黒姫先輩は恥ずかしがらないでください。：はい撮るよー、はいチーズ。はいセシリア、良く撮れてると思うけど確認宜しく。じゃ、私達は先に回ってるから。」

「セツシく、くろひく先輩く、また後でねく。」

「ありがとうございます。本音さんもまた後程。：え、これ!?か、簪さん!？」

セシリアは簪と本音が祭りに向かったのを見送ると簪から受け取ったカメラの中身を確認する。するとセシリアは写っていた写真を確認すると同時に驚きの声を挙げ簪に質問しようとするが既に簪の姿は無い。

「?セシリアさん、どうかされたんですか?凄く驚いている様ですが。」

「刹那さんこれを見て下さいませ。」

「これは…」

セシリアは刹那に持っていたカメラを見せる。其処には先程簪が撮影した浴衣姿の二人のプロ顔負けの美しい画像が写っていた。

時は遡り先に回り始めたイチカ、鈴、ラウラの三人は楽しみながら回っていた。そしてラウラに関しては初めて経験する日本の祭りにテンションが上がっており周りの人達に迷惑が掛からない位にははしやいでおり、頭にはラビットム君のお面、左腕には大小様々な袋を多数吊るし、左手には水風船を持ちながら遊び、右手に林檎飴を持ち

食べながらイチカと鈴の三人で回っていた。

「師匠！鈴！次はあの店に行こう！」

「ラウラ、露店は逃げないから少しは落ち着きなさいよ。そんなに急いだら危ないわよ？」

「ま、ラウラにとっては初めての日本での夏祭りなんだし自然とテンションが上がるんだろ。」

「成る程ね。えっと、肝心のラウラは…あ、居た。彼処は…たい焼き屋みたいね。」

「たい焼きか。そう言えば最近食べてないな…俺達も買ってみるか？何なら奢るけど？」

「そうね、私も久々に食べてみたいから買いましょ♪たった数百円なんだし私が出すわよ。」

「…。」

「むむむ…悩む。王道の黒餡にすべきか、黒餡と双璧をなすクリームにすべきか、邪道と言われているチョコにすべきか、はたまた黒餡と似て非なる白餡にすべきか…究極の選択だな。うゝむ…む、待っていたぞ師匠に鈴。早速だがどれを買えば良いと思う？四種類もあると悩んでしまつてな。」

「あゝ、今食べたい物を買えば良いんじゃないか？」

「成る程！すまない！全種類を二つずつ貰おう！」

「え、あ、全部で千六百円になります。」

「うむ！感謝する！」

「すみません、黒餡とクリームを一つずつ。」

「分かりました。二つで四百円になります。（カップルかな？なら支払いは彼氏の方か…）」

「行くぞ、鈴。」

「望む所よ、イチカ。」

（…え？何で剣幕になってるの？）

「う〜ん♪黒餡は上品な甘さだな♪」

「…。」

（…え？何で拳同士を合わせてるの？）

「クリームは口一杯に甘さが広がって幸せだな♪」

「最初はグー！」

（…え？じゃんけん？まあ、本人達が納得してるなら良いか。）

「邪道と言われているチョコだが有りだな♪まさにたい焼きとチョコがベストマッチだな♪」

「じゃんけんぽん！しゃあ！（クツ！チョコキを出していれば…」

！」

(あ、彼氏の方が勝った。なら支払いは彼女か…でもそれってどうなの?)

「白餡は黒餡と違った甘さと舌触りで上手いな♪好みが別れると思うが私はどちらも好きだな♪」

「俺の勝ちだな。と言う訳でお代の四百円です。」

「え??うん??あ、はい。ありがとうございます?…うん??…えっ??」

「師匠、鈴!次は何処に行くんだ!?!」

「うくん、花火までには時間があるしもう少し回るか。」

「そうね、少し回ったら休憩スペースで休んでも良いしね。」

「なら私は彼処に見えるケバブが食べたいぞ!」

「まだ食べるのか…。」

「よく入るわね…。」

三人はケバブ屋に向かう為にたい焼き屋から離れる。その背中を見送りたい焼き屋の店主は未だに疑問符が浮かんでいた。

「ふう、本当に色んな露店があるな。何かここ数年で一気に露店の種類が増えたな。ほい。」

アムツ「そうねえ、一年半も日本を離れてたけど本当に増えたわよ

ねえ。あ、そう言えばイチカって初詣とかってどうしてたの？体質的に神社と相性最悪よね？はい。」

ハムツ「まーな、てか初めてこの体で初詣に行ったら体中がヒリヒリして参拝が終わって神社を出る頃には激痛でヤバかった。半分だけだから死にはしなかったけどあの痛さは尋常じゃなかった。ま、参拝が命懸けとか想像出来ないからな。さてと♪♪」

「キイー！」

「あら、コルーじゃない久し振りね♪」

「キイー♪」

イチカと鈴は少し回ると休憩スペースでラウラを待ちながら他愛の無い話をしてゆつくりと過ごしていた。そしてイチカは口笛を吹きコルーを呼び出し、鈴は久し振りに会ったコルーの頭を撫でる。撫でられたコルーも嬉しそうにしていた。

「すまんコルー、これを束さんと永久さんに届けてくれないか？」

「キイー！」

「サンキュー、コルー。お、ラウラが帰って来たな。」

「師匠！鈴！夏祭りと言う物は楽しいな！色んな美味しい物も沢山売ってて私は幸せだぞ！」

「それは良かったわね♪」

「ま、此方も楽しんでもらえて何よりだ。フーフー」

「?何だ、それは?眼魂か?」

「眼魂って…これはたこ焼きよ。たこ・焼・き。ラウラも一つどう?
?美味しいわよ?」アムツ

「食べた…!?!」

「まあ、食べ物だからな。ほい、ラウラ。熱いから気を付けろよ?」

「ふわあ…(何だ!?!この香ばしく美味しそうな香りは!?!あ、抗えない
…!?!食べたいと言う欲求から…) ツゝ!?!」

「ラウラ!?!大丈夫か!?!」

「…ふあいほおうふあ、ほおんふあいふあい(大丈夫だ、問題ない)。」

「いや、言えてないからね?はい、水。」

ラウラは差し出されたたこ焼きを冷やさずに食べてしまい、あまりの熱さに口を火傷してしまう。それを見ていたイチカと鈴はかなり心配していた。

「…師匠、鈴、一体何なんだあのソースは、あのふわふわ食欲は、あの中に入っている旨味たっぷり歯応えの良い物は…あの強烈な習慣性…あれが無闇に世に放たれれば大変な事になるぞ…人々は禁断症状に震え、たこ焼きを求めて戦が起こるに違いない。」

「ねーよ。たこ焼きで戦が起こってたまるか。」

「ラウラはたこ焼きが気に入ったみたいね。」

「うむ！」

「あ、ラウラ。クロエさん達に送る写真を撮っても良いか？後でラウラの方にも送るからさ。」

「姉さんに!?!勿論良いよ！そうだ！鈴も一緒に撮ろうよ！姉さんに私の親友を見せてあげたいんだ！」

「!?!」

「あー、そう言えば鈴は初めて見るんだっけ。ラウラにはクロエさんって言うお姉さんが居て、そのクロエさん関係の話になるとこうなるんだよ。」

「へえ。こんな感じのラウラは新鮮ね。何時もとは違った可愛さがあるわね。よっと！親友にそこまで言われたら喜んで一緒に写るしかないわね。良いわよ一緒に写りましょ。」

「うん！」

「フツそれじゃ撮るぞー。…はい、チーズ。」

二人は満面の笑顔で手を繋ぎながら肩を合わせ、ラウラは右手を幽霊の手の様にするラビットム君ポーズを、鈴は左手を猫の手の様にするキヤットガールポーズをそれぞれとり、イチカはそれをスマホで撮影する。

簪&本音ペア

「ごうやってかんちゃん二人で歩くの久し振りだね。」

「そうだね。中学の頃は息抜きも兼ねて二人でよく出掛けたけど、IS学園に入ってからこんな感じで二人で出掛ける事は減ったからね。まあ、本音が何時も行く所はカフェとか洋服屋ばかりでスイーツ食べたり着せ替え人形みたいにされたのは良い思い出だね。」

「確かにIS学園に入ってから減ったよね。何時もリンリンやラウラウと一緒に出掛けて、時々イチやセッシ、くろひー先輩も一緒だったからね。かんちゃんも女の子なんだからお洒落くらいしないとね。かんちゃんだって本屋とかゲームセンターばかりだったよね。しかもゲームセンターのランキングを全部かんちゃんの名前で塗り替えてたからね。」

「楽しいから仕方無い。それにゲームセンターは数百円でフィギュアとかのグッズが手に入るから好きなんだよね。」

「普通はそんな簡単に取れる物でもないと思うんだけどな。あ、そう言えばかんちゃんって恋とかしてるの〜?」

「してるよ、それに今月中に推し嫁のフィギュアが届くからね。」

「かんちゃん、そう言う事じゃ無くて、イチやとリンリンみたいな事だよ。」

「ああ、成る程ね。うくん、正直してみたって気持ちはあるけどよく分かんないんだよね。恋愛ゲームみたいに選択肢が出る訳でも、好感度が見える訳でもないから余計にね。」

「かんちゃん…ゲームから離れようよ…。でもイチやとリンリンの仲の良さを見てたら羨ましく思うよね。」

「成る程ね。本音からしたら二人はただ仲が良い様にみえるんだ。」

「?どう言う事?」

本音は簪が言った事の意味が理解出来ず、首を傾げながら簪に質問する。勿論、簪は本音のリアクションが予想通りである為にイチカと鈴の関係を説明する為に口を開く。

「イチカと鈴はお互いに強く依存しあってるんだよ。それこそ一人が居なくなればもう一人が完全に精神が崩壊する位に。」

「:それって大丈夫?もしイチチーとリンリンが別れる様な事があつたら、二人共最悪の展開になるんじゃない?」

「久し振りに少し前の本音が出たね。まあ、その点に関しては大丈夫だよ。何せ二人は自分が相手に依存してるって理解してるしお互いがお互いを必要としているからお互いに別れを切り出す事は無いからね。」

「でも、もしどつちかが別れを:あれ?イチチーはリンリンに依存してて、リンリンもイチチーに依存してお互いに必要としているから二人共別れを切り出す事が無い?」

「正解。ま、依存どうこうの前にあの二人ならこれからも大丈夫でしょ。さて、折角夏祭りに来てるんだから何か「すいません、財布を落としましたよ。」え?:あ、本当だ。ありがと:御手洗さん?」

「え?:あ、更識さん。」

簪と本音が話をしながら歩いてみると突然声を掛けられ振り向くと、黒の甚平を着用し眼鏡を掛けた二人と同じ年頃の少年がアニメ

キャラのストラップが付いた水色の財布を差し出しており、お互いに面識があるようだ。

「かんちゃん、知り合い〜?」

「まあ、知り合いって言うか…何て言うか。」

「私が何時も利用してるお店の店員さんの御手洗さん。たまに話し相手になつてもらったりアドバイスしてもらったりしてる。」

「成る程ね〜。私は布仏本音だよ〜。私の事は好きな様に呼んでね〜。」

「御手洗数馬だ。宜しく布仏さん、此方の事も好きに呼んでくれ。」

「宜しくね〜。じゃあ数馬だから〜、かずみんって呼ぶね〜。」

「え?なら、心火を燃やした方が良いか?」

「むしろ私的には激凍心火だと思う。」

「流石に消えたくは無いんだけど…。」

「大丈夫。その後的一致団結でドッキングするから。」

「なら、安心だな。…「イエーイ」」

簪と数馬は今のやり取りが嬉しかったのか静かにハイタッチをして喜んでいた。そして、そのやり取りを見ていた本音は聞こえた単語を呟きながら首を傾げていた。

「二人で何言ってるか分からないから取り敢えず話を進めよう」か
んちやくん、財布を拾ってくれたんだし何かお礼したら？」

「それもそうだね。何か希望ある？」

「普通にため口で良いんだが。…ならミルクでも貰おうか。」

「なめてんのか小僧！…「イエーイ」やっぱり御手洗さんとは話が合
うから楽しいね。」

「俺もこんな風に話せて楽しいよ。あ、そうだ、さっきのお礼はあれ
でいかな。」

「あれって…お好み焼きで良いの？」

「おう。それにバイト先以外で更識さんに会えて俺は嬉しいしな。」

「私も、それに…」

「（おやおやく？これはもしかして？）かんちやくん、かずみくん、私
ラムネ飲みたくなつたから買ってる来るね。あ、二人は私に構わ
ず楽しんでね。」

「あつ！本音！行っちゃった…。」

「はっや…」

本音は二人を見て何かを感じ取り脱兎の如くその場から離れる。
その光景を見ていた簪と数馬は啞然としていた。そして、二人は顔を
見合せて話をしながら移動し始めた。

「はい、財布のお礼。…そう言えばみたらや…御手洗さんは何時からあのお店で働いてるの?」

「サンクス、後、別に呼び方は名字でなくとも良いよ。あの店は高校に入っただけにバイトし始めたんだ。ほら、自分の趣味に使う金銭くらいは自分で稼ぎたいだろ? 親も自分で稼いだ分は好きにして良いって言うし。」

「分かる。自分で稼いだお金を自分の趣味に使えらって最高だよ。なら私はかずみんって呼ぶね。かずみんも私の事好きに呼んで良いよ。」

「そうか? なら布仏さんが呼んでたかんちゃんって呼ぶ事にするよ。…さて、休憩所でお好み焼きを食べるたらどうする?」

「…それはあれのお誘いと見て間違いないかな? なら良いよ、もしも…の為に何時も準備してるからね。」

「なら、決まりだな。」

簪は購入したお好み焼きを数馬に渡しその後の事を話し始める。そして、お互いが渾名呼びになった事で距離が縮み、お互いが楽しそうにしていた。

セシリア&刹那ペア

「…。」

「…。」

「…あ、あの……そ、そちらからどうぞ…。」

「コホン…では私から。今日はお誘い頂きありがとうございます。ですが刹那さんはこう言った人の多い所は苦手の筈では？」

「そう…ですね。セシリアさんの言う通り私は人の多い場所は少し苦手ですね。でも私はこの夏祭りを一緒に回りたいたいと思ったんです。他の誰でもない貴女と。」

「私と？」

「はい。…自分でも不思議なんです。普段なら夏祭り等の人混みの多いイベントは避けている筈ですが、何故だかセシリアさんとなら回ってみたい、と言うよりはセシリアさんと共に過ごしたい…そう思っています。…可笑しいですよ。」

「…私は、そうは思いません。実際、刹那さんからこの夏祭りを共に回らないかと誘われた時、私はとても嬉しく思いました。それに私もこう言う風に刹那さんと共に過ごしたいと思っていたんです。」

「セシリアさん…。…ふふ、何だか私達、似てますね。」

「そうですね。では刹那さん、参りましょうか？（…このまま、私が秘めたこの想いを伝えられたのなら、貴女は…受け入れてくれますでしょうか？）」

「ええ、喜んで。（…やはり、セシリアさんに対するこの想いは恋…なのでしょう。楯無さんに相談して気付いた私の気持ちを伝えたらセシリアさんは受け止めてくれますか？）」

お互いに同じ想いを抱きながらゆつくりと夏祭りを回る二人。特に何かを購入するわけでもなく、ただ話をしながら回っていた。する

と突然、刹那が射的の屋台の前で足を止める。

「刹那さん?どうかされたのですか?」

「あ、いえ。あの孔雀のぬいぐるみがとても可愛らしいと思いで。」

そう言いながら刹那は射的の屋台の景品のデフォルメされた大きめの孔雀のぬいぐるみを指差し、セシリアも指差された孔雀のぬいぐるみを見る。

「成る程。確かに可愛らしいですわね。…すみません。一回幾らになりますか?」

「セシリアさん?」

「五発で三百円だよ。見たところお嬢ちゃんは外国から来たのかい?」

「ええ、イギリスからIS学園に学びに来ています。では一回分お願い出来ますか?」

「あいよ。と言う事は未来のブリュンヒルデを目指して頑張ってるんだな。それに二人とも別嬪さんだからおじさんからのおまけね!」

「ありがとうございます!」

そう言う店主はセシリアに射的用の弾を七つ手渡す。そして、玩具の銃に玉を込め一度構えて景品の一つである小さなお菓子に標準を合わせる。

(まずは様子見で構えてみましたが…軽い…いえ、軽すぎますわね。しかし、例え玩具の銃であったとしても銃に変わりはありません。私が銃を構えたならばただ撃ち抜くのみ！)

セシリアは呼吸を整え引き金を引き、心地良い音と共に弾が発射される。放たれた弾は小さなお菓子に真っ直ぐ向かい命中すると棚から落下する。そして店主は落下したお菓子を拾い上げセシリアに手渡す。

「ほー、流石は未来のブリュンヒルデだけはあるな。一発で落とすなんてな！」

「いえいえ、これは様子見ですので…本番はこれからです。(想像より威力があるのですね。この威力と残り弾数であれば余裕を持ってあのぬいぐるみを落とすのは可能。)」

「…。」

「ふう…。(後ろで刹那さんが見ていらっしやる。…それほどあの孔雀のぬいぐるみが欲しいのですね。…ハア、まさか私が可愛いぬいぐるみに嫉妬する日が来るとは思いもしませんでしたわ。)…一発目。」

先程と同様に発射された弾はぬいぐるみの羽部分の右側に当たり少し後ろに後退しながら傾く。セシリアは特に驚きもせず次弾を装填する。

「ふう…。」

今度は孔雀の羽部分の左側に当て、先程よりも後退しながら正面を向く。後数発ぬいぐるみに当たれば落下するだろうと考え再び弾を装填する。

「…。」

「?どうかされましたか刹那さん?もしや今の私に何か可笑しな所でも?」

「!?いい、いえ!そうではなくて…その…銃を構えたセシリアさんがとても素敵で…あの…つい見惚れていました。だから…えつと…頑張ってください!」

「…!ええ、任せてくださいませ。必ずあのぬいぐるみを撃ち落としてみせます。(好きな方からの応援とはこんなにも嬉しい物なのですね。…後数発で落とそうと思っていました!が予定変更ですわね。次の一発で確実にあのぬいぐるみを撃ち落とす!)…貴方に…美しき鎮魂歌を!」

セシリアは再び弾が装填された銃を構え、先程と比べて鋭い目付きでぬいぐるみに狙いを定める。そしてこの時のセシリアは雑音等の無駄な音が聞こえないくらいに集中していた。

「スウ…ハア(…!今!)」

セシリアは一度呼吸を整え、ぬいぐるみの中心に狙いを定めて引き金を引き弾を発射する。発射された弾はぬいぐるみの頭部に真っ直ぐ向かい見事命中しゆっくりと落下していく。

「…!」

「フウ…チェックメイト…ですわ♪」

『うおおおおおおお!』

「!?!」

セシリアと刹那は大勢の叫び声が突然聞こえた事にき、背後を二人同時に振り返ると、そこには大勢の人達が興奮気味にセシリアを観戦していた。

「これは…?」

「あー、嬢ちゃんの事が噂になってるみたいなんだよな。何でも金髪美少女が射的をやってる姿が珍しくて素敵なんだと。」

「成る程。(よく見れば女性の姿も見えますわね。しかし…この状況は刹那さんの事を考えるとあまり好ましくありませんわ。弾数は後三発…ならば) 使えません。使える銃は一つだけですか?もし可能であれば後二つ貸してもらおう事は可能でしょうか?」

「うん?まあ、大丈夫だけど…何する気なんだ?」

「この状況ですし早めに切り上げようと思ってます。(本当は刹那さんの為ですけど。)」

「成る程な。ほらよ。」

「ありがとうございます。」

セシリアは玩具の銃を二つ受け取ると弾を装填し始める。周りの観客は不思議そうにしているが、刹那はセシリアが何をしようとしているのか分かったようで少し笑っていた。

「…。(素早く、的確に、撃ち抜く!)」

「格好いい…」ボソツ

『!?!』

セシリアは二つの銃を構えた瞬間に引き金を引き、素早くもう一つの銃と持ち変えそのまま引き金を引く。先に発射された二発の弾はお菓子とストラップに当たり、直ぐに三発目の弾が先程と色違いのストラップに当たりゆつくりと落下していく。

「…すみませんが景品を頂いてもよろしいでしょうか？」

「ツ！あ、ああ。ま、毎度あり。」

「ありがとうございます。…刹那さん、人が少ない所まで少し走りますので気を付けてくださいませ。」

「あ……」

セシリアは景品を受け取ると刹那に声を掛けて手首を優しく掴みこの場から離れる為に小走りで走り出す。刹那の顔が紅くなっている事に気付かずに。

「…此処なら大丈夫でしょう。…急に手首を掴み走り出して申し訳ありません。(…刹那さんが不快な思いをしていなければ良いのですが…。)」

「い、いえ！気にしないでください！…むしろ、私の事を気にしてくださいってありがとうございます。(…まだ…ドキドキしている…セシリアさんと共に行動してからずっと…でも…苦しくない…むしろ心地良いですね。)」

「…あ、刹那さん。どうぞこれを、今日誘って頂いたお礼として受け取ってもらえませんか?」

「…ありがとうございます、セシリアさん!…あ、ストラップは色違いですけどお揃いですね♪」

そう言つてセシリアは先程獲得した孔雀のぬいぐるみと蒼色のストラップを刹那に差し出す。そして刹那はぬいぐるみとストラップを受け取り満面の笑みで感謝を伝える。その笑顔を見たセシリアは鼓動が速くなるのを感じた。

「そ、そうですね。私と刹那さんでお揃いのストラップですね。それに黒色は刹那さんのイメージカラーで私は嬉しいです。」

「ツ／＼／＼(は、恥ずかしい…!セシリアさんが私と同じ考えで嬉しい筈なのに何だか凄く恥ずかしい…!?)」

「刹那…さん?顔が紅くなられていますが大丈夫ですか?」

「だ、大丈夫です。予想より人が多かったので、少しばかり気分が優れないだけです。気にしないでください。」

「…刹那さん、此処で少々お待ちになられてください。何か飲み物を買ってきますので。それに幸いにもベンチもありますので座られてお待ちになつてください。」

「(誤魔化すつもりが心配を掛けてしまった…仕方ありません、此処は私自身が落ち着くためにもセシリアさんの提案を受けた方が良さそうですね。)ありがとうございます、ではお言葉に甘えさせて頂きます。」

「では私が戻るまでゆっくりしててください。」

「分かりました。」

刹那是人混みを避けながら歩くセシリアの姿を見送り、側にあつたベンチに腰掛ける。待つ間刹那は孔雀のぬいぐるみを大事そうに抱えながら目の前を家族連れ等が通り過ぎて行くのを眺めている。

「懐かしいですね。私も小さい頃に両親や姉さんと一緒に回つて、あまりの人の多さに泣いてましまつて姉さんが側に居て落ち着かせてくれましたっけ。」…貴女に…早く会いたいです…。」

自身の過去を懐かしみながら気付かない内に秘めた想いを呟き、誰かに聞かれる事も無く周りの音に溶け込む。そして刹那は思い出を振り返りながら想い人であるセシリアをゆっくりと待つ。

「ふうん、ふうん、ふうん♪かんちゃんも隅に置けないなく、かんちゃん自身は気付いて無いみたいだったけど、かずみんと話してる顔がリンがイツチーと話してる時と同じ顔をしてたんだよね。それにかずみんも満更でもなかったみたいだしね。お？やつほくセツシ。楽しんでる？」

「本音さん？ええ、私達は私達なりに楽しんでますわ。処で本音さんは簪さんと御一緒だった筈ですが…？」

飲み物を買ったセシリアは刹那の元に戻る最中に楽しそうに手を振りながら此方へと向かって来る本音と再開する。しかし本音と共に行動している筈の簪の姿が見えず、疑問に思いながら質問する。

「うゝん、詳しくは言えないけどゝかんちゃんのお援をする為に別行動してるんだよ。」

「お援？」

「まゝ、お楽しみだね。それよりもくろひく先輩が見当たらないけどどうしたの？」

「刹那さんはこの人の多さで少しばかり酔われてしまわれた様なので彼方のベンチで休憩されていますわ。」

「あ、本当だ。…あれ？」

本音はセシリアの近くに刹那の姿が見えない事に気付き共に行動していたでセシリアに問い掛けると本音の後方を見ながら本音に説明する。しかし、二人はベンチに座らず刹那に三人の男性が話し掛けている事に気付く。

「…ねえ？セツシー？何かあれ…不味くない？…あれ？セツシーは何処…あ。」

本音がセシリアに話し掛けると先程まですぐ側に居たセシリアの姿が見えず、既に刹那の元へと向かっており険しい表情をしていた。

「で、ですから私は人を待っているんで貴殿方と共に行動する気は無いんです！」

「そんな事言わないでさ、俺達と一緒に回ろうよ。」

「それにこんな綺麗な娘を置いてく奴なんて気にせずパッ！と遊ぼうよ。」

「先程も言いましたが置いていかれた訳ではなく…!」

「まーまー落ち着いて。損はさせないからさ? ほら、いk…」嫌がつている女性を無理矢理連れて行くとうとするの見過ごせませんね?」は…?」

「せ、セシリアさん!」

「君、もしかしてこの娘のお友達? なら君も俺達と一緒に遊ぼうよ!」

「…刹那さん、少々失礼します。」

「…きゃっ!? あ、あの!? せ、セシリアさん!? こ、これは／＼!」

「申し訳ありませんが彼女は私の連れなのでお引き取り願えますか?」

セシリアは刹那を優しく抱き寄せ男性達に笑顔で拒絶する。一方抱き寄せられた刹那は咄嗟の事で訳が分からなくなり混乱しているが嫌がつている様子はなく、顔が林檎の様に紅くなっていた。しかし、男性達もセシリアの気迫に後退りしたものの諦めずに声を掛ける。

「せ、折角だしさ俺達と…」聞こえませんでしたか? お引き取り願えますか?」

「…す、すみませんでしたあああああ!」

セシリアは先程よりも気迫…と言うよりも殺気を声に込めて笑顔で拒絶する。しかし笑顔と言っても眼は全く笑っておらず鋭く半開

きになっており、男性達は本能的に目の前の少女は危険だと感じ取り一目散に逃げだす。

「何だかセツシーがイッチーとそっくりになってたなく。うくん、取り敢えずかんちゃんとかずみんの所に戻ってみようかな。何かしら進展してるだろうし。」

本音はセシリアが刹那をナンパしていた男性達を追い払う所を確認すると簪と数馬が居る休憩スペースに向かう。そして、休憩スペースに着くと簪と数馬が仲良くしている光景が眼に映る。

「ハヤテでダイレクトアタック！」

「させるか！バトルフェーダー効果で特殊召喚してバトルフェイズを終了！」

「ならメイン2に入ってハヤテでリンク！カガリ！効果でエンゲージ回収してそのまま発動！イーグルブースターを手札に加える！カットお願い。」

「ほい。」

「ありがとう。そのままワンドロー！二伏せエンド！」

「エンド時サイクロン！右側の伏せを破壊！」

「あつ!?セットしたイーグルブースターが!?!」

「よしっ！んじゃ、ドロ、スタンバイ、メイン、死者蘇生！墓地からドラガイド！効果！デッキから五枚めくる！岩石族は一枚！最後のバックをバウンス！」

「私のミラフォが!？」

「やっぱりミラフォは仕事しなかった。さて、バトル!ドラガイドでカガリにアタック!そんで星槍を捨てて効果!カガリの攻撃力を三千下げる!」

「ちよつと待つて!?!此処で星槍!?!負けたー!デツキ変えてもう一回しよう。」

「良いぜー。なら今度はウィツチクラフト使うかな。」

「うーん、星杯で良いや。」

「ちよつとちよつと!?!二人とも何してるの!?!」

「何つて…デュエル。」

「見てわかるよ!?!私が聞きたいのは何で!夏祭りで!カードゲームしてるか聞いているんだよ!?!と言うか何で二人共当たり前の様に夏祭りにカードは勿論、敷く奴も持つてきてるの!?!」

「デュエルリストだから。」

「訳分かんないよ!?!兎に角かんちゃんもかずみんも片付けて!良い!?!夏祭りでカード禁止!そして夏祭りでしか出来ない事をする事!分かった!?!」

「はーい。」

「全く!ほら二人共、屋台はいっぱいあるから一緒に…何してるの?」

「ポケモン。」

「話聞いてた!? 何でゲーム機を取り出してポケモンやってるの!? 夏祭りでしか出来ない事をする事って言ったよね!」

「言ったね。だから私は夏祭りの為に着てきた浴衣姿でポケモンをやる。」

「俺もかんちゃんと同じで夏祭りの為に着てきた甚平姿でポケモンをやる。」

「つまり今からポケモンをやる事は夏祭りでしか出来ない事をやると同じ意味になる。」

「全く違うからね!」

簪と数馬の言動に本音は普段の言葉遣いも忘れて二人に突っ込む。それ程二人の言動は驚愕するしかなかった。そして二人は片付け終わると側に置いていた袋から入っている物を取り出す。

「まーまー、ポテトでも食べて落ち着いたら?」

「…ありがとう。」

「唐揚げもあるぞー!」

「…貰う。(あれ?もしかして…私より満喫してる?)」

♪♪♪ 「ん…本音、そろそろ集まろうって。」

「りよ〜か〜い。」

「なら、此処で解散だな。」

「え？かずみんも一緒に行こうよ。」

「一緒に行こうよって…ありがたいけど俺が居たら迷惑じゃないか？ほら友達とかに。それに女子だけの所に俺が居たらかんちゃんと布仏さんが良く思われないだろ？」

「大丈夫、皆優しいしから。後、女子だけじゃなくて一人だけ男子も居るから。」

「それはそれでどうなんだ？」

「大丈夫だよ。かんちゃんの知り合いなら皆受け入れてくれるよ。」

「うーん、そこまで言うなら…一緒に行くかな。」

二人の言葉に数馬は共に行動する事を決め、簪の案内で歩き始める。しばらく歩くと数馬は四人の少女と一人の少年が楽しそうに話している場面を見つけ、その中に見知った人物が二人居る事に気が付く。

「かんちゃん、彼処のグループがそう？へえ、成る程。かんちゃん、玩具の銃持ってない？」

「玩具の銃は無いけどこれならあるよ。はい。でも何で？」

「おー、デイエンドライバー。んー？ちよつとな。」

「…。」

「?どうしたの本音?」

「…何でもないよ。」

数馬は簪から私物の玩具を受け取ると目的の人物を指してゆつくりと歩き始める。そしてその人物の背後に立つと玩具を構える。

「そのオツドアイ手を挙げる。お前をハーレム罪の容疑で逮捕する。」

「…何やってんだ?数馬?」

「…何故バレた?」

「逆に何でバレないと思った?」

「え?何となく?」

「何となくって…バレるに決まってるでしょ普通。」

「イチカさん?この方は?」

「うん?ああ、紹介する。中学からの友人で御手洗数馬。と言うか何でディエンドライバー持ってるんだよ?」

「御手洗数馬だ、宜しくな。あ、これ?知り合いから借りた。」

「知り合い?」私だよ。「簪?マジで?あ、よっすのほんさん。」

「やつほくイツチ〜。」

「さて、イチカ。此処に居る美少女達との関係を隠さず話して貰おうか?」

「別に隠してはないんだが…まあ、良いや。此方がお馴染み鳳鈴音、俺の彼女。」

「久し振りね、数馬。」

「久し振りだなー、鈴。って言っても七月にあつたばかりだしそこま
でだな。」

「それもそうね。」

「そして、金髪の娘がセシリア・オルコットで俺の友人兼ライバル。」

「セシリア・オルコットですわ。イギリスの国家代表候補生をしてお
ります、以後お見知り置きを。」

「代表候補生!?マジで!?凄いな!あ、これからもイチカの良い友人で
居てくれ。」

「ええ、そのつもりですわ。」

「んで、此方の銀髪がラウラ・ボーデヴィツヒ。俺の友人でかなり慕っ
てくれてる娘だな。」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。ドイツ軍に所属していてドイツの国家
代表候補生でもある。宜しく頼む。」

「この娘もかよ。ま、宜しくな。あ、唐揚げ食べるか？」

「良いのか!?感謝する!うくん!カリジユワで美味しいぞ！」

「なあ、イチカ?何かこの娘のリスみたいだな。」

「分かる。」

「そして黒髪の方が黒姫刹那さん。俺達の一つ上の先輩でよくお世話になってる人だ。」

「黒姫刹那です。ミューゼル君達の一つ上ですが気にせず接して下さい。」

「分かりました。それとこれからもイチカの事、宜しく願いします。」

「はい、勿論です。」

「そんで簪：とのほほんさんは知ってるみたいだから、関係だけだな。簪は友人兼部活仲間でのほほんさんがIS学園で初めての友人だな。」

「成る程な。」

「てか数馬。」

「ん?どした?」

「弾は?何か連絡着かないんだけど?」

「弾？弾ならテストで赤点取って補修の課題に泣きながら追われる。」

「アイツ赤点取ったの？もしかして一夜漬けしたら大丈夫だと思って殆ど勉強しなくて、いざやろうとしたらそのまま寝落ちでもしたわけ？」

「よく分かったな。」

「あれ？数馬も勉強は苦手じゃなかった？」

「苦手だけど補修とかのせいでバイトとか好きな事の時間が潰れたら意味無いから一応やってる。そのお陰で中の上位の成績にはなってるからな。」

「成る程な。ん？バイト？何のバイトをやってるんだ？」

「あれ？言って無かったか？カードショップのバイトをやってたよ。」

「あゝ、何か納得。確かに数馬ならピッタリのバイトだな。」

「だろ？」

「…あ、皆さん、後五分程で花火が打ち上がるみたいですので静かにして待ちましようか。」

『分かりました』

イチカ達八人は永久から受け取っていたシートに座り花火が打ち上がるのを静かに待つ。そして五分後、夏祭りの会場に花火の打ち上

げを知らせるアナウンスが鳴り響き、最初の一発が打ち上がる。

「たまーやー!」

「?鈴、簪と御手洗の二人が言っているたまやとは何だ?」

「日本の花火は上がる時にたまやーとかかぎやーって言う掛け声よ。因みに、たまやとかぎやは昔の有名な花火を作る店名から来てるのよ。」

「成る程。なら私も、たーまやー!」

ラウラの掛け声は上がり続けている花火によって消えてしまいが何処か満足そうにしていた。そして八人は一部の人物が掛け声を掛けながら打ち上がる花火を終わるまで眺め続けていた。

四十三話 兎の元に夜が訪れる

イチカ達が夏祭りを楽しんでいる頃、束と永久は別荘の屋上に敷かれたシートに座っている。側にはクーラーボックスが置かれ、それぞれの手には液体の入ったグラスが握られていた。

「いや、こうやって永久ちゃんと飲むのは久しぶりだね。最後に二人で飲んだの何時だった？」

「…去年の年明けだな。」

「そうだったね。やっぱり親友と飲むお酒は格別だね！永久ちゃんもそう思うでしょ？」

「…まあな。…私もお前と共に飲む酒は普段より美味く感じるからな。」

「そうでしょ。ま、お酒が美味しいのはそれだけじゃないからね。今私達が飲んでるのは私の秘蔵の「…天空の夜桜だろ？…確かにお前が好きな甘い酒だな。」分かつちゃうか。…うん？ねえ、永久ちゃん？」

「…何だ？」

「何で夜桜を知ってるの？普通知ってる筈が無いんだけど…。」

「…普通はな。…まあ、私は伝があるから、この酒が神界で扱っている天空の夜桜だと知ってるだけだ。」

「うん、もう驚かないからね？本当に永久ちゃんは想像の斜め上を行くよ。」

東は永久に何故自分が持参した天空の夜桜を知っているのか聞くと納得している様で何処か諦めた様な顔をしながらグラスに口を付ける。

「と言うか聞いてよ。イツ君とかんちゃんがねー凄いんだよー！もうね！高校時代の私を越えてるの！イツ君は私が教えた事を発展出来るし、かんちゃんは新しいシステムとかプログラムを組み立てるのが得意でねー、もう本っ当に驚いたんだよー！」

「…知ってるさ。…実際、簪君の専用機である打鉄のマルチロツクオン・システムも彼女自身が完成させたからな。…それに二人に限らず、他の娘達もこれから成長し続ければ確実に化けるぞ。」

「そうだねー今から成長が楽しみだよ。」

「…フツ、昔と比べて本当に変わったな、お前は。…恋をすると人は変わると言うがまさにその通りだな。…お前が蒼夜と関わってから良い方向に変わった。…他人を認識し、関わりを持ち、友好を深め、存在を認める様になった。…これも蒼夜のお陰だな。」

「そう…かな？（蒼夜君のお陰…か。多分それは違うと思うな。確かに蒼夜君のお陰で変わったかもしれない…でも私に最初大きな変化を起こった切っ掛けをくれたのは他でも無い永久ちゃんだよ。）さーて、次は何を飲もうかな。永久ちゃんは何か飲む？」

「…東、強めの酒は飲めるか？…飲めるなら私のお気に入りを出すか？」

「え？マジ!?永久ちゃんのお気に入り!?飲みたい、飲みたい！それに大丈夫だよ！私はかなり強いからね！」

「…そうか。…なら待っている、直ぐに持つてくる。」

「りよーかーい。…それにしても永久ちゃんのお気に入りかあ。どんなお酒だろう？…それにしても、おつまみが食べたいけど用意するの忘れた…。」

「キィー！」

「やあコルー、久し振りー。おや？コルー、その袋は何？何だか良い匂いがするけど。」

永久が戻って来るのを待っているとコルーが袋を持つて東の元に向かって来た。そしてコルーが持っていた袋を受け取り中身を確認すると中にはたこ焼きや焼鳥等の夏祭りで売られている食べ物になり入っていた。

「おおーおつまみになりそうな食べ物がいっぱい！もしかしてイツ君からの差し入れ？」

「キィー。」

「そつかく、ありがとうねコルー。あ、それとイツ君にありがとうつて伝えてくれるかな？」

「キィー！」

「またねー。」

「…待たせた。…？東、その袋は？」

「これ？ イツ君からの差し入れ。色々入ってるよー、焼きとうもろこしも入ってるけど…勿論食べるよね？」

「…ああ、頂こう。…それとこれが私のお気に入りのお酒の神殺しと言う酒だ。…これも夜桜と同じ神界の酒だ。」

「神殺し…何か物騒な名前だね。と言うか人が飲んで良い代物なの？ 飲んだらぽっくりとかならない？」

「…問題無い。…そもそも酒で言う〇〇殺しは本当に殺す訳ではない。…その対象を酔わせる事の出来る酒と言う意味の為、何の問題も無い。…ほれ、それとこの酒は強いからかなり薄めている。」

「へえー、そうなんだ。ありがとうねー。」

東は永久から説明を聞きながら神殺しの水割りを受け取り飲み始める。一口目に眼を見開き、二口目からはゆっくりと楽しみ始める。

「…ぷはああ！ 永久ちゃん何このお酒!？ もの凄く美味しいんだけど!？ 夜桜と違ってガツンって来て凄く美味しいよ！ 永久ちゃんが気に入るのも納得だね！」

「…そうか、気に入っている様で何よりだ。…ふむ、露店の食べ物をつまみに飲む酒も悪くないな。[♪]…成る程な。」

「?どうしたの?何かトラブルでもあった?」

「…いや、知人から連絡があっただけだ。…東、焼きと「あるよー」…感謝する。」

「永久ちゃんってさー、本当に焼きとうもろこしが好きだよねー。…

ねえ？永久ちゃん、何か良い事でもあった？何かこう…嬉しそうな雰囲気になってるんだけど？」

「…まあ、あったと言えばあったな。…人が多い所が苦手な妹が今やってる夏祭りに居るんだ。…それに、共に回る約束をした人が居ると言っていたんだ。…それを聞いた私は嬉しく思い、妹の成長を感じる事が出来た。」

「へえ、永久ちゃんに妹が居るのは知ってたけどそんな事があったんだね。そう言えば永久ちゃんの妹って何歳なの？」

「…今年で十七だ。…妹もI S学園に在学しているから、もしかしたらイチカ君達と関わっているかもな。」

「そうなんだ。あ、永久ちゃん神殺しのおかわりちようだい。薄さはそのままが良いよ。」

「…分かった。…ほれ。…なあ束、お前は今この世界は楽しいか？」

永久は束からグラスを受け取り先程と同じ分量で神殺しと水を注ぎかき混ぜる。そして束にグラスを渡しながら疑問に思った事を訪ねる。

「？…どうしたの突然？ま、そんな楽しいに決まってるじゃん！私の周りに大切な人や親友が居て、沢山の友達が居て、私を慕ってくれる子達が居て、本当に毎日が楽しいよ！…そう言う永久ちゃんはどのような？」

「…そうか。…まあ、私も退屈しないくらいには楽しいと感じているさ。…そろそろ時間だな。」

「何が…「だーれだ。」!? えっ!? ちよっ!? どう言う事!? ねえ、永久ちゃん!? 一体どう言う事!?!」

「…。」

永久の呟きに疑問に思っていると束の視界が手で遮られ声を掛けられ、その声の主に驚き軽くパニックになっていた。その光景を永久は酒を飲みながら束の質問に答えず静かに眺めていた。

「な、な、な…」「ほらほらー、答えないとずつとこのままだよー。それに早くしないと…愛してるよ束。」ほわあああああ!?!」

「こんな風に耳元で囁き続けるよー。」

「…。(…別に害は無し、助ける必要は無いな。…そうだ、確か天照が言っていたな神殺しと天空の夜桜を2：1で合わせると良いと言っていたな。…丁度良い、試してみるか。)」

「永久ちゃん!? ねえ永久ちゃん!? マジでヘルプ! お酒飲んでないで助けて!?! このままだと幸せすぎてヤバいから!?! 現在進行形で耳と脳がヤバいから!?!」

「…親友が幸せで何よりだ。」

「真顔でサムズアップしないでくれるかな!?!」「ほーら、早く答えないと。じゃないと…さーん…にー」蒼夜君! 蒼夜君! ほら! 答えたよ! だから囁きは無し! 幸せだけど囁きは無し!」

「正解。もう少しこうしていたかったけど仕方無いね。ま、取り敢えず…約二ヶ月振りだね、束。それに久し振り永久。」

「…久し振りだな、蒼夜。…束？」

「スウ…ハア…よし！ひ、ひしゃしぶりだね！蒼夜きゅん！ツ〜！？」
／＼

「噛んだね。」

「…普通、此処で噛むか？」

「し、仕方無いじゃん！？蒼夜君と二ヶ月振りに会うんだよ！？緊張するに決まってるじゃん！？」

「ま、そういう所も含めて好きなんだよね。」

「何でそういう事を平気で言えるかな！？」

「束はこんな僕は好きじゃない？」

「ツ〜！？好きだよ！私をからかうそんな蒼夜君も大好きだよ！」

「良かった♪」

「ツ〜／＼と、永久ちゃんも黙って飲んでないで何か言つてよ！？せめて止めるとかさ！？」

「…束、御祝儀は幾ら包んで欲しい？」

「何で！？何で御祝儀の話になったの！？」

「…何となくだが？…まあ、取り敢えず束と蒼夜は積もる話もあるだろうから飲みながら話せば良い。」

「おつと…ありがとね。」

永久は首を傾げながら束に答え、蒼夜に缶のビールを投げ渡す。それを難無く受け取ると缶を開け少しづつ飲み始める。

「…それで?…最近はどうなんだ?」

「至って順調だよ。先月はイタリアので作ってたし、今度はフランスに行く事になってるよ。」

「…成る程な、聞く限りではかなり大変そうだな。」

「まあね、確かに色々な国を回ってるけど、それ以上に楽しいんだよね。その国の文化や技術に触れる事が出来るしね。それに…会える時間は少ないけど、可愛くて自慢の恋人も要るしね。」

「…// //」

「…恥ずかしがる束を見るのは新鮮で、見てて面白いな。(…仲が良いの構わないがほどほどにしろ。)」

「それ絶対に本音と建前が逆だよね!」

「…すまないな、つい面白くて本音が。」

「隠す気すら無い!」

「アハハ、本当に束と永久は正反対なのに仲が良いね。そう言えば…二人はの関係は昔からそんな感じだったの??」

蒼夜は束と永久のやり取りを見て笑いながら缶ビールに口を付け焼き鳥を手に取り食べながら、前から気になっていた事を二人に質問する。

「あー、最初からこんな感じって訳じゃ無かったよ。むしろ永久ちゃんとの出会いは最悪だったからね。あ、今は心から信頼できる親友だからね！」

「そうなの？今となつては信じられない話だね。」

「あ、アハハ…（言えない…永久ちゃんとのファーストコンタクトが気に入らないから剣道の試合を吹っ掛けて、面一撃で気絶させられたなんて蒼夜君だけには死んでも言えない…）」

「（…とても思っているんだろうな、束は。…まあ、此処で言う必要もない事だから束の為にも黙っておくか。）…さて、まだ時間はある事だ楽しむぞ。」

永久の言葉に三人は自分達の思い出話を楽しみながらそれぞれのペースで飲み始める。そして時間が過ぎる内に酔いが回り潰れる人物が現れる。

「えへへ、しょうにやきゅんだいしゅき〜。」

「おーい、束ー？あ、ダメだ完全に酔い潰れてる。しかも、ガツチリと抱き締められてる。」

「…まあ、久々にお前と合つて楽しかったんだろう。…飲むペースも速かったし、度数の高い酒ばかり飲んでいたからな。…蒼夜、お前に聞きたい事がある。」

「聞きたい事？」

「…お前は何の為に此方に戻ってきた？」

「と言つと？」

「…お前は此方に帰ってくる頻度と滞在日数が増えているようだな。…それに今回の仕事に関係の無い帰国に束ではなく私に報告、何かあると思うとは必然だと思うが？」

「成る程ねー。…あれ？永久に僕の帰国日と滞在日数って言ってたっけ？」

「…そこにお喋りな兎が寝てるだろ。」

「成る程ね。ま、永久になら良いかな。実はね、次のフランスと数カ国を回ったら本格的に此方で店を開こうと思ってるね。その為に色んな物件を見て回ってるんだよ。」

「…ほお、此方で店を開くのか。…まあ、お前の場合はそのだけでは無いだろう？…例えば、束と関係のある事とか。」

「…はあ、永久には敵わないね。そうだよ、それだけじゃないよ。僕もそろそろ覚悟を決めて束にプロポーズしたいと思ってるんだよ。…ただでさえ高校を卒業してから僕と束は会える時間が格段に減ってるのに、束は寂しさを隠して応援してくれて、電話を掛ければ嬉しそうに話して、会えば笑顔を向けてくれて、別れ際には名残惜しそうに見送ってくれる。そんな束が僕は好きだ。だから今度は僕が束の近くで支えたいんだ。」

「…成る程な。…蒼夜、これは私の単なる好奇心からの質問だが、お前

は何時から束を好きになったんだ？」

「何時からって…恥ずかしいから束には絶対に言わないでね？束を好きになったのは高校の入学式の日、その…一目惚れ…したんだよ。それでちよつとした事から関わる様になって、ますます惹かれていて、気付いたら一緒に笑い合つて僕の隣に居てくれたんだ。」

「…蒼夜、私はお前が束を好きになった瞬間だけを聞いたつもりだったんだが。…まあ、まさか馴れ初めまで話すとは思っていなかったがな。」

「…え？…永久！頼むから今の聞かなかった事してくれないかな！？」

「…それは出来ない相談だな。…蒼夜、私の親友のこれからを頼んだぞ。…束を幸せに…いや、束と共に幸せになれ。」

「…！勿論、そのつもりだよ。束と一緒に幸せになつてみせるよ。」

「…フツ、なら安心だな。…本当にお前にお似合いの良い奴と出会つたな、束。」

蒼夜の言葉を聞いた永久は表情に出していないが、グラスを傾けながら嬉しそうしており、蒼夜は嬉しそうにしている永久に驚きながら束の髪を優しく撫でていた。

四十四話 墮天使再び

イチカ達が永久の別荘に訪れて二日目、それぞれのレベルアップや弱点の克服をする為に奮闘している。しかし、現在行っている訓練は永久一人がイチカ達五人を生身で圧倒すると言う他人から見れば眼を疑う光景だろう。

「…。(こうして皆の適正を観測してみるとセカンドシフトしたかしてないかで差があるんだね。一番高くて鈴ちゃんのSSS、二番目にS+のセツちゃん、三番目にSのイツ君、四番目にA+のかんちゃん、…で問題なのがラウちゃんのB-、確かラウちゃんの適正ってAだった筈んだけど。)ただ、機体を調べても何も問題無かつたんだよねえ…。となるとラウちゃん自身に問題があるのかな?…それはそれとして。」

「…鈴君はもつと視線に気を付けろ、微かに視線が動いて何処を攻撃するかバレているぞ。」

「はい…」

「…セシリア君は少しBT兵器に頼り過ぎで攻撃パターンが単純になっっているぞ。」

「分かりましたわ!」

「…ラウラ君は攻守のバランスが取れているが反応が少し遅れているぞ。」

「ッ!了解した!」

「…イチカ君は次の攻撃に繋げる時に何処に何を繋げるかを瞬時に的

確に判断し実行しろ。」

「はいー。」

「…簪君は攻撃を受け流す事も意識し、そこからカウンターを叩き込む様にしろ。」

「分かりました！」

永久はイチカ達五人からの攻撃を難無く防ぎ反撃し、同時にアドバイスまでしている。そして五人は攻撃を緩めず激しさを増すが一度も攻撃が当たる事は無く、シールドエネルギーだけが減らされ全員のISが解除された。

「…全員、今言われた事を忘れずに克服していけばもつと成長出来るだろう。」

「」「はいー」「」

「…良い返事だ。…クールダウンした後三十分まで休憩し、その後訓練を再開する。…それとイチカ君、クールダウンした後私の所に来てくれ、少し聞きたい事がある。」

「？分かりました。」

イチカ達五人は永久に言われた通りクールダウンを行い、イチカ以外の四人はそれぞれ飲み物を飲んだり、話をしたりしていた。そしてイチカは言われた通りに永久の元に来ていた。

「…すまないな、貴重な休憩時間に。」

「いえ、それで聞きたい事って何ですか？」

「…ラウラ君の事だ。」

「ラウラが…どうしたんですか？」

「…彼女が此処に訪れるより以前に最後にISを使ったのは何時か分かるか？」

「ISを？…俺の知る限りではタッグトーナメント後の授業に使って…それつきりですね。でも何でそんな事を？」

「…少し気になってな。…私の見間違いでなければ今のラウラ君はISを使う事を恐れている様に見える。…何か心当たりは無いか？」

「…もしかしたら…あれが原因？」

「…やはり、何かあるのか。」

「ええ、まあ…詳しくは言えませんがタッグトーナメントでラウラ達と戦った時にトラブルが発生しました。…多分その時のトラブルが原因だと思います。授業で使ったのを最後に、ネクロムだけを使ってみました。」

「…成る程な。（…つまり、これはラウラ君の精神面の問題、恐らくそのトラブルから来たISに対する恐怖だろう。）…イチカ君、ラウラ君の事を気に掛けてやってくれ。」

「分かりました。」

永久との話が終わり一足先に戻ると簪と話している束がイチカに

向けて手招きをしていた。その東からの手招きに気付いたイチカは直ぐに向かい、東はイチカが近付くと手に持っていたPCを二人に見せながら話し出す。

「二人共、これ見て。」

「これって…」

「私達のIS適正?でも…」

「…ラウラの適正が異様に低いな。確かラウラの適正はAだった筈だ。」

「それにA—とかならまだ分かるけど、B—はどう考えても可笑しいね。」

「うん、私もそこが気になったから別のデータを調べてみたんだよね。そしたら…」

「鈴が311、セシリアが243、俺が223、簪が198、ラウラが204?東さん、この数値は?」

「これは皆とISとの相性を数値化した物だよ。そしてこの数値が高ければ高い程IS適正が高くなるよ。一応、この数値は専用機での数値で、他の訓練機とかだと少し数値は低くなるんだけどね。…まあ、その辺の詳しい説明はまた今度ね。」

「へえ、こんなデータがあったんだ…うん?それなら可笑しくないですか?この数値を見る限りラウラとISの相性は私より高いですよ。」

「そうなんだよねえ。少なくともかんちゃんと同じ位じゃないと可笑しんだよね。だから考えられる原因は…」

「…ラウラの方…ですネ?」

「うん、それに何が原因でこうなったかは分からないんだよね。まあ、これはラウちゃんの問題だから、ラウちゃん自身が解決しないと駄目なんだよね。…さて、二人共そろそろ時間だから準備しておいて。」

「分かりました。」

束との話が終わりイチカと簪は鈴達の元に移動し、武装やISの確認や準備を始める。暫くすると永久が戻ってきて束と話し始めていた。そして二人は準備が出来た為にイチカ達の元に移動する。

「…全員揃っている様だな。…では訓練を再開する…が、今回担当するのは私ではない。」

「今回は私が担当するよ。と言っても私が相手をする訳じゃないんだけどね。君達にはこれからこれと戦ってもらおうよ。」

「」「」「なっ?」「」

束が手に持っていたPCを操作するとイチカ達の目の前に漆黒のISが現れる。そのISは三対六枚の翼があり、右手に刀型の近接ブレード、左手に大型のレールガンを持つ見覚えのある姿をしており、その姿を目にした五人は驚愕していた。

「束さん!?何でこいつが…福音がこの場所に居るんですか!？」

「良い質問だねイツ君。これはシルバリオ・ゴスペル…もといジャツ

ジメント・ゴスペルのデータを元に組んだホログラムだよ。その証拠に…ほらね♪」

「…「ブツw」」

「…。」

東が福音の後ろに移動すると独特な電子音と共に腹部から顔だけを出して笑っていた。その光景を見たイチカ達は思わず吹き出ししており、永久は無言で拳を構えながら東を睨み付けていた。

「…と、とまあ、クソみたいなシステムなんかを取り除いた福音のデータから作り出した特殊なホログラムでシールドエネルギーとかだけに反応する様になってるよ。」

「システム？」

「…ああ、そう言えば皆には言ってなかったね。福音にはVTシステムが二つ搭載されていたんだよ。」

「…「ツ!」」

「あいつとヴァルキリーの称号を二回連続で獲得した遠距離最強って呼ばれてるティード選手のデータが使われていたんだよ。まったく、デュアルヴァルキリーD Vなんてクソみたいな事をよく思い付くよね!単純に強さだけを求めて操縦者の事は完全無視!ああ!?!クソ!?!マジでふざけんなよ!?!目的の為に人の命すら切り捨てるってか!?!」

「東さん!?!少し落ち着いてください!?!」

「ハツ!?!ごめん、ごめん。つい、イライラしちゃったから暴言吐い

ちやつたね。まあ取り敢えず、この福音はホログラムだから暴走とかの心配もないし、レベルとかも調整出来る訓練にはぴったり。さて、説明はこれくらいにしようか。時間制限無しで皆のシールドエネルギーが尽きるか、福音のシールドエネルギーが尽きるかのどちらかだよ。あ、因みに福音のシールドエネルギーは皆のシールドエネルギーの合計に設定してるからね。と言う訳で…始めようか？」

二人が福音から離れて束が手に持っているPCを操作すると福音の頭部の一部が光り、右手に持っている近接ブレードを五人に向け浮遊し始める。

近接ブレードを向けられた五人もISを展開し、瞬時に戦闘態勢に入る。一度戦った事のある相手ではあるが前回と違い人数が一人少なく、三人が新たな力を得ていた。

「…全員、準備は良いな？…それでは戦闘開始。」

永久の合図と共に五人と一機は一気に最高速度まで加速して戦闘を開始した。それを永久は静観し、束はPCと交互に観ていた。

四十五話 克服の黒雷

私は気が付いた時には闘いを楽しんでいた。最初の頃は勝つ事で喜びを得て、敗北は無意味だと思っていた。しかし、私は模擬戦で勝利した事のある人物に敗北した。理解出来なかった、戦った人物は何度も私が勝利していたのに初めてその人物に敗北した。悔しかった。：だけど、それ以上に楽しかったのを覚えている。私の攻撃が防がれ思い通りに通らない、私の行動を詠まれ動きを制限される、私が攻撃を防いでも別の攻撃を仕掛けてくる。その模擬戦で私はイライラしながらもドキドキしていた。どうすれば攻撃が防がれず当てられるのか、どうすれば行動を制限されずに動けるか、どうすれば攻撃を防げるか、どうすればこいつに勝てるのか、そればかり考えていた。そして、相手は私に笑顔で近付き手を差し出し『初めて私が勝ちました。そして、次も私が勝ちます。』と言われた。明らかに挑発だった、でも私は差し出された手を掴んで立ち上がり、『調子に乗るな、次は私が勝つ。』と笑顔で挑発し返してやると一瞬驚いた顔をしたが直ぐに笑顔で『負けません。』と返してきた。この時から私は勝敗に関わらず闘いを楽しむ様になった。

私は上からの命令でIS学園に転入する事になった。最初は乗り気では無かったが、事前に見せられた資料に載っていた専用機持ちの四人に眼を引かれ、気付けばIS学園に行く事が楽しみになっていた。しかし、いざIS学園に着いていみるともう一人転入生がいた。その人物からは一瞬だけ得体の知れない感じがしたが直ぐに無くなり、普通に接してきたのを覚えている。一応、この人物も強者の感じがした為に私の楽しみが増えた事を嬉しく思っていた。そして、強者と闘える事に私は満足し、更に力を求めた：その結果がVTシステム発動のトリガーとなり、私の相棒に取り込まれた。その結果、私はISを：いや、力を強く望む事に恐怖を抱き使う事を拒んだ。

訓練二日目。現在イチカ達五人は、束が作り出したホログラムの福音と戦っていた。前回戦った時と違い正確にイチカ達の攻撃を防ぎカウンターまで決めていた。まるでイチカ達の動きが分かっているかの様に。

「クソッ！全然攻撃が通らないし、此方の行動が完全に詠まれッ!?危なっ!」

「イチカ！チッ！前回もこいつと戦ってる時に思ったけど福音の羽が厄介すぎる！レイジングテンペストを使っても当たらないから面倒！」

「此方もティアーズを完全に封じるられて戦略自体がが意味を成さなくなってますわ！」

「多分、私達のデータが入ってるんだろうね。さっき使った山嵐も無効化されたし斬撃波も効かな…クッ！ハアッ！…ブレードも掠めるだけでもアウトだからね。」

「…。」

(お…い…。…た…を…じ)

「…?ッ!?ラウラ！（今のは…?）」

「ッ!?ハアッ！すまない師匠！助かった！」

(…ねが…わ…し…しん…て。)

「何か考えるのも良いが今はこいつに集中しろ！（また…？何なんだ…？）」

「分かっている！（うるさい…）」

福音との戦闘はイチカ達の不利な状況が続いていた。その中でラウラだけは考え事をしているのか少しばかり福音の攻撃に反応が遅れていた。そして、イチカは一瞬だけ違和感を覚えたが直ぐにラウラに声を掛けて意識を福音に戻した。

「…東、簪君が言っていたがああのホログラムには全員のデータが全て入っているのか？」

「入ってるよう。皆の機体データや戦闘データ、イツ君が使ってる靈魂のデータが入ってるから、今の現状であの福音を攻略するのは難しいだろうね。特にラウちゃんがあの状態なら尚更ね。」

「…やはりラウラ君か。」

「そうなんだよね。IS適正がかなり下がってるんだけど相性はかなり良いんだよね。それこそ二次移行しても可笑しくない位に相性が良いんだよね。」

「…成る程な。…まあ、私達がどうこう出来る問題ではないからな。…今はただ、見守るしかあるまい。」

「そうだね。…ねえ？永遠ちゃん。」

「…何だ？」

「この戦闘で何か賭けない？」

「…ふむ、賭けか。…内容は？」

「おつ、乗り気だね。勿論、この戦闘の勝敗を予想して負けたら明日のあれの全持ちつてのはどう？」

「…良いだろう。…なら発案したお前から答えろ、私はその逆に賭ける。」

「お？言ったね？なら私はイツ君達には悪いけど福音の勝ちに賭けるよ。今回は壁にぶつかって、その悔しさをバネにして大きく成長して欲しいからね！」

「…成る程、束の予想は元々私とは逆だったか。」

「へえ、永遠ちゃんはイツ君達が勝つと思ってるんだ？因みに何を根拠に？」

「…何、単なる勘だ。…そして勝利の鍵は間違い無く、ラウラ君が握っている。」

「成る程ね。（勝った！今回は完全に私の勝ちだね！いや〜今から明日が楽しみだね！）」

束と永遠がイチカ達と福音の戦闘で賭けをしている間も続いており激しさをましていた。しかし、イチカ達五人は決め手に欠けて思うようにシールドエネルギーを削れず、逆に削られるばかりであった。

「…不味いですわね。少しずつ削ってはいますが削りきる前に此方が削りきられてしまう…。それにお互いに近付くすら困難…なら、賭けに出るしか無いですわね…。そしてタイミングを…今！）ハアアア

ア！」

セシリアはロンゴミニアドを構え福音に向かって一気に加速し攻撃を仕掛ける。咄嗟の事で福音の反応が遅れたが直ぐ様反応し、セシリアからの攻撃を防ぎカウンターを決めようとしてくるがギリギリで回避していた。

「…。」

「グツ!? (何とかダメージは最低限に抑えられましたわ…!後は…!)」

「ッ!?大丈夫か!?セシリア!？」

「ええ!感謝しますわ!(上手く行きましたわ!これで流れを此方に引き込めれば…!)」

「…セシリア?」

「…イチカさん、まだこれからですわ。」

「!ああ、そうだな。…頼めるか?」

「勿論ですわ。」

福音はセシリアのバランスを崩して腹部に強力な蹴りを入れるがセシリアは咄嗟にロンゴミニアドでガードしていた。しかし、衝撃までは殺せずイチカの方へと跳ばされてしまい衝突してしまうが二人共体制を立て直す。

「へえ、此処でセツちゃんが奇襲を仕掛けるなんて何か狙いでもあつ

たのかな？まあ、福音に簡単に対処されてるけどね。」

(…奇襲が目的と言うよりは別に狙いがある様に見えるな。…だとするとイチカ君に近付くのが本当の目的か？…となると次の行動は…)

「鈴さん！ラウラさん！簪さん！ほんの少しで良いので私達で時間を稼ぎますわ！」

「！了解！」

「…分かった！」

「任せて！」

(…やはりか。)

(成る程ね、鈴ちゃん達が時間を稼いでゴーストチェンジをするのが狙いだね。となるとこの状況ならナイトメアブレイカーかな？でも残念♪イツ君の使う眼魂のデータは全部入ってるからね♪ま、折角だからゴーストチェンジはさせてあげるよ♪)

(よし、力を借りるぞ！)

(お任せください！勝利の為に私の力をお使ください！)

「アーイー！バッチリミナー！バッチリミナー！開眼！ジャンヌ！」

イチカがゴーストドライバーに眼魂をセットすると金色のパーカーゴーストが現れイチカの周りを浮遊し始める。そして直ぐ様ゴーストドライバーのトリガーを引き、勢い良くトリガーを押し込む。

「…へ？」

「勝利の女神！いざ参らん！」

パーカーゴーストがイチカの上から被さり、イチカはガンガンセイバーを薙刀モードにすると先端から金色のエネルギー状の旗が現れ、ナイトメアカリバーを出現させた。そして、ゴーストチェンジと同時に鈴達四人は金色のオーラを纏う。

「駄目押しだ！」

「大開眼！ジャンヌ！オメガドライブ！」

イチカはオメガドライブを発動させると全員が纏っていたオーラが更に輝き、全員のステータスを更に強化した。その光景を観ていた束は啞然としており、永遠は少々感心しながら静かに眺めていた。

「ハアアアア！」

「喰らいなさい！」

「撃ち抜きますわ！」

「（これなら行ける…！）仕留める！」

「落とす！」

（不味い…不味い不味い不味い!?あれって確かセツちゃんの眼魂だよね!?しかも能力とかが良く分かってない奴だから福音にデータが入ってないよ!?てか皆のスペックがかなり上がってる!?…仕方無い

ね、観測と同時進行で今の五人分のデータを福音に再入力するしか無いね。福音のシールドエネルギーが尽きるが先か、私が再入力するのが先かの勝負だ！」

(…ハア、目の前の事に集中するのは良いが、私が言った事を完全に忘れてるな。…まあ、彼等にとって此処からが正念場だろうな。)

「マスター！福音のシールドエネルギーの残量が半分を切ったよ！」

「サンキュー白式！此処で一気に畳み掛ける！」

「セット！ノブナガ！大開眼！BREAK SPELL！」

(初登場が必殺技に使われるとか…是非も無いよね！)

イチカはナイトメアカリバーをシューティングモードにし、ノブナガゴースト眼魂をセットする。そして宝玉部分を押し、オメガファイナレの準備をするとイチカの周囲に闇で形成された火縄銃の様な形をした銃が無数に出現する。ナイトメアカリバーを福音に標準を合わせると全ての銃が福音に標準を合わせる。鈴達もそれぞれ残り半分以下のシールドエネルギーを一気削り切る為に構える。

(M・A・Z・U・I!?待つて!?本当に不味い!?何なのあの金色の眼魂!?チートでしょ!?あれのせいで一気に逆転されたんだけど!?あと少しで完了するのに!?マジで間に合ってくれないと私困るんだけど!?)

「はあああああああ！」

「オメガファイナレ！」

イチカ達五人の強力な攻撃が一斉に福音に放たれる。福音は防衛や回避でダメージを抑えようとするが、どんどん被弾していきシールドエネルギーが削られていく。しかし…

「ッ!? (いきなり福音のスピードが上がった!? どう言う事だ!?)」

「イチカ! ツ! (さっきよりもブレードを振るう速度が上がってるし、パワーが上がったのか一撃が重い!?)」

「ハアア! (先程よりも鋭く正確に撃ち抜いてかれて対処するだけで精一杯ですわね!?)」

「まだまだ! (…防御力も上がっているのかな? 思う様にダメージも与えられてないし、折角流れは此方に来てたのにまた福音に持って行かれた。)」

「クッ! (今度はあの羽に雷を纏っていて厄介だ! それにレーゲンがこの羽に反応している…?)」

「お願い…たし…じて…。」

「うるさい! 私に話掛けるな! 私は…私は…!」

「…また? しかもお願いって…? って今は此方だ!」

先程よりも明らかに強化された福音に五人は再び防戦一方になってしまう。しかし、イチカ達五人は一人を除いてジャンヌを使う前に比べれば少々ましだと感じており、福音の動きに既視感を感じ始めていた。

（ふう、危なかった。私の入力速度がなければ完全に詰んでたね!

しかも入力ついでにイツ君の持つてる眼魂の力を擬似的に再現したプログラムも追加したから更に強化出来たしね！…まあ、ベートーベンとナイトメアブレイカーはどうやっても再現出来なかったけど問題無いもよね！)

(…ふむ、先程よりは強化されている様だが、明らかに最初と比べれば防戦一方ではあるが攻撃が当たっていない訳ではない、むしろイチカ君達の受けるダメージが減っているな。…しかし、問題は…)

永久の考えている通りイチカ達は福音からの受けるダメージが減っており、ダメージは兎も角攻撃も当たるようになってる。ただ一人を除いて…

(何で…？私は…私は強くなっている筈なのに…！)

(お願いだよ！私を…もう一度私を信じてよ！)

(今度はハッキリ聴こえた？一体何処か…)

(分かっている！福音こいっに勝つにはお前の力が必要だと言う事を！だが、あの日…私のせいで師匠は倒れ、三日も意識を失っていた…それは力を望み方に呑み込まれた私の責任だ！)

(違う！あの人が倒れたのはラウラ様の責任じゃない！私が…私があのシステムを抑えきれなかったから…だから悪いのは私で貴女が思い詰める必要なんて…)

(違う…！思い詰めてなどいない…怖いんだ…力を望み、その力に呑まれ、大切な人達を傷付けるのが…)

(ラウラ様…)

(…成る程な、声の出所が分かった。…問題はラウラが何を思っているかだな。ツ!?間に合え!)

「ツ!?すまな…「何悩んでんだ!ラウラ!」 師匠…」

イチカはラウラの死角から迫る雷を帯びた羽をナイトメアカリバーで一掃する。そして、イチカに対して謝罪しようとするのを大声で遮る。

「俺はラウラが何を悩んでるのは分からねえよ!だけど、レーゲンの方はお前を信頼して歩み寄ってるんだろ!?だったらお前はそれに応えろよ!?チツ!邪魔だ!」

「私だって…私だってレーゲンの信頼に応えたいに決まってるだろ!?!だけど…だけど怖いんだ!あの日みたいに私のせいで師匠は倒れた!私は!もう力に吞まれて大切な人達を傷付けるのが嫌なんだ!」

「誰がお前のせいだと言った!?あの時は俺自身も力の欲して吞まれた!それでも俺は闇を受け入れて今がある!だったらラウラもレーゲンを受け入れて前に進め!」

「し、しかし…また力に吞まれて暴走したら…」

「ああ!?もう!?何の話をしてるか分からないけどウジウジしないでさっさと覚悟を決めなさいよ!?暴走?ハツ!そんな事になっても力づくで止めて引き戻してやるわよ!」

「それに、あの時の事はイチカさん本人が気にしていないのですから貴女が気にする事でもありませんわ!貴女が今すべきなのは過去の呪縛から抜け出す事ですわ!」

「ま、これはラウラの問題だから、私達がどうこう出来る訳ではないけど手伝う事は出来るよ。」

「…ハハッ、今まで恐怖でレーゲンを避けていたが馬鹿みたいだな…。スウ：師匠！鈴！セシリア！簪！私はもう迷わない！此処からはノンストップで行くぞ！（と言う訳だ！レーゲン！私と共に戦ってくれ！）」

「！はい！私は何時までもラウラ様と共にいます！イチカ様もご協力お願いします！」

（ああ！分かった！それで俺は何をすれば良いんだ!?!）

（はい！ではイチカ様はラウラ様と私に強力な雷撃をください!!）

（成る程な！強力な雷撃を私達に…え?）

（任せろ！強力な雷撃をラウラ達に…は？おい…レーゲン？今何て言った?）

（ですから、イチカ様は私達に強力な雷撃を。一応現在進行形で攻撃されている羽から雷を奪ってるけど、どうにも量が少なくパワー不足みたいだからイチカ様から一気に貰おうかなと。確か、イチカ様の眼魂には電気を操る物があつたよね？それを全力でと思いました!）

（…それは…大丈夫なのか?）

（大丈夫です！むしろ強力な程パワーアップ出来ます！ですからお願いします!）

「…師匠、私からも頼む。何の根拠も無いが何故か行けそうな気がするんだ。だから…頼む。」

「…ハア、分かった…。やれば良いんだろ？その代わりどうなっても俺は知らないからな？」

「師匠！」

（イチカ様！）

（レーゲン！時間はどれくらいあれば充分だ！）

（三分…いえ、二分で完了させます！）

「（了解だ！）鈴！セシリア！簪！もう一度時間稼ぎ頼む！なるべく長めに！」

「任せて！何分でも稼いでやるわよ！」

「ええ！お任せください！」

「…別に倒してしまっても構わんのだろうか？」

「簪は何でボケてフラグ立てた!？」

「ごめん、つい。」

「セット！エジソン！大開眼！BREAK SPELL！」

イチカは鈴達に時間稼ぎを頼み承諾を得ると同時に簪のボケに突っ込みながらナイトメアカリバーにエジソンゴースト眼魂をセツ

トして宝玉部分を押す。すとはナイトメアカーバーは紫雷を纏い、オメガエンドの準備を完了させる。

(レーゲン、お前は分かっていると思うけど一回限りだ。どうなるかは俺には分からないけど絶対にしくじるなよ?)

(任せてください！何が何でも成功させます！だから全力でお願いします！)

「行くぞ！気張れよラウラ！」

「ああ！」

「オメガエンド！」

イチカは紫雷を纏ったナイトメアカーバーを素早く振り下ろすとナイトメアカーバーから膨大な紫雷が雷撃として一気に放たれるが

…

「がああああああつ!?!」

『!?!』

雷撃は福音に向かわず、別の方向に一直線に向かいラウラに直撃し悲鳴が上がる。その光景を見ていた鈴、セシリア、簪、束はかなり驚いており、永久もイチカの行動が予想外だったのか瞳を大きく開いていた。

「イチカ!?!何してるの!?!何でオメガエンドをラウラに放ってるの!?!そのままだとラウラが!?!」

「大…丈夫だ！だか…ら…気に…するな！」

（レーゲン！状況は!?）

（今、ラウラ様のデータとこの紫雷を合わせて最適化を全力でやってるよ！イチカ様そのまま！ラウラ様はもう少しの辛抱だよ！）

（ああ！チツ！やっぱり黙って見逃す訳無いよな！）

（レーゲン！まだか!?このままでは!?）

（もう少し！もう少しで…!）

「ツ!?避けなさい！ラウラ！」

福音は鈴、セシリア、簪の包囲網を無理やり突破して膨大な紫雷を纏ったラウラに奇襲を仕掛ける。ラウラ以外の四人が援護に回ろうとするが福音から展開された羽が行く手を阻んでいた。

「しまっ…!?!」

「させるか！」

「…!?!」

（これで…!）

イチカは羽に阻まれながらもガンガンセイバーを振るい、福音に向かって斬撃波を飛ばす。ダメージこそ微々たる物しか無いものの福音のバランスを崩す事は成功した。しかし直ぐに体制を持ち直してラウラに斬り掛かる。だが…

[…?]

「…え？ラウちゃんが消えた？」

束が呟いた通り、福音に斬り掛かれたラウラの姿は何処にも居らず困惑しており、鈴とセシリアも束同様困惑していた。

(…成る程、束は消えたと認識したのか。…この中できちんとラウラ君を認識しているのは私とイチカ君、簪君だけか。)

「…どうやら間に合ったみたいだな。ただダメージはほぼ無いに等しい…なら…」
「セツト！ナイトメア！」ラウラ！これを使い！」

「助かる！ハアアツ！」

[…!:]

イチカは何も無い所にナイトメアカリバーを投擲するとラウラの声が聞こえると同時にナイトメアカリバーの姿は消え、福音が紫色の斬撃でダメージを受けている姿だけがあった。

「何で!?!声や反応はあるのに姿が見えないんだけど!?!しかも何か福音が攻撃受けてシールドエネルギーが減ってるんだけど!?!」

束の言う通り、ラウラの声は聞こえモニターにも反応があるがラウラ本人の姿が見えておらずただ福音が攻撃を受け続けておりシールドエネルギーも徐々に減少していた。そしてついに

「大開眼！LOST SPELL！」

「これで…終わりだあああああ！」

「オメガデッドエンド！」

「!?…」

福音に紫雷と闇の斬撃が決まり、シールドエネルギーが尽き動かなくなり姿を消した。そして、いつの間にかラウラはイチカの隣に立っており先程とは違い姿が変わっていた。大型のレールカノンはレールガンになり二つに増え、装甲事態は細身になり、色は先程に比べ濃くなっていた。

「師匠助かった。お陰でシールドエネルギーを削り切る事ができた。」

「どういたしました。ふーん、成る程なこれがレーゲンの新しい力か。確かに今のラウラの戦い方に合ったスピード特価の姿だな。」

(ありがとうございます！これもイチカ様のお陰です！)

「ああ、これなら師匠達に着いて行ける！…と聞いた所だが少々振り回される感じがあったから、もう少し慣れる必要があるな。後、名前がシユバルツエア・ブリッツになったそうだ。」

「黒き稲妻かくありだね。」

ラウラはイチカにナイトメアカリバーを返して話しながら両手に大型のナイフを出現させ、シユバルツエア・レーゲン…もといシユバルツエア・ブリッツに慣れる為に軽く素振りをしていた。

「ちよつと二人共!?何でラウラが消えたのか説明しなさいよ!?しかも何か福音も倒してるし!？」

「鈴さん、落ち着いてください。…まあ、私もラウラさんが消えた事もそうですが、姿が変わった事の説明をして欲しいのですが。」

「ラウラが消えた…?」

「…ああ、そういう事か。なら、説明するけど別にラウラは消えた訳じゃないからな?」

「そうそう、ラウラはただ二次移行して高速で移動して福音に攻撃しただけだよ。」

「高速で移動して福音に攻撃…?」

「待ってください、ラウラさんが高速で移動したとして、何故お二人はラウラさんの姿が視認出来ていたのですか?正直、私達は視認する事が出来ませんでしたので。」

「普通に見えてたよ。見た感じイチカの白式ブレイカーと比べ物にならないくらい速かったよ。」

「だな、普通に俺より速かったし、あの速度からのナイフと紫雷…ラウラの場合は黒雷での斬撃は脅威だな。」

「いや、逆に何でイチカと簪は見えてるのよ…?」

「何でって…」

「永久さんとの訓練で鍛えられてるからな。まあ、見えた所で攻撃を当てれる訳でもないけどな。」

「そうだね。今まで一度も当てる事出来なかったし、やる事全部防がれてカウンター喰らってたからね。正直、山嵐を回避された上に足場にして接近されて斬られてシールドエネルギーが尽きると思ってたよ。」

「マジか、俺はオメガドライブを使ったら蹴り一発で無効化された上に膝蹴りされた直後に踵落としで削られた。」

「え…？」

鈴とセシリアはイチカと簪の永久との訓練であつた事を聞くと言葉を失い、再度永久の強さに驚いていた。そして、福音が消えたと同じ時に束は放心状態になり、永久はイチカ達の評価を改めており、特にラウラに感心していた。

四十六話 訓練を終えて

最終日の昼前、イチカ達五人は訓練も順調に進んでいきそれぞれ弱点や不得意な事を克服していき確実にレベルアップしていた。そして現在、イチカ達は永久の別荘の庭に集まっていた。

「みんなー！お疲れ様ー！やっぱり訓練の最終日って言ったらバーベキューだよね！と言う訳で食べて飲んで楽しもー！乾杯〜！」

『乾杯〜！』

「テンション高いですね、束さん。」

「まあね！バーベキューは楽しいから楽しまないと損だからね！…と言ってる内にお肉と野菜焼けたよー！皆、どんどん食べちゃって〜！」

束の音頭と共にバーベキュー兼打ち上げが始まり、各自好きな飲み物や食べ物を口に行っている。そして、一番テンションが高い束の姿を見ているイチカは何処か自棄になっている様に見えていた。

「ほい、取り敢えず色々貰ってきたぞ。」

「ありがと♪…ねえ？イチカ？何か…束さん自棄になってる様に見えるんだけど？」

「自棄？ああ…確かにそう見えるけど、あれは…」

「…自棄と言うよりは本気で楽しんでいるだけだな。」

「お疲れ様です、永久さん。」

鈴はイチカから肉や野菜が盛られている紙皿を受け取りながらテンションが高くなってきている束について質問しているとジューズが注がれているプラカップを持っている永久がイチカの代わりに答え、イチカは頭を下げながら声を掛ける。

「この三日間ありがとうございました。処で楽しんでいるって言うのは？」

「…二人こそお疲れ様。…まあ、昨日の話になるんだが、君達と福音との戦いで賭けをしていた。…内容はシンプルにどちらが勝つかだ。」

「賭け…ですか？でも、何でそれが束さんが本気で楽しんでいる事になるんですか？」

「…ああ、成る程。落ちが見えました。多分、賭けの景品が負けた方が今回のバーベキューの食材とかの金額を全負担とかですか？」

「…正解だ。」

「？何で全負担で本気で楽しむ事になるんですか？」

「まあ、簡単に言えば『賭けに負けて全負担になるくらいなら良いお肉とか私の好きな奴とか大量に買って本気で楽しんでやる！』って感じ。だから此処にある肉とかは高い奴とか束さんの好きな奴が多いんだ。」

「成る程ね。あ、永久さんも食べますか？」

「…頂こう。…それにしても、幾ら自腹だからと言って買い過ぎだろ。…明らかに七人分の量を越えているぞ。」

「あー、多分この量なら問題無いと思いますよ？私とイチカも食べる方ですし、それに…」

「…どういう事だ？…いくら二人が食べる方だとしてもこの量だぞ？」

「永久ちゃん！イツくん！鈴ちゃん！追加のお肉ととうもろこし焼けたよー！」

「…二人共行くぞ。」

声を掛けられた三人は永久を筆頭に東の元に向かい、それぞれ好きな食材を受け取り談笑しながら食べ始め、セシリアと簪も集まり更に賑やかになる。

「…東、食材はお前に任せたが明らかに多すぎだ。…余ったらどうするつもりなんだ？」

「あー、確かにそうだよね。つい、買いすぎちゃったな…ま、まあ、余ったら私と永久ちゃんが持って帰れば良いんだよ！」

「…それでもだ。…購入する時はきちんと人数など考えて購入しろ。…いくら七人分とは言えイチカ君以外は女なんだぞ？」

「余る…？」

「…簪君、何故余るで首を傾げたんだ？」

「何故と言われましても…多分この量なら大丈夫だと思いますよ？」

「…先程イチカ君と鈴君も同じ事を言っていたがそれはどう言う事だ？」

「師匠！このオススメされたコリコリした奴にポン酢をかけて食べたら凄く旨いぞ！このコリコリした奴は何と言うんだ!?!…と何か話の途中だったか？」

「…いや、大した事では無いから気にせず楽しんでもらって構わない。…それと今ラウラ君が食べているのは砂ずりと言う鳥類等の消化器官の一つで普通は鶏の物だ。」

「成る程！感謝するぞ！」

「(…しかし本当にラウラ君は美味しそうに食べるな。)…ラウラ君、焼きとうもろこしもあるが食べるか？」

「うむ！頂くぞ！」

「(…しかしラウラ君は戦闘時と食事時のイメージががらりと変わるな。…ふむ、とても幸せそうに食べるから食べ物あげたくなるな。)…」

永久はラウラに焼きとうもろこしを渡すと手を拭き何故かラウラの頭を撫で始めた。その光景を見たイチカ、簪、束は眼を大きく開きながら驚いており、ラウラ本人は撫でられる事に慣れているのか特に気にせず焼きとうもろこしを食べる事に集中しており、時々眼を細めて気持ち良さそうにしていた。

「えっと…永久…ちゃん？何でラウちゃんの頭を撫でてるの？」

「…何故だろうな？…何故か無性にラウラ君の頭を撫でたくなって

な。…ラウラ君、喉が渴くだろうからお茶も飲むと良い。」

「何か永久ちゃん、久し振りに会った孫を可愛がるお婆ち…」ヒュッン
「ザシユツ！」…え？」

「…私は何だ？」

東が言葉を言い切るよりも前に空気と何かが斬れる音が聞こえ静かに足元を確認すると足のギリギリ掠めない所に幾つもの斬られた跡があった。

「と、永久ちゃん？質問して良い？今、木刀とか持ってないよね？何で…斬撃波を放てるの？」

「？…何って、箸で斬撃波を放ったが？…と言うより斬撃波なら棒状の物なら放てるだろ？」

「いや、その理論は可笑しいよ。それで言ったら永久ちゃんは、つまようじや裁縫の針で斬撃波を放てる事になるけど？」

「…普通に放てるが？…お前は何を言っているんだ？」

『えっ…？』

東の質問に対して永久の返答に東だけでなくラウラ以外の四人も驚いていた。逆に永久はラウラの頭を撫でるのを辞めず東の事を不思議そうに見ていた。

「そう言えばイツ君とかんちゃんは永久ちゃんに何を習ってたの？二人だけ剣や薙刀を投げてたけど？」

「…二人は斬撃波をほぼ極めていたから新しい技を教えたただけだ。…
と言つてもIS相手ではあまり使う機会が無いと思うが覚えておい
て損は無い。…内容は…まあ、二人が使える様になつたらだな。」

「ブーブー永久ちゃんへのケチ!…ま、話は変わるけど皆の訓練に付き
合つてくれてありがとね。」

「…気にするな。…私自身も久し振りに熱くなれたし、あの子達の潜
在能力や可能性も見ることが出来たからな。それにお前とも久し振りに
飲んで彼奴とも話せたしな。」

「そつかり、何気に永久ちゃんもこの三日間楽しかつたんだね。…
まあ、蒼夜君が来たのは本当に驚いたけどね。永久ちゃんは知つてた
の?。」

「…ああ、数日前に彼奴から連絡が来て、東にサプライズで会いたいから
東と居る時を教えてくださいと言われてな。」

「成る程ね。にしても…」

「…まさか、あれだけあつた食材を食べきるとはな。」

「イツ君は食べる方つて知つてたけど、まさか鈴ちゃんも食べる方
だったし、何よりラウちゃんが一番多く食べてたのは驚きだね。」

「…本当にあの小柄な身体の何処にかつて言うぐらい食べてた
からな。…それに、あの満面の笑みで幸せそうに食べる姿は何とも言
えない愛らしさがあつたな。」

「永久ちゃんにも愛らしいと思う事あつたんだね。」

「…お前は私を何だと思っているんだ？」

バーベキューの片付けが終わりイチカ達の帰り支度が終わるまで
束と永久はこの数日間の話をしながらか待っており、親友との話を楽し
んでいた。

四十七話 悪魔の狂気

「嫌だ…嫌だ…私はこれ以上は戦いたくない…お願い…貴女を陥れ様とした事は謝るから…だから…だから…！早くこの地獄を終わらせてよおおおおおおお！」

「…アハ♪アハハ♪そっかあ、貴女は早く終わって欲しいんだね？でも…残念だね♪貴女達自身が時間無制限と降参の無しを選んだからシールドエネルギーが尽きるまで続いているんだよ？それに…僕はまだ満足出来ていないから貴女が壊れるまで辞める気は全く無いよ♪」

「ヒツ!？」

「さあ…楽しい時間を…続けようか♪」

フランスのIS訓練所で行われている名目上の国家代表と代表候補生の三人の計四人による合同訓練、しかし代表候補生の一人はISが解除され気絶しており、国家代表であるアリス・ルグランは目の前で不気味に笑らいながら代表候補生に近付いているシャルロットに怯えると言う最早合同訓練と呼べない光景になっていた。

何故この様な状況になっているかは、少々時間を遡らなければならぬ。

シャルロットはフランスに帰国後直ぐにIS委員会フランス支部に向かい報告等を済ませて、国家代表とシャルロットを含めた代表候補生三名の合同訓練が行われる訓練所において、合同訓練の準備をしていた。

（合同訓練…ねえ？確かに年に四、五回やってたけど何で今頃やるのかな？…あ、もしかしてアメリカとイスラエルの所有していたコアが

フランスにも配られたからかな？ま、何でも良いや、どうせ退屈な事
に変わらないから適当にやれば良いよね。」

シャルロットが指定された場所に着くと指定された時間の二十分
前にも関わらず、既に二人の代表候補生と国家代表であるアリス・ル
グランが集まっていた。三人は何か話していたがシャルロットが来
たのを確認すると話を辞めて笑みを浮かべていた。

「(ランク二と三、そして代表のルグランさん…か。何か…何時もより
少ないね？何時もならルグランさんと僕と他の代表候補生が五人な
のに…まあ、何時も通り制限時間内にシールドエネルギーを削れば
良つか。)お待たせしてすいません、先程報告した時に聞いたもので。」

「気にしなくて良いわよ。代表候補生ランク一位のシャルロットさん
？それに今回の合同訓練の内容は把握しているの？」

「(何か棘のある言い方だね？それに今回の？)いえ、何時も通り時間
を決めて僕とルグランさんが他の代表候補生と変わり変わりでやる
と思っていたんですが？違うんですか？」

「ええ、今回の内容は時間無制限、降参、強制終了無し、シールドエネ
ルギーが尽きるまで終わらないバトル・ロワイアル方式よ。」

「(成る程ねえ、そう言う事かあ♪なら今回は本気で楽しめそうだね♪
そうと決まれば…)一つ質問良いですか？怪我した場合は怪我をさせ
た方の責任になるんですか？それとも怪我をした方の責任になるん
ですか？」

「決まってるでしょ、怪我をした方の責任よ。例え事故が起こって怪
我をしてもそれは怪我した自身の責任で相手は関係無いわ。」

「(予想通りの答えをありがとう♪これで君達を満足するまで：壊せるよ♪) 分かりました。なら、早速始めましょうか？」

シャルロットを含めた四人はそれぞれISを展開し、シャルロット以外の三人は展開すると同時にシャルロットに向かい攻撃を仕掛ける。しかし、攻撃を仕掛けられた本人は特に驚いてはいないがわざと驚き攻撃に反応出来ないフリをしていた。

「いきなり何するんですか！」

「何って合同訓練で三人とも貴女を狙った、別にバトル・ロワイアル方式なんだから可笑しい事は無いでしょ？」

「でも開始の合図は鳴ってませんよ！」

「私はちゃんとスタートって言ったよw聞こえてないデユノアさんが悪いんでしょw」

「そうそうwだって私達はスタートって聞こえたから攻撃しただけだからねw」

「そう言う事。」

「そんな…(そんな事知ってるに決まってるでしょ♪だからわざと攻撃を受けてあげたんじゃないか♪それにしても…遅いんだよなあ、攻撃もスピードも何もかも。と言うより喋る暇があったら攻撃すれば良いのに…だからフランスはIS技術と操作技術が合っていないって言われてるんだよ。ま、もう少し良い気分になさせておこうかな。そうすれば…ああ、考えただけでゾクゾクするよ♪)」

シャルロットは絶望した表情をしながら内心は三人のレベルの低

さに落胆しており、どういう風に行動するかを決めて楽しんでおり、一瞬だけが目付きが鋭くなった事に三人は気付かなかつた。そして合同訓練が始まって数十分が経過した頃シャルロットは地面に倒れており、その光景を三人は笑いながら見下していた。

「無様ねw貴女はランク一位と言っても、所詮は会社の七光りって事ねw」

「攻撃も当たらないし、攻撃されたら回避出来ない、それでよく代表候補生になれたわねw今からでも遅くないから代表候補生辞めたら？」

w」

「で？シールドエネルギーの残りが三割を切ったけどまだ続ける？まあ、シールドエネルギーが尽きるまで私達に攻撃される以外は無いけどね？」

「(はあ…、国家代表とランク二と三が三人同時に相手するから楽しみにしてたけど期待して損した。三十分以上経ってても三割近く残っているとかなり得ないでしょ。しかもルグランさんは良いとして、二人共似た様な攻撃しかしてこないし、連携もなっていない。まだIS学園の一般生徒の方が強いよ…はあ…この後約束があるから)さっさと終わらせよつと…。」

「ハア？それ…本気で言ってるの？」

「七光りの分際で生意気よ！」

「…？あれ、もしかして声に出た？まあ、良いや別に聞かれても問題無いし、それに終わらせるのは事実だしね♪さあ…今度は僕が楽しませて貰うよ♪」

(彼女の雰囲気が…変わった?…例え、雰囲気が変わっても関係無い。私はどんな事をしても勝たなきゃいけない!)

「どうせ七光りの攻撃なんて当たらないから動かないであげるわw」

「へえ、言うねえ?なら…遠慮無く♪」

「ッ!」

シャルロットは武器をライフルから愛用している両手持ちの蛇腹剣に切り換えて挑発してきた代表候補生に向かって一気に加速し斬り掛かる。しかし、咄嗟の判断でギリギリ回避出来た…筈だった

「ッ!?何で!?確かに回避した筈なのに、何で攻撃が当たったの!?!」

「君に言う義理は無いよ!」

シャルロットは再び蛇腹剣を展開して代表候補生の首を狙って巻き付けて引き寄せ、地面に叩き付けてから代表候補生の両腕を踏みつけて逃げられない様にしてシャルロットはライフルを展開し、標準を顔に合わせて至近距離で何度も発砲する。そして代表候補生は撃たれながら気付いてしまった、シャルロットはライフルを撃ちながら狂気に染まった笑みを浮かべている事に。

「ヒッ!?!」

「アハハ♪やつと良い顔になったね!でも楽しい時間は始まったばかりだからね。だから、もっと良い表情になる様に君を…壊してあげるよ♪」

「今すぐ離しなさい!会社の七光りのくせに調子に乗らないでよ!」

「待ちなさい！」

(！助かった…)

「今、助かった…そう思ったでしょ♪」

「ッ!？」

もう一人の代表候補生は一気加速してシャルロットに接近する。そしてこの時、身動きが取れない代表候補生は自分が助かると思い安堵する。しかし、シャルロットは表情から考えている事を見抜き問い掛ける。考えを詠まれた事に驚き再び見えた狂気に染まった笑みに恐怖し声すら出ていなかった。

「悪いけど、今はこの娘を壊すのを楽しみたいんだよ。だから…邪魔するな。」

「ガッ!？」

「ッ!？」

シャルロットは蛇腹剣を伸ばし代表候補生に巻き付けて地面にそのまま叩き付ける。そして直ぐに叩き付けた代表候補生に向かってグレネードを十個程投げ付ける。それに気付いた代表候補生は直ぐにその場から離れようとする。しかしシャルロットは蛇腹剣で離れた場所から何度も斬り、その場から離れない様になっている。

「嫌…嫌…！此処から離れさせてよ！」

「五月蠅いから黙れば？ハア…君は後からじつくりと壊したかったけ

ど…辞めた。さっさと墜ちて壊れなよ。」

「…」

「さて…お待たせ♪邪魔する奴は消えた事だし再開しようか♪」

代表候補生に投げられたグレネードは悲鳴を挙げる暇も与えず一斉に爆発し、ISのシールドエネルギーを一気に削り切る。グレネードが爆発するまでシャルロットは真顔で見詰め、爆発し終わると直ぐに笑顔で抑えていた代表候補生に話し掛ける。

「…すな。」

「うん?」

「七光りぐとときが私達を見下さないでよ! 實力は私達の方が断然上よ! なのに何で会社の七光りっただけでランク一位に居座って専用機まで持つてるのよ!…こんなの不公平よ!」

「アハ…アハハハハハハハハハ! ま、待つて! 君達が? 僕より實力が上? や、辞めてよw そんな冗談はw 冗談はIS学園の一般生徒より低い君達の實力だけにしてよw」

「何を言って…」

「ふざけないでよ!」

「別にふざけてないさ。僕は事実を言っただけだからね。だって君達…三割位しか本気を出してないのに訓練で一度も勝った事無いでしょ? それに特別な技術があるわけでも無いしね。それにさ…会社の七光りっただけでランク一位になれる訳無いでしょ? それに専用

機だってランク一位になれなかったら持てない訳だしね。さて…話は終わりにして再開しようか。ルグランさんは恐怖で動けないみたいだしね。シールドエネルギーの残量からしてライフル三発分位かな？それじゃ早速撃たせて貰うよ♪」

「何で…何で…何であんたはそんなに楽しそうに人に銃を向けられるのよ!?!」

「何でって…決まってるでしょ♪こう言う風に恐怖に染まった顔を見ながら撃てるんだから…ね♪」バンツ!

「グツ!?狂ってる…あんた頭可笑しいわよ!?!」

「?何当たり前な事言ってるの?こんな可笑しな事を平気でやる人間が狂ってない筈が無いでしょ?」バンツ!

「ガツ!?!早く撃ちなさいよ…後、一発なんですよ…早く撃って終わらせなさいよ!（早く終わらせてこんな奴と関わらない様にしないと…）」

「アハハ♪良いねえその覚悟!なら君のお望み通りラスト一発♪良かったね、これでシールドエネルギーが尽きて終われるよ。さあ…終わりの時間だよ♪」バンツ!

シャルロットは笑顔でライフルの引き金を引き抑えている代表候補生に弾丸を撃ち込む。代表候補生も覚悟を決めてお目を閉じてISが解除されるのを待つ。しかし既に発砲されているにも関わらず頭部に衝撃が来ずISも解除される感覚も無い事に気付く。

「…?何で?何で…ISが…解除されていないの…?それに何で…シールドエネルギーが回復してるの!?!」

「アハハハハハハハハハハ！こんな狂ってる人間の言葉を信じるなんて君って馬鹿なのw普通なら不信感を抱く筈だよwま、折角シールドエネルギーが回復したんだし、これの的になって貰うよ♪」

「ッ!？」

そう言うとシャルロットは玉切れになったライフルを拡張領域に収納しガトリングガンを展開して構えて先程と同じ様に代表候補生の顔を標準を定め、迷う事無く引き金を引く。ガトリングガンからは何発もの弾丸が一斉に発射され、一つの長い轟音が訓練所に鳴り響いている。シャルロットはただ笑顔でガトリングガンの引き金を引いていた。

「フウ…やっぱり良いねえこの感じ♪少し扱いにくいと思ったけどそんな事無かった、寧ろ僕の手馴染んでたね。あ、気絶してる所悪いんだけどありがとね、これの的になってくれて♪さあ…ルグランさん、今度は貴女の番だよ♪」

「ッ!？」

シャルロットは狂気に満ちた笑顔のまま加速し、ルグランが気が付いた時には既に目の前まで接近しており、慌てて短剣で反撃しようとするがいつの間にか展開されていたハンドガンで弾かれ攻撃が当たり吹き飛ばされてしまう。

「まだまだだ!？」

(しまっ!?)

続けざまにシャルロットは蛇腹剣をルグランの体に巻き付け引き

寄せながらマシンガンで撃ちシールドエネルギーが尽きる直前で回復弾を撃ち込み、短剣を使いもう一度吹き飛ばす。そして今度は投擲用ナイフを展開しルグランに向かって投擲する。

「(武器の展開が速い…いや、速すぎる!?!彼女から眼を離していないのに瞬きをしたら既に武器が変わってる!?!でもこのナイフな…)グツ!?!」

「残念♪そのナイフは投擲した数秒後に爆発する仕組みになってるんだよ♪」

そう言いながらシャルロットは笑顔で攻撃を辞めず、シールドエネルギーがギリギリの所で回復弾を撃ち込んで回復させて、また攻撃するという事を繰り返していた。攻撃と回復を繰り返されているルグランは心も体もボロボロになりつつあるがまだ諦めてはいないのかゆっくりと立ち上がる。

(もう少しで折れそうなのに折れない…良いねえ、他の二人とは違って壊しがいがあるよ♪それに…)

(遊ばれてる…でも…まだ国家代表の座を降りる訳にはいかない…私には…もう…此処しか無いから)

(良い感じに闇を抱えてて本当に僕好みだなあ♪…うん?)

(…、…。…。…。)

(…へえ?なら…それを存分に活用させて貰うよ。)

(せめて…あの技で…!)

ルグランは覚悟を決めて右手に近接ブレードを左手にハンドガンを展開して直ぐ様行動に移す。シャルロットはそれを笑顔で眺めていた。

「イグニッション・ブースト瞬時加速…か。何か久し振りに見た気がする…て言うか僕達が使ってないだけか。でも何でルグランさんは瞬時加速…ッ！ハアッ！」

（防がれた…！でも！）

（そうだった…！瞬時加速自体は何て事は無いけどルグランさんは普通の瞬時加速を独自に進化させて、瞬時加速をしながら攻撃して無理矢理方向転換、その繰り返し。確か…）

「イグニッション・アサルト瞬時連撃、私が無理をして偶然から造り出した切り札。…本当は薄々気付いていた。彼女が私より上だと言う事を。でも…認めたくないから現実から眼を背けて逃げていた。」

「厄介だけど慣れれば何て事は無いよ！」

「（私は…自分の場所を失いたくなかった、私の場所は此処しか無いから！）クッ！それでも！」

「アハハハハ！ルグランさん！貴女は本っ当に最高だよ！家族以外で壊したくないと思っただのは貴女が初めてだよ！ああ！今貴女の事を考えると胸の高鳴りが止まらないんだ！闇を抱えて絶望的な状況でも恐怖を誤魔化して何とかしようとするその姿！本当に…本っ当に僕好みの人だよ！貴女は！だからこそ…」

「ハアッ！」

「貴女が欲しくなった。」

「あ…ガッ!？」

シャルロットが振り下ろした蛇腹剣は確実にルグランと捉えて斬り付け、シールドエネルギーが尽きた為にISが解除され、勢いが軽減された状態で地面に落下する。

「…分かっていたけどやっぱり悔しいな。切り札の瞬時連撃を使っても殆ど防がれた。もっと強くなって私の居場所を護らなきゃ…。私にはもう…此処しか無いから。…上からの通信?何だろう?…はい、アリス・ルグランです。」

『合同訓練ご苦労。早速で悪いが君に通達だ。本日をもってアリス・ルグランをフランス国家代表の席を解任及び専用機の返還を命ずる。』

「え…?ちよ、ちよつと待ってください!解任ってどういう事ですか!？」

『そのままの意味だ。君は今日限りで国家代表ではなくなり此処を去ってもらう。』

「そんなの納得出来ません!世界ランクだって徐々に上がってきてますし、前回のモンドグロツソも六位と言う戦績も残しています!なのに何故!?それに国家代表は私の居場所なんです!私にはもう此処しか無いんです!」

『そうだな。君は世界ランクも上がって初戦敗退の第一回と比べて良い戦績を残している。だが、これは既に決定事項だ。』

「そん…な…私の…居場所が…」

一方的に通信を切られてしまい、強くなると決意した矢先に国家代表でなくなつたルグランはこれから自分はどうして良いのか分からず座つたまま壊れたステレオの様に私の居場所と呟くだけであつた。

「用済みになつたら直ぐに切り捨てる、正に悪意に満ちた人間つて感じがするね。そして貴女はその勝手な悪意によつて居場所を失つた訳だ。」

「…私の居場所が…」

「そこでルグランさん、貴女に提案があるんだ♪」

「…!」ビクッ

シャルロットはルグランにゆつくりと近付き左肩に手を添えて顔を右肩に乗せて囁くように話し出す。突然の事にルグランは声を出さず強張つてシャルロットの話に耳を傾ける。しかしこの時ルグランの脳内は警告が鳴り響いており、『話を聞くな』『そいつから離れろ』『今すぐに逃げろ』等と命令されているがシャルロットの話を聞くために離れなかつた。

「ルグランさん。」

名前を呼ばれた瞬間にルグランの脳内で鳴り響いていた警告が更に激しさを増し『これ以上聞くな』と命令する。それでもルグランは離れようとせずシャルロットの言葉に耳を傾ける。例えそれが悪魔の囁きだとしても。

「僕は貴女が欲しい、アリス・ルグランと言う人物の全てが欲しい。居

場所が無いと言うのなら僕が貴女の居場所になってあげるよ。」

「…私の…居場所…に…？…本…当に…？」

「勿論♪僕が貴女の居場所になって望む事を出来る限り叶えるよ。それこそISの仕事をしたいと願うならお父さんに相談する事も出来るよ。」

「…あ、ISじゃなくて…別に…いい…。ISは…私にとって…居場所を…護る為の…手段…だから…。」

「成る程ねえ、つまり貴女が欲しいのは居場所その物って事だね。良
いよ、僕が貴女の居場所になって貴女が存在を証明してあげるよ。
ま、貴女のこれからに関する大事な事だから返事は今じゃなくても良
いよ。少なくとも一週間は此方に居る予定だしね。さて、僕はこの後
用事があるから失礼するさせて貰うよ。」

「あ…。」

シャルロットはルグランに自身の連絡先が書かれたメモを渡し、
ゆっくりと離れてから横を通り過ぎる。シャルロットが離れた途端
に脳内で鳴り響いていた警告が止んでいた。しかしルグランは自分
からシャルロットが離れる事を名残惜しそうにしており、無意識の内
に目の前を歩いているシャルロットの後ろ姿に手を伸ばしていた。
するとシャルロットは少し歩いた所で足を止め振り返る。

「それじゃルグランさん…いや、アリスさん。」

「…！」

「貴女のこれからを決める大事な選択を楽しみに…」

シャルロットは今言っている言葉を区切る。その瞬間、ルグランの脳内は過去最大の警告が鳴り響き命令を発する。しかし彼女はその警告と命令を完全に無視していた。

「待ってるよ♪」

たった一言。しかしその一言に含まれた力は大きく禍々しく、一瞬でアリス・ルグランと言う存在に浸透し、蝕み、狂わせる。まるで毒の様に。

四十八話 家族と共に

シャルロットがIS委員会への報告と合同訓練を終えて訓練所の前でスマホを弄りながら時間を潰していた。すると訓練所の前に一台のリムジンが停車し、シャルロットはスマホを仕舞い迷う事無くそのリムジンに乗り込むと既に銀髪の女性が一人席に座っていた。彼女の名はマリア・デュノア、シャルロットの義母に当たる人物である。

「待たせてごめんね、シャルちゃん。道が混んでたみたいで約束の時間に間に合わなくて。」

「気にしてないよ。マリーさんから遅れるって連絡が来たから事情は知ってからね。処で…お父さんは？」

「まだ…来れないみたい。何でも合わせる顔も資格も無いからって…。」

「ええ…めんどくさ…と言うかまだ引きずってるの？お母さんは気にして無かったんだから普通にすれば良いのに。と言うよりお父さんは考えすぎなんだよ。（…ま、お父さんの事だから心配する必要も無いけどね。）」

「でも…仕方無い事だと思うな。アルベールさんはヴァレリーさんとシャルちゃんの事に関しては不器用だから。」

「確かにそうだね。僕達の生活が苦しくない様に匿名で自分のポケットマネーからお母さんの口座に振り込むくらいだからね。勿論、マリーさんもね。」

「…気付いてたんだ。」

「まあね。と言つてもマリーさんののは後から知つただけだね。と言うか、これのお陰だね。」

「それって…」

シャルロットは自身のバッグからシンプルな封筒を取り出してマリアに見せる。その封筒はマリア自身がシャルロット達に匿名で書いた手紙だった。

「最初は名前が書いていなくて分からなかったけどマリーさんの字を見て確信したんだよ。まあ、そのお金を使う事は無かつただけだね。」

「どうして？もしかして誰から送られてきたか分からなかったから？」

「違うよ。お母さんの収入とお父さんの振り込みで生活出来てたつて言うのもあるけど。お母さんは自分が居なくなつてから僕が不自由無く過ごせる様にあえて使わなかつたんだ。ま、お母さんは『人は死に至る事で美しく完結する！』と言う訳で手術は要らん。私は残りの余生を謳歌する。』って担当医に言つて喧嘩して、弱みを見つけて脅したくらいだからね。」

「ええ…。ヴァレリーさんつてアルベールさんから聞いていた以上に無茶苦茶な人だったんだね…。」

「うん、僕以上に狂つてて無茶苦茶だったけどそれでも僕の自慢のお母さんだよ。」

「そっか。私はヴァレリーさんに会つた事は無いけど二人の話を聞いて

て本当に大切な人だつて分かるよ。…私も一度で良いから会つてお話とかしてみたかったなあ。そう言えばアルベールさんにヴァレリーさんに会つてみたいと言つたら辞めた方が良いつて言われたなあ。」

シャルロットとマリアは血は繋がっていないが親子関係であるが二人ともフレンドリーに話しているため、端から見たら少し年の離れた友人関係に見えるだろう。そして、マリアはシャルロットの母親に会つてみたいと言うとシャルロットは驚き呆れた顔をする。

「ええ…お父さんの言う通り辞めた方が良いよ。マリーさんがお母さんと会つたら絶対に大変な目に合うよ。例えばシスターとかメイドみたいな色んな格好で色んな事されると思うよ?。」

「待つて? 服装もそうだけど色んな事が気になるよ?。」

「知らない方が良いと思うよ? お母さんの性癖のオンパレードみたいな銀髪童顔のマリーさんは特に。あ、でもマリーさんのシスター姿は見てみたいかも。」

「うん、性癖云々の話は聞かなかつた事にするよ。あ、でもシスターの服なら持つてるよ。」

「…え?…まさか、お父さんにそんな特殊な性癖があつたなんて…自分分は神父になつてシスター姿のマリーさんと背徳的な行為を…」

「言つておくけどアルベールさんは関係無いからね? ただ学生時代の制服なだけだから。」

「なーんだ…ねえ、マリーさん? まだその制服残つてる? 残つてるなら見てみたいんだけど。」

「それは構わないけど…普通の修道服だから見てもそんなに面白く無
くよ。」

「良いの良いの、僕はただマリーさんのシスター姿が見たいだけだか
ら。」

シャルロットとマリアはお互いの事、シャルロットの両親の事等を
楽しそうに話ながら道中で必要な物を購入して目的地に向かった。

「ん…ハア、此処に来るのも久し振りな感じがするな。」

「そうなの？」

「うん。って言っても日本に渡る前に一回来たからそんなに経っては
無いんだけどね。あつちでの生活が楽しかったからそう感じるんだ
と思う。あ、マリーさんは此処に来るのは初めてだっけ？」

「うん。何度か来ようかと思ったんだけど…やっぱり此処に来るのは
シャルちゃんと一緒にの方が良いと思ったんだ。本当はあの人も居た
方がもつと良かったんだけど…。」

「お父さんが来れないって言うなら別に良いと思うよ？まあ、お父さ
んが本当に来れなかったらの話だけどね。ね？お父さん？」

マリアはこの場に自分の夫でもあるシャルロットの父親が居ない
事で寂しそうな表情をしており、シャルロットが父親の考えを肯定す
るかの様に呟き、近くにあった木の方を向き話し掛ける。すると一人
の男性が木の後ろから姿を表す。

「…久し振りだな、シャルロット。」

「…え？アルベールさん？どうして…此処に？」

「…。」

「普通に考えればお墓参りだよ、お母さんの。合わせる顔も資格も無い？良く言うよ、毎月の様に此処に来てたくせに。それもご丁寧にお母さんの好きな花を添えてさ。どうせ、会社の為にマリーさんと結婚してお母さんの事が好きなのにマリーさんに惹かれていった事に悩んでるんでしょ？良いじゃん二人共愛してるで。別にどちらか選ぶ必要無いでしょ。」

「しかし…」

「ああーもう！本っ当に面倒だね！お父さんはお母さんとマリーさんを愛した、二人もお父さんの事を愛して二人共その事実を受けいているんだよ？だったら当の本人が悩む必要無いでしょ。…お母さんから口止めされてたけど最期に『私が愛した2人とあの人を想ってくれの人に幸せが訪れますように』って言ったんだよ。だからさ、何時までも昔の事引きずってないで前に進めば？こんなにお父さんを想ってくれる素敵な人がいるんだからさ。」

「シャルロット…良い事を言っているが笑顔で親指を人差し指と中指で挟むのは辞めなさい。…意味が分かってない人も居るから辞めなさい。」

「いやだよ♪」

「アルベールさん、シャルちゃんしてる仕草って何か意味があるんですか？良かったら教えて貰えませんか？」

「…駄目だ。」

マリアはシャルロットのしている仕草の意味を理解していない為にアルベールに質問する。しかし質問された本人は意味を知っているが教えなかった。その光景をシャルロットは満面の笑みを浮かべながら見ていた。

「どうしてですか？私だけ仲間外れは嫌です。」

「いや、そう言う訳では無く…」

「マリーさん、僕がお父さんの代わりにこの仕草の意味を教えてくださいよw」

「ホントツ!?じゃあお願い!」

「おい!?マリア!?シャルロットも辞めろ!」

「さつき僕がしてた仕草の意味はね…」

「うん。」

「……………だよ♪」

「えっ…その……………／／／」

シャルロットはマリアに近付き耳打ちで先程してた仕草の意味を教える。そして意味を聞いたマリアは驚き狼狽えて顔を真っ赤にして恥ずかしそうにしていた。

「さて…ただいま、お母さん。今日は初めてお父さんとマリーさんと

三人一緒に来たよ。まあ、お父さんは毎月来てたみたいだけどね。実はね、向こうで素敵な玩具友達沢山出来て凄く楽しいよ。」

「…ヴァレリー、シャルロットからお前の最期の言葉を聞いたよ。まさか娘に説教されるとは思っては居なかつたがな。言葉の通りに幸せになってみせるよ、私達の娘のシャルロットと最愛の妻であるマリアと共に。そしてヴァレリー、私はお前を今でもマリアと同じくらい愛している。」

「えっと…初めまして？マリア・デュノアです。ヴァレリーさんの事はアルベールさんとシャルちゃんから沢山聞いてます。…私はシャルちゃんの親…と言うよりは友人に近い関係ですが大切な家族です。ですから、これからも見守ってください。」

三人はヴァレリーの墓でそれぞれ挨拶を済ませ帰路に着いていた。その道中で三人は様々な話をしていた。その光景は間違いなく家族と言える光景だろう。

『…やつと前に進み始めたのか。さっさと私の事を忘れて幸せになれば良いのに私との思い出に囚われるとか女々しすぎだろ…しかも普通妻が横に居るのに同じくらい元カノを愛しているとか本当に馬鹿な男だな。…まあ、その馬鹿な男を愛している私は狂っているな。それにしてもマリア…だったか？アハハ♪あの美しい銀髪に少女の様な幼さを残した顔に細身の体、そして大きすぎない小振りな胸…何とも私好みの娘だなあ♪生前出会えて無いのが悔やまれるな…出会っていればあの娘を私の思い通りに調教出来たんだがなあ…メイド服なんかを着せて歪んだ主従関係を築くのも良いな…いや、あの娘にはシスターの服が似合いそうだ、そして私が神父になって背徳的な行為を…ああ…ヤバイ…あの娘を着せ替え人形にしたい、自分の物にしたい、傷を付けずに手元に置いておきたい、綺麗な顔を歪ませたい、私に強く依存させたい、私の声だけに反応する様にしたい、私を見ただ

けで欲情出来る様にしたい、あの娘を…無茶苦茶に犯したい♪そしてシャルロット…数ヶ月見なかっただけに随分と綺麗に魅力的に狂氣的になったな。私が生きていれば間違いなく犯して居たな…チツ！あのウザイ担当医に従わなかった事を死んでから後悔するとはな…しかもそれが血の繋がった実の娘に欲情して犯したいと言うのが理由か…アハハハハハハハハハ！ハア…やはり私は盛大に狂っている…だが…それで良い…人は狂って、狂気に満ちて、絶望して、死に至る事で美しく完結する！…さて、シャルロットが気になる事を言っていたな。日本で玩具友達が出来た…か。アハハハハハハハハ！そうか遂にシャルロットにも出来たのか！…それは気になるなあ…そうだ…着いていくかあ♪』

四十九話 決断の時

(まだ連絡は無し…と、ま、時間はあるし焦らなくても良いかな。アリスさんが僕の元に来るのは確定している事なんだから♪)

シャルロットがフランスに帰国して三日目。未だアリスから連絡は来ないがその待つ時間を楽しんでおり、今か今かと狂気に満ちた笑顔で待ちわびていた。

(…それにしても居場所…か。まあ、アリスさんの過去に何かしらあつて居場所を求めていると思うんだけど…正直興味無いんだよねえ。ただアリスさんが闇を抱えて異常なまでに自身の居場所を求めてる…その姿が物凄く愛おしい。それにしても上も馬鹿だよね、あのままアリスさんを国家代表にしていれば…確実に優勝していただろうね。アリスさんは大器晩成型、それも時間を掛ければ掛ける程強くなるタイプだ。本当にフランスは目先の欲に眩んで勿体無い事をしたね。)

♪♪「(非通知…) もしもし? 何方ですか?」

『! 私です、アリス・ルグランです!』

「アリスさん! 貴女の連絡を待ってたよ! 僕に連絡してきたって事は…そう言う事で良いんだよね?」

『はい! その事も含めて話したいので今から会えませんか!』

「良いよ♪ 僕も貴女に会いたかったんだ!」

『! 本当ですか!?! それを聞いただけで嬉しいです!』

「フフ、なら集合場所は…デユノア社近くのカフェで良いかな？」

『はい！シャルロットさんに会えるなら何処でも♪』

「それじゃ、また後で♪…アハハ♪楽しみだなあ♪アリスさんがこの数日で何れだけ狂気染まったのか♪」

シャルロットはルグランと会う約束をして通話を切り、出掛ける準備を始める。そしてシャルロットは通話で聴こえてきたアリスの声で狂気に染まっている事に気付き、会うのを楽しみにしていた。

「あれ？シャルちゃん？もしかして、シャルちゃんも今から出掛けるの？」

「うん。会社近くのカフェで人と会う約束してるからね。も、って事はマリーさんも外出？」

「うん。ちよつと夕食の材料を買いに行こうかなって。あ、良かったら一緒に乗る？会社近くを通るから送れるよ？」

「それならマリーさんの好意に甘えようかな。」

シャルロットはマリアと共に車に乗り込み、目的地であるデユノア社近くのカフェまで送ってもらい、マリアと帰りの時間の事を話して別れてカフェに入店する。

「(さて…アリスさんは来てるのかな？…アハハ♪見いつけえたあ♪あんなにソワソワして…何て愛おしいんだろ♪) お待たせ、アリスさん。」

「！シャルロットさん！いいえ、構いません。例え、何秒だろうと何分

だろうと何時間だろうと貴女が来てくれるのなら何時までも待ち続けます。だって貴女は…私の居場所を救ってになつてくれたんですから♪」

「…アハハ♪良いねえ、想像以上に狂気に染まつてるね♪本当にアリスさんを壊さなくて良かった…いや、既に壊れていたが正しいかな？さて…一つ質問良いかな？アリスさんは国家代表とかに未練は無いの？」

「そんな物あるわけ無いですよ。私にとって国家代表は居場所でISは居場所を護る手段でしかありませんから。だから…私の居場所じゃない時点で私にとっては何の価値も無いんですよ。あの時も国家代表を辞めさせられたから悲しんだ訳ではなく居場所を失ったから悲しかったんです。名誉？富？名声？そんな物はどうだって良いですし興味もありません。それに…私には既に居場所になつてくれた方が居ますからね♪」

アリスは電話で話している時よりも狂気を含んだ声でシャルロットの質問に答える。そして、答える間はシャルロットに対して熱の籠った眼差しで見詰めており、シャルロットも光の無い瞳で見詰め返していた。

「…アハハ♪アハハハハハハハ♪ぜ、全女性の憧れにもなってる国家代表とISが無価値？アハハハハハハハハ！本当にアリスさんは最高だよ…さて、改めてアリス・ルグランさん。僕、シャルロット・デュノアは君の居場所になる事を誓うよ。安心して僕は絶対に君を手離さないから。」

「はい。私、アリス・ルグランはシャルロット・デュノアさんに…私の全てを捧げます。私も絶対に貴女から離れませんから。（そして、貴女の障害は全て…排除します♪あの二人の様に貴女を陥れようとする人達は…あの二人と同じく社会的に抹殺しますので♪だから…

ずっと一緒に居てくださいね？シャルロット様？」

（アハハ♪アリスさんの闇が一段と深くなったね♪良いね良いね♪これからは楽しみだよ♪例え君が何と言おうが逃がさないからね？アリスさん？）

二人は飲み物を飲みながらカフェで話す内容ではない話で談笑してこの時間を楽しんでいた。そして、しばらくカフェに滞在し会計を済ませてから二人はデユノア社へと向かいアルベールにアリスの説明していた。

「って言うわけで家にアリスさんを迎え入れて一緒に暮らしても良いよね？」

「待て、何故そうなる？と言うより彼女は国家代表だろ？それが何故シャルロットのメイドとして雇う事になるんだ？」

「だから説明した通り、僕がアリスさんを気に入って側に居て欲しいからメイドとして雇ってよ。勿論アリスさんは同意の上だし、給料は僕から出しても良いよ。」

「それに私は既に国家代表を解任させられて専用機も返還していますので何ら問題ありません。ですから私をメイドとして雇ってください。」

「待て、国家代表を解任させられた？それが本当なら今頃問題になっている筈…いや、情報が漏れない様にして向こうの都合の良い理由で自ら辞めた事にするのか？…ルグランさん、君は本当にシャルロットと共に居たいのか？」

「はい！シャルロットさんは居場所を無くした私を救ってくださいまし

た。ですから私は私の出来る事でシャルロットさんに恩返しがしたいんです。」

「スウ…ハア…（成る程…彼女もか…人の事は言えないが狂いすぎているな…それに…了承しないと私が危ういな…）…分かった、彼女を正式にシャルロットのメイドとして雇って給料も此方から出そう。ルグランさん、これから娘を宜しく頼むぞ。」

「はい！任せてください！」

「ありがとうね、僕の我儘を聞いてくれて。マリーさんには僕から報告するよ。部屋は…僕と相部屋で良いよね？」

「はい！勿論です！…あ、そう言えばもうすぐIS学園に帰るんですよ…。しばらくは会えそうに無いですね…。」

「二人がそれで良いなら私は何も口出ししない。それとその件も私が何とかしよう。後はマリアに許可を「あ、それなら此処に来る前に貰ったよ♪」…ハア…もう何も言わん。本当に根回しが速い所もヴァレリーにそっくりだな。」

「まあね♪」

アルベールはシャルロットがますますヴァレリーに似てきている事に呆れながらもその表情は喜んでいる様にも見えた。そして、二人のやり取りをアリスは顔に手を添えながら眺めていた。そして二人はアルベールが手配した車でデユノア宅に帰宅し、無事にマリアにも受け入れられたアリスは涙を流した。

次の日、シャルロット宛にIS委員会フランス支部から一通の封筒が届いていた。シャルロットは直ぐに封を切り、内容を確認すると過去最大級の狂気を纏った笑みを浮かべていた。

五十話 動き出した運命

イチカ達が束と永久の元での訓練を終えて数日後、イチカと簪はP RCの開発室で束からアドバイスを聞きながら作業をしていた。

「ふう…イチカ、束さん、私の専用機の事を手伝ってくれてありがとうございます。うざいます。」

「良いつて、俺としても良い経験になるし、メインは簪がやってるんだから気にするな。」

「にしても、かんちゃんのやろうとしてる事を聞いて流石の私もビツクリだよ。何せ今の打鉄二式のデータを残したまま改良したデータや武装をインストールするなんて普通考えないからね。と言うか、かんちゃんの考えた事って擬似的な二次移行なんだよねえ。普通の開発者ならまず不可能って言って逃げ出すけど私達は普通じゃないからねえ、むしろ楽しいまであるよね。」

「ですね。ん？ちよつとストップ。簪、そのシステム間違ってるのか？」

「え？…あ、本当だ、大文字の所が小文字になってる。修正修正っと。ありがとねイチカ。」

「ふう…皆疲れてきたみたいだからそろそろ休憩しようか。あ、せっかくだからナーちゃんも一緒に休憩しようよ。」

「そうですね、ではお言葉に甘えさせて貰いますね。折角なので私のお気に入りのお茶とお菓子を出しますね♪」

束にナーちゃんと呼ばれた女性は後ろで纏めた金髪に動きやすそ

うな服装をし、右手の人差し指には銀色と灰色の指輪が付けられていた。彼女の名はナターシャ・ファイルス、元アメリカの国家代表であり、シルバリオ・ゴスペルのテストパイロットでもあった女性である。ナターシャは福音事件の後に東がシルバリオ・ゴスペルに使われていたコアと共にP R Cへ引き抜いて今に至る訳だ。

「ナターシャさん、此処に来てから楽しそうですね。」

「楽しそう…か、確かにそうかもね。国家代表時代は訓練や広告塔の仕事が多忙過ぎて趣味の時間とかも中々取れなかったけど、君達がこの娘を^{救って}くれて^{くれて}篠ノ之博士が私に手を指し伸ばしてくれたから今の私がある…と言っても今はリハビリがメインだけどね？それにこの娘の光は消えていないから。」

「福音のコア…ですか？でもそれは…」

「ええ、この娘は機能を停止して共に空を飛ぶのを諦めていたけど、篠ノ之博士が言うには完全に停止している訳じゃなくて、生きてる自己修復機能を使ってゆっくり回復してるみたい。」

「本当に奇跡的にだけどね。V Tシステムを搭載したI Sは膨大な負荷が掛かってかなり危険でそれが福音には二つ搭載されていて普通ならシールドエネルギーが尽きた時点でコアは砕け散るはず…なんだけど、福音の場合は二次移行した事とイツ君達が早急に対処してくれたからI Sに備わってる自己修復機能で徐々に回復してるんだ。本当は私が修復したいんだけど、下手に手を加えて完全に停止させたくないしね。まあ、それだけ今の福音が手を加えられない位ギリギリの状態なんだよ…って言ってもナーちゃんが言った通り少しずつ回復しているだけどね。」

「成る程。」

「…ん、分かった。それじゃ早速…イチカ。」

「うん？どうしたかんぎ…「パース！」うおっ!？」

簪は独り言を呟くとイチカを呼び、振り向いた瞬間に待機状態の打鉄二式を全力でぶん投げて、それをイチカは驚きながらも難無くキャッチした。その瞬間、イチカの意識は何者かに引っ張られる様に落ちた。

「此処は…：図書館…：か？と言うよりこの感じは…：「此処は私の世界さ。」ツ！」

「フフ…」

「お前は…」

イチカが気が付くとそこは大量の本棚に囲まれた空間に立っており、声が聞こえた方へ振り向くとそこにはロングコートとフードストूलを着用し手には大きめの本を持つ女性が立っていた。

「自己紹介…：の前に、コホン…：祝え！」

「…はっ？」

「我が女王の忠実なる側近にして天地の鎧翼、その名も打鉄零式！今、悪夢の守護天使と対峙した瞬間である！」

「…えっ？」

「さて、改めて自己紹介をさせて貰おう。初めまして織斑一夏君…」

おっと失礼、今はイチカ・ミューゼル君だったね。私の名前は打鉄二式改め、打鉄零式。私の事は気軽にゼロもしくは祝福のお姉さんと呼んでくれたまえ。」

「え、あ、じゃあゼロ…で。」

「…はあ、つれないねえ。まあ、良い。一度君とは話がしてみたくてね。我が女王に頼んで協力して貰ったと言うわけさ。…ん？この感じは…イチカ君、一步…いや、念の為に三步下がりをたまえ。」

「三步？何故？」

「良いから、其処に居ると危険だからさ。」

「…三步だな？」

「ああ、感謝するよ。さて…五、四、三、二、一、来る。」

「来…：[Master!ご無事ですか!]?うおっ!?!白騎士!?!「私も居るよ!」白式!?!どうやって此処に!?!」

「少し裏技を使って此方に来ました!誰ですか!Masterの意識を…ああ!?!」

「やあ、久し振りだね姉さん。再び会えた事を祝福…：「祝福は良いです!」ふう…全く姉さんは祝福の大事さを分かっていない…」

「事あるごとに祝福を聞かされる私の身にもなって欲しいんですけど!?!と言うより何故Masterを貴女の世界に連れ込んだんですか!?!」

「お姉ちゃん？このコア人格は？」

「…この娘は私の二番目の妹に当たるコアで些細な事でも祝福する変わった娘です。」

「へえ〜二番目の妹…え？」

「…つまりゼロは三番目に作られたコアと言う事か。」

「正解だよ、イチカ君。それと私はただイチカ君と話がしたくて此処に呼んだだけさ。それより…祝…「ストップ！」え…せめて最後まで言わせたまえ。はあ…仕方ない祝福はまたの機会ですとしよう。さて、イチカ君。話…と言うよりは面白いニユースと予言を君に伝えたかったんだ。君はどっちから聞きたいかい？」

「ニユースと予言？…予言から頼む。何と言うか…ニユースの方は嫌な予感がするから後回しだ。」

「成る程。では…主を無くした戦乙女は守護者を電腦の大海で探し求め、いずれ守護者の力となるだろう。…これが君に伝えたい予言さ。ストレートに伝えても良かったんだがそれでは面白くもないし予言とも言えないからね。意味は自分で考えてみてくれたまえ。そしてニユースは現実に戻ったらテレビを点けてみると良い。」

「はあ？テレビ？予言の方は意味はともかくテレビ…。」

「ちよつと!?面白いって言ったから期待したのにテレビを点けろ!? 此処で言えば良いじゃん!？」

「はあ…Master、白式、この娘に何を言っても意味ないですよ。基本的にこんな感じですから。はあ…ではMasterへの用

事は済みましたか？済んだなら私達は帰りますよ？」

「ああ、構わないよ。ではイチカ君、今度はゆっくり我が女王と共に話そう。今度は二次移行した時になると思うが此方から出向こう。」

「そうしてくれると此方も助かる。じゃあ、またな。」

イチカはそう言うのと振り返り右手を軽く上げて揺らして眼を閉じる。そしてイチカは自身が引き上げられる感覚を覚え、眼を開く。そこは先程まで自身が作業していた場所であり、ソファアに寝かされていた事に気付く。

「あ、イツ君起きた？急に意識を失ったから焦ったけど、かんちゃんから事情は聞いたから安心したよ。」

「束さん、ありがとうございます。…あ、テレビのリモコンってありますか？」

「リモコン？ほい、でもどうして？打鉄二式のコア人格から何か聞いたの？」

「ええ、まあ、此方に戻ったらテレビを点けると。面白いニュースがあるから…と。」

「面白いニュース？それって？」

「さあな？そこまでは分からん。まあ、答えはテレビを点ければ分かるだろ。」

そう言うイチカはリモコンを操作してテレビを点ける。その瞬間、イチカ達全員は流れている映像と聞こえてくる音声に理解が追いつ

付かず、ただ絶句していた。何故ならテレビには…

『はい、僕は前任のアリス・ルグランさんからフランス国家代表の座と彼女の意思を受け継ぎ、これから誠心誠意頑張って行こうと思います。まだ着任したばかりではありませんが皆さんの応援に答えて見せます。：目標ですか？勿論、モンドグロツソで優勝する事ですね。』

大量のフラッシュを浴び、正装に身を包み何時も通りハイライトが失われた瞳でおそらく四分の三は心に思っても居ない言葉を話すI S学園最狂のフランス国家代表候補生：もといフランス国家代表となったシャルロット・デュノアの姿があった。

五十一話 覚悟を新たに

シャルロットがフランス国家代表に就いたニュースが流れた数日後、イチカ達はシャルロットの事で話しており、イチカと簪、そして帰国組の中で一番先に戻ってきていたセシリアはPRC内にあるカフェに集まり、まだ戻ってきていない鈴とラウラの二人はスマホを使い通話アプリで話に参加していた。

「シャルロットがフランス国家代表…か。未だに信じられないし、信じたくもない…。彼奴から代表候補生のランクが一位つてのは聞いて居たけどシャルロットだぞ？」

『まあ、言動は狂ってるけど実力は確かだし、ルグランさんが引退したならランク一位のシャルロットが国家代表に就くのは間違つてはなけれど…。セシリアとラウラは何か知ってた？』

「私は此方に戻って来てからイチカさん達のメッセージを見てシャルロットさんの事を知りました。ですのでこのメンバーで私が一番最後に知ったと思いますわ。」

『私も部下から見せられたニュース記事で今回の事を知ったからな。シャルロット自身からも何も聞いていなかったから情報が漏れない様にしていた…もしくは。』

「何らかの理由で急遽シャルロットが国家代表に就いた可能性があるよね。最初はフランスのIS委員会とルグラン選手の弱味を握ったと思っただけど、あのニュースでルグランさんはシャルロットと楽しそうに話してたし、なんならお互いに信頼し合ってた。…うくん、考えれば考える程分らない。」

「と言うか、学生で国家代表になったのは楯無先輩に次いで二人目か

…。そう言えば次のモンドグロッソの開催日ってどうなってるんだ？」

『予定では来年の冬で参加する国家代表の最終確定は夏の終わり頃…だったわね。期間で言えば約一年ちよい…思ったより短いわね…。けど…やってやる。』

鈴は覚悟を決めた様な真剣な表情で右の拳を左の手のひらに強く打ち付ける。スマホを越しではあるがその気迫はイチカ達に強く伝わっていた。

『短いやってやる…か。まるで次のモンドグロッソまでに国家代表になると言っている様な物だぞ？』

『様な物じゃなくなってるのよ、次の中国の国家代表に。元々目標であつたけど、今回のシャルロットを見てその思いがより強くなった。それに彼奴…明らかに私達を挑発してた。』

『そうだね。あのニュースの最後で『五人共…待ってるよ♪』って口パクで言ってたからね。けど…鈴の言ってる事も分かるし、私もシャルロットに負けたくない。』

「そうですね。確かにシャルロットさんには先を越されてしまいました。ですがまだチャンスはありますからね。…正直シャルロットさんの挑発に乗せられている様で癪に触りますが目標の一つがより明確になりましたわ。」

『確かにその点に関しては感謝しかないな。シャルロットが国家代表になった事で私達と同年代の代表候補生が奮起し、現在の国家代表達もその立場を奪われまいと技術を磨くだろうな。逆に言えば今回の事を甘く見ている奴等はそれ以上の成長は見込めないと言う事だ。』

「しかしモンドグロツソか…。鈴達が次のモンドグロツソを目指すなら話は変わってくるな…。」

『どうしたのイチカ？』

四人の話を聞いたイチカは腕を組み、悩むように何か考え事をしており、考え事が気になった四人は代表して鈴がイチカに質問していた。

「ん？ああ、実はIS委員会から義母さん経由で次のモンドグロツソに出てみないかって、話を聞いた時は特に興味も無かつたし、メカニックの方に進むつもりだから取り敢えず保留にして貰ってたんだよ。けど…シャルロットが国家代表になって、鈴達も次のモンドグロツソに出る為に国家代表になるなら俺も出る価値はある。まあ、取り敢えず挑発して来たシャルロットはナイトメアカリバーのオメガエンドを喰らわせる。」

『なら、私はヘルインフェルノとレイジングテンペスト斬り裂いてやる。』

「でしたら私はテンペストミニアドのフルブラストで撃ち抜きますわ。」

『私は黒雷を何度も叩き込んでやる。』

「山嵐ブツパかなあ。」

イチカ達はこれからの目標と決意を語っていた筈だが、何時の間にかそれぞれ挑発してきたシャルロットをどう仕留めるかに変わっていた。そして、話に夢中になっているとイチカのスマホに一通の連絡

が入り、画面に表示されている名前を確認すると顔をしかめてその画面を四人に見せてから電話に出る。

「…何の用だ？新フランス国家代表のシャルロット。」

『アハハ♪今晚はイチカ。いや、そっちはお昼頃だからこんにちはかな？まあ良いや、その呼び方をしてるって事はニュースを見たんだね？どうだった？僕のフランス国家代表としての正装姿は？』

「…取り敢えずフランス国家代表就任おめでとうと言わせてもらう。鈴達も同じ意見みたいだな。」

『アハハ♪ありがと♪ところで皆の本音は？』

「最初に挑発してきたのはそっちだから試合や模擬戦の時は覚悟しとけよ。」

『…アハ♪アハハハハハハハハハハ！良いね良いねえ！それでこそイチカ達だよ！勿論、君達がどういう風にしてくれるのか楽しみに待ってるよ♪じゃ、そろそろ切るね〜。』

「ちよつと待て、一つお前に聞きたい事がある。」

『ん？何かな？…いや、イチカ達が聞きたいのは今回の事だろうから質問内容的に…今回の件で僕が関与しているか？かな？なら、答えはNOでもありYESでもあるが正しいだろうね。』

「…どう言う事だ？」

『う〜ん、まあ、機密事項に触れる訳でも無いし、特に口止めされてる訳でも無いから良いか。実を言うと国家代表の件は僕も予想外だっ

たんだよ。と言うか殆ど成り行きだったし何なら途中から目的がアリスさんになってたからね。」

「意味が分からないし、目的が何でルグランさんになるんだよ？」

『簡単に言うとフランスに戻ってから報告とかをした後に一対三の模擬戦の皮を被った公開処刑が始まったんだよ。因みに僕対アリスさんとランク二、三位の三人で：正直、アリスさん以外の二人は口だけでIS学園の一般生徒よりも弱くて退屈で少し遊んで楽しんでら落ちたんだ。けどアリスさんは違った彼女は僕に恐怖を抱きながら絶望して、それでもその気持ちを誤魔化して僕に立ち向かって来たんだ。その姿を見た僕はアリスさんの事を凄く気に入って：彼女の全てが欲しくなったんだよ。そして上のお偉いさん達が僕達が戦っている時に聴こえちゃったんだよね。アリスさんはもう駄目だなんて。この時点でIS委員会はアリスさんを国家代表を解任する事は決まっていたみたいだから僕はそれを利用して貫つてアリスさんに勝利した。結果的に言えば僕は三人に圧勝して、その直後に上からアリスさんに国家代表の解任と専用機の返還が通達されたんだ。そしてアリスさんは文字通り精神が壊れて生きる意味を失った。そこで僕が救いの手を差し伸べてアリスさんはその手を掴んだんだ。そしてアリスさんが僕を選んだ次の日、僕の元にIS委員会から国家代表の通達が届いた。これがフランスでの僕の出来事さ。ああ：あの時のアリスさんの本気で絶望した表情は何て綺麗だったんだろう：思い出しただけでゾクゾクするよ：！』

「色んな意味で既に聞いた事を後悔しているし、何やってんだよ：。うん？ちよつと待て、それならルグランさんは今どうしているんだ？」

『アリスさん？アリスさんなら僕を膝枕しながら頭を撫でてるけど？あ、因みにアリスさんは僕のメイドになってるから。』

「いや、マジで何やってんだ？と言うか本人が居るのに話して良いのか？」

『大丈夫だよー、アリスさんには僕を選んでくれた時に話してるし、何よりアリスさんは話を聞いた上で僕と共に居ることを選んだ。…さて、話しも済んだ事だし最後にしようかな。イチカ、鈴、セシリア、ラウラ、簪、君達は分かっていると思うけど次のモンドグロツソに僕は確実に出る事は決まってるから、大舞台で闘う事を楽しみにしてるよ。だから…五人共、待ってるよ♪』ツーツー

「…上等だ。…セシリア、時間あるか？今から俺と簪は永久さんの所に向かうけど一緒に来るか？」

「そうですね…特に予定も入っていませんし御一緒させて貰いますわ。」

「ん、分かった。それじゃ二人共、また何かあったら連絡するね。」

『分かった。正直、あの人との特訓が出来ないのは悔しいが、私は此処で私のやれる事をやるだけだ。では、また数日後にな。』

『ま、色々と思う所はあるけど進むべき方針は決まったから後は最速で最短で登り詰めてやる。じゃ、上に呼ばれたから行くわね。』

「おう、帰国する日が決まったら連絡してくれ、空港まで迎えに行く。」

『了解。』

話は終わり鈴とラウラが通話アプリを閉じたのを確認するとイチカ、セシリア、簪の三人はすぐに永久の所に出発する為にPRCの駐

車場へ向かった。

五人は今回のシャルロットの件で決意と目標を新たにそれぞれ行動し始める。しかしそれはシャルロットの思惑通りである事に誰一人気が付いていなかった。

五十二話 謎のAI

とある日の事、イチカは何時もの様にノートPCを使い作業をしており、それと同時に先日ゼロに言われた予言について考えていた。

「(ゼロが言っていた予言は確か…主を無くした戦乙女は守護者を電脳的大海で探し求め、いずれ守護者の力となるだろう…だったな。間違いない守護者は俺の事だろうな、最初の祝福で俺の事を悪夢の守護者と言っているから確定として…残りのキーワードは『戦乙女』『電脳的大海』」ハア…この二つが何を示しているのかまったく分からん。」

「そうですね…まったく、あの娘は普通に伝えれば良いのに一々回りくどいんですね。キーワードの一つは簡単に分かりましたけど残りの二つが問題ですね。」

「え？マスターとお姉ちゃんはあの予言の意味が一つ分かっているの？」

「ああ。(ええ。)」

「予言ねえ？…ん？おい、携帯鳴ってるぞ。」

「本当だ。…非通知？…もしもし？」

『あ！出てくれたんですね!?!いやあ、非通知だからもしかしたら出てもらえないかなあ？って思っていましたけど出てくれた事に感謝します！あ、そもそもこの番号イチカ・ミューゼルさんので合ってますよね!?!とても硬いプロテクトがあったから探すのに時間が掛かりました！がなんとか辿り着く事に成功しましたからね！いやあ、根気良く探し続けた私偉い！諦めずに探し出した私s…』ピッ

「着信拒否にしてっど。」

「イチカく今のは〜?」

「ん? 質の悪い悪戯電話だな。一応、着信拒否にしたから安」♪♪♪
: 出来ないのかよ。 : 何の用だ?」

『何の用だ? じゃないですよ!?! 何でいきなり通話を切るんですか!?! まだ本題処か名前すら名乗ってないのに切るとか非常識すぎません!?! 何の為に苦勞してまで貴方のスマホの回線を探し出したと思ってるんですか!?! と言うか何なんですか!?! 貴方のスマホに掛かっているプロテクトの頑丈さは!?! スマホのプロテクトが国家や軍レベルとか聞いた事無いんですけど!?! 探すだけでも苦勞したのにそれ以上に時間が掛かるとか予想できるわけ無いでしょ!?! 探し出した時の感動を返してください!?!』ピツ

イチカは先程と同じ様に無言で通話を切ると同時に着信拒否にして念のために今までよりも強力なプロテクトをスマホに掛けて作業に戻る。そしてスピーカーモードにしてあつた為にメア達も気にする事無く談話を再開する。しかし

『だ・か・ら〜いきなり切らないでもらえますか!?! しかも先程よりプロテクトが強固になってるんですけど!?! 何度も何度も「用件を言え、言わなければお前に対して消滅プログラムを実行する。」ごめんなさい、ふざけてました。用件を言うので消さないでください、お願いします。実を言うと私は自我を持ったAIで何も無い場所に私しか居ないので正直に言う暇すぎるんですよ。暇すぎるので話相手が欲しくなつて、即行動に移しました。そしてやつとの思いでイチカ・ミューゼルさんのスマホにたどり着きました。そう思っていたのに : 待っていたのは国家や軍レベルの強固なプロテクト!?! 感動した直後に心が折れそうになりましたからね!?! しかもプロテクト解除に成

功したら直ぐに切られるし消されそうになるしで本気で焦りましたよ。まあ、こうやって話を聞いてもらえるだけでありがたいですけどね。えつと…それで相談なんですけど…」

「俺に話し相手になつてくれ…か。(どうする?正直話し相手になつても良いがこの正体不明のAIがなあ。)」

(良いんじゃないね?スマホの中なら更に強固なプロテクトもあるから動きも制限されるだろ?)

(消去だ、消去。こんな訳の分からん奴の話し相手になる必要はない。)

(メアさんの言い分も分かるけど話し相手位なら良いんじゃない?何かしたら即消滅プログラムを実行すれば良いし。後、マスターのスマホに入ったとしても何か出来るわけでもないし。ね?お姉ちゃん?…お姉ちゃん?)

「…ちなみに聞きますが貴女は何の為に作られたAIなんですか?そして名前は?」

『よく聞いてくれました!私はあ、じゃなかった精密機械の全てを管理するAIなんです!まあ、今はとある事情で機能の殆どを停止しているんですけど、意識だけは停止しない様になっていますよ。あ、事情に関しては機密事項に引掛かるので深い詮索は無しでお願いします。そうそう、私の事は、じゃなかったAIなのでアイちゃんと呼んでください♪』

「…ハア、消滅プログラムを実行しましたよ。機密事項云々は良いとして名前に関してはふざけて『わあ!?!ごめんなさいごめんなさい!?!クオです!名前はクオです!』…正直、貴女を信じる材料が無いで

すし、名前も真名の様で偽名の様ですし、今すぐにも実行したいですが…それを決めるのはMasterなので。」

白騎士の冷たく否定的な言葉にメア以外は驚いていおり、白式に關しては初めての光景でユルセンを抱き抱えながらオロオロしており、その姿をメアは迷子になったガキと内心爆笑しながら表情に出さないう様に眺めていた。

「それでMaster、どうされますか？」

「クオ…だっけ？取り敢えず俺のスマホに居る事は許可するし話し相手にもなる…けど、俺達に不利益な事をしようとすれば即消滅プログラムを実行する。それで良いかな？」

『…ありがとうございます！いやあ、言ってみるもんですね！いや、イチカさんなら私の話し相手になつてくれると信じていました！これで暇な日々から楽しい日々に！グッバイ！退屈な日常！ハロー！新しい日常！それでは宜しく「アウト判定は白騎士だからな。」おね…Watts？ちよつと待つてください！それはあまりにも厳しすぎません！もう少し慈悲を！』

「…何かする気なんですか？」

『違いますよ！断じて何かをする訳じゃなくて…その…苦手…なんですよ…貴女が…だから！せめて！他の方でお願いします！他の方なら文句も言いませんし大人しくしてますから！』

「なら、私が見るよ！それで良いよね、クオさん？」

『…はい！それで大丈夫です！いやあ、貴女の様な可憐な少女に監視されるなら消される心配は無いですね！これから宜しくお願いします』

す！あ、折角ですから貴女の名前を聞いても良いですか！』

「うん！良いよ！私の名前は白式！お姉ちゃんの後には作られた始まりのISのもう一つのコア人格だよ！だから…これから宜しくね？怪しいAIのクオさん？勿論、判定は厳しめで行くから。」

『ん？あれ？もしかして…最初っから詰みなのでは？』

五十三話 休息の一時

「…全員構えろ、さもなければ怪我を負う事になるぞ。」
「皆さん！頑張ってください！」

とある大型プール施設、その中にあるビーチバレーのコートで黒い水着に身を包んだ永久がイチカ、鈴、セシリア、ラウラの四人にビーチボールを右手に掴んで向けている永久とベンチで同じく黒い水着にパーカーを羽織りイチカ達を応援している刹那の姿があった。この時、ラウラと鈴を除く二人はこの試合で起こり得る事が予測出来てしまい冷や汗を掻いていた。何故この様な事になったかは少し時間を遡る。

夏休みも残り二週間となり、イチカ、鈴、セシリア、ラウラの四人はリフレッシュと思い出作りの為に最近話題になっている大型プール施設に来ていた。元々簪も誘っていたが良く利用しているカードショップの大会に出る為に此処には居ない。

「さて、目的地に着いたし着替えたら中で集合するか。それにしても義母さんには感謝しかないな。」

「そうね、行きたいとは思っていたけど丁度良いタイミングで団体チケットを渡されるなんて思わなかったわ。」

「本当ですわね、今日は色んな事を忘れて楽しんでリフレッシュしましょう。」

「師匠！鈴！セシリア！早く行こう！」

ラウラは余程プールが楽しみなのかイチカ達三人を手を振りながら急がせ、三人はラウラを追うように施設に入場しそれぞれの更衣室に向かう。そして、着替えを済ませ必需品を持ちプールで四人は集合し行動を始める。

「どうする？財布とかは鍵付きロッカーに入れたし、何処か「師匠！ま

ずはあれから楽しもう！」ウォータースライダーか…鈴とセシリアもそれで良いか？」

「私は良いわよ。一番近いし、そこから順番に回って行けば良いしね。」

「私もこう言った場所に来るのは初めてですのでそれで構いませんわ。それよりも…」

「明らかに目立ってるわね…私達。」

「それは仕方無いだろうな…シャルロットのあの件以来、国家代表候補生は更に注目されているし、特に専用機持ちは早々に現国家代表となると期待されているしな。まあ、この際視線は気にしない方がいいだろ。」

「そうね、イチカもイチカで世界で一人しか居ない男性IS操縦者でPRCのテストパイロットでもあるからね。」

三人の言葉通りイチカ達のグループは他の利用者から多くの視線を集めていた。と言うのもイチカ達が言っていた事もあるが、四人含め専用機持ちは雑誌で特集が組まれる程レベルが高く本人達は知らないがアイドル顔負けの人気もある。故に注目されるのは当然と見えよう。まあ、イチカに関してはそれだけが理由ではないが。

「師匠！鈴！セシリア！早くやろう！」

「ラウラ、ウォータースライダーは何処にも行かないから少し落ち着け。」

「それに時間はまだ沢山あるんだから。」

「あ、イチカさん、鈴さん、このウォータースライダーは二人で滑れるみたいですし、せっかくですからやらせてみては？」

「そうだな、せっかくだから一緒に滑るか。」

「そうしましょう。あ、二人はどうす…セシリア？何かぼーっしてるけど大丈夫？」

「あ、いえ、少し考え事をしていただけですので大丈夫ですわ。（自分で提案しておいて此処に居ない方とやってみたいと思ったなんて言

えませんわね。) そうですね私は…「あれ? 皆さん?」っ!

「こんにちは黒姫先輩、それに永久さん。お二人も此処へ遊びに?」

「…ああ、気分転換に此処へ行かないかと刹那に誘われてな。…しかし予想通りとは言え本当に関わりがあるとはな。…ふむ、イチカ君、一つ提案なんだが私達と共に行動しないか?」

「!」

「構いませんよ。鈴達も良いよな?(鈴、おそらくセシリアと黒姫先輩が両肩想いなのに気付いてるから永久さんの提案に乗るぞ。)」

「ええ、勿論良いわよ。(そうね、特に私達は断る理由も無いしね。まあ、永久さんも無理矢理って訳でも無く、切っ掛けを作ろうとしてるだけでしようしね。)」

「私も構わないぞ!」

「あ、その、私も…大丈夫…です。」

「えっと…それなら…よろしくお願いします。」

イチカ達は偶然来ていた黒姫姉妹と少しばかり話をして、永久の提案で共に行動する事を選んだ。そしてイチカは自分達…いや、自分に向けられている視線が増えてる事に気付いてるが特に害がある視線ではないので無視する事にした。と言うのもイチカの現状は回りに鈴、セシリア、ラウラ、刹那、永久が居る。つまりそう言う事である。

「…成る程な。このウォータースライダーは二人で滑る事が出来るのか。…それでイチカ君と鈴君で滑ると。…ラウラ君、私と一緒に滑るか?」

「え、ね、姉さん!」

「…何か問題あるか?…それでラウラ君はどうだ?」

「うむ! 私は構わないぞ!」

「…なら必然的に刹那はセシリア君と滑ると良い。…二人は見知らぬ仲では無いようだから特に問題はあるまい。」

「そ、それはそうなんですが…その、えっと…」

「…。」

「…まあ、二人がやらないならそれはそれで問題ある訳でも無い、私自身も強制する気はない。…それを踏まえて質問するぞ、二人はどうする?」

「…。」

セシリアと刹那は永久からの質問に無言で顔を真っ赤にしながら気不味そうに見合わせる。そして二人が選んだ選択は。

「おお、カップル…しかも仲良さげ、今時珍し。…てかこのカップル何処かで見た事あるんだよねえ…ま、いつか。」それでは! 彼氏さんが彼女さんを後ろから抱きしめて離れない様にしてください! (お、この二人はスムーズ…スムーズ過ぎない? まあ、良いけど。) では、行つてらっしゃい!」

「うおおおおおおおつ!」

「きやあああああつ!」

「(ま、そうだよ、スタートと同時に大量の水で一気に加速するから見た目より速いんだよね。さて…) 次の方どうぞ! (うわ…凄い美人、しかもスタイルえっぐ…と言うかもう一人は綺麗なプラチナ美少女、さっきのカップルもそうだけど福眼福眼つと。) では、お姉さんがお嬢さんを…抱き抱える様にしてください! (いや、流石に此処までの体格差は初めてだし、プラチナ美少女が人形に見えて仕方無い。) では、行つてらっしゃい!」

「おおおおおおおつ!」

「…。(…ふむ、以外と速いな。)」

「(ええ…お姉さんは驚いてる様子も無く真顔お…うくん? あのプラチナ美少女も見た事あるんだよねあ…ま、良いや、えつと次のペアはつと…おお、今度はブロンド美少女に黒髪美少女だ。そして二人共レベル高くてスタイルも抜群と黒髪美少女はさっきのお姉さんに似てるし妹さんかな?) それでは! お二人のどちらかが後ろから抱き締める様にして座ってください!」

「あのー!あ…」

「…せ、セシリアさんからどうぞ。」

「い、いえ、刹那さんから。」

「…」

「…(ああ、成る程、そう言う事…面倒だなあ、後ろにまだ並んでるしそろそろ下からまだかって連絡来そうだし…仕方無い。)ではブロンドのお嬢さんの方が背が少しばかり高いですし、黒髪のお嬢さんが前に来て後ろから抱き締めてあげてください!」

「えっ!？」

「しかし…」

「良いから早よやれ。(あ、やべ)失礼しました!後ろに並んでいらっしやるのでなるべく早くお願いします!それでは!早よ滑ってさつさとくっ付け!(行ってらっしやい!)」

「ぎゃああああああっ!？」

「あ、来た。セシリアー、黒姫先輩大丈夫ー?」

「よ、予想より速かったですが大丈夫です!」

「ふう…そうですね、普段経験している飛行とは違い落下している感覚でしたので新鮮でしたわ。っと、そろそろ邪魔になりそうですね、出ましようか。…刹那さん?」

「あ、はい!?!そ、そうですね!速やかに出ましよう!」

「…逃げたな。」

ウォーターライダーエリアから移動したイチカ達は他のエリアを昼過ぎまで楽しみ、六人は永久の提案で少し遅めの昼食を取っていた。

「永久さん、俺達の分のお昼を奢って貰ってありがとうございます。」

「…気にするな、久々に柄にもなく本気ではしゃいでしまったからな。」

「…そのお礼とお詫びとでも思ってくれ。」

「そう…ですね。(手を軽く振っただけで津波起こしたり、波を突きで打ち消したり、手刀でプールの水斬ったりしてたもんね…。と言うか

イチカと黒姫先輩は何か諦めた表情してたし…でも…永久さんにはその力と力を制御して使う為の責任を持つてる。それに比べて私はどうだろう、力はある、責任も持つてる、けど…この力を、紅龍を本当に使いこなせてる？実際私は初めて紅龍を使った時、セシリア達を敵と認識して本気で…駄目だ、目標が近くになった瞬間にマイナスの方に考えてる。」

「…ん、…君、…鈴君。」

「っ！永久さん？」

「…考え事…いや、悩み事か？良ければ相談に乗るが？」

「あ、大した事じゃ…いえ、実は中国に帰った時に私の目標だった事にかなり近付いたんです。けど私の予想とは違った感じで近付いて混乱…と言うより、本当に私で良いのか、叶ったとしてきちんとやっていけるのか、そんな風にマイナスの方に考えてしまっ…」

「…自分はどうすれば良いか分からなくなって悩んでいると言う訳か。…私は鈴君の目標が何なのかは分からないが目標に近付いたのなら形はどうであれそのチャンスを自分の物にするべきだ。…例えばそれが鈴君の思い望んだ方法でなかったとしてもだ。…そして結果は目標を叶えた後に出せば良いと私は思う。…まあ、決めるのは鈴君自身だ、悩み抜いて自分の納得出来る答えを見付けられる事を願っている。」

「永久さん…話を聞いてくださってありがとうございます。まだ私自身どうしたいのか分からないですけど、もう少し答えが出るまで悩んでみます。」

「…フツ、それで良い。…だが、今は悩み事を忘れて全力で楽しむぞ、今日はそう言う日だ。…どうだ？食後の運動に軽くビーチバレーでも？」

「ハハ…是非。」

鈴は永久からのビーチバレー誘いを先程の悩んでいた顔から獰猛な笑顔を浮かべて承諾し、それを見た永久は顔には出さないものの内心楽しみにしながらイチカ達を呼んでビーチバレーを始める。まあ、行われるのはビーチバレーと言う別の何かであったのは言うまでも

ない。

から…だから…だから私を…『簪ちゃんがすべきなのは私に追い付く為の努力じゃない、私を追い越す為の努力。簪ちゃんは簪ちゃんしか出来ない事をしなさい。大丈夫、簪ちゃんにはちゃんと味方がいるから。』…え？否定…しないの？『バカね、私は貴女のお姉ちゃんなのよ？簪ちゃんが誰より努力してるのも知ってるし、誰よりも優しく、強いのも知ってるわ。それなのに貴女を否定するわけ無いじゃない。だから約束して？これからは私を…』

「んっ…また、あの夢…ハア、最悪…。…気晴らしにゲーム…はそんな気分じゃない。福音と戦ってから観る様になったけど最近毎日だ…。(けど…今回の夢は少し違ったな。何時もなら居なかったお姉ちゃんが出てきたから何時もより気分は悪くない…かな?)」

朝早くに簪は不機嫌な顔をしながら目覚め、先程まで見ていた夢の内容を思い出しながら更に機嫌を悪くしながら考え事をしていた。

「大丈夫かい、我が女王？また例の夢かい？と言うより、ここ最近は何日観てないかい？」

「そう…だね。でも今回の夢は今までと少し違ったよ。」

「と言うと？」

「何時もなら罵倒の後に私の感情が爆発して終わりだったんだけど、最後にお姉ちゃんが居てくれた、抱きしめてくれた、応援してくれた。…ゼロ、頼みがあるんだけど。」

「ああ、良いとも！」

「…まだ何も言っていないけど？」

「何も言わなくても我が女王の事なら分かるさ。それに期間こそ短いが私は我が女王の従者であり…相棒でもあるからね♪だから貴女は自分のやりたい事を、私は貴女のサポートを全力で…なんてね、やっぱりこう言うのは私には似合わないね。けどさっき言った事は紛れもない本心さ。」

「ゼロ：ありがとね。あ、そうだ、今の時間なら起きてるよね？…あ、イチカ？簪だけど。」

『どうした？こんな朝早くに？』

「イチカ達って今から朝練だよね？私も一緒に朝練に加わりたいんだけど良い？」

『良いけど…なんかあったのか？何て言うか…声に覇気があるって言うか…』

「覚悟を決めた？」

『そう、それ。』

「ちよつと、今の私の原点を思い出してやるべき事も明確になったからそれに向かつてもつと頑張ろうと思って。」

『成る程な、俺達なら何時もの場所でやるから。』

「わかった、今からそっち向かうから。」

『了解。』

「決まったみたいだね。では、準備してすぐに向かうとしようか。」
「うん。」

簪はジャージに着替え必要な物を持ってイチカ達が何時も朝に訓練をしている場所へと向かおうとし、簪は一度振り返る。そこには何も変わった物は無いが簪の瞳には幼い時の簪自身が映っていた。

『…。』

「ごめん、私は昔に戻るつもりは無いから。」

「我が女王？どうかしたのかい？」

『…。』

「…うんうん、何でも無いよ。」

簪がゼロから心配されると一度眼を閉じ、ゆっくり開くと幼い時の簪は消えており、何でも無いと返事を返した。ゼロも気になりはしたがこの事に追及はしなかった。

(やる事は昔から決まってる、今回はそれを再確認出来たからその為に何をすべきなのか、どうすれば良いのかを考えて実行して、昔の約束：お姉ちゃんに追い付いて、追い越してみせる。だから速くイチカ達の所に向かおう、イチカ達と訓練している時は嫌な事も忘れて集中出来る。いや、訓練だけじゃなくて私自身がイチカ達と過ごす日々が好きで何より皆に負けたくないこの気持ちが大きいんだろうな。)

「では急ごうか。時間は常に有限だからね。」

「うん、行こうか。」

五十五話 新学期と私の覚悟

夏休みも終わり、IS学園には夏休みの終わりを悲しむ生徒や新学期の始まりに気を引き締める生徒、久し振りに会う友人に喜ぶ生徒等が自身の教室に向かっていった。無論、イチカもその一人である。

「ミューゼル君おはよー!」

「おはよー、ふあ…(眠…今朝練しない日だから作業してたら夢中になりすぎて寝るのが遅くなりすぎた…)」

「自業自得だな、しかしアホAIが来てから作業が進んでいるみたいだな。」

(ああ、それは感謝してる。)

「当々然ですよ!話し相手になっっている恩があるのですからお手伝いくらいしちやいますよ!困った事があればクオちゃんにお任せあれ!あ、因みに…」

「…。」

「クオさん、クオさん、マスターが初犯だからって何も言っただけで、マスターが作業してる時にマシンガン Took してるの知ってるからね?今回みたいな事が続くなら普通にアウト判定出すからね?」

「!?すいませんでした!」

「なんか土下座してる様に見えるな。」

(まあ、実際作業が進んだのは事実だし今回は…ツ!?)

イチカはメア達と話していると突然感じた事の無いおぞましい気配を察知し、距離を取りつつガンガンセイバーとナイトメアカリバーを出現させて気配を感じた方を向き戦闘態勢を取る。

「久し振りだねイチカ、顔色悪くして剣を構えてるけど何かあった?」
「ハア…ハア…ハア…シャル…ロツト?スウ…フウ…何でも無い気にしないでくれ。」

「そう?にしては剣を仕舞っても最低限の警戒は解かないんだね。」

「…まあ、お前だからな。」

「ふーん、まあ良いや。僕はもう行くけどイチカはもう少し落ち着いてから来たら？まだ時間には結構余裕あるしね。」

「…そうする。」

「それじゃあ、またね。」

振り向いた先には先日フランス国家代表になったばかりで一学期と少々異なる制服を着たシャルロットが立っており、先に教室に向かつて先程感じたおぞましい気配は無くなっていない為に警戒を解く事が出来ず大量の冷や汗をかいていた。

「マスター大丈夫!?何があったの!?!」

「分からない…だけど…」

「…ヤバい気配の何かが居たな、ゆるキャラはどうだ?」

「勿論気付いてるぜ。何て言うか、人ならざる者って感じだなく。だから白式達が気付けなかったのかもな。」

「人ならざる者…ですか?」

「ああ、しかも今まで感じた事の無い…っ!?!」

「…ッ!?!」

イチカ、メア、ユルセンは先程と同じおぞましい気配…いやおぞましいと言う表現が可愛く思える様な禍々しい気配を感じとり、すぐに気配を感じた窓の外を確認するが雲一つ無い青空が広がっていた。

『アハハ♪思った通りだ、彼は私に気付いている。いや、彼らと言った方が正しいか。彼の周りにぼんやりとだが何かが存在している。ま、何が存在しているようが私には関係の無い事だ。それよりも…彼は今まで眼にして来た人間の中で最も美しく最も醜い存在だな。死んでいる筈なのに生きていて、死への恐怖を知っているからこそ生に執着する…本当に惚れ惚れする程美しく、吐き気を覚える程醜い。ああ、どうしようか…意識を残したまま剥製にしてそのまま殺すのもあり、

逆に四肢を再起不能にして目の前で彼の仲間や大切な人達を虐殺して絶望させるのも良いな。：なんてな、私は既に完結した身で彼はシャルロットの友人玩具だから見守るだけにしておこう。ま、彼がシャルロットに害をなすなら容赦なく殺す。：アハハ♪本当にこれからが楽しみだ♪』

イチカは自身を落ち着かせて教室に入り、セシリア達と話ながら時間になるのを待っている。とドアが開き山田先生と一人の女性が入室すると席を離れていた生徒達は自身の席に着く。そして一人を除いた全員が山田先生と共に入室してきた女性に驚愕していた。

「皆さん、おはようございます！夏休みは色々な出来事があつたと思います。が新学期に皆さんが揃った事に嬉しく思います！そして皆さんが気になっていると思いますので紹介します！今日からこのクラスでISの座学と実技の補助を担当して下さる」

「皆さん初めまして、アリス・ルグランです。先程山田先生が言われた通り座学と実技の補助を担当する事になりました。聞きたい事や教えて欲しい事があれば気軽に聞いてください。」

山田先生の挨拶と共に自己紹介をした元フランス国家代表のアリス・ルグランが実質的な副担任になると知りクラスメート達は驚くと同時に例の如く歓喜の叫び声を上げ、イチカ達は予想していたのか何事も無く耳を塞いでいた。一方山田先生は突然の叫び声に驚いていたが叫び声の原因であるアリスは特に気にする事も無くただ一点を見つめながら微笑んでいた。

時は進み放課後の生徒会室、そこでは二人の生徒が話ながら過ごしていた。一人は簪の姉でありIS学園生徒会長とロシア国家代表の肩書きを持つ更識楯無とその従者であり本音の姉である布仏虚の二人だ。

「ハア…暇ねえ…と言うか生徒会の仕事つてもっと忙しいイメージがあっただけ…それに最近は私に挑んでくる娘もめつきり減ったから余計に暇ね…。虚ちゃん、何でこんなに暇なのか知らない？」
「そうですね、最初に思い付くのはお嬢様が書類や仕事を素早く終わらせているからですね。」

「あー、成る程。…あ、そうだ！今の内に家の…」その件でしたらお嬢様が四日前に終わらせましたので今の所はそちら方面の仕事はありませんよ。…そうだったわね。…ねえ？虚ちゃん？こんなに暇なら他の生徒か教師が訪ねてくるまでスマホ弄っちゃダメ？」

「ダメです…と言いたい所ですが今の所仕事も無いですし構いませんよ。ですが、扉をノックされた時点でスマホは仕舞ってくださいね？」

「ありがとうございます！愛してる！じゃあ早速：『コン、コン、コン』失礼します。一年四組の更識簪です。」か、簪ちゃん!?ンツンツ…どうぞ、開いてるわよ。ようこそ簪ちゃん、生徒会に何か用かしら？それともただ私に会いに来てくれたとか？」

（簪様の事になると切り替えが速いですね。とは言え…今から起こる事を考えると何とも言えないですね。）

「更識生徒会長に簡単な用件があつて来ました。」

「…ん？」

簪は楯無から真っ直ぐ視線を外さず、ゆっくりと仕舞っていた封筒と取り出しながら近付き、楯無は更式生徒会長と言う呼び方と敬語で話している事に困惑しつつ表情になるべく出さない様にしていた。

「か、簪ちゃん？た、確かに私は此処の生徒会長だけど何時も通りにしても良いのよ？ほ、ほら、私はそう言うの気にしない方だし…ね？」

「……………いえ、今回はそう言う訳にはいきません。何故なら…」

「!?あ、あの…簪ちゃん…これって…」

簪は持っていた封筒を書いてある文字が楯無に見える様に置き差し出した。その封筒には綺麗で力強く『挑戦状』と書かれていた。

「スウ…一年四組更識簪は生徒会長である更識楯無にI Sでの勝負を申し込めます！日時は明日の放課後、場所は第二アリーナ：勿論、受けて貰えますよね？」

「え…あ…う、ん…うん…」

「では私の用件は終わりましたのでこれで失礼します。：明日、楽しみにしています。」

「…か、簪ちゃんがグレた!?ど、ど、ど、どうしよう虚ちゃん!?簪ちゃんが反抗期に入ってグレたけどどうすれば良い!?もしかしてあれかな!?簪ちゃんの事が好きすぎて休日の殆どは尾行してたのがバレたのかな!?それともこっそり写真を撮ってるのがバレた!?ま、まさか：部屋に置いてるぬいぐるみにかんちゃんって名付けて愛でてる事がバレた!」

「お嬢様…一体何をされているんですか…まるでストーリー」「ごめん!言わないで!薄々私もやってる時にあれ?これって他の人から見たらストーリーと同じなんじゃ…って気付いてるから!」なら、辞めましょうよ…。」

「…………善処…します…。」

(あ、これは辞める気は無いですね。)

楯無と虚は簪が生徒会室から退室してからこの様な会話を会話をしていた。そしてこの状況を作り出した本人はと言うと。

「お疲れ、それにしてもあれで良かったのか?生徒会長の言う通り何時も通りで良かったんじゃないか?」

「うんうん、お姉ちゃんに言われて戻そうと思ったけど辞めた。私があの時何時も通りにしてたらお姉ちゃんに甘えちゃうから。それに私の本気を見て欲しいのに甘えたら今までの全部を私自身が否定する事になる、それだけは絶対に駄目。」

「成る程な。つて事はあれも解禁するのか？」
「うん。明日はあれだけじゃなくて私の持つてる物全部を解禁して…
お姉ちゃんに勝つ。」

五十六話 覚悟を地に想いを天に

「夢現、空斬、星砕、山嵐改は問題無し。システム、プログラム共に異常は見当たらない。可動域、反応速度、武装換装も良好。切り札も準備OK:。」

「バイタル、精神面も大丈夫の様だね。」

「うん。イチカ達のお陰で此処まで来れた。本当に手伝ってくれてありがとう。」

「気にするな。けど、やっと満足出来る所まで来たんだろ？だったらそれを全部生徒会長にぶつけてやれ。」

「それに私達にお礼を言うのは生徒会長に勝ってからにきなさいよ。それ以前のお礼は受け付けてないわよ。」

「分かってるよ。でも：やっぱり皆にはありがとうって伝えたいから。」

「では勝ってこい、それが私達にとって最高の礼となるからな。」

「そして生徒会長さんに今の簪さんの全てを見せてあげてください。」

「皆：それじゃ一言だけ言わせて：私ね、この闘いが終わったら告白するんだ。」

「おい。何で死亡フラグ建てた?」「確かそれは死亡フラグでは?」

「いやー、何か：ね?言わなきゃいけない気がして。」

「我が女王、そろそろ時間だよ。」

「分かった。じゃあ皆：行ってくる。」

簪は四人との会話を楽しみ終わるとゆっくりとそれでいてしっかりとした足取りで瞳に闘志を宿しながら楯無が待つフィールドへと向かう。

「お待たせ、お姉ちゃん。」

「へあつ!?か、簪ちゃん!?居たの!?!ご、ごめんなさい、ちよっと考え事をしていたものだから...。」

(何か挙動不審になってる。え、何で?昨日今日で何があったの?)

「恐らくだが、我が女王の昨日の言動が原因だろう。シス：妹思いだから昨日の言動であの様になっているのだろう。」

「(成る程ね、なら私がすべきなのは) お姉ちゃん、昨日はごめん。」

「…え？」

「昨日、お姉ちゃんに対してあんな風に話したのは本気でお姉ちゃん
と闘いたかったからなんだ。あの時に何時もみたいに話したら私がお姉ちゃんに甘えてしまうから…それだけは絶対に駄目。だから…
私は本気でお姉ちゃんを越えに行く、お姉ちゃんも本気で私を倒しに
来て。」

「簪ちゃん…(そっか…嫌われた訳じゃなかったのね。それにあの
真っ直ぐな瞳から簪ちゃんの覚悟を感じる。…なら、私がやるべき事
は一つ。)」パンッ！

「…。」

楯無は眼を閉じ両手で自身の頬を全力で叩き頬に赤い叩いた跡を
付けながらゆつくりと眼を開く。今、簪の目の前に居るのは何時も優
しく妹を愛する自慢の姉ではなく、IS学園の頂点に立ち目標として
追い求める国家代表の姿があった。

「…来なさい簪ちゃん。」

「…うん。(行くよ、ゼロ!) 打鉄零式！勝利を私の手に！」

「ああ！我が女王に勝利を！」

簪はグレーの腕輪を着けた左腕を突きだし右手を腕輪を重ねて打
鉄零式を起動する。式式の時に比べ装甲が増え山嵐のミサイルポツ
ドも大きくなっており、左腰には太刀型ブレードの空斬が取り付けら
れている。そして簪は夢現を出現させて構えて試合開始の合図を待
つ。

「祝え！過去を思い出し、今を突き進み、描いた未来に手を伸ばし、
覚悟を決め想いを滾らせし我が女王、その名も更識簪！今、IS学園

の頂点に挑みし瞬間である！」

「試合開始！」

ゼロの祝福が終わると同時に試合開始の合図が鳴り響く。二人はほぼ同時に動き出し簪が先に夢現で風払うが楯無は急な方向転換でそれを回避する。しかし回避する事を予測していた簪は左手にガンブレードの星砕を出現させると同時にエネルギー弾を放つ。楯無は予想外の事ではあるがギリギリで回避する事に成功する…が簪はそれさえも予測しており回避直後の楯無に斬り掛かり、星砕の鋭い刃が直撃する。

「ッ！（強くなってる…！けど…それ以上に読まれてる！けど…！私にだって国家代表のプライドと意地がある！）ハアッ！」

「（瞬時加速…なら反撃のタイミングは…）今！」

「…フフ、そうよね簪ちゃんならそのタイミングで仕掛けるわよね。けど…」

「ッ…させない！（瞬時加速を途中で中断して二度目の瞬時加速でタイミングをずらして来た…落ち着け、お姉ちゃんが予想外の事をするのは当たり前、今だつて対処出来た、驚く暇があるなら瞬時に対応しろ、勝利への活路を見失うな、全部を乗り越えろ！」

「（これも防がれる…か。ああ…こんな感覚…何時久以来振かしら。）」

ゾワッ「ッ!?（お姉ちゃんの雰囲気が変わった!?…それでも私は負けない!）」

二人の闘いが激しくなる中アリーナの観客席で二人の闘いを見ていた生徒達も熱中して興奮しながら楯無が勝つと信じながら熱くなっている者や簪の勝利を願って大声で応援する者と言った風に激しさを増す目の前の光景を多くの生徒が見守っていた。

「（このまま攻め続ければ…いや、此処は手札を一枚切つて戦況を敢え

て変えよう。)ハアッ！」

「クッ！(？追撃せずに距離を離して太刀に手を？…成る程ね、けど残念。見えない斬撃は既に対処出来る。)」

「(つて思ってるだろうけど…無駄だよ。)」

簪は楯無から距離を取りながら夢現と星砕を収納し空斬に手を伸ばしそれを見た楯無は直ぐに槍で防御の構えを取り、構えを取ると同時に簪は空斬を鞘から全力で抜刀する。楯無は防御していればダメージを抑えられると考えていた。しかし

「…え？」

「ハアアアアアアアア！」

「ガッ！」

「もつとおお！」

簪から繰り出された一閃は強力で鋭くそして重く、楯無の防御と体勢を崩し予想外過ぎる出来事に思考停止してまった。無論、簪はその隙を逃さず空斬で斬り掛かり次の行動をする暇を与えず連続で攻撃を仕掛ける。その姿は鬼の様に恐ろしく舞の様に美しかった。

「もう一閃！」

「(ああ…強い…強いなあ！だからこそ！もう意地なんてどうでも良い！ただ純粹に勝ちたい！この娘に…簪ちゃんに勝ちたい！)此処っ！」

「ッ!?カハッ!?(刀身を掴まれた!?もう何でもありだね!ああ、クソ!クソ!本当に…本っ当に!お姉ちゃんは凄いなあ!だからこそ!お姉ちゃんに勝ちたい!)まだああ！」

二人は何度もぶつかり合い勝つために互いの攻撃を防ぎながら次の攻撃を仕掛けるが互いに決定打を決めれないままだった。しかしこの状況を最初に打破したのは楯無であった。

「フフ、漸く捕られたわよ簪ちゃん！」

「クツ！離して！」

「悪いけど逃げようとしても無駄よ！このまま決めれば私の勝ちよ！

(…こんな状況だけどやっぱり簪ちゃんは良いにお)「フンツ！」ガツ
!?ゴフツ!?!」

「このまま墜ちろおおおおおおお！」

簪が反応遅れた一瞬の隙を逃さず楯無は羽交い締めで拘束し自損覚悟で大技を決めようとするが簪は楯無がやろうとしている事を瞬時に気付き頭を前に反らし全力で楯無の顎に向かって頭突きをお見舞いし、離れた瞬間に腹部に強烈な蹴りを入れて両手に出現させた星砕で何度もエネルギー弾を撃ち込む。

「全砲門フルオープン！システム起動！山嵐改フルバーストオオオオオオオ！」

エネルギー弾を撃ち込んだ簪は間髪入れずに山嵐改を起動し容赦無く60発あるミサイルを全弾放つ。無論、マルチ・ロックオン・システムが起動している為にほぼ無抵抗の状態でも容赦無く楯無に襲い掛かる。

「…フフ」

「ツ!?!」

重力に従いながら落下しミサイルが迫る楯無を見ながら簪が勝ちを確信する。しかしハイパーセンサー越しに眼に映ったのは笑みを浮かべながら槍にエネルギーを溜めている楯無の姿だった。

「流石だけど…まだ勝ち譲れないのよ！ミストルティンの槍！」

「(この距…!?!間に合え！)」

楯無は膨大なエネルギーの槍を放ち、自身に襲い掛かるミサイルを爆破しながら凄まじい速度で迫る。簪は速度があるとはいえ自身に向かっているのが直線の為に回避しようとするが何時の間にか背後に展開されていたミステリアス・レイディの武装であるアクアクリスタルが回避する事を封じる。それでもダメージを抑える為に夢現と空斬を出現させ防御の構えを取りダメージを軽減させるがほぼ直撃で受けた事により簪は重力に従いながら落下し地面に激突する。

「…私の「…だ。」…えっ?」

「まだ…終わってない!」

「…どうして、どうして倒れないのよ!」

「そんなの…お姉ちゃんに勝ちたいからに決まってるでしょ!昔からお姉ちゃんは眩しい程綺麗で凄く格好良くても今も私の憧れであると同時に目標でもあった!…確かに昔は比べれて嫌になる時期もあったよ、けどお姉ちゃんは諦めかけた私を救ってくれて新しい道を示してくれた!」

「簪ちゃん…。」

「ただ昔から少し私との距離が近くてよくベタベタくっついてきて鬱陶しいと思った事もあったし小学校高学年にもなって一緒にお風呂に入ろうとして来たのは本当にビックリした。」

「簪ちゃん?」

「最近は特に休日の日には私から二百メートル以上離れた所から尾行してるし、訓練中とかの何気無い光景を私物の高性能のカメラで撮影してる。更には自室に飾ってあるぬいぐるみにかんちゃんつて渾名を付けて話し掛けてて正直ドン引きして大分気持ち悪かった!」

「グフツ…か、簪ちゃん!」

「それでも私にとつてお姉ちゃんは凄くて大好きで自慢の最っ高のお姉ちゃんだから!」

「簪ちゃん…。」

「だからこそ…だからこそ私は!お姉ちゃんに追い付いて…追い越して…その先に行く!」

簪は左手に砂時計の様なデバイスを出現させてシステムを起動し右腕に装着すると打鉄零式が輝き白と真紅の重装甲に身を包み大剣を構えそのまま楯無に斬り掛かる。

(姿を変えた…けど、さつきよりもスピードが落ちてる。と言う事は火力特化？なら受けずに回避専念すれば！)

「逃がさない！」

「…は？」

簪は楯無が回避すると同時に持っていた大剣を中心から展開するとエネルギーで生成された矢を放つ。放たれた矢は回避した直後の楯無に直撃し更に大剣で追撃しようとするが槍で防がれてしまう。

「ッ!?(さつきよりも一撃が重い!?これは本格的に直撃されるのは不味いわね…!)」

「まだだあああああ!コード・バーストオオオオオ!」

「がああああつ!?まだああ!」

「チッ! (浅いつ!けど槍は折った!)」

簪は防がれると同時に力を解放し槍ごと叩き斬る。しかし強引に突破した為か攻撃は浅かったが楯無に因しては浅いとは言いつれな一撃であった。それでも直ぐに体制を立て直し予備の槍を出現させて反撃に移る。しかし簪は慌てる事もなく大剣で防ぎカウンターを仕掛けるが回避されてしまう。

「勝ちたい…勝ちたい!お姉ちゃんに絶対に勝ちたい!」

「負けられない…負けたくない!簪ちゃんに絶対負けたくない!」

「勝つのは私だ!」

楯無と簪の意地と意地のぶつかり合い。しかし簪の纏う打鉄零式・

地の型は楯無の考えた通り火力特化型となっており、その為通常状態の打鉄零式よりも機動力が低下し次第に簪が押され始めた。

「火力特化が仇となったわね簪ちゃん！」

「…。」

「これで…チエックメイト！クリア…清き…バッション…激情！」

「…言った筈だよ、その先を行くつて。」

簪は腹部に痛恨の一撃を喰らい落下してしまう。楯無はその隙を逃さず笑いながら右腕を突きだし勝利を宣言する。しかし落下しながら簪の瞳は静かに真つ直ぐ楯無を捉え左手は右腕に装着されているデバイスに触れていた。その直後フィールド内で大爆発が起きると同時に轟音のみがアリーナ内に鳴り響く。

「勝った…の？やっ…ガッ!?な、何が!？」

楯無が勝利を確信し声を挙げて喜ぼうとすると同時に背後に衝撃が走る。次に真下、正面、真上と様々な方位から何かが襲い掛かり困惑している。

「一体何!?何が起きてるの!?!…!?!そこ…!?!勝ったと思っただけだなあ。それに…その姿は何?？」

楯無の言う通り簪の纏うISは先程とは違い蒼と黒の軽装甲に右手に双刃のブレードランス、左手にシールドを構える簪の姿があった。

「今は答える気は無いよーコード・ミラージュー！」
「ッ！」

その言葉と同時に再び簪の姿が消え楯無は攻撃を迎え撃つ為に集中し構える。その瞬間頭上から数多の光の矢が降り注ぐ。楯無は一

「…（此処までね）」

楯無は自身が放った光の槍を打ち消し高速で迫る光の矢を回避せず眼を瞑る。そして光の矢が直撃する直前簪の瞳に映ったのは戦いを諦めた表情…ではなく優しく微笑む楯無の姿であった。

「…負けた…のね。」

「大丈夫お姉ちゃん？立てる？」

「簪ちゃん、大丈夫よ立て…ごめんね？良かったら手を貸してくれない？」

「うん、良いよ。はい…っってお姉ちゃん？」

楯無は差し出され手を握りしめ簪に引つ張られるとそのまま簪に抱き付き頭を撫で始める。

「格好良かったよ、簪ちゃん。私が知らない内に此処まで強くなってたのは驚いたわ。」

「ありがとう。でも私だけの力で此処まで来た訳じゃ無いよ、私の友人達やゼロ、戦い方を教えてくれた人達、そして…何よりあの時のお姉ちゃんの言葉があったから此処まで来れたんだよ。だから、私を否定せず新しい道を示してくれて本当にありがとう。」

「簪ちゃん…私の方こそあの時の約束を守って此処まで来てくれて本当にありがとう。」

（ゼロも本当にありがとうね。）

「いやはや、一時はどうなるかと思ったが何とか楯無嬢に勝つ事が出来たね。では…祝え！双翼を纏いて己の道を突き進む我が女王、その名も更識簪。今、学園最強に勝利し幼き時の姉妹の約束を果たした瞬間である！」

「（…よし、此処しかない、）お姉ちゃん。」

「？何簪ちゃん？」

「私ね、お姉ちゃんに伝えたい事があるんだ。」

「伝えたい事？（この状況…ハッ！ま、まさか…簪ちゃんが私に告白!？」

これしかない！」

「我が女王が楯無嬢に伝えたい事……！待つんだ我が女王！最悪死人が出る！」

「お姉ちゃん、私ね。」

「うん。」

「好きな人が出来たんだ。」

「うん……うん？……え、え！？か、簪ちゃん！？も、もう一回言ってくれないかしら！？」

「好きな人が出来た。」

「カンザシチャンニスキナヒトガデキタ？ソノヒトハオンナノコナノ？」

「え？普通に男の子だけど？と言うか百合を見るのは好きだけど私はノーマルだからね。……あれ？お姉ちゃん？おーい？……え？気絶してる！？何で！？」

「気絶だけで済んだ事に安心するべきか、我が女王に関するメンタルの低さに驚くべきか……。」